

さよならジヨジヨ先生  
—改稿版—

パラレル。

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

初めまして。パラレル。です。

別サイトで二次創作書いていましたが、この度活動範囲を広げようと決心し、そのサイトですべての小説を投稿しました。

内容は同じですが、随一表現などを修正して投稿するつもりです。

・以下のことを注意してお読みください

- 1、さよなら絶望先生全巻の内容を踏まえて書いています。
- 2、作者オリの解釈・設定があります。
- 3、話の都合上、キャラにそぐわない言動・行動をする可能性があります。

出来れば感想ください。待っています。

キャッチコピー『守り抜く。この身が朽ち果てるその時まで・・・』

# 目次

第壹章 6人のスタンド使い篇

第零話 プロローグ ————— 1

第壹話 噂の学校へ行こう! その①

8

第貳話 噂の学校へ行こう! その②

16

第参話 噂の学校へ行こう! その③

22

第四話 噂の学校へ行こう! その④

27

第五話 『秒速の天使《ミニット・エン

ジェル》』と『ウォーアイニー』その①

40

第六話 『秒速の天使《ミニット・エン

ジェル》』と『ウォーアイニー』その②

51

第七話 『ラブマシーン』 ————— 72

第八話 『オレンジミント』と『サムラ

イハート』その① ————— 96

第九話 『オレンジミント』と『サムラ

イハート』その② ————— 116

第十話 『オレンジミント』と『サムラ

イハート』その③ ————— 140

第十壹話 『空想《イマジネーション》』

その① ————— 160

第拾貳話 『空想《イマジネーション》』

その②

194

スタンド・キャラクターNo. 1

215

第貳章 糸色勢力と野犬の猛威篇

第拾参話 侵入者を討て!!その①

224

第拾四話 侵入者を討て!!その②

244

第拾伍話 侵入者を討て!!その③

274

第拾六話 侵入者を討て!!その④

301

第拾七話 侵入者を討て!!その⑤

335

第拾八話 侵入者を討て!!その⑥

365

第拾九話 侵入者を討て!!その⑦

395

スタンド・キャラクターNo. 2

421

第貳拾話 糸色望と2のへ組その①

449

第貳拾壹話 糸色望と2のへ組その②

第貳拾貳話 『コントラスト・コネク』

471

ト』その① ————— 503

第貳拾參話 『オン・ユア・マーク』

530

第貳拾四話 『ブルー・インパクト』

547

第貳拾伍話 『コントラスト・コネク

ト』その② ————— 565

第貳拾六話 地獄の女神 加賀愛その

① ————— 590

第貳拾七話 地獄の女神 加賀愛その

② ————— 617

第貳拾八話 学校の七不思議 — 645

第貳拾九話 『アンフェア・ワールド

ド』と『スターティング・オーバー』その

① ————— 672

第參拾話 『アンフェア・ワールド』

と『スターティング・オーバー』その②

700

## 第壹章 6人のスタンド使い篇

### 第零話 プロローグ

2012年3月21日、

この日は全米、否、全世界が震撼した。

ケーブ・カナベラルのケネディ宇宙センターが突如の異常現象に見舞われた。

それもつかぬ間、太陽が速く周る、なま物の腐食が早くなる、乗り物がとてつもなくはやくなる、などの現象が起こり、人々はパニックになり、誰もが世界の終わり来たと悟り始めた。

その影で必死の攻防戦が繰り広げられているとも知らずに……

「生き延びるのよあんたは『希望』!!」

「うわああああああ!!徐倫お姉エエエちやアアアん!!!」

「ストーン・フリーイイイイイ……!!!」

「人の出会いも『重力』！あんたは因縁がきれなかった！」  
「このちっぽけな小僧がああああああああ!!!」

多くの仲間の失いながら闇を打ち負かす一人の少年がいる。  
彼の名は、エンポリオ。

今、宿敵のプッチを倒しているところだ。

「ぐあばあああああああああああああああ．．．」

そう言いプッチは、二度と起き上がることはなかった。

戦いは終わった．．．エンポリオそう思った。

そして彼は、ゆっくり目を閉じた。

一緒に旅をしてきた仲間のことを思いながら．．．

「エンポリオ、ねえ起きてエンポリオ」

「ふえ？」

思わず出した第一声は変だが、そうなる理由があつた。

仲間の一人、自分を逃がしてくれた空条徐倫がそこにいるのだから。

否、彼女だけでない。その父の承太郎、良き親友のエルメエス、密かに恋心を抱くアナスイまでもいる。

「よし、全員無事のようにだな、それにしてもヤツはどこだ？」

「確かヤツは俺の腕を突き破りながら新しい『スタンド』を発現した。．．．おそらくかなりヤバイぜ」

「．．．ツ!!それじゃ早いところプッチの野郎を見つけて倒さねーと」

何やら話している承太郎、アナスイ、エルメエス。

プッチを倒そうとしているのか？

でも．．．．．

「プツチならもうこの世にはいません」

「どういうこと・・・エンポリオ？」

「アイツはぼくが倒しました、ウエザーのDISCを使つて・・・」

「ウエザーの・・・本当だわ！DISCがないッ！」

エンポリオの発言に戸惑う徐倫だが、実際にDISCがないこと気がついた。

ほかの仲間も、どうしてなのか疑問に思っていた。

その疑問は、承太郎の口から出た。

「どうして君がそんなことを知っているんだい？」

「実は、体験したんです、アイツの『スタンド』、『メイド・イン・ヘブン』は、時を加速させる能力だったんです。最終的に、世界を一巡させるほど加速したんです、ただ、ぼくが生きていたため完全には一巡せずに、ぼくを殺しにきたけど、振り返ちにしました。」

「それだと、我々が君を残して殺されたと。」

「はい、しかし、能力が解除されて時が加速する前の状態に戻ったんだと思います」

「ふむ、にわかに信じがたいことだが・・・」

エンポリオの説明を聞いて、少し悩むが、エンポリオの眼を見て、

「君の眼は、嘘を言っているようには見えない、ありのままの真実をのべている。今、一切のヤツの気配はない、だから、君の言うことを信じるよ。ありがとう、エンポリオ君」

と言った。ほかのみんなも首を縦に振って同意を表す。

その後、空を見上げ、去ってしまった者達に伝える。

F F、ウエザー。終わったよ。何もかもが・

しかし、彼らはまだ知らない！

彼らがいずれ出会うかれらのことを・・・

物語はまだ終わってないッ!!これから始まるのだッ!

“かれら”との出会いまであと数ヶ月・・・  
To Be Continued・・・  
⇒

## 第壱話 噂の学校へ行こう！その①

プッチが死亡してから数ヶ月が経った。

人々はケープ・カナベラルで起こった超常現象や刑務所から出てきた脱獄囚のことをまだ囁かれている。(時の加速のことは、プッチが完全に一巡、つまり、ケープ・カナベラルまで進まずに死んだため、人々はそのことを知ることはなかった。)

そんな中彼らは、ある建物の来賓室にいた。

場所はテキサス州ダラス、建物は、超有名財閥『スピードワゴン(SPW)財団』。

SPW財団は、20世紀初めに設立した財閥で、その巨万の富を使って、医療・経済を発展させた。

そして、ここはその本部である。

そんな一般人なら緊張のあまり、泡を吹いて気絶するほどの場所で、彼らは待ってい

た。

「承太郎さん、いつになったらくるんですか?あたしの首が《ロクロクビ》っていうやつになる前に、きてほしいんだが」

「我慢なさいよエルメエス、あっち側だつてきつと色々と忙しいのよお」

「確かに徐倫ジュリンの言うとおりで、約束の時間を10分もオーバーしてる、エルメエスの言うとおりで早く来てほしいぜ」

「プツチと君たちの件で色々とあるのだろう、まあ一刻を争うことではないから、気長に待とう」

「う~~~~ん・・・そうですね」

SPW財団のとある社員を首を長くして待っているのがエルメエス・コステロ、彼女の愚痴を抑えているのが空条徐倫、徐倫の言葉に同意しながら、エルメエスのも同意しているのがナルシソ・アナスイ、おおよその原因を推測しているのが空条承太郎、彼の言葉に一応納得しているのが、エンポリオ・アルニーニョ。

ちなみに、承太郎の発言で分かるとおり、徐倫・エルメエス・アナスイは、世間で囁

かれる脱獄囚である。だが、SPW財団の協力で彼らは表向きでは脱獄後何らかの理由で全員亡くなったということになっている。

その知らせを多方面に流している途中であるため、財団はボロが出ないようにあれやこれやと虚偽の証拠を提示したり、それに対する口裏合わせをしたりと忙しいのは事実である。

現在午前11時10分。

11時に来てくれ。と言われたのに、一向にきやしない。  
これが財閥の社長ならば、怒って帰るほどだ。

結局、11時15分になってガチャツと扉が開いて1人の社員が入ってきた。

その人は小太りの社員で、彼らに軽く会釈をして席に座った。

ちなみに、この部屋は中央に正方形のテーブルがあり、それを囲むようにソファアが4つ置かれている。彼らはその内の3つのソファアに座っており、社員は残っているソファアに腰をかけた。

「すいません。色々と情報整理をしていたら、遅れていました」

「いえ、問題ありません」

遅れたことを社員が謝罪したが、承太郎は大丈夫と伝えた。

承太郎の顔色を窺った後、その社員は今回の徐倫達の脱獄に対する処置を報告した。変更点として徐倫は無実の罪で投獄されていたのでその証拠を提出し、公的な釈放手続きを取ったことを伝えた。尤もその証拠はグレーなもののだが、そこところは何とか財団の財力で黙らせたようだ。

残る二人は前々から聞かされていた方法で丸く収めたことを聞いたところで承太郎は唐突に口を開く。

「おい。もうそろそろ、私達を呼んだ”本当の”理由を話してくれるか?」

先程から社員の口から出た報告はいつでも、それこそこの場でなくても聞くことができるものだった。であれば、自分達がこの場に呼ばれたということはただ事ではないことは容易に説明がつく。

的を射る承太郎の発言によりその社員は前口上を言うのを止め、本題に入った。

「そうですね、あなた方を呼んだのは他にもありません、あなた方には・・・」

「とある日本の高校の調査に行ってきた欲しいからです」

口から言葉が出なかった。皆、もつとスケールのでかい事なんだと思っていたから。彼らの脳内は、意外な単語、高校、調査が駆け巡っている。

「正確には、あるークラスの調査なんですけど・・・」

「ねえ?」

「はい?」

最初にこの空気を破ったのは徐倫だった。

「もしかして、高校の調査をするためだけによばれたの!? 私達!?」

今の彼女は心配して損した脱力感とそれに対する怒りが込み上がってきた。それと同調して、

「ふざけてんじやねえぞこのハナクソ!!人をパシリみたいに使いやがって!!!」

「ちよつ、やめなよエルメス」

「徐倫との式場決めの時間割いてここいんだぞッ!!『解体』されてえーのか!!!」

「うえっ、アナスイまで」

「アナスイ、誰が娘との結婚を許した？」

エルメエスとアナスイがキレた。

エンポリオは2人の暴走を何とか止めよとし、

承太郎はアナスイと1対1で討論している。

「いや、待ってください、ただの学校なら我々でできますが、あの学校だけは違うんです」

と小太りの社員は怯えながら補足した。

「それはどういうことだ」

アナスイとの討論を一旦やめて耳を疑う承太郎。

彼の顔を見て、より驚く承太郎。

理由は簡単、それは嘘偽りのない、マジ顔だからだ。

T  
o  
  
B  
e  
  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.  
.  
.  
.  
.  
⇒

## 第弐話 噂の学校へ行こう！その②

場所はSPW財団の来賓室、

人と人が交じって、ガヤガヤとしているオフィスで、そこだけ静かで、場が重かった。その部屋にいたのは、1人の社員とこの財団に呼ばれた5人の男女だった。

話題は、彼らが向かう高校の話だった。

「私達は、その学校に今まで3回使者を送っていますが、全員ひどいケガをして、帰ってくるんです。その中には屈強なSPもいたのですが、全員精神をおかしくしており、調査は真つ白、何も書かれていないんです。」

「なるほど、それで我々を呼んだ訳かあ」

社員の言葉をようやく理解した大男・承太郎。

そして彼は、そのことについてあることを推測した。

「つまりその学校の生徒もしくは関係者がその・・・スタンダード使い」だということ

が・・・」

「あるかもしれません」

いつも冷静沈着な承太郎も今はたまに見せる焦っている表情になりかけていた。

「スタンド使いとスタンド使いははずれひかれ合う」、昔に聞いた言葉を再び理解した。

と同時に何故ソイツは使者を襲うのか、という疑問が頭に流れた。

その疑問は、その社員の新たな情報によって解決した。

「後、日本の支部の情報によると、その高校では何やら不穏なことをしていると地域住民の噂になっているとのこと、他にも、背後霊や自縛霊、鬼神、ミイラなどが出没するという信じがたい噂も流れているようです。」

「なるほど、後者はどうでもいいが、使者を撃退する理由はわかった」

長々と話していたことを頭に刻み込むように彼らは眼をつぶり、カツと目を開いた。その眼はそう「覚悟した眼」だ。

「どこの高校だ」

「ッ！、旧小石川区つまり文京区西部に位置しておりますとある高校（仮）の2のへ組です。」

承太郎その目つきで社員に聞いた。

社員は少しびびつくりしてふくらんだ腹を揺らして、答えた。

場所は東京・文京区、戦いの歯車が再び動き始めた。

「トーキョーか、承太郎さんが生まれ育った場所かあ」

「そうね。父さんの母国、わくわくしてきたわ」

「俺と徐倫の祝福をあげるにはそこでもいいか。フッフ」

「日本かあ。どんな国なんだろう」

「フツ。お前ら調査のことわすれるなよ。あとアナスイ、後で私の所まで来い。」

未知の大陸に胸を膨らますエルメエス、徐倫、アナスイ、エンポリオを見て、承太郎は、かつてDIOを倒すためにエジプトを目指して旅をしたことを思い出す。

花京院、イギー、アヴドウルを失ったが、その旅で彼らと祖父ジョセフ、友のポルナレフといろいろあったことを不意に思った。

彼らとの奇妙な友情を懐かしく思えて、涙が出そうになるが、堪えて徐倫たちを見る。

「滞在場所はどうかさるつもりですか。」

「ああ、文京区ならしばらく母のいえに滞在するつもりだ。実家は中野にあるからホテルよりはそっちの方がいい。」

「左様ですか」

突然、社員が質問してきたため、答えた。

承太郎の返答を聞いて理解したとき、徐倫が承太郎の方へ向かってきた。

「ねえ父さん、ママも連れてきてもいい?」

「ああ、いいぞ」

「やったあ〜!じゃあ早く電話しないと」

実は、徐倫との和解もあり妻ともう一度再婚させてもらった承太郎。

まあ、アメリカに置いてきてしまつては、これこそ本末転倒なので、連れて来させないといけないと承太郎は内心想つていた。

そんなことも知らずとても喜んでゐる徐倫。

若いころの口癖の「やれやれだぜ」と言わんばかりに退室しようとする。

それにつられて、他の皆も退室しようとする。

「よし。さくぞー!!」

ドオーーーーーー!!

彼ら全員が部屋を出ると、一列に並んで皆同じポーズをとつた。

それは、四半世紀前の旅の始まりを表したものと一緒だった。

ある春の朝、とある高校（仮）の2のへ組の教室。

まだ生徒諸君は各々話している。担任はまだ来ていない。

午前8時25分、

ガララツと戸が開く音とともに生徒たちは話をやめ、自分の席に座った。

入ってきた者は着物を着て、メガネをかけた男性。片手に出席簿を持っている。どう

やら担任のようだ。

その男は生徒たちに一言言った。

「おはようございます。それでは出席をとります」

男、糸色望と2のへ組の生徒の一日が今宵も始まるのであった。

To Be Continued . . . →

## 第参話 噂の学校へ行こう！その③

天気は快晴。桜はそろそろ散る頃の朝、2のへ組の朝礼が始まった。

「おはようございます。今朝も中央線が止まりましたね」

担任・糸色望は朝の挨拶をした。が、クラスの空気がどんよりとした。

おそらく望の最後のセリフを意味深に受け取ったのだろう。

「いえ、別に深い意味はありません」

と、裏づけてもこの空気は変わらない。まさしく蛇足、後の祭りだ。

「まあまあ、気を取り直してみなさんに報告があります。あの超有名なSPW財団の使者様たちが今日、急遽また訪れる事が決まりました」

クラス中にええくくの一言が響き渡った。まあ、急遽来る事になったし、分からんでもないが。

「皆さん変な騒ぎを起こさないでください。本当にですよ、ホントにホントにホー……ントウにですよ」

補足として騒ぎを起こすなど言う望。それを聞いてガヤガヤと騒がしくなった。

そんな中、一人の女生徒が手を挙げた。

それは、髪型が真ん中分け、いかにも委員長ほい美少女だった。

「先生。」

「はい、何でしょう。木津さん」

質問した少女・“木津千里”は、席から立って、こう発言した。

「そんなに強調しなくても、大丈夫ですよ。何をそんなに恐れているのですか？」

望はその発言にこう返した。

「何って・・・自覚ないんですか？」

「はい？何のことでしょう？」

「やっぱり自覚ないじゃないですか!!三度にわたって使者様を半殺しにしていること!!」

そう、精神的にも肉体的にも重症をおわしたのは、彼女だ。

「しかたないじゃないですか。先生!!私には、保護観察官のトラウマがあるんです。調査を書いているのを見ると、私の悪口まで書いているのだと思って、そう思つて・・・殺シタクナルノヨオオオオオオオオオオ!!!」

「誰かぁー!!救急車呼んでくださぁー!!い!!どんな精神病も治る病院にいけるー!!」

彼女が半殺しにする理由を淡々と述べ、終いには、どつからか持ってきたスコップを持ち、狂気ならぬ、凶鬼になりかける。

望はそんな彼女の精神を完璧に治す病院を紹介してくれるよう頼むが、

望先生、そんな病院あつたら、全世界の精神病院潰れますよ。

「うなああああああ!!!ウナアアアアアアアアアア!!!」  
「先生!!千里ちゃんが暴れています!!スコップを持ったまま!!」  
「いけません!誰か彼女を止めてください!!」

望がそうこうしてる内に千里は乱心モードに移行して、無差別に暴れ始めた。  
なんだか普通そうな少女がそのことを望に、教えてやると、望は、彼女を止めるように言った。

言ったはしたが、彼女は危ない刑事デカよりも超危ない。  
数分して、なんとかクラスの5、6人で押さえつけることができた。

いやはや、朝っぱらからハードな一日である。

時同じく、その学校の校門の前にある5人組がいた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

彼らが着いたとき、グラウンドから一人の女性がやって来た。

彼女は「新井智恵」、この学校のスクールカウンセラー（SC）の先生だ。

彼らと智恵先生の差が1mほどまで近づいたとき彼女は会釈した。

「お会いできて誠に光栄です。『空条承太郎様』」

「ここにこそ、新井智恵先生」

最強の「スタンド使い」・空条承太郎そしてその御一行・・・

見参!!!

To Be Continued・・・⇒

## 第四話 噂の学校へ行こう!その④

校門で会った智恵先生と承太郎たちは彼女に2のへ組のクラスまで案内をしてもらっていた。

授業中のため、チヨークの音と、教諭の声しか聞こえない。日本に馴染みの無い徐倫、エルメエス、アナスイ、エンポリオはまじまじとクラスの中の様子を見ている。

そうこうしている内にへ組のクラスの前へ到着した。ちなみに智恵先生は、用が済んだからともうその場にはいない。

そして、そこに着くや否や承太郎は戸の取っ手に手を伸ばす。

「よし、開けるぞ。準備はいいな」

徐倫たちに開けると告げた承太郎。

首を縦に振って、オーケーの合図を送った4人。

そして、クラスの戸が承太郎によって、勢いよく開いた。



しかし、そんな彼らの中で一人、一人は動けた。そして、行動した。  
その一人はエルメエス。彼女は!!

「うっしやあああああ!!!」

ドゴオオオ!!

「グゲボツ!!」

「先生ーッ!!」

その男を蹴り飛ばした!!

蹴られた男は壁に激突。メシヤアアアという音とともに倒れてしまう。

男・糸色望はエルメエスに蹴り飛ばされたにもかかわらず、すぐに立ち上がる。

少々苦しそうな表情を浮かべるが。

「な・・・何をするだアーッ!!」

「何をするだアアア? てめえこそ何やってんだ! あたしの前で自殺すんじやあねえ!! イヤな事思い出させやがって」

立ち上がった望を叱りつけるエルメエス。

エルメエスの言うイヤな事とは半年ほど前に獄中で「ハイウエイ・トウ・ヘル」という「スタンド」を操るマックイーンのことだ。

自分が自殺するとき対象者も同じ死に方をする能力で、彼女はそいつにやつとの思いで勝てたので、以来エルメエスは、自殺がトラウマになっていたのだ。

「あの．．．．その．．．．すみません。いやな事を思い出させてしまつて．．．」  
「わかりやいいんだよ」

望はもうしわけない様子で、エルメエスに謝った。

そしていつの間にか、クラス内の空気が再び重くなつた。

おそらく、彼らは彼女の家族か親しい人が自殺したんだと思つているのであろう。しかし結果として、クラスが黙ってくれたので結果オーライだ。

「望先生でしたね。どうか私の顔に免じて彼女の無礼を許してくれますか？」

「いえ、はい。それでどちら様ですか？」

望はその顔つきに少しびっくりにしたが、彼に質問した。

承太郎は腰をピシッとまっすぐにし、クラス内に響きわたるほどの声で言った。

「どうも。SPW財団から派遣されました空条承太郎だ。以後よろしく」

承太郎が自己紹介した後、エルメエスを除くほかの三人も教卓に近づいて、生徒の方へ向いた。

「そして、君たちから見て右側にいるのが順にアナスイ、エンポリオ、娘の徐倫、そして君たちの担任を蹴り飛ばした彼女、エルメエスだ」

「承太郎さん、さすがにもうやめてくれますか?」

他の四人について説明した承太郎。エルメエスに関しては、もはや傷口を抉っている。

そんな世界観が全く違う彼らを見て、生徒たちはどう思っているのだろうか。一部の生徒の心の中を覗いてみよう。

(身長大きいなあ、あと若いし何歳だろう?)

(同人誌の参考になりそう。ニヤリ)

(新しいカモが増えた)

(徐倫さん、メチャクチャかわいい!)

(キイイイイ! ネットアイドルの天敵!)

(ボ~~~~~)

普通、私欲、論外、意味不明

まあクラス平均してヘ~~~~~ぐらいだ。

「そして私が、このクラスの担任の糸色望です」

「こちらこそ、糸しk「うお、これは」どうしたアナスイ?」

握手をしようと思っていた承太郎だが、アナスイが何かに気づいた声をあげたためそちらを向いた。

そんな彼の手には出席簿があった。

「承太郎さん見てくれ、コイツの名字と名前をくつつけると『絶望』になってるぞ。プククク、ハハハハハハハハハ」

「えっ? 何々? ブ、ブハハハハハハハハハハ、こいつは傑作だぜ」

「.....」

彼の名前にある発見をしたアナスイ。どこがつぼだったか爆笑しているアナスイとエルメス。

そんな二人を情けなく思っている三人。

いやな事が起きなければいいが、と心のなかで呟くが、だめだった。

「うわー！ー！ー！！！！私のいやなあだ名を早くも知ってしまうなんてえ！！しかも笑われた！！笑われたよオー！ー！ー！！！！絶望したツ！！自分の名前に絶望したアー！ー！ー！ー！！！！」

と叫び、再び自殺しようとする。

先生ツ！！落ち着いてください！！と数名の生徒が彼を止めに入った。

承太郎はその様子を眺めていると、被っていた帽子を指で下げて呟いた。

「やれやれだぜ」

「アナスイ、エルメエス、人の名前には名付け親の子供に対する優しい想いが籠められている。だから、人の名前を見てそういうことをいうもんじゃあないぞ」

「はいすいません（だからっておもつくそ殴らないでくださいよ）」

なんとか望を落ち着かせて、アナスイとエルメエスに鉄拳制裁（本気で）をして、叱りつけた後、生徒たちの方へ向いた。

「まあなんだ、色々あったが、私達はしばらくこの学校のことを色々と調査する。何か我々に用がある者は話してきたまえ」

はくくくくくいとのおんきな声を上げて返事をする生徒たち。

ようやくクラス内の重い空気が軽くなったようだ。

が、“一部”は少し違った。特に、徐倫たち四人は違った。

彼らは今、承太郎を見て驚愕している。

彼は何をしているのか。

彼は出している!!!自分の“スタンド”、“スタープラチナ星の白金”を!!

今更だが、“スタンド”とは、生命が作り出すパワーある『ヴィジョン像』のこと。

多種多様の形態・能力を持っており、近距離型、遠隔操作型、自動操縦型といった性質を持った、一種の超能力である。

そのため、一般人には基本スタンドは視えない。

あらかじめ、スタンド使いがいるかもしれないと財団から聞いているので、感づかれないように用心していたが、承太郎のせいでする必要がなくなった。

これじゃあ自ら“君と同じ人間だよ”と言っているのと同じだ。

しかし、承太郎も馬鹿ではない。

承太郎がなぜ「最強のスタンド使い」と呼ばれているかと言うと、スタンドの性能だけでなく、自身の冷静な判断力があるからである。

人は誰しも共通の趣味を持っていたら、何らかの反応を見せる。

承太郎はそこをついたのである。自身とスタンドの洞察力で見極めてスタンド使いをひとまず見つける作戦のようだ。

承太郎はある程度観察したら、教室を出た。それにつられて徐倫達も出た。

「父さん、スタンド使いは何人いたの？」

「ざっと六人だ、まさかそこまでいたとは」

教室を出て数分経ったときに徐倫は口を開いた。

その数に皆驚いた。

「矢」でもない限り、1クラスにあれだけいるのはありえないと正直驚いている承太郎。

やはり、裏に「何か」あると実感した彼ら。だが、

「そういえば承太郎さん、彼らがSPたちを半殺しにしたスタンド使いだとはまだ分かっていません。いったいどうするつもりですか」

「心配ない、今から言う六人が単独で我々のところに来たときに、その対処は考えよう」

いくらスタンド使いだつて、“良いヤツ”と“悪いヤツ”もいる。

エンポリオは、彼らがもし“良いヤツ”だった場合を考えたら、心配してきたが、承太郎もそこまで冷酷ではない。

「但し、その中の一人には、今日の昼休みに屋上にくるよう誘うつもりだ」

「何故一人なんですか?全員を呼べばいいと俺は思いますが」

六人のうち一人を呼ぶと決めた承太郎の意図が全くよめないから問うアナスイ。

その質問に承太郎は腹を空かした野獣の如く恐ろしい眼で睨んだ。

「いや、これはいい大人として最初に“あの担任”とただ話がしたい。ただそれだけだ、アナスイ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

最強のスタンド使い・空条承太郎は、謎のスタンド使い・糸色望タゲツトを標的に絞り込んだ。

To Be Continued . . . . . ⇒

### 次回予告

望 『いったい何のようですか?』

承太郎 『抜きな。てめーのスタンドを』

望 『戦わざるを得ない、という訳ですか』

承太郎 『午後の授業には出れるように手加減するからよ』

望 『しようがないですね』

承太郎 『こいつはいつたい!?』

??? 『スタンド使いは一人ではありません!!』

望 『久々に本気を出しますか』

『第五話 『秒速の天使《ミニット・エンジェル》』と『ウォーアイニー』その①』

# 第五話 『秒速の天使《ミニット・エンジェル》と『ウォー アイニー』その①』

昼過ぎである。そろそろ午後一時になる頃で、生徒たちは昼食をあらかた食べ終えて  
いるはずだ。

その時間に望は屋上に向かっていた。  
理由は簡単、承太郎に呼ばれたからである。

三時間目の終わりに、「話があるから昼休みに屋上にきてくれないか」と言ってきたの  
だ。

まあ話だけなら別にと考えたので屋上まで階段を上っていた。

が、屋上に近づければ近づくほどどんどんその足取りは重くなり、額から汗がだらだ  
らと流れた。

望は薄々感づいている。これから起きる事を……。

屋上のあるフロアに到着した望は、屋上に出る扉をゆっくり開いて、辺りを見渡すと、真正面のフェンスに承太郎が彼を背にして景色を見ている。いかにもゴゴゴゴというものが出そうな雰囲気だ。

今、彼は望が来たことに気付いていないようだ。

そのため、望はゆっくりと来た道に戻ろうとするが、承太郎は振り返り、望に声をかける。

「望先生。待ってましたよ」

「はは、やっぱり気付いてたんですか」

逃走するという道は、空しくも崩れ落ち、前へ進む道しかなかった。

尤も相手が承太郎なら尚更無理だが。

望は承太郎の所まで進みながら再び辺りを見渡したが、彼以外誰もいない。あらかじめ、彼は、仲間にそうさせるように言った。

つまり承太郎と望とのワンツーマン。とことん、サシで話したのであろう。

そして望は、承太郎とその差2mの間隔を開けて立ち止まった。

2 m、それは承太郎のスタンドの射程距離と同じだ。

どういう訳かそれだけ開けた。やろうと思えば今すぐスタープラチナを叩き込める。しかし、そんな卑怯なことをするつもりはなかった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

しばらくの間、沈黙の時間が流れたが、沈黙に耐え切れず、最初に望が口を開いた。

「それで……いったい何のようですか？」

「いや……君を呼んだのは他でもない……だがその前にひとつ聞きたい」

望の質問に答えようとする承太郎。しかし、その返答よりも言いたいことがあるらしい。

望は「？」と首をかしげていた。

「てめー・・・何故抜かねえ・・・？もしかしたら俺がてめーの敵かもしれないんだぞ」  
「フツ。何世迷い言言つてんですかあ？もし私はその気なら、とつくにあなたに叩き込んでますよ。なんせわたしの射程距離は5mですから」

承太郎の目つきはこれまでとは比べのものにならないほど恐ろしかった。そして、口調も学生時代に戻っている。

望も望だ。午前中とは180度変わり、承太郎とメンチをきっている。

これだと午前中は人形のように、本性を隠しているようだ。

「フツ。案外容易く化けの皮が剥がれたな。糸色望！まさかこれほど玉だったとはなあ！」

「ご冗談を、最初から気付いていたのでしょうか？それよりあんたこそ、本当はガサツでいかにも不良って感じですねえええ!!よくここまで来れましたねえ！」

互いの本性を曝け出す二人。こんなところ誰かに見られたら、ひくか気絶するレベルだ。だから二人つきりにしたのであろう。

だんだん二人の心に呼応するように風が荒れ始めた。髪や服が激しく揺れても二

人は平然だった。

「はあ……戦わざるを得ないって訳ですか。私は木津さんみたいに『戦場のみが私の居場所ッ!』というタイプじゃあないんですがねえ」

マントを靡かせながらそうつぶやく望。十数年前に同じ事を言った奴を承太郎はふと思ひ出したが、すぐに考えるのをやめた。

「俺もそうだ、無利益な戦いほど愚かなことはない」

承太郎は若い頃不良で、飲酒・喫煙ときには牢屋まで入った。

しかし、そんな承太郎でも決して自分から危害を加えることはなかった。喧嘩を売られたらかうが、自ら進んで喧嘩を売ったりはしなかった。

理由はおそらくどうでもよかったのだろう。

「だが、てめー否、てめーらが!この学校で何を企んでいるのかが知りてえ!それが人のための良いものはたまた私利私欲の悪しきものなのかなあ!!」

荒れる風の中で承太郎の正義の炎は逞しく燃えている。それに何らかの関係で同調したのか、彼の背後からオーラが発生している。

どんなに悪そうに見えても、彼の心は清く輝いている。昔も今も。

「フツ……、それに……」

「……!?」

シリアスな雰囲気の中の場に承太郎の笑い。あまりにもおかしい。

望は何で彼が笑ったか分からず、顔をしかめながら後方に少し下がるが、承太郎は気にせずにこう発言、否、こう断言した。

「何故だかなあ、今の俺はてめーと力<sup>パワー</sup>比べがしたくてたまらない。こんな気持ちになつたのは生まれて初めてだ」

承太郎の笑いは、そういう感情から来たものだ。彼の帽子の左側のつばを右人差し指で押さえ、クイツと右側のつばまで指を動かした。

「だから……、抜きな。てめーのスタンドを……午後の授業までには出れるよう手加減してやるからよ」

「はあー。しかたないですねえ。久々に本気を出しますか」

これは承太郎なりの宣戦布告の合図だろう。こうなったら逃げるのも癪である。望はだるそうな体を伸ばして、戦闘態勢に入る。

「それじゃあお見せしましょう。我がスタンド、ミニット・エンジェル秒速の天使“を!!”

ズキユユユウウウウウ

勢いよく彼の背後から上空へ飛び出すスタンド。秒速の天使《ミニット・エンジェル》。その姿は、正しく天使のような翼、頭上の輪、そして慈愛に満ちた髪留めをしている少女の形をしている。

見た目パワー型ではないように見えるが、騙されてはならない。そういうスタンドもいる。

承太郎もスタンドを出して構える。

そのスタンドは、物凄い筋肉質の人型で正しく承太郎の分身と形容できる代物だ。

お互い射程距離内に入っている。

どちらかが速いの勝負になる。

相手の力はお互い未知数なので、油断はできない。

こうした、沈黙の時間が暫く続いた後、承太郎は動いた。

うおおおと雄叫びを上げて、望に先手必勝の一撃を与えようとするつもりだろう。しかし、その足は急に止まる。なぜなら、承太郎目掛けて何かが飛んできたからだ。

承太郎は即座に反応してスタンドでその飛び道具を掃った。

それはナイフ、それを知って再び殴りかかろうと思ったが、すでに望は後方に下がっていた。

敵ながら天晴と思ったが、それよりも承太郎には重要なことあった。

(あのナイフ、ヤツの腕も、スタンドの腕も一瞬も動かずに飛んできた。そういう能力か

？いや、それに今の風の強さでもあれほど速度が遅い訳がない)

今の風力はだいたいぶ落ち着いている。2 mの差でナイフを弾いた承太郎の精神力はすばらしいが、弾くことができたのは、ナイフの速度が遅かったためである。

2 mの距離の差で成人男性が突っ込んでいる相手にナイフを投げたなら、手を大きくスイングするはず、そしてかなり速いため、相手は普通防げない。

承太郎でも避ける動作はとる。

しかし、望とスタンドのどちらの腕も1 mmも動かさず、かつ、ナイフを遅く投げるこ  
とができるのか。

投げることは、スタンド能力と推測できるが遅い理由が分からない。スタンドの能力・パワーが仮に弱いとすると、何故自分で投げないか。

承太郎はそういうことを次々と推測した。

(まさか、誰かが隠れて投げたのか？ヤローを守るために。しかしどこからだ？ここらへんは注意深く確認したが、いなかっただはずだ。ましてはヤローの後ろに隠れて一緒に来ることなんて一般人には出来る筈が・・・)

「・・・ッ!!!まさか!!!」

「ようやく気付きましたか」

承太郎がようやく一つ of 真理に辿り着いたことにニヤニヤとする望。  
承太郎は思った。何故早く気付かなかったのかと。

「そうスタンド使いは!!」『1人じゃありません!!』

急に女の声が聞こえた直後、望が羽織っていたマントが上空へ飛ばされた。もう一度  
言うようだが、風は強くない!!

「( )いつはいつたい!?!」

何が起こっているのかわからない承太郎はたまげていると同時に、そのマントが形を変えて、一人の少女となった。

その少女はおかつば頭で望同様着物を着ていた。

「て．．．てめえは．．．」

「そう、スタンド使いは『一人』じゃありません」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承太郎が見つけた六人の内の一人にその少女は入っていた。

「先生の『ミニット・エンジン秒速の天使』とこの『常月まとい』の『ウォーアイニー』、この2人です!!」

To Be Continued . . . . . →

## 第六話 『秒速の天使《ミニット・エンジェル》』と『ウォーアイニー』その②

午後1時5分。場所は食堂。

承太郎が糸色望と相手しているとき、そこで徐倫たちは食事を取っていた。

「くう~~~~。うまあああい。さすがに並んだ甲斐はあったわあ、この牛丼」

「徐倫はすげーよなあ、和食を優雅に食べるなんてよお、あたしやあさすがに無理だ、まだ慣れてねえ。で、どうよアナスイそのカツ丼」

「ああ、『日本独特の味』と俺のアメリカンの舌が拒絶反応を起こして味を相殺してるから何とも言えない。が、今のうちに舌を慣れさせないと徐倫と結婚した際、日本食を食べる機会があったらたまったもんじゃねえからな」

「もしかしてそのために頼んだの?」

父親が日本人のためか牛丼を食べて、満足そうな徐倫。

まだ日本食に慣れてないエルメエスはシンプルにチキンライス、エンポリオはカ

レー、アナスイは徐倫との将来のためにカツ丼にトライしている。別に無理をしなくてもいいのでは。

ちなみに、この食堂は最近出来たらしい。

風の噂では、座敷わらしがこの学校にいて、そのおかげかお金がどんどん入るようになって、知らず知らずの内に資金が有り余る程になったので、この学校の理事長が「この際だから食堂でもつくるか」と提案して今に至るらしい。詳細は最中ではないが。

後、和食と洋食合わせて100種類以上あって、食堂マニアには打って付けの場所だ。閑話休題。

「そういえば父さん遅いなあ、ちやちやつと『時を止めて』トドメさせばいいのに」  
「何でもかんでも『時を止めて』物事を解決したら、話が破綻するぞ徐倫」  
「裏の情報聞き出すのに手間取っているんだよ。きつと」

5分が過ぎてても一向に来ない承太郎に心配する徐倫。望と一悶着した承太郎をここで合流するつもりの徐倫たち。

彼女の発言につっこむアナスイ。色々とあるだろうと予想するエンポリオ。エルメスはチキンライスを食べることに夢中で話に参加してない。

ちなみに、徐倫とアナスイが言ったとおり、承太郎には『時を止める』能力がある。常に止められる時間は不規則で全盛期で5秒止めたと豪語している。それが最強と言われる理由の1つだ。

その最強が今、苦戦していることは彼らは知るよしもなかった。

場所は戻って、屋上。

承太郎は二人のスタンド使いと相手していた。

1人は自分が呼んだへ組の担任・糸色望。もう1人は自らのスタンドを『ウォーアイニー』と名乗った同じへ組の生徒。

出席番号25番、常月つねつきまといだ。

彼女はマークしていた6名の中の1名だが、予想外の登場に驚く承太郎。どうやら後で、ではなく今すぐ戦わなければならぬようだ。

「先生のごことは大分前に知っていましたが、承太郎さん。まさかあなたが、そんな柄の悪い方なんて思いもしなかったです」

承太郎に話しながらもまといは両手にナイフを持ち、警戒を緩めない。

「それにあなた、その見た目で二十歳ほどの娘さんがいますねえ。いったいあなたはおいくつなんですか?」

「……………。」(スタンドの像が視えなかった。まさか、エジプトで俺に化けた「クヌム神」のように本体と一体化してるのか?)

「もしもおくくくくし。聞いてますか?無視ですか?」

「ああすまん、ちとばかし考え事をしていた。ちなみに、おまえの質問に対する答えは今年で42だ」

「ええ!?!私より年上なの!?!」

まといのスタンドのことを考えていて、彼女の言葉を全く聞いていなかった承太郎。幸いにも最後の所だけ聞いていたため自分の歳を答えた。

承太郎は自覚してないが、彼は見た目大学卒業したばかりの若い兄ちゃんだ。実母も妬む若さだ。

二人とも実年齢を言われて驚く（望は特に）が、すぐに話題を変える。

「そういえば『考え事をしていた』と言いましたね。私のスタンドのことですか？」

「……」

「凶星ですか。ククッ」

完全にまといのペースだ。考えている事でさえ読まれてしまうほど承太郎は焦っている。

「ばらしてしまいますが、私のスタンドはこういうものです」

と彼女は言い、自分の手の甲を承太郎に見せた。

すると、そこにゆつくりと割とでかい目が出てきた。その目はまるでルクソールで

会った「セト神」のようだった。

「そう、これがいわば私の『ウオーアイニー』の像<sup>サイゾン</sup>。能力は私の体を『布に変える』。普段から先生のマントもしくは着物になって、共に行動していただけますわ。あなたがいらつしやつたきは、偶然能力を解いていたために、あなたに見つかってしまったとは、偶然とは怖いですねえ」

「だけど常月さん、一緒にいる私は大迷惑ですが？」

自分から能力についてばらしまうまとい。自分の能力を喋る事は弱点を教えることになるので、決して人には言わないのが鉄則だ。

しかし、承太郎はそれを鵜呑みにしない。それを弱点と思わせて相手を不利にさせるかもしれないからである。

ちなみに相手の望は彼女の能力に迷惑がっていた。だって、自分の生活習慣を覗かれているからだ。

兎にも角にも、彼らが構えてから何分経ったか。数えるのもメンドくさい。そんな時承太郎は言った。最も重要なことを。

「やる前にーついいか？ずつと気になっていたことなんだ。てめーら、さつき俺が言ったこと聞いてたよな『裏で何してる』って、今すぐ答える!!」

承太郎たちがこの学校に来た理由の一つ、『学校側の不穏な動き』それを彼らに喋らす気だ。今すぐ!!

「……………」

「おいどうした？てめーらもだんまりかあ？なあ教えてくれよ。子供の頃、『刑事コロソボ』が好きだったせいかな、気になることがあると夜も眠れねーんだ。俺につき纏われたくなかったらいうんだな」

「…………ツ!!……………」

さつきまでとは打って変わり、黙ってばかりの2人。

そこまで言わないとなるとますます怪しいと思った承太郎は警察沙汰ぎりぎりの嚇しをかけた。

ここまでの事を言われたら、さすがの2人もお手上げだ。

渋々閉じていた口を望は開いた。

「『いずれわかりますよ、いずれ』。あなたたちがへ組に居続ければ、直、分かりますよ……。心配しなくとも悪しき事はやってません。やっているのはただの『罪滅ぼし』ですから」

「先生……」

「そうか。もういい、分かった。それじゃあ始めるか」

これ以上は聞く必要はないだろうと、承太郎は打ち切った。

それは望のことを思つてのことなのか。それは彼にしか分からないことだろう。

午前1時7分、否、8分。

ようやく戦いが始まる。

戦いが始まると共にヒラヒラと上空を舞う一枚の布、否“ウオーアイニー”。  
それが承太郎の頭上にまで舞うと上半身だけ戻して彼を見下ろす。

「そうそう承太郎さん。言つてませんけど私つて『掴んだもの』まで布にしちやうんですう。こんな風にね!!」

そう言つてまといは、なにかを振り下ろす。それはツ!!

「……ツ!! 電柱ツ!!」

「そうですよツ!! 食らいなさい! 承太郎オオオオオオオオオオさああああん!!!」

まといは電柱を斧のように振り下ろす。

それを承太郎は「スタープラチナ」で軽々と折つた。

バチチチチチツと電柱の中のコードが漏電しながらそれは落ちた。と同時に。

ズシューウウウウウ

「なツ!! 脚がツ!!」

「余所見をしてはいけませんよ」



しかし、〃スタープラチナ〃のような豪快なパワーを持っているなら話は別。一気に差を縮める。

が、足りなかった!!!

（数メートル高さが足りなかったようです。結局は重力には逆らえない。布は風に舞うが、あなたは風に舞えない。仮に攻撃しても数発しか当てられない。落下したのを見てナイフで串刺ししてあげますよ）

いくら〃スタープラチナ〃でも重力の法則には逆らえない。

まといの思うとおり、このままいけば彼女の手、できなくても望の手によって再起不能になるのは間違いない!!

落ちる前にまといを再起不能しなければ、承太郎は確実に負けるツ!!

そんな承太郎はスタンドの右手の人差し指と中指をくつつけて構えた。そして叫んだ!!

「スターフィンガー流星指刺!!!」ズギユウウウウーーン

ドスツ!!

「くっ……かは……!?」

「2本の指が『伸びた』だとオオオオ!?」

構えた2本のスタンドの指がグー……と伸び、まといの布の所を貫いた。それを見ていた望はもう驚くことしかできなかった。

「オラツ!!」 ビリリリッ

貫いた指を右にズラし彼女を切り裂いた。

そのまま着地した承太郎は一人になった望の方へ向いた。

「これでめでたい人だ。よかったよかった」

「……」

まといの安否は確認せず、承太郎は依然黙ったままの望を見る。相方を倒されて何も言えないだろうか。

「ククククククククククク」

「……!!!」

いや、黙ってはいない。でも泣いてはいない。『笑っていやがるのだ』。  
この男は笑っていやがるのだッ!!

承太郎がそんな風に笑う望に戦慄しているとふと脚にドスツと刺さる音と痛みが  
やって来た。

後ろ側の脚を見るとナイフが一本刺さっていた。

そのまま角度を上げると、彼女がいるのだ!!常月まといがッ!!

「承太郎さん、私の能力をなめないでください」

倒したはずのまといが倒せていない。承太郎はそう思い後ろにいる彼女に猛烈な  
ラッシュを与える。布が変わってから。

これだけじゃ倒せていないと承太郎は判断して、布を持ち、真つ二つに引き裂いた。

しかし、2つに裂いた布は暫くしてから1つに集合して元の彼女の姿に戻った。

「無駄ですよ承太郎さん、私にはスタンドパワーも射程距離もない代わりに素早く布に変わるスピード!どんな攻撃も耐えしのぐ耐久力!フフ、ハハ、理解できましたか?つまり!布になっている私には如何なることも通じないのですよ!!!」

「.....」

まといが自身のスタンド能力に関して説明している際、それを聞きながら承太郎は精神を自分の記憶の中に入った。

自分のパワーが通じない、自分のスピード追いつけない。承太郎がそういう経験は三度したことがある。

一人目は25年前の旅が始まってすぐに襲った「タワーオブグレー」。

二人目はシンガポールで花京院に化けた「イエローテンパランス」。

最後に数ヶ月前に襲われた「ホワイトスネイク」

最後以外の連中はある点のミスにより敗北した。そしてそれは、今のまといにも当てはまるものだった。

「やれやれだぜ。頭のネジでも飛んじまったようだな。気付かねえのか？てめーは今とんでもねえミスを1つ犯してんだぜ」

承太郎の言ってることにまといや望は頭に疑問符をつける。どうやら二人は彼の言っていることが分かっていないようだ。自分たちが行った行動を思い返しても思いつく点は見つからなかった。

「先生ッ!!」

「ん？あ、はい」

考えても仕方がないのでまといは望にある合図を送った。

その合図によって望はスタンドで自分を後ろから抱えて浮いた状態にしてまといの所へ向かい、彼女はかれのマントになって一緒に彼の周りを回り続ける。

“ミニット・エンジェル”はその名の通りかなり速い。もうほとんどどれが残像かかれか分からなくなった。

しかも、徐々に間隔を狭めているのでより彼は追い詰められている。

「どうですか？これでも同じセリフが言えますか？ジョジョ？」

そう言い、まといは奇襲を始めた。望を踏み台にし、承太郎をナイフで切りつける。そしてまた望を踏み台にし、何度も何度も何度も切りつけた。

今の状態のまといなら「スタープラチナ」を叩き込めば、倒すことができる。だが、どこから襲ってくるか分からないため手の出しようがない。

いろんな所から血を流す承太郎はこんな状況の中で切られても表情は一つ……とて  
も哀れむ表情だ。

「やれやれだぜ……自分というものは、自分ではなかなか分かりにくい、本当に気付いてないようだな。本当にラッキーだったのはこれまでだったと……これは使いたくはなかったんだが、やらざるを得ないな」

「は？何を言っ……いふ」

「常月さん!？」

まといは承太郎の言っていることが依然分からず言い返そうとするが、そのまま仰向け

に倒れてしまった。

望は彼女が急に倒れたんでびっくりして急停止した。

「そうだけ。速度を落とすな。どっちみちてめーは負けるからな」

「・・・!!!」

自分の前にいるはずの彼がいつの間にか自分の後ろにいた。

かれは知らないが、彼は、どうとう使ってしまった。『時止め』を。

いくら速くても『止まっている世界』では、彼以外の物質は全て無防備状態だ。

反則極まりない能力のため使わないでおこうと思っていたが、彼女が自分を侮辱したので使った。

彼女が犯した決定的なミス、それは、自分の能力を過信し過ぎたことだ!! 過信し過ぎて勝てる場面で勝てなかった。

彼はそう言いたかったのだ!!!

そして彼は「スタープラチナ」を全面的に出し、かれを威嚇するのだ。

「後、実はミスが2つある。もう1つはな・・・」



承太郎に殴られおもいつきりフェンスに激突する望。手加減してくれてるが殴る量  
 があまりに多い。が、そんなことは彼はどうでもよかった。

「そう・・・てめーらのもう1つの敗因はもうこれしかない・・・極シンプルな答えだ・・・」  
 二人とも気絶しているのに彼は、承太郎は言い、徐倫たちのいる食堂へ向かうので  
 あった。

「てめーらは俺を・・・『怒らせた』」

糸色望、常月まとい・・・再起不能（リタイヤ）

※但し、午後の授業までには再起可能

To Be Continued・・・⇒

評価：A・・超スゴイ B・・スゴイ C・・人並み D・・ニガテ E・・  
超ニガテ

・秒速の天使  
ミニット・エンジン

本体名：糸色 望

【破壊力：B スピード：A 射程距離：C 持続力：A 精密動作性：B 成長性：A】  
能力：不明 スタイル：近距離パワー型 分類：人型

・ウオーアイニー

本体名：常月 まとい

【破壊力：なし スピード：A 射程距離：なし 持続力：A 精密動作性：E 成長性：  
C】

能力：本体及び掴んだものを布化 スタイル：近距離操作型 分類：一体化型

次回予告

??? 『ああ・・・糸色先生』

望 『それでは授業を始めます』

??? 『愛しき先生・・・』

望 『いや何も』

??? 『あなたのためなら私は・・・』

徐倫 『ん？どうしたの？』

??? 『命も惜しくはありません』

徐倫 『何じやこりやああ!!』

??? 『あなたを傷つけた者たちを・・・』

徐倫 『来るなら・・・』

??? 『始末します!』

徐倫 『最後までとことん来いッ!!』

『第七話 ラヴマシーン』

## 第七話 『ラブマシーン』

午後1時25分。

昼食を食べ終え、生徒たちは5時間目のために席に座っていた。

2のへ組も同様だが、他クラスと1つ違うことは教諭が来るのが少し遅かった。他クラスはチャイムが鳴る前に来ていたが望はチャイムが鳴ってから来た。

「すいません皆さん。色々あつて遅れました。それでは授業に移りましょう」  
「いや、先生待つて下さい」

昼休みに承太郎に殴られていたことが嘘かのように全開の望。

そんな彼が生徒たちに一旦謝罪した後、授業を始めようとするが、それを真ん中分け少女、木津千里は止めた。

「全くもって、理由になっていません。そこは、きつちりと話すべきでは？」  
「色々ありまして」

「先生。はぶらかさないでください。」

「何もはぶらかしていませんよ」

「何か起こったんですか？」

「いや何も。それでは授業を始めます」

「先生……」

承太郎と戦ったことを伏せる望。そこまでして隠す理由は分からないが。

そんな中、一人の女生徒が望の顔をじっと見つめる。もちろんまといではない。

（ああ……糸色先生……愛しき先生、なんちゃって）

そんなダジャレを心の中で呟き微笑みながらじっと見つめる彼女。

（先生……あなたは どうして先生なの？あなたが先生で無ければ私達の愛を邪魔する障害は何も無いというのに）

もうセリフがまんまあれだが、彼女のその微笑みには慈愛に満ちていた。

(先生……あなたのためなら私は……命も惜しくはありません。だから……)

しかし、急にどンドンその微笑みは影を濃くしていた。そうそれはもはや……

(あなたを傷つけた者たちを始末します)

悪魔のようだった。

放課後、徐倫は廊下を歩いていて。理由はなく只歩いていた。

時刻はすでに4時半を過ぎていた。帰宅部はもうほとんどいないであろうと徐倫は思っていると、「すみません」と声をかけられた。振り返るとそこに見覚えのある女生徒

が立っていた。

「あつ、あなたは確かへ組の・・・」

「あびる。〃小節<sup>こぶし</sup>あびる〃です。あびるって呼んでください。」

出席番号22番。小節あびる。好きなもの：動物の尻尾

クラスの中では背が高くスタイルも良く、左目は包帯によって隠れている。

常に包帯をしているので周りからはDVを受けていると言われているが、本当は動物園でアルバイトをしていて、その動物たちとじゃれていて怪我をしている少女だ。

余談だが、彼女の部屋には動物の尻尾のコレクションを飾っている。どこぞのギャンブラーたちよりタチが悪い。

そんな彼女が徐倫に話しかけてきた。

「ん？どうしたの？」

「いや・・・こんな時間まで残っているなんて精がでますね」

「ああ・・・どうも」



と同時に、あびるに巻いていた包帯が一斉に徐倫に目掛けて襲ってきた。

「ストーン・フリーイイイイー！！」

徐倫はそう言い、自分のスタンド、"ストーン・フリー"を出し、その包帯を払い飛ばした。

そして、二人は一旦間を置いて相手のスタンドを観察した。

徐倫の"ストーン・フリー"の像はまるで男のように鍛え上げられた人型のスタンヴィジョンドだ。

あびるの方は見当たらないが、おそらく"包帯"であろう。その証拠に包帯が生きているように活動しているからだ。

「いかにも・私はスタンド使い。名を"ラブマシーン"。私のスタンドはスタンド使い関係なく『視える』から先生に使用を制限されてるのよ」

「ふーん、『視える』スタンドかあ・・・でも"ストーン・フリー"に弾かれるってことはあまりパワーはないようね」

「確かにパワーないけど・・・」

あびるの弱点はパワーの無さと理解した徐倫。だが一方で平然としているあびる。何をするつもりだろうか。

そう考えていた徐倫は急に足元に違和感があると思い、下を見ると……  
包帯があつた!!!

そのことに気づいたとき包帯がそこら中にあることに今気付いた。  
そして、徐倫がおつたまげる前にあびるは腕を動かし彼女を拘束した。

ピツツツシイイイイイイイン

「拘束力ならあります」

「な……何じゃあこりゃああ!!」

スタンドも縛られた徐倫。何とか振り解こうとするが、彼女の言うとおりのうんともすんともいわない。

「後、私の操る包帯は『保護色』ができてましてねえ。戦う前に仕掛けておきました」

これがあびるが平然とした理由だ。相手に気付かせずに捕縛する、それができるから一人て来たのだ。

徐倫は焦りながら包帯を解こうとした。自分を殺すほどのパワーは無いが、人質になることだけは避けたかったからだ。

でもなかなか解けない。スタンドのパワーを全開にしてもビクとももしない。

一旦諦めてあびるの方へ見ると彼女は包帯を野球ボール並の大きさに纏めて徐倫の方へ歩を進める。

「嘘でしょ・・・あんだ」

「私にもちゃんとした攻撃方法があるのよ」

そう言い、あびるは徐倫の顔面に纏めた包帯を叩き付けた。

「ほら!!」ドゴオオオ!

「ぐげえ!」

「ほらほらほらほら・・・」ドゴ　ドゴ　ドゴ　ドゴ　ドゴ　ドゴ　ドゴ

「ブ、ブ、ブ、ブ、ブ、ぶお」

痛くないように結構痛い。それを何十回も繰り返された。

何十回もされると徐倫の顔はいたる所が腫れ上がっていた。そんな状態の徐倫は顔色ひとつ変えず彼女に問う。

「何故だ・・・何の理由で私と戦うんだ！私達があんたらにとって邪魔だからと言いていいのか!？」

「別に・・・そんな事無いわ。理由は一つ先生を傷つけたから」

互いに敵対意識はないはずだから戦う理由も、襲われる理由も無いと徐倫は思った。

ただ、あびるにとつての理由は自分たちの担任を傷つけたことらしい。ということ  
は、

「まさか、戦いを見てたの!？」

「いいえ、ぶらぶらと校庭を歩いていたら、屋上で音がしたから行ったら先生が倒れて、『誰が先生をッ!』て思ったら、自己紹介そうそうスタンドを出した承太郎さんが怪しいと思ったから」

「でも・・・やったのは父さん一人よ」

「けど変わらないでしょう。スタンドも使えるそうだし、共犯よ」

「確かにそうですね」

彼女は戦いを見ていなかった。つまり『時止め』のことは知らない。少しほっとする徐倫だがまた新たな疑問が浮かび上がる。

「ねえ？なんでそこまであの担任に忠実なわけ？独占欲が強すぎるわよお。こういうのを『ヤンデレ』って言うのかしら？」

「うっくくくん。確かに私もここまで先生を独占したいなんて思うのもいっただったかしら・・・あつ、思い出した」

そのような気持ちをし始めた正確な時を思い出し徐倫に言った。

「私の『初めて』を先生にあげた時かな」

「はあ!？」

理解不能だった。徐倫の頭の中で『初めて』の意味を何十回と検索した。意味を理解するのにある程度時間が掛かった。

「分かりませんか?つまり処・・・」

「言わんでいい、言わんでいい、言わんでいい!!」

意味を言うあびるだが徐倫の必死の叫びで遮った。

「えっ!?!つまり、えっ!?!あ、あんた！貴重な自分のヴァージンなんだと知っているの!?!普通好きなのヤツにやるだろう!!」

「先生のこととはする前から好きだったわよ。してから先生への愛が大きくなったの。これでもいい?」

「いいわけねえーだろう!!そこは普通同年代だろツ!!」

「別にいいでしょ、誰に『初めて』あげても他人には関係ないでしょ。・・・それに私は『そういう恋愛』できないし」

『初めて』を誰にあげるかで討論になっている2人。女の子がそんな事を言っただけじゃない!」

最後に言ったあびるの言葉に疑問を抱く徐倫。対してあびるはガールにあるまじきガールズトークでテンションが上がっていた。

「ああ、こんなこと言っているとあの時のことを思い出して興奮してきたわあ。ウフフフフ」

彼女は自分の腕を手で掴み、上下に擦り合わせてテンションを上げる。

それに対して徐倫はグツグツと怒りが込み上げてきた。

「あんだ．．．それって．．．ただ寝とられたただけだろうがああああああああ  
!!!」

ブチイイイイイイツ!!!

噴き出した怒りは、＼ストーン・フリー＼に伝わり、包帯を破り去った。と同時に徐倫の乙女の怒りもブチツと切れた。

「あんたが誰にヴァージン上げようが知らないけど、急に闘志が湧いてきたわ!!」

今の徐倫はどっかの誰かさんの髪型を貶されたように怒っている。

そんな彼女を見てあびるは緩みきった精神を直して構えた。

「今のこんな私を攻撃して来るなら．．．」

「くッ、＼ラヴァマシーン＼」

「最後までとことん来いッ!!オーラオーラオーラオーラオーラオーラオーラ．．!!」

徐倫があびるに突っ込んできてラッシュユを与えようとする。だが、それらを包帯で

ガードする。

その包帯を破ることはできず、徐倫は攻撃するのを止めた。

「ちっ、結構堅いのね。」

「防御力ならまといちゃんにも負けないからねっ」と

「うおっ!!」

攻撃を止めた瞬間、あびるは徐倫を捕らえるために包帯を伸ばす。それを巧みにかわし、窓ガラスを割り、外へ逃げた。

あびるはそのことに気付いた瞬間、外を見るが徐倫はもう50メートルも向こう側にいた。

彼女にとって逃げられる事は、一番の難点だった。なぜなら、彼女は生まれつき運動が出来なかった。見た目とスタンド使いなのにできない。だから、へ組の中で最も足が遅い。

そうこうしている内に徐倫はもう見えなくなつた。このままあびるは諦めるのか。

いや、諦めない!!

あびるは左手を左目の所に持っていきしばらく押さえた。そして、フツと笑い、何処かへ行ってしまった。

左目の包帯から血を出しながら……

徐倫は今校舎裏にいた。校舎内においても包帯で捕まるからだ。

それに校舎裏はあまり手入れをしておらず草木が生い茂っている。一先ずここに隠れておこうと決めたのだ。

(彼女の射程距離はおそらく5メートル程の筈。だから此処らへんに隠れてあの子を待ち……うおっ！)

徐倫が今後の作戦について練っているときに何かにつまずいた。振り返ると包帯が自分の右脚に巻き付いていた。

「何ー！ツッ!!まさかッ!あびるの包帯って遠くまで伸ばせるのか!」

「その通りです。私は何百メートル先まで伸ばせるの。この学校の敷地内なら満面無く伸ばせます。あなたがここに来ると思って先に仕掛けて置いたの」

そして、何時の間にかに校舎の陰から出てきたあびるはもう徐倫の数メートル先の正面にいた。

「うおおおお!! ストーン・フリー!!」

自分の脚に包帯が巻かれてながらも、あびるを攻撃しようとする徐倫。

だが、彼女の攻撃は全てあびるにかわされる。

「なっ!?!なんでなんで当たらないの!?!左目は包帯してるから視えてるのは右目だけなの

に・・・左目の出血と関係があんの？」

そう、徐倫の言う通りあびるは、かわす度に左目の出血量が多くなり、最終的には垂れてきた。

徐倫はその出血と回避に関係があると考えていたとき、あびるはその一瞬の隙を突いて、徐倫の首の後ろから包帯を巻きつけ5メートル後ろの木に叩きつけられた。

「ごはッ!!」

「もうあなたと遊んではいられません。早くあなたのお父さんを倒さなければならぬですからね。ちなみに私の左目は幼い時に事故で怪我をして高校入学前に移植したんです。よくは分かりませんが左目に力を入れると出血する代わりに、人が次にどう行動するかが分かるんですよ」

そう言いあびるは徐倫の首を絞め始めた。ただ絞めあげてない、激突した木に予め何重もの包帯を巻き付かせている。

最終的には磔刑のようになるが、徐倫はそうならないために踏ん張っている。

「無理ですよ、ここであなたが踏ん張っても、結局は首が絞まっていることに変わりはありません。諦めてください」

しかし、あびるの言葉に徐倫は耳を傾けずに踏ん張っている。相当首が絞まっているのに必死に必死に。

「無駄だつってるでしょう!!首が絞まって知能が下がったんですか?踏ん張るぐらいなら首の包帯取る方が最も効率よくあなたが助かるのよ!?!」

徐倫の無駄な踏ん張りに流石のあびるもキレるが彼女は一向に止めない。呆れたあびるは思いつきり力を入れた。

そして、徐倫の首、否、体が「バラバラ」になった。

「なっ?!?!何ですつてええええええええええええええええ!!?!」

驚きのあまりあびるは思いつきり叫んだ。そりやそうだ。

あびるは2メートル程前に進んでどうなっているかを見る。そこには『長い糸』が残っていた。

「糸？彼女は『糸を操る』能力だというの!?じゃああれは分身で本体は別の場所!?（どんなの!?いろんな所にあえて仕掛けたのに踏まれる反応なし、一体どこに!?）」

とあびるが思っていると、ふとゴロゴロと何かが崩れる音がする。あびるがよーく聞いてみると石か何かを崩しているような音がする。

しかもその音がどんどん近づいて……

（まさか?!?彼女!!）

しかし、もう何もかもが遅かった。そうあびるが気付いたときには地面から「ストーン・フリー」の両腕が彼女の目前にツ!!

（地面の中を掘って!!!）

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
オラオラオラオラオラ……!!!』

流石のあびるもそのラッシュに対応できず、呆気なくくらってしまう。

あびるをスタンドで殴っている最中に徐倫は地面の中から出てきて殴られている彼女を見るのだ。

「惜しかったわね。あんたが私の能力を知っていたら、勝っていたのにね。因みに私の能力は『肉体を糸に変える』能力。『糸を操る』じゃないわ。『肉体を糸に変える』のよ」

今になってあびるに能力を教える徐倫。否、徐倫はあの方法をするためにわざと能力を見せなかった、と考えた方が妥当だ。

何故なら、草木がここいら一帯に生い茂っているから穴を掘っても気付き難い所だからだ。

「いくらあんたの能力が強くても、土の中までは流石に忍ばせることは考えてないよね。敗因はそれよ」

徐倫は敗因の理由を述べているが、あびるに意識があるかは皆無だ。

「じゃあね」

『オオーラアアアアアッ!!!』

ドゴオオオオオオオオン

あびるを嵐のようなラツシユから開放した徐倫。あびるはもう完全に気を失っている。あびるは宙を少し舞って落下する。

どさつとあびるが落ちた後、徐倫はその場に倒れこむ。

「やれやれって感じだわ。正にギリギリね」

彼女の作戦はこうだ。

まず「ストーン・フリー」で自分が入れる程度のトンネルを掘るため地面にしがみつき、掘れたら体を糸にし包帯の拘束を解きトンネルに入る。一部をトンネルに気付かせないためにより遠くに設置する。

後はあびるの隙を突いて地中から攻撃する。以上だ。

もし掘つているときに体が数センチでも浮いてバレてしまったり、もつとトンネルの穴に近づいたり、囿の糸がトンネルに続いていると気付かれてトンネルの中に包帯を入れられていたら……。

そんなことを想像するだけで冷や汗が出てきた徐倫。その汗を拭い、承太郎達を探しにこの場を去った。

その後、承太郎達を探している徐倫だが、承太郎達はもう既に帰っており、もういいことが教員から知らされた。

だるい体を起こして、家に帰ろうとする徐倫。だが彼女の前からある男が向かって来た。

その男は糸色望。徐倫は彼に笑顔で話しかける。

「あ、糸色先生じゃないですか」

「おや？徐倫さん、こんな遅くに何やつてるんですか？」

「いえ。あなたの教え子のあびるちゃんとお、戦つてたんです」

「おや、では彼女に勝つたということですか。流星は承太郎さんの娘さんですね」

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

和やかな会話をしていたが、急に徐倫は望の肩を掴んだ。しかもおもつくそ。

「あの・・・徐倫さん？ちよつと痛いんですけど」

「でもねえ、どうしても怒りがおさまらないんですよ・・・あんたに対して」

「え？それつてどういう事ですか？」

「そのままの意味だよ!!乙女の純潔奪いやがつてツ!!このクサレ寝取り先公野

郎オーーーーーッ!!!」



## 第八話 『オレンジミント』と『サムライハート』その①

(私の名前は“日塔奈美”<sup>ひとうなみ</sup>。出席番号27番。好きな食べ物は色々あるけど特にラーメン。皆からは“普通ちゃん”と呼ばれることがある。私は普通じゃないツ!!異常なよ!!皆みたいに異常なところが無いのが異常なのよ!!あれっ?それって考えてみたら普通だわ)

と、出番欲しげに自己PRをする普通ちゃん。

(おいつ!!そのナレーター!!普通って言うな!!私には“日塔奈美”と言うちゃんとした名前があるんだから!!)

と叫ぶ普通少女。

(.....普通って言うな.....)

と苦し紛れに言う普通。

(普通って言うなあああああああああああ!!!何で私ってやる事なす事普通なおお  
おおお!!!それ以外の評価は無いのかああああああああああああああああああ  
ああああああああああ!!!)

と嘆く(普)。

(誰かああああーーーーー!!!私を救い上げてーーーーー!!!普通と言う負の  
スパイラルからーーーーー!!!大体普通って良い意味で使われない言葉  
だよねーーーーー!!!こんな風に!!!)

- ・ 普通のアルバム
- ・ 普通の彼氏、彼女
- ・ 普通の作品
- ・ 普通列車
- ・ 専門学校の普通科

と叫んでいる普通……いや、もういじるのもここまでにしておこう。

奈美は「普通に」早く学校に来てまだ全員集まっていない教室で現在自分の席で座っていた。

時刻は8時15分を過ぎたところ。もうすぐほとんどの生徒が雪崩れの様に教室に入ってくる筈の時間だ。

教室には、奈美を含む10人程の生徒がいた。奈美はこの状態でさっきの様な件をしていた。他の生徒は彼女の奇妙な仕草に最初は驚くが、段々無視されていって、最終的には反応することもなかった。

閑話休題。

そして、時刻は8時25分、朝礼の時間だ。

ガララツと戸が開き、担任が来たと思いきや、来たのはSCの新井智恵先生だった。しかし、手には出席簿が握られていた。

「えー。皆さん。糸色先生は昨日何者かに暴行を受け、焼却炉の中に入っていたのを発見され病院に搬送されて、現意識不明のため臨時で私が出欠確認をします」

何やら物騒な話である。だから、智恵先生がこのクラスに来たのだ。えー！と驚く生徒たち。驚く理由は担任のことだ。

その事を今日は包帯の量が増えたあびるが質問する。

「先生自らじゃないんですか？」

「自分の体の至る所に拳で痕が付くぐらい殴れたらね」

「じゃあ犯人は分かっているんですか？」

「いえ、まだ判明していません」

あびるは自分で殴って自殺を図ろうとしたのかと質問したがそれはないと答える智恵。逆に、殴った犯人は誰かを問うメガネをかけた少し長髪の女生徒。だが、その事もまだ分からないと口にする智恵。

真実は、徐倫が女の子の『初めて』を奪ったことに対する怒り（勘違いしないで欲し

いが、徐倫のではない)でやられたが、本当は望は誰の『初めて』も奪ってはいない。全て、彼の「影武者」が悪いのだ。

詳しくは絶望本編の百四話『ドクトル・カホゴ』をお読みください。

只、これらの事を1ミリも知らない彼らはおそらく真実に到達する事は決してないだろう。

出欠確認をした後、智恵先生は直に教室を出た。朝の読書の時間なのに殆どの生徒が喋っている。ペチャペチャとお喋りで騒がしいなか、奈美は机に顔を押し付けてぐたあとしている。

(ああ。結局先生をやったのって一体誰だろう?)

と心の中で呟いていると一人の女生徒が彼女に近づいてきた。その彼女は出席番号20番、真ん中分け少女、木津千里だ。

「奈美ちゃん。ちょっと、いいかしら。」

「何?千里ちゃん?」

千里は奈美に何か用があるそうだ。千里は奈美の顔に近付いて内緒話をする要領で話した。そこまでの話なんだろうか。

「あなた、先生を殴った相手って彼らよね？」

「ええ!!? 何でそんな事聞くの!?! 千里ちゃんじゃないの?」

「私じゃないわ。昨日は別の用事があったから、すぐに帰ったわ。後、何でもかんでも私が引き金とは思わないで。」

「御免。(別の用事って何の用事?) それにあんまり突っ掛かる事ないんじゃないの?」

「何、言ってるの? “スタンド” をあかも堂々と彼は、出したのよ。つまり、私達に “そこそしないでさっさと来い” と宣戦布告しているのよ!」

「いや……でも……」

日塔奈美は基本普通だが、ある一点において他人と違う所がある。それは “霊が視えて操れること” つまり、 “スタンド能力” !!

二人の会話から分かるように千里もスタンド使い。千里は割と好戦的だが、奈美は逆に反戦的。

このまま遣り過ごそうと考えている奈美。さっさとこつちから仕掛けた方が良くと

考えている千里。その意見の違いから千里の何かがプチンと切れた。

「何甘ったれた事ぬかしてんのよ!!まだ分からないの、マンモーニの奈美!!」  
「ぐええ……ちよつと千里ちゃん……何を……」

内緒話が千里の大声で内緒話でなくなった二人の会話。キレた千里が大声で怒鳴り、奈美の胸倉を両腕で掴み、吊るし上げる。吊るし上げられた奈美は苦しそうだ。

「貴女なんかよりあびるちゃんの方が凄いわ。見なさい、彼女を!!包帯の量が多くて、ミイラみたいになってきているのよ!!これが、どれだけの勇姿か……。それに比べて貴女は何?!貴女には他にはない優れた『才能』を持っているのよ!!それを最大限に使わいなんで……。だから貴女はいつまで普通なのよ!この普通!!」

「普通って言うなツ!!大体それは個人の勝手でしょ、別にいいじゃん」

「んな訳ないでしょ、この戯け!!誰もが優れた『才能』を持っている訳ないでしょ!!」  
「持っている者」は持っている事に感謝感激して、それをそれを最大限に生かさなければならぬ義務があると思うの!!「晴美」<sup>はるみ</sup>「みたいに運動できるのに、漫画ばっか描いて運動することを疎かにしているのを見てると、我慢できないのよ!!きつちりしなさいよ

!!

「酷いじゃない千里!!」

そう文句を奈美に喚く千里。『才能』豊かな者はその才能をちゃんと理解し、発揮しなければならぬと考える千里にとって、奈美の様な考え方は神経に障るのだ。

それに関連して、彼女の親友のメガネを掛けた少し長髪の少女、ふじよしほるみ「藤吉晴美」がしていることまで文句つける。

因みに、彼女が描いている漫画は基本「BL」だ。意味が分からない人は親か友達に聞か、原作を読めば大体分かる。

「それに晴美だけじゃない!!世の中皆そう、自分の『才能』に気付かない者、仮に気付いても最大限に生かさないう者が多い!!全く……きつちりしなさいよ!!」

- ・ この世の中を変えられる程の力と人脈を持っているのに使わないニート侍。
- ・ 地球を破壊できる兵器を持っているのに一回も使わないネコ型ロボット。
- ・ 自分が滅茶苦茶モテることに気付かないツンツン頭。

- ・小説の挿絵を自分で描きたいがために美術科に通う小説家高校生。
- ・才能があるのに最終決戦まで力を使わない魔法少女。
- ・「こいつだけは使いたくはなかったが・・・」と力を抑えていた主人公。
- ・「これからが本気だッ!」とか言う敵キャラ。

怒りの矛先を全世界に変えた後、吊るし上げている奈美に向かい思いっきり睨む千里。その背後には真つ黒なオーラが出ていた。

「で、貴女はどうするの?行くの!?!それとも、行かないの!?!」

「行きます!行きます!行きます!だから能力は使わないで!!」

「よろしい。」

奈美は涙目になりながら頷く。彼女が涙目になるほど千里の能力は恐ろしいのであろう。そして、奈美を下ろしてからまた千里は言う。

「それじゃあ、放課後、一緒に行きましょう。」

「ええ!?!いまからじゃなくて!?!」

「学生は学業だけは、疎かにしてはいけないわ。あびるちゃんも放課後戦ったんだし、ねっ。」

「は……はい」

決行の時期を定めた千里。渋々それを奈美は受け入れた。  
そして千里は、後ろにいる晴美に話しかける。

「それで、晴美はどうするの？」

「え？ああ、いい。私、同人誌描かなきゃいけないから」

「ちっ。」

千里はそれを聞いて舌打ちした後、彼女は自分の席に向かう。

「まあいいわ。晴美なら別にいいわ。そろそろ授業だしその話はまた昼休みで……」

一時間目の授業のチャイムが鳴る頃なので、皆が席に着き始める。  
クラスの皆は千里が何かやらかしそうだなあと思っていた。

そして、当の本人は薄気味悪く笑い、こう呟いた。

「放課後が楽しみね。」

放課後、エルメエス、アナスイ、エンポリオの三人は校舎裏で箒を持ったまま、校舎を背にして座っていた。

元々、調査をする許可を出す代わりに学校の雑務をするよう交渉していたSPW財団。それを呑んだ上で四回も調査している。

「くそ、なんであたしらがこんな雑用しなきゃなんねえんだ」

「全くだ、ん？　そういえば、徐倫は何処だ？　いつの間になくなったのか？」

「お姉ちゃんなら承太郎さんと生徒指導室にいるらしいよ。何でも昨日の糸色先生のことで説教受けている筈だよ」

現在、雑務に対してふて腐れているエルメエスとアナスイ。そんな二人に対してエンポリオは真面目に遣っていた。

徐倫も途中まで遣っていたが、午後になつて意識が回復した望の証言で承太郎に無理矢理連れて行かされて、現在こつてりと絞られている。

エンポリオの説明で「ああ、徐倫がやったのかあ」と理解した二人。そんな三人の前にある女生徒が二人来た。

一人は、堂々と彼らへ向かっている木津千里。もう一人は、その後ろに隠れておどおどしながら来る日塔奈美。

二人に気付いた彼らは、二人に眼を飛ばす。そして、十分近付いて千里は声を出す。

「こんにちは、皆さん。今は、貴方達だけですか？」

「ああ、徐倫と承太郎さんはここにはいない」

「そうですかあ。まあ、お互い三対三で“戦う”んですから、別にいいんですけどね。」

挨拶をした後、現在三人しかいないことをアナスイから聞いた千里。そして、“戦う”という言葉で堂々と言ったので彼女を睨むエルメエス。

「てめえ・・・大した玉じゃねえか。正々堂々戦いに来るなんてよ」

「あんな宣戦布告をされたら、それは堂々と来ますよ。尤も、どつかの誰かさんはそんな玉なかつたんだけどね・・・」

「もう~~~~。しつこいよ千里ちゃん」

エルメエスの言ったことを返答した後、後ろにいる奈美をまた睨む。もう鬱陶しいという表情を千里に見せた奈美は、彼らにある質問をした。

「それで、貴方達が見つけたスタンド使いの数は何人で、誰なんですか?」

「6人です。糸色望さん、常月まといさん、小節あびるさん、そしてあなたたち、最後に藤吉晴美さんです」

「え!?! やっぱバレてたの!?!」

「当たり前でしょ・・・この普通。」

「普通って言うな」

奈美の質問に律儀に答えたエンポリオ。やはりバレていたことを知った奈美を千里

は罵声を浴びせる。そして、彼女達はようやく見つけた人数と誰かが分かった。

「随分素晴らしい洞察力を持っていますね、承太郎さん。しかし、まだクラスに半数程のスタンド使いが潜んでいます。」

「そ．．．．それ程．．．．」

「どうします？半数程いるスタンド使いに怯えますか？」

「は！そんなもん、どうしたっていうんだよ！！ドンと来たらええじゃねえか」

「ふん。エルメエスの言う通りだ。それぐれーの度胸が無かったらスタンド使いとして名が泣くぜ」

「フッフ．．．．そうこなくっちゃ、オモシロくないわ。」

半数程クラスにスタンド使いが紛れ込んでいる事実には驚くエンポリオだが、エルメエスはそんな事はないと言い張り、堂々としている。アナスイも同様だ。

その態度にクスクス笑う千里。さっきの件は彼女なりの「度胸試し」だった。そして、より闘志を燃やす千里。そして、人差し指を彼らに指して、ある説明をした。

「オーケー、オーケー。それじゃあ「闘い」のルールを言うわ。まず、互いに一人ずつ

闘って、どちらかが再起不能になるまで他の二人は手を出してはならない。別に、勝つても負けてもこれは「力試し」みたいなものだから、何らかの利益というものは、ないわ！あるのは勝利か敗北、強いか弱いか分かるだけの勝負の中の勝負・・・『絶対勝負』よ!!」

「千里ちゃん、かつこよく言ってるけど、そのネタ知ってる人結構少ないと思うよ。まあ別にどうでもいいけど」

妨害なしの一对一バトル。最も千里が得意とするバトル形式だ。原作でもサシでは無敵を誇る。そんな凶暴で狂暴な千里の恐ろしさを彼女自身が醸し出す圧倒的な殺気を肌で感じとる三人。

長年の経験と勘で彼女が極度の戦場好きかが分かった。そしてこの闘い、千里と戦う際一瞬の隙も彼女に見せてはいけないと悟った。

そう考えているときふとアナスイがあることに気付いた。

「おい！もう一人は何処にいやがんだ!?何処にもいねえぞ」

「ああ、晴美のことね。晴美は、『家で闘う』って昼休みいつてたわ。」

「ああ？つまり？」

「つまり、遠隔操作なのよ晴美は。心配しなくても彼女のスタンドなら近くにいたから、ちやんと闘うみたい。さすが晴美だわ。やると思ってたのよ。」

「いや・・・かなり千里ちゃんに脅迫されたからじゃないかな？」

「何か言ったかしら？ん？」

「いえ、何も!!」

もう一人のスタンド使い・藤吉晴美は、千里の必死の説得（否、どっちかと言うと脅迫）で闘う事を決めて、スタンドを学校内に残らせた。

彼女の家は学校から何百メートルと離れているので、これだとかかなりの遠隔操作型だと思われる。

その説明であと一人がいない理由が分かったアナスイ。と同時に接近戦ではかなり弱いと考えた。

「二つ忠告するなら、晴美が遠隔操作だからって、あまり調子に乗らないでください。彼女は私でも恐ろしいと思うスタンド使いですから。」

これを聞いた後、プルプルと臉を震わせるアナスイ。凶星だったこととそこまで強い

やつに自分達で勝てるのかという疑問でだ。

アナスイが考える通り、遠隔操作型はパワーが無い代わりに特殊能力と射程距離が強い。そのため、接近戦では弱いため、必ず距離を置いてから闘う。

しかし、化学にはどんなものにも例外があるように、パワーが強い遠隔操作型もいる。例を挙げるなら、十三年も前に杜王町で承太郎とその町のスタンド使いとで戦った“レッド・ホット・チリ・ペッパー”だ。

ソイツは何十キロメートルの射程距離を持ちながら、電気を取り込むことで“ジェツトエンジン”のようなパワー“を出せる。

また、“ゲブ神”や“マンハッタン・トランスファー”のようにスタンド能力だけでなく、本体の特殊な技術によって、通常より強くなることもある。

晴美はそのようなものを持っていることになるかと考える。しかし、承太郎がいらない今、その事について知らない三人。未知数の力を持つ彼女たちとどういう組み合わせで闘うか、彼らはそれしか考えられなかった。

そして、千里は彼らと違ってとても冷静だ。

「さあ、まずは、奈美ちゃんから行って貰います。貴方達は誰がですか？」

「ええ!? いきなり私!」

いきなり最初に闘う闘うことになり驚く奈美。そして、おどおど前に出て誰が相手か心配する。しかし、彼女より彼女の方が心配していた。

相手は普通みたいだが、それは見た目だけで強い能力を持っているかもしれない。それに千里や晴美と闘うとき、誰を行かしたらいいか分からなくなっていた。

そんな心理状態の彼らに千里は更に焦らす。

「Go ahead!! You, 早く決めなさい、奈美ちゃんを不戦勝にさせる気? そんなの許さないわよ。」

そう彼女が言ったとき、彼らから数歩前へ出る者がいた。その者はエンポリオだ。

「なっ!! エンポリオ、おい!!」

「ここは僕が行かさせて貰います。アナスイ、君の能力は二人に取っておいた方がいいと思う。それに、エルメエスの能力も応用の幅が広いから彼女たちに使った方が効率がいいと思う。この闘いは僕とウエザーのスタンド“ウエザー・リポート”こそ奈美さん



「オレンジミント」!!!  
「ウエザー・リポート」!!!

二人は傍にいる者・スタンドを出して、いざ決闘を始める。

To Be Continued . . . . . ⇒

## 第九話 『オレンジジミント』と『サムライハート』その②

「〃オレンジジミント〃!!」

「〃ウエザー・リポート〃!!」

奈美とエンポリオは自分の近くにスタンドを出現させ、相手をじつと見る。

エンポリオが操る「ウエザー・リポート」の姿は、顔にマスクをしていて雲のようにふんわりしている人型のスタンドだ。

対して奈美の「オレンジジミント」は口に酸素マスクをしており、そこから6本の管が髭のように出ていて、手には分厚い手袋を嵌めている人型だ。

スタンドを一通り観察した後、奈美はエンポリオに向かって突進していく。

「先手必勝!!スタンドの拳を叩き込んで……げふ!!!」

「オレンジジミント」の拳を叩き込もうとする奈美だが、その前に彼女の顔面に「ウエザー・リポート」の拳が当たる。

軽く吹き飛んだ後、その痛みに悶える奈美。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!!痛い、痛いようおおおおお!!うわーーーーーーーーーん!!」

ジタバタジタバタジタバタジタバタ

あまりの痛みにそこら中を転げ回っている奈美。その姿は傍から見ると玩具を買って貰えずに駄々をこねる子供の様だ。

そんな彼女に尽かさず“ウエザー・リポート”を叩き込もうとするエンポリオ。高くジャンプして頭蓋骨を陥没する勢いで拳を振り下ろす。

じたばたしている奈美が気付いた時にはもうすぐそこに拳があった。そして、頭蓋骨が軋む音が不気味に……

鳴る事はなかった。

「あつぶな~~~~~い！」スルウウウウウウ

「何!?!」

30センチ程の差しかないのに彼女はその拳を避けたのだ。一体何が起こったのか、エンポリオはそう思ったが、答えはすぐに分かった。

「僕のスタンドが弱体化しているツ!!あれほどの勢いで殴ったのに亀裂一つ付いていない!!」

そう、〃ウエザー・リポート〃のパワーとスピードは承太郎の〃スタープラチナ〃に張り合える程なのに、地面が殆ど割れておらず、普通に避けられたのだ。

避けるなら色々と考えられるが、地面が割れてないのは明らかにおかしい。だからそう考えた。

離れた奈美を見ると、クスクス笑っているのだ。間違いなくこの事象は彼女が行ったものだ。

「ハハハハハハ。そう、君は弱体化したの。これが『オレンジミント』の能力!! 私のスタン드의表面には『普通アレルゲン』っていう抗原があるの。あつ、抗原って言っても分からないか」

「いえ、『ウイルスや細菌の様な異物』の事でしょう。そしてアレルゲンは『アレルギーを引き起こす』抗原でしたよね。本で読みました」

「あら、そう。説明有難う。そして、それが皮膚に接触すれば、そのアレルゲンによつて体を侵されてステータスが人並みになるのよ。しかも、生物、スタンド問わず無差別にね」

「ぐ……だからあえて殴られたんですか」

「E x a c t l y<sup>その通りよ</sup>。只、そのアレルゲンは何らかの強い衝撃が無いと飛び散らないのよ」

完全に彼女の策に嵌ってしまったエンポリオ。『ウエザー・リポート』のステータスが人並みに落ちてしまつて、自慢の接近戦も使えなくなつた。こればかりはアナスイもエルメエスも驚愕している。

「な……なんつう能力だ。俺の場合、能力でカバー出来るが、それでも苦戦するぜ」

「あたしらの様なパワー型には圧倒的不利だぜ」

「フフ。これが奈美ちゃんの実力。殆どのスタンド使いを震え上がらせる力を持っている。けど、『弱点』がかなり大きいのよね。」

長所は多くて、短所も多い。そんな能力を持つ奈美だが『弱点』を知られば、一気に相手側のペースになる。千里はそう思っている。

しかし、その事を知らないエンポリオたちは、見せ掛けの脆い壁を分厚い鉄壁と誤認している。要は、早期決着。彼らに見破られる前に奈美はエンポリオを倒さなければならぬ。

「私のアレルゲンの射程距離は十数メートルだけど、どうする？このまま闘うか、それとも一旦離れるか」

アレルゲンのため全身に痒みを憶えるエンポリオ。スタンドにも自分にもぶつぶつと体が腫れている。

彼がとった行動は彼女が言った後者の方、“一旦離れる”。

そして、全速力でエンポリオは彼女から離れた。しかし、奈美は彼を追い掛ける。

「逃がす訳ないでしょ!!このまま君をぶっ倒す!!」

「くっ……やっぱり無理ですか」

エンポリオより奈美は年上だ。そのため彼女がエンポリオに迫り着けない筈はない。彼女の射程距離内に入った所で尽かさず“オレンジミント”を叩き込んだ。エンポリオは一旦走るのを止めて、奈美と交戦する。

パワーとスピードは互角のため決着は早々着かないが、“オレンジミント”の蹴りで“ウエザー・リポート”の拳の一つを蹴り飛ばし、怯んだ所を尽かさず追撃の蹴りをエンポリオに食らわせる。

「ちよつと詰めが甘いね!」ドゴドゴドゴドゴ

「ぐほお……!!」

「トドメの一ぱあぁー……っ!!」バッキュー……

奈美がトドメにエンポリオを思いつきり蹴り飛ばした。しかし、蹴り飛ばした方向が悪く、何かにぶつかることなくアレルゲンの射程距離の外に吹っ飛んだ。

そのおかげで、力を取り戻したエンポリオだが、まだそこら中にアレルゲンがあるだろう。と思いきや奈美をアレルゲンの無い場所に誘うとしていた。近付かなければ攻撃できない奈美は仕方なくそちらに向かった。

今の『ウエザー・リポート』のパワーなら奈美を再起不能にすることはできると風に吹かれながらエンポリオはそう思った。

エンポリオの遣る事はただ一つ。弱体化する前に奈美を倒す、それだけだ。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

一瞬のミスが命取りになるこの場、風が吹き荒れ、二人の髪は揺らぐ。

奈美は隣にスタンドを出して近づく。そんな彼女の額には緊張の汗が流れていた。エンポリオも同様だ。

不思議と辺りの音が何もしない。全くの無音。見ている三人も黙っている。

静寂を破つたのは奈美がエンポリオと２メートルの差まで近付いた時、『ウエザー・リポート』が奈美のどつて腹に拳を叩き込んだ音だ。

バツシイイイイイイイ

「ふ~~~~。危なかった」

「な~~~~」

バアアア~~~~ーン!!

何と、奈美はエンポリオのスタンドの拳を自分のスタンドの手で受け止めたのだ。つまり、もう「弱体化」が始まっていたという事だ。

「ど~~~~。どういうことですか?」

「フフ~~~~。残念。『天候』が私の味方をしてくれたのよ。」

「ま~~~~まさか、今の風で~~~~」

「そう!!今の風でアレルゲンが空气中を舞ってくれたお陰で君が知らない内にアレルゲンが君のスタンドに接触したからっよっ」と!!」

バキッ!

「ぐわあああああああ!!」

奈美のスタンドに自分の脚を蹴られて痛みを感じるエンポリオ。持続力も人並みに落ちたため自分の脚を擦る最中にスタンドが引つ込む。

痛みに耐えながら、奈美を睨むが急に視界がぼやけてきた。否、体がだるくなつてしまったと言った方がいいか。

「フフ。そろそろ始まった様ね。　　“アナフィラキシーショック”が」

「“アナフィラキシーショック”!!そんなまさか!!」

“アナフィラキシーショック”とは、同じ抗原が再び体の中に入った時、腹痛や嘔吐、蕁麻疹といった症状を引き起こす“アナフィラキシー”の中で症状が全身に現れて、急激な血圧低下や意識低下を引き起こす症状のことである。つまり、“オレンジミント”のアレルゲンは“アナフィラキシーショック”を引き起こすものなのだ。

「君が射程距離外へ逃れたことは敗北に繋がっていたのよ。このまま意識がなくなるのを待つか殴っておくか悩みどころねえ……。でも、これだけは言わせてもらおうわ。普通が最も、最も、もー………つとも恐ろしいってね」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

普通が最も恐ろしい、エンポリオにはその言葉が深く突き刺さった。パワーやスピードが並でもここまでの事を遣って退ける彼女の言葉と行動に感銘を受ける。

「素晴らしいですね。奈美さんここまで……。僕を……。追い詰めるなんて……」

「フフ、まだ元気そうね。これは直接倒さないとね」

「普通って恐ろ……。しいですね」



「が……が……なっ……何を……  
 した……の……?」

「貴女は恐ろしく強い……でもね大きな『弱点』があります。それは……『人並みにしてしまおう』ことです!!」

「……!!」

「……??」

エンポリオが言った『弱点』は本当の様だ。アナスイとエルメスは言っている事が分からない様だが、千里と奈美は額に汗を流した。

「つまり、元々強いものなら弱くなりますが、元から弱ければ強くなる!という事です」

ドーーーーー

分かりやすく説明するなら一直線上にある点Aを普通とするとAより前へ進んでいるものは引き戻され、Aより遅れているものは引き寄せられているのだ。

つまり、弱い、苦手なところが強くなるということ！これが彼女の『弱点』だッ!!

「パワー、スピードは確かに高いけど精密動作はかなり悪いんだ…。特に能力を使う時にね。言ってなかったけど、僕の能力は、『天候と空気を操る能力』。普段は広範囲で、大雑把な微調整は出来ないんだけど、貴女のお陰でそれが出来ます。今、貴女の頭の周りの『酸素』を抜きました。もうすぐ貴女は窒息するでしょう」

「は……………あつ……………あつ……………」  
ぐはう……………」

奈美はふらつく足で後退して呼吸をしようとしますが、調整が出来る『ウエザー・リポート』の能力に万事休すだ。そして、奈美は白目を向いて、仰向けに倒れた。倒れた彼女の口からは泡が吹いている。

倒れたのを知った直後、能力を解いたエンポリオ。アレルゲンが消えたことで、体が自由に動けるほどうこぶる快調になったので、念のためにエンポリオは、彼女が呼吸するように一発彼女を蹴った後、一言置いて仲間の所に向かう。

「策士策に溺れるとは正にこのことですね、『普通さん』」

日塔奈美……再起不能（リタイヤ）

「よくやったじゃねえかあ」

「ええ!?! そうかな」

「上出来だよ！上出来!! まさかあんな突破口があつたなんてよ」

エンポリオはアナスイとエルメエスに目一杯褒められていた。

今、千里が気絶した奈美を回収している時にエンポリオは二人から頭をわしやわしやと搔かれている。

「それにしてもよお、何処で『弱点』が分かつたんだ？」

「彼女に蹴り飛ばされた後だよ。ふとその考えに到達して、彼女を一撃で倒すためにわざと“天候を操って”アレルゲンを飛ばして挑んだんだ。まあ“アナフィラキシ― ショック”は予想外だけど」

「いや、滅茶苦茶計算してんじやねえか。すごいぜ」

あの天候は、奈美は偶然だと思っていたが本当は必然だった。そのことに驚くエルメス。聞いたアナスイもたまったもんじやない。この闘いの一番の策士はエンポリオだった。

そんなことをわいわいがやがや話している三人に対して、この場で一人になった千里は、気絶した奈美を無事運び終えた後、彼らを睨む。

ドドド  
ドド  
ドド

(まさか、蹴り飛ばした時から勝敗が決まっていたなんて、なんてヤツなの………。  
だ・け・ど・ど・)

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

（私は、奈美ちゃんみたいに甘くは無いスタンド使い。私とこの「私の人生を狂わせた最凶のスタンド」ささえあれば次の相手、否、全員皆殺しに出来るツ!!）

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

そう殺気立たせながら、背後の影を濃くする千里。自分の手には制服に忍ばせていた愛用のスコップを取り出し、背後の影からは右手に日本刀、左手に斧が浮かび上がって、彼女は彼らの方へ向かう。

（私は元々、貴方達をブチ殺せばそれでいいの。先生は許してくれないと思うけど、それでもいい。この呪われた人生の中で満たしてくれることといえ、もうこれしかない！だから安心して死になさい。血液一滴残らず、食らい尽くしてやるツ!!）

To Be Continued . . . ⇒

## 番外編

夜、東京の港のある倉庫の中、ある組織はそこで待つていた。

何人もの屈強な男たちがいる中、その組織のN.O. 3がその男たちに身を固められ、台に座つていた。

「おい、いつまで待ちやあいんだ？俺を『クビナガ竜』にさせてえのか奴さんは。おいお前、今何時だ？」

「午後11時15分です。『ミスタ』さん」

「おいおいおいおい。15分つてお前、普通15分遅れてるつて社長さんとかが怒つて帰る位のもんだぞ」

「それでは、本部に帰りますか？」

「んな訳ねーだろ！『おいしい取引』をするんだぞ、此処まで来て諦めてたまるか」

そのNo. 3は部下に時刻を聞いた。どうやら取引相手がまだ来ていないとの事。その取引を成功すると彼らには何かと良い事があるらしく、そこまでして待つ価値があるらしい。

そうこうしていると倉庫の扉が少し開き、一人の白衣を着た男が遣つて来た。その手には大きめのトランクバックが抱えられていた。

その男が彼らに近付くと男達は道を開けて、No. 3の所へ行かせる様にした。

「すいません、ミスタさん。研究所の警備が嚴重過ぎて持つてくるのに手間取りました」「おお、すまねえな。ワザワザご苦労さん。で、そのバックの中に例のブツが?」

「はい、日本政府にも極秘の研究材料をこの度入手する事に成功しましたので、3億円、全額払つて貰いますよ」

「おいおい大丈夫かよ、それつて研究所の連中全員裏切つたことになるぞ」

「フフ、金になるのにあの『最重要責任者』ときたら、『この研究は人道を大きく外れる』とかぬかしていやがるんですよ。馬鹿馬鹿しい。私を『悪』と言うならば、そいつは『ゲロツ糞な悪』ですよ。なんせ『極秘に研究している』んですからね」

「・・・・・・・・」

研究所の人達を敵に回したその男は自分は悪なら奴らはもつと悪だと言い放っているがNo. 3の「ミスタ」は言葉に出来ないほどコイツが悪だと思った。

しかし、そこで口にしても、自分達の行いも根っからの『悪』なので全く説得力はなかった。

兎に角、そいつのトランクバックを貰い、中身を確認したミスタ。そのトランクの中身を見て驚く。その中身は・・・・・・・・

「なんじゃこりゃ」

入っていたのは、小さい「肉片」が入った試験管一本だった。

「これでも頑張ったものですよ。さつ、3億払ってください・・」

「ふざけてんじゃねえぞ!!」

「ヒイイ! な・・何ですか!？」

ミスタはその男の胸倉を掴んで怒鳴った。あんなだけ大きいバックなのに試験管1本しか入っておらず、それで3億円も払うなんてぼったくりにもほどがあるからだ。

「なんだこの“肉片”は!!俺達、“パツシヨーネ”はものすごい特効薬があるって聞いたんだが!？」

「それが特効薬なんです。まず、拳銃を下ろして聞いてください」

ミスタは怒ってその男に拳銃を向けるが、その男の説得で一応下ろして話を聞いてみることにした。

「元々この肉片は、とある遺体から削り取ったもので、その肉片がたった一晚周りにあるだけで、不治の病が治り、失明した者は再び視えるようになったんです」

「嘘だろ・・・」

「それが嘘じゃないんです。後、取り扱いには必ず手袋をしてください。この肉片は生命が宿っている物に喰らいつきどんどん増殖していくんです。それで、数名が亡くなっています」

ミスタや周りにいた男達も驚愕していた。その肉片にそんな力があることが信じられないが、ミスタはそのような事を幾つも経験しているため、真実なんだなと思った。

「良<sup>ベ</sup>し、分<sup>ネ</sup>かった。3億だな、おい持って来い！」

部下の男に指示し、握った拳銃をしまい、三個の3億円が入ったトランクと試験管が入ったトランクを取引をした。

本部であるイタリアヘブツを運ぶ「パッショーネ」の船。その甲板でミスタは肉片が入った試験管を目の高さ位まで持ち上げて、眺めていると、部下の男の一人が遣つて来た。

「No. 3、いいのですか？あの男の言葉を信じて」

「問題ない、これは『ジヨルノ』の命令だ。もし嘘なら、そんな時は『そんな時』だ」

ミスタはそう肉片を睨みながら言うが、あの男とはもう一生会えないが。

翌日、とある住宅街でその男は惨殺されていた。

至る所に斬られた痕があり、しかも、胴を全部バツサリと斬られている。

その惨死体は手に三つのトランクバックを持っており、中身は空っぽだが、警察はそこの中に現金等が入っていたと推測した。

指紋も残っておらず、目撃証言もないため、警察はその捜査を打ち切つてこの事件は迷宮入りと化した。その影にスタンド使いがいるとも知らずに……

そしてこの事件は、承太郎達が2のへ組に来る2日前の出来事だ……

## 次回予告

千里 『私のスタンドは．．．．』

エルメエス 『何つうスタンドだ!!』

千里 『私の青春を破滅させたし．．．．』

アナスイ 『どんどん成長しているぞッ!!』

千里 『先生と晴美へ導いてくれた．．．．』

エルメエス 『倒せるのかこんな奴!!』

千里 『はてさて一体．．．．』

アナスイ 『こいつ！様子がおかしいぞ!!』

千里 『悪魔なのか天使なのか』

エルメエス 『なんなんだこいつは!!』

千里 『どっちなんだろうね．．．．』

エルメエス 『化け物かこいつはッ!!』

千里 『うなああああああああああああああああ!!!』

『第拾話

オレンジミントとサムライ・ハートその③』

## 第拾話 『オレンジミント』と『サムライハート』その③

彼らが千里に気付いたのは、彼女が殺気だたせて遣つて来た直後だ。

長年の戦闘の勘で研ぎ澄まされた直感で、気付いた彼らはスタンドを出している千里の方へ見る。

スタンドの右手には日本刀、左手には斧、本体にはスコップ。両腕しかスタンドの像が視えていないが、近距離パワー型であることは分かる。

その彼女に立ち向かったのがエルメエスだった。

「大丈夫かエルメエス。こいつ、マジで俺達殺そうとしているんだぞ。スコップまで持つてるし、本当に遣れるのか？」

「任しな、あたしのスタンドでポッコボコにしてやるからよ」

「その根拠は一体どうやったらでるんだよ……」

「勘ッ!!」

「滅茶苦茶だよエルメエス!! 一番言っちゃいけない言葉だよッ!!」

エルメエスは何かしらの勝算もなく勘で闘おうとしている。心配したアナスイもそれを聞いたエンポリオも彼女が無事に帰ってこれるだろうかと心配する。

そして彼女は、千里の方へ歩を進めながら、頭に数本の釘が刺さり、体の至る所にシールを貼っている人型のスタンド、*“キッス”*を出した。

「私相手にそんな心構えで倒せると思うの？この愚か者がッ!!」

そう言い千里は、前面的にスタンドの像を公開した。その像は、魔法使いの様なオーブを着て、正確にセンターラインが引いてあるホッケーマスクの様なものを被り、露出しているところにはさらしを巻いて肌を見せていない。只、口元だけは緩んでおり、微かな隙間からは牙が見える。

そんな恐ろしい姿をしているスタンドにエルメエスは全く動じず *“キッス”* を構える。

これから激しい戦いが始まる事を暗示するかの様に鳥たちは逃げ、犬たちは吼え始めた。見ている二人は恐怖で心臓がばくばくいつている。

その恐怖から時間が止まった様に一瞬静かになった。そして、また騒ぎ始めると共に

闘いは始まった。

「うなああああああ!!!」

「うっしやああああああ!!!」

千里は刀と斧をエルメエスに振り下ろし、エルメエスはスタンドの蹴りでそれを対抗しようとする。どちらの攻撃が負けるのか、世紀の一瞬が今……!!

バツキイイイイイイイン!!

「……!!? なっ!!」

「……!!? よっしやああ!!」

負けたのは千里の刀と斧、  
“キツス”の蹴りが当たった直後、  
見事に折れ、易々と千

里のスタンドに命中した。エルメエスはこうも簡単に刀と斧が折れたことに驚くが、気にせずに蹴った。

強烈な蹴りを食らった千里だが、怯まず持っていたスコップでエルメエスを斬ろうとした。そして、何度も斬り付けようとした。

エルメエスはそれを最初は避け、後のやつは“キツス”で防御した。そして、千里の動作には若干隙があるため、その隙に“キツス”のパンチを浴びさせる。食らった千里は後方によるめいて息を荒げている。

パワーやスピードでは“キツス”に劣っているが、能力がおそらく強力なのであろうとエルメエスは推測した。パワーやスピードでは“オレンジミント”と大差変わりないに見えるが、あの奈美ですら恐れおのおのく程、どれほど強い能力なのか。

そう思っていると千里が急に笑い始めた。その彼女の体が一瞬黒、否、濃い紫のオーラを発している様に見えた。そして、彼女のスタンドを見ると刀と斧が元に戻っている。何事も無かった様に戻っているのだ。

一体何が起こっているのか考えようとするエルメエスだが、その時間も千里は与えず、襲い掛かる。

「うなあああああああああああ!!!」

「ちっ……、うっしやあああああああ!!!」

再び刀と斧を振り下ろす千里。そしてそれをまた蹴りで折るエルメエス。只、前回と違って、折れるのに時間が掛かった。さつきまでは一瞬で折れたのに、今回は数秒経つてから折れた。

そして、千里はスコップを槍の様に突き刺して攻撃する。エルメエスは隙を狙おうとするが、今回には全くなく、呆気なく彼女の攻撃を食らい、トドメにスタンドの蹴りを食らう。

（ぐは……。なんなんだこいつは!!パワーもスピードもさつきとは桁違いだ。何つうスタンドだ!!やべえ、あたし、ホントに倒せるのかこんな奴!!）

後方に吹っ飛ばされながらそう思うエルメエス。その間に、千里のスタンドの刀と斧はまた修復されていた。

これを見たアナスイとエンポリオはあることに気付いた。

「アナスイ……まさか……」

「ああ……おそらくアイツのスタンドは……『どんどん成長しているぞッ!!』」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「おい、『成長している』ってどういうことだ?」

エルメエスは二人の所まで運よく吹っ飛ばされたため、そのことを言った事を聞いていた。そして、アナスイにどういふことを説明してもらおう。

「つまりだ、エルメエス、お前が攻撃すればするほど奴は強くなる。そういうことだ」  
「じゃあ攻撃せずにどうやって倒すんだよ!？」

「より強い一撃を与えるしかねえ、いいか、“一撃”だッ!!再び起きあがらねえような一撃必殺をするしかねえ」

「だが、あたしにそんなもんってあったっけ？」

「無いなら作れ！あいつをブツ殺す程の威力を持った一撃をなあ」

一撃で仕留めなければ負ける。エルメエスの“キツス”は、“シールを貼り、貼った物をもう一つ増やし、シールを剥がすと増えた物が破裂し傍の物を破壊する”能力だ。

破裂する威力は物の大きさによるが今の千里では何とか耐えるだろう。“キツス”はジワジワ追い詰めて倒す系統のため結構難しい。

どうやって倒すか考えているエルメエスを睨んでいる千里は、息を荒げて言った。

「ノンノンノン。ただ攻撃されるじゃあないわ。恨めば恨むほど負のパワーが私に集まり、私とスタンドを強くする能力。これが私の、“サムライ・ハート”の能力。この能力が……スタンドがいたせいで私の人生が台無しになった……憎き能力!!」

「てめえ、自分の能力に嫌悪しているのか？」

「ええ、でも……。その代わり先生や晴美を導いてくれた……良い能力……」

「てめえ……どういふことだ」

「貴女に言ったって何が分かるの？この正確にきっちり区別できない私の能力について……私が経験した日々の数々をツ!!」

「てめえ……」

「貴女に何が分かるって言うのよッ!!」

能力を説明していた千里だが急にその能力を貶したり、褒めたりして、最終的に頭を押さえて膝から崩れる。今、誰にも干渉されずに覆っていた壁が消え去り、素の千里が現れている。

彼ら三人は千里がどれ程複雑で悲しい人生を送ったかを感じ取れた。

少し、千里の昔話をしよう……

彼女は二十世紀末期木津家の次女として生まれた。

生まれつききつちりした性格で中途半端な事が嫌いな子だった。しかし、その裏で千里は悩んでいた。生まれた時から傍にいるスタンドのことで。

家族がその事に気付いたのは千里が7歳の時、クリスマスが近いときに親が『サンタさんって実はいないんだよ』と言った時、アイデンティティーが崩壊し、誤って包丁で姉を刺したのだ。

命に別状はなかったが、千里のスタンド能力が暴走するきっかけになった。

それ以降、彼女は数多の暴力事件を起こし、クラスメイトに恨まれて、転校を繰り返した。その生活環境が変わる度、また、クラスメイトの自分に対する目線からストレスがたまり、負のパワーが彼女に積もっていた。

その当時、分かっていたいなかったが、その負のパワーは戦ったり満足感を得ることで発散できるが、スタンドの領域に到っていない子供たち相手では、彼女に太刀打ち出来る者はおらず、ストレスは発散出来なかった。

普段から恨まれ、蔑まれ、虐められて孤立していた千里はどんどん負のパワーを溜めていって、終いに心を閉ざしてしまった。誰にも心を開かない性格になり、家族は心配したが、如何しようもなく諦めていた。

しかし、そんな彼女はある事がきっかけで再び元気を取り戻した。それは、藤吉晴美との出会いだった。

小学5年生のとき、晴美のクラスに転入した彼女は、自然と晴美と関わっていた。彼女も生まれつきスタンド使いで、誰にも言えず、画していたが、千里と出会ってその話し相手がいることに喜んだ。その時、千里は心の底から笑った。決して出る筈がないと

思っていた笑顔を再びした。彼女達が親友になるのに時間はあまり掛からなかった。

そして、彼女達は闘った。千里の能力を見抜き、"サムライ・ハート"と名付けてくれた晴美は、千里のストレス発散のためと、千里のスタンドをコントロールするために闘い、競った。来る日も来る日も、雨の日も、風の日も、雪だろうが嵐の中だろうが彼女は闘った。千里にとってこの時から人生がやっと始まったと感じた。

そして、中学校も一緒に上がり、3年間同じクラスだった。互いにスタンドを磨いて、卒業式当日にはもう、溜まっていたストレスは綺麗さっぱり無くなり、晴美と同じ高校に行ける事を幸せに思う千里。

しかし、そんな彼女は再び失意のどん底に叩き落される事件が起きた。

高校に入学した夏休み、彼女は・・・千里はいつも通り彼女と闘っていた。だが、その日、千里は、彼女を・・・晴美を斬ってしまった。

幸い千里がすぐに直接彼女を病院へ連れて行ったことで命に別状はなかったが、数週間意識不明だった。特に致命的だったのが、大量出血と胃が真つ二つに斬られたことだ

が、それは移植と輸血でしのいだが。

親友を傷つけてしまい自責の念で溢れ返っていたときに、晴美の母が追い討ちをかけた。

「この化け物ツ!!」

その罵声で「サムライ・ハート」の能力が発動することはなかった。怒りよりももつとえげつない感情が湧いた。それは「失望」。

自分なんて居たつてしようがないんだ、死んだ方がいいんだなどと彼女の心がそれで満たされて、自分に絶望し、屋上で自らをスタンドでトドメをさして命を絶った。

『が、死ねなかった』。 気付いたらベットの所で寝ていた。自分は助かったのだ。そう思うとイラついてまた自殺した。

『が、死ねなかった』。 また自殺した。

『が、死ねなかった』。 今度は両手足が縛られていたが、スタンドは出せるので自殺した。

『が、死ねなかった』。 また自殺した。

『が、死ねなかった』。 今度こそ自殺した。

『が、死ねなかった』。 . . . . .

何回自殺したかは憶えていない。生きる屍と化した千里にそんな事を考えることは出来なかった。

考えていたことはたった一つだ。

(なんで私は死なないんだろう . . . . .)

(~~~~~)

そう心の中で呟いた時、何やら幻聴が聞こえてきた気がするが、気のせいだろうと思う千里。で、死のうと思った。

『でも、生きようと思った』 . . . . .

それからは自殺をするのを止めて、毎日病室の一点に向かって見続けた。

そして、二年生の春、退院した千里は学校を変えた。何故かは分からなかった。只、親がそうなのだ。晴美も一緒にいる……。

そして、2のへ組のクラスの戸を開けた。そこには、数名の生徒と教卓に担任がいた。

「ようこそ、木津さん、藤吉さん。絶望組へ」

そこで担任は満面の笑みを見せた。

その笑顔を見て、千里の心に何かが起きた。それはすぐに分かった。崩壊していた自分の心を繋ぎ止めてくれたことと。

そのとき、彼女は涙し、親友やクラスメイトが見てる中、神に懺悔する体勢になった。

そして、千里はこのとき本気で自分の心から生きてみようと思った。彼に尽くすために。

「こんな……こんな私でも、生きて欲しいと思ってくれた先生に感謝しています。命は惜しくありません。こんなクズの私でも先生のお役に立てるなら、死んでも構いません。だから私は、いつもここにいます。先生のためにこのクズの命を使うとね!!」

暫く自分の過去を振り返るために、黙っていた千里だが、自分がここにいる目的と自分の存在価値を彼らに向かって叫んでいる。そして、エルメエスを思いつき蹴っ飛ばした。

バツコオオオオオオオオオオオ

「ぐええ．．．．!!」

そしてそのままエルメエスは200メートル先の教員用の駐車場へ突っ込む。彼女は何かタイミングよく体勢を整えて、ダメージを軽減して千里を見ると、彼女は約50メートル前について、走っている。

エルメエスは防御のためにそのためにその中の大型自動車を「キッス」で持ち上げ、前へ持って行く。

しかし、千里は前にはおらず後ろにいた。そのままスタンドと本体と共に蹴りを入れられ、大型自動車共に思いつき吹っ飛んだ。

その車はガラスが大破し、車の後ろにエルメエスがいる。その車とエルメエスはさっきまでいた位置ほどに吹っ飛んだ。車に激突したため肋骨を何本かイッてると思つて

いると、千里が攻撃を仕掛けて来た。

「トドメの一撃ッ!!」

ズガガガン!

「うおおおおっ!!」バシィ!

千里が車越しにスタンドの刀を突き刺す。エルメエスはそれをスタンドで白刃取りのような取り方で止める。

その剣先はエルメエスの脳天擦れ擦れだった。なんとか後方に下がるがスタンドのパワーが強く、「キツス」の手を擦り抜けて突き刺さる。

だがそれをしゃがんでかわすエルメエス。何とかかわしたがこのまま下に刀を下ろされたら、体が真つ二つになって死んでしまう。その状態で千里はエルメエスに言う。

「残念ね。『一手』、私の方が上へ行っていたようね。」

そして、力を入れて刀を下ろそうとする。耐えようとするエルメエスだが、完全にパワー負けしている。徐々に刀が下ろされていく。

「私のスタンドは．．．私の青春を破滅させたし．．．先生や晴美へ導いてくれた．．．はてさて一体．．．悪魔なのか天使なのか、一体どっちなんだろうね．．．エルメエスさん？ 答えはどっちでもいい!! 悪魔だろうが、天使だろうが、私を大事に思ってくれる先生のためならどっちになるうが関係ないわ!! さあ死になさい! 鮮血をどくどく出して、イキぐるええええええええええええええええええええええ!!」

もうエルメエスの目の前まで刀が下りている。もう全てが手遅れだ。誰もが死んだと思った。

が．．．．．．．．．．．．．．．．

ガツシヤアアアアアアアアアン!

「ぐほおおおええ!!」

「ふー。間に合ったぜ」

千里の後ろから刀が刺さっている車と同じ大きさの否、同じ車が空中を滑走し、激突

した。そして、押し潰されて吐血する千里。もうスタンドも消えている。

「な．．．．．なん．．．．．何で．．．．．!?!」

『シール』をこの車には貼つといたのさ。てめえに蹴られる前にな!!この『シール』を貼ると物が2つに増えるんだよ。そして、『シール』を剥がすと2つの物が1つになるうとして物同士が離れているならどちらかが引き寄せられる。つまりてめえはもう1つの車があることに気付かずにあたしを蹴った。そしてあたしが追い詰められた時、足で『シール』を剥がし、駐車場に置いてあつたもう1つの車がここまで飛んできたんだよ!!てめえが単純ヤローでよかつたぜ」

追い詰められたつもりが追い詰められたことに気が付かなかつた千里。まんまとエルメエスの策に嵌り彼女の全身の骨がバキバキに砕けた。200メートル余りも滑空した大型車が勢いよくぶつかったのだから、流石の千里も耐えられない。そのまま彼女は意識を失い、再起不能になった。

2つの車はある程度重なり合うまで千里を押し潰しながら『1つ』に戻っていき、『1つ』に戻った瞬間、その車は大破し、挟まれていた千里は地面に転がった。

エルメエスは屈する千里が完全敗北したことを近づいて確認すると、そのまま彼女を

放置し、ギャラリーのアナスイとエンポリオの元へ向かおうと背を向けたとき、生々しい殺気を感じた。まさかと思いいエルメエスが振り返ると、倒れた筈の千里が起き上がっていた。

「何?! 化け物かこいつは!!」

驚くエルメエス。しかし、仕方が無い。全身粉砕骨折はしている筈なのにまだ立ち上がるのだ。

「うなああああああああああああああああああ!!!」

千里の叫び声と共に彼女の髪の色が紅く染まり、額から「目」が出てきた。その姿は正しく「鬼神」と化している。

「こ……こいつ様がおかしいぞツ!! 気をつけろ、エルメエス」  
「うなああああああああああああああああああ!!!」

アナスイはエルメスに身の危険を知らせるがその心配は無用だった。なぜなら、千里は白目を向いたまま気絶しているからだ。おそらく肉体が精神について行けず、ショートしてしまっただのである。

あえて補足するなら彼女は『立ったまま』気を失っているのだ。

「こ……こいつ立ったまま……」

「何て人だ!!最早人間じゃないみたいだ」

「ますます怪しくなってきたぜ、こいつら一体裏で何されてんだ?」

髪の色も元の黒色に戻り、額も普通に戻っている。そんな彼女を見て三人はますますこの学校の裏の活動が怪しく思っていた。

木津千里……再起不能(リタイヤ) 全身粉碎骨折で病院に運ばれて、数日間意識不明。

To Be Continued . . . . . ⇒

次回予告

??? 『ウフフフフフフ．．．』

徐倫 『ああ．．．疲れた．．．』

??? 『SPW財団の使者さんですか？』

アナスイ 『いい趣味してるぜ』

エンポリオ 『それじゃあ学校全域が．．．！』

アナスイ 『徐倫が、いつぱい、いるッ!!』

徐倫? 『本物はわたしよッ!!』

アナスイ 『本物はどれだアーーーーッ!!』

晴美 『私は成長しているッ!! 同人誌作家としてもッ!! スタンド使いとしてもッ!!』

アナスイ 『始末するッ!!』

『第拾巻話』

空想《イマジネーション》その①』

## 第拾壹話 『空想《イマジネーション》』その①

エルメエスは千里に勝った後、アナスイとエンポリオに合流して千里を病院に連れて行くかで話しあっていた。

結論から言わせて貰うと先程の鬼神の如き復活から千里が気絶しているフリをしているかもしれないと懸念したため、可哀想だが晴美を倒してから連れて行くことに決めた。

「とうとう俺の番って訳か」

「油断すんなよ、二人とも相当な策があったからそいつも使うと思うぜ」  
「でも本当にいるのかな？姿が全く見えないけど」

ようやく出番なのではりきるアナスイ。彼にどの二人も相当の実力者だったので気をつけるよう言うエルメエス。エンポリオは晴美のスタンドが本当に学校内にいるのかと疑問に思うが、確かにいる。学園内のどこかに!!

「心配すんなよエンポリオ。ようは相手はパワーが弱つちいんだよ。能力使わないと殆どカスのスタンドなのさ。ブハハハハハ。気楽に行こうぜ、気楽に」  
「・・・・・・・・」

彼の気楽な発言は嘘だと思う二人。もちろん正解だ。彼の本心は・・・

（やべーよ、んなこと言ったけど大丈夫なのか？あの千里ヤロでも一目置いてんだぞ。どこだ、どこにいやがる。何で俺っていつも大変な役回りなんだ？なんでいつもボケキアラなんだ？なんで承太郎さんは俺と徐倫との交際を認めねーんだ？）

と、超が付くほど焦っている。一言言おう、そんな考えしているからそうなるんだ。彼が仲間に見栄を張っている時に、一人の男が近づいてきた。そいつは空条承太郎だった。

「承太郎さん!!」

「どうした君たち、こんなところで」

「いや、かくかくしかじかでしてね」





力です」

そう言い、承太郎を手招きするアナスイ。承太郎は先に行つて背中を見せているアナスイを追う。ニヤリと笑いながら……。

その時、目の前の地面から『D』の文字が入ったスーツとマスク、あと酸素ボンベを背負つた人・否スタンドが現れた。

「『ダイバー・ダウン』」

「何ッ!!」

ドゴオオオオオオオオオン

「ぶぎぐわッ!!」バキバキ

アナスイのスタンド『ダイバー・ダウン』で顔面を殴られる承太郎。そして、割れる音と共に体が裂けた。しかし、血は出ていない。

「やはり、偽者か。だと思つたぜ、雰囲気は違つてたし、何より顎がそんなに尖つてねえ

よ!!」

よく見ると、その偽承太郎の顎があまりに尖っている。ほぼ直角の顎がこの世にあるのか。

『なんて事だ!!私の癖が仇になったなんて!!』

何か聞こえたので、後ろを向くと向こうの木の陰から長くて鋭い爪を持って、メガネを掛けているブリキの人形の様なものひよこつと出てきた。

誰もがそれが藤吉晴美のスタンドだと分かった。

「分かりやすいな、お前の奇襲」

『五月蠅いですよ!!私の“芸術センス”を馬鹿にするなあア!!』

晴美は自分の奇襲を貶されて怒っている。アナスイは彼女が言った“芸術”という表現に少し疑問に思った。

「もしかしてあれは『絵』か?」

『ええ、そうですね。私は、『この爪で描いた絵を実体化できるスタンド』、『イメージネーション空想』。描くための媒介の制限はありません。何にでも、例え空気にも描けます』

「それじゃあ、学校全域が貴女のスケッチブックになるんですか」

『Yes, Yes, Yes, 貴方達がどんなカップリングが似合うか・・・グヒヒヒヒヒ  
楽しみね』

「あつ、くそ!!逃げられた。待ちやがれ!!」

『絵を実体化させる』スタンド、描くための媒介は制限なし。そのことに驚くエンポリオ。そして、その間に逃げる『イメージネーション』。

逃げた彼女を追い掛けるアナスイ。その彼らは校舎の中に入って、暫くしたら見えなくなつた。

二人を追い掛けようとするエンポリオとエルメエスだが、行く前に気絶していた日塔奈美が起きた。

「う~~~~~ん。酸素不足でまだ頭が痛い」

「起きたか『普通』」

「普通って言うなあ」

奈美が起きた事に気付いたエルメスは、お決まりの台詞と共に奈美とお決まりの件をした。その後、奈美は千里の方を見て、驚く。

「うわー！ー！ツ!!!何あれ!!何がどうなつたらあんな気絶の仕方になるの!?!」

「実はかくかくしかじかで……」

「まあ大体の事情は分かった。じゃあ今は晴美ちゃんが闘っているのね……」  
「はい、そうです」

奈美が気絶してから今に到るまでのことをエンポリオが説明したところ、急に何かを考えている奈美。暫く考えてまとめたことを二人に話す。

「……おそらく勝てないよ、アナスイさん」

「え!?!」

奈美が暫く考えていた事はアナスイでは晴美に勝つ事が難しいと言った。勿論、驚く

二人。そして、エルメエスが奈美にどうしてアナスイが勝てないのかを問い詰めた。

「何言つていやがんだ、てめえ！」

「ぐおお・・・死ぬううう・・・このままだと今度こそ死ぬうううう」

「エルメエス、彼女を放してあげて!! 本当に窒息しちゃうよ!!」

問い詰めるためにエルメエスは奈美の胸倉を掴む。だが、それで首が圧迫して息ができていないためエンポリオは彼女を放してあげるようエルメエスに言った。仕方なく、エルメエスは奈美の胸倉から手を放した。

解放された奈美はゲホゲホと咳をして呼吸を整えた。そして、楽になったとき、エルメエスが再び問い詰めた。

「で? そいつが負けねえという確信はあんのか?」

「大いにあるよ! 晴美ちゃんは半自動操縦型だから、スタンドが死んでも何とも思わないし、彼女は凄いい成長速度で、あつという間に抜け目ない行動をするのよ」

「そんなに強いのか!?!」

奈美が言った「イマジネーション」の性能。スタンドを攻撃しても晴美には無傷で、あつという間に成長するスタンドでもある。エルメエスが驚いているところを追い討ちするように奈美は情報を追加した。

「でも、一番恐ろしいのは私ですら先生ですら見た事がない凶暴な面を持っているという事です。それは、千里ちゃんしか知らず、彼女曰く、『あんな最悪なスタンドは見た事がない』と言うほどなんです」

「大丈夫かなアナスイ……」

あの千里ですら「最悪」と言うほどのスタンド能力を持つ晴美。これらの3つの長所を持つ晴美に果たしてアナスイは勝てるのか!?

エンポリオとエルメエスがそう思う中、その決着が着く時間は一刻、一刻と近付いていた。

「ああ．．．．．疲れた．．．．．」

場所は変わって校舎2階の廊下。徐倫は疲れた足を動かして歩いていった。さつきまで承太郎に説教（長時間正座で座らされていただけだが）されて、くたくたの徐倫。家に帰ろうと思っていると、ふと声を掛けられた。

「あの、SPW財団の使者さんですか？」

「うん？誰？」

だるそうに振り返るとそこに髪留めをした女子生徒がいた。その少女は徐倫の質問を無視して再び質問する。

「SPW財団の使者さんですか？」

「貴女、日本語通じる？質問を質問で返さないでくれる？」

「ああ、確かにそうですね。私は2のへ組の風浦可符香（P・N）です。昨日休んでし

「まっって貴方達の顔を見てないものですから」

「あらそうだったの、私は空条徐倫よ。よろしく」

可符香という少女は昨日学校を休んでいたため自己紹介の時にいなかったためわざわざ挨拶に来てくれたのだ。それだから徐倫も名前を言った。

名前を言ったら、急に紙とペンを用意して彼女は徐倫の名前を書いた。そして、あることに気付いた。

「『ジョジョ』、ジョジョさん！」

「私を『ジョジョ』って言うな!!」

徐倫は自分のことを『ジョジョ』と呼ばれたくはなく母親しか呼ばれたくない。その事を指摘した可符香は、この時、顔の影を濃くした。彼女はそういう性格だ。

「それで……これだけなの？」

「はい、そうです。すいません、わざわざ……」

「いいのよ別に。あと、私を『ジョジョ』って言うなよ!!」



の様に恐ろしい。

「昨日は本当にびっくりしたよ。急に先生からメールが来て、『学校に来るなツ!!』って書いていたものだから。フフ、面白い人が来たんですね」

そう言い、彼女は窓から空を見上げて咳くのだ。

「彼等を『計画』に巻き込むつもりなんですね。先生……そこまでして、  
“時期”  
を早めたいんですね」

出席番号14番。風浦可符香（P・N）。スタンド使いであることが判明。しかし、徐倫達と交戦するつもりはない。

「ちっ、待ちやがれこの女郎!!」

『くっ、まだ追い掛けて来るんですか』

戻って校舎1階。広い校舎でアナスイと“イメージネーション”の追走劇が繰り広げられている。スピードは両者ほぼ互角、一向に差が広がらない。“イメージネーション”は痺れをきらして、振り返り、絵を描き始める。

空気を切り、高速で絵を描いた。その絵が立体的な男になり、アナスイを襲った。

「しっけえ!!」バゴオオ!!

『ギヤアアアア!!』バラバラ

襲って来た絵の男はアナスイのスタンドのパンチで木っ端微塵になった。そして、アナスイも痺れをきらして、“ダイバー・ダウン”の脚で走って、彼女との差を縮める。

『……!!うわああああ!!』

「これで終わりだーーーーッ!!」

ドッコーーーーーーッ

スタンドのパンチを決めるアナスイ。命中した“イマジネーション”はバラバラに  
砕け散った。だが、その散り方が彼女の“絵”と同じだった。

「まさかとは思うが……『偽物』か？」

アナスイは立ち止まり、辺りを見渡す。が、どこにも見当たらない。本当に倒したか  
と思っていると、

『ウフフフフフ……』

という声が聞こえる。やはり、倒されていない。何処かにいる。そう思い捜している  
と、少し離れた壁から鋭い爪を持った手が出てきた。

そのままズルズルと壁の中から出てきた“イマジネーション”。しかし、雰囲気は何  
やら違う。

『アナスイイーサーーン、まだまだですわエー。分身』と本物の見分けが

つウーいてなアーいなんてねアー!!ウハハハハハハ!!」

「性格が変わったな・・・頭のネジが飛んだのか?」

『えアー? 私が主人だと思ってるのアー? 違うね違うねアー、スタンドは半自動操縦型だからあん時は主人が操っていたがアー、今はこの私、"イマジネーション"なんだよアーアーアー』

「なるほど、そういう仕組みか」

スタンドの口調が変わったため、ちよつと驚いたアナスイ。自動操縦に晴美が切り替えたと理解してひとまず一件落着したが、それによりある問題が浮かび上がる。

『もしかしてアー、"自動操縦型"ってことは、コイツを攻撃しても全く意味がない"とかかんがえてるんでしょアー?』

「・・・」

『エハハハハ、凶星の様ねアー。ええ、そうよ。そういうタイプだからアー、何しようがマスターは傷つかねーしアー、マスターは私が遣っている所を見るウー。つまり、遠隔操作と自動操縦の長所の塊が私よアー。マスターと闘いたかったら、まず私を倒すことねアー!! 因みに、マスターが今描いているのは"BL、ボーイズラブ

“の同人誌なのさアーーー。ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ”

自分の考えていたことが読まれた事に動揺する。まあ別にそれだけしか動揺した訳ではないが。

「いい趣味してるぜ。おめーのマスターはよう」

『ハハハ。同感だねエーーー。でも、そのおかげで私は強いのだアーーー!!』

アナスイは『BL』を描いている晴美を嫌味を言う様に言った。スタンド自身も同感のようだ。

しかし、そのおかげで自分は強くなっているスタンド自身はそうと断言できる。スパパパと腕を動かし、絵を描く『イマジネーション』。

『マスターが漫画を描いてくれたことは、私にとっては誇りだよオーーー!! 例えそれがどんだけ卑猥なものでもねエーーー!!』

そして、絵が実体化し、“ウエザー・リポート”、“キッス”、“ストーン・フリー

“ の3体になった。顎はやはり、尖っているが。

『流石に3対1じゃあ、あんたでも無理があるかアアー。私の絵は、本物と同じ性能を持つ。上手ければ、上手いほど、より正確に再現が可能。つまりイアー!!この3体どものパワーは本物と差ほど変わらねエアー!!さあ、どれを防ぎ、どれを食らうウアー!!』

3体のスタンドの絵が襲って来た時、アナスイは地面を殴り、後退する。

『はっ!何してんのさアアー!!下がったところで逃げられるかアアー!!』

「『ダイバー・ダウン』は『潜行する』能力を持つ。それは、スタンドだけでなくパワーもなッ!!」

『はっ!!まさかアアー!!』

アナスイの言葉で後退する前に地面を殴った理由が分かった。理解した時には3体は、もうその場所にいた。

「その場に触れたら、それが解き放たれるッ!!」

バツコオオオオオオオオオオ

“ダイバー・ダウン”の能力で潜行していたエネルギーが解放されたバラバラと崩れる絵たち。幾らなんでも絵のため耐久力はない。

そして“イマジネーション”は、再び逃げ始めた。それをアナスイは再び追い掛け始めた。

“イマジネーション”とアナスイは2階に上がり、追走劇を再び始める。が、2人が上った階段の壁が裂け、そこから“イマジネーション”が出てきた。またアナスイは偽物を追い掛けている。

『危なかったわ……私が早く気付かなかつたら、倒されていたわ。』

今度は、晴美自身が操っている。本体とスタンドの精神は別離しているため、考えを互いに共有出来ないのです。スタンド自身は隠れるという策を考えていなかった。

そのことに逸早く気付いた晴美は、自分で操作して今に到る。そして、呼吸を整えてアナスイを倒す方法を暫く考えた後実行した。

「くそ、偽物だったとは」

5分ほど鬼ごっこをして、＼イメージネーション＼を倒した後、ようやく偽者だったと分かった。スカに無駄な体力を奪われたアナスイは、廊下を歩いていった。暫くしてから、アナスイはある者と偶然出会った。

それは徐倫だった。

「あらアナスイ、こんな所で何やってんの？」

「・・・!!徐・・・徐倫・・・」

アナスイは徐倫が「絵」ではないかと思った。けど、顎の尖りは普通だった。出会うまでの時間差があるため確認で彼女の至る所を触った。別にいやらしいことはしていない。頭とかほっぺとか肩とかを触った。

「ちよっ!! アナスイ何してるの!!」

「すまん徐倫、偽者かと思つてな」

「偽者!?!」

「そうだ、実はかくかくしかじかなんだ」

アナスイが急に自分の体を触ってきてびつくりして構える徐倫だが、アナスイから今までのことを説明されて一応構えは解く。

「なるほどね、そういうこと」

「いいか徐倫、君も俺と一緒にいるつてことは標的になつていられるかもしれないねえ。兎に角、あまり俺の傍……えっ!?! アナスイ!?!」

何かおかしいことが起きている。絶対にここに2人はいないはず。そう思つてアナスイは振り返ると、やっぱりいた徐倫がツ!!

徐倫はアナスイの後ろに自分がいることに驚いている。つまり、今まで話していたのは……

ズシヤアアアアア

「ぐは・・・偽者か!!」

「アナスイ!!」

『そうですよ!!今更気付いたんですか?』

徐倫の絵を纏っていた「イマジネーション」で自分の肩を斬られたアナスイは、斬られた肩を押さえ、後ろに倒れた。徐倫はそんなアナスイに近付いて、傍についた。

「イマジネーション」は「徐倫の絵」から出ると、二人に対峙する。

「その口調は、今は晴美の方が・・・バカな・・・全く区別がつかなかった・・・どういうことだ」

『どうって「成長した」んですよ。千里も私の成長速度を一目置いている程、私は成長性が高いんですよ。既にもう私は、「クセ」を克服したのよ!!そして見分けがつかなく

なる程正確に描ける様になったんですよ!!これならどんな絵でも再現できるわあ、ワハハハハ!!』

奈美が恐れていた『脅威の成長力』。その力でそれほど成長してしまった晴美は、二人に突っ込んで来た。狙いはアナスイではなく、徐倫!!

『この子は少し預からせて貰いますよ!!』

「なっ!!徐倫!!」

「うおっ!!くっ・・・ストーン・フリー!!」

晴美のスタンドに首を掴まれた徐倫はスタンドを出して倒そうとするが、その前に「絵」で縛られた。

「なっ!?!速い!!」

「徐倫の「ストーン・フリー」よりも速く!!」

『素晴らしいわ!!ここまで成長しているの!?!正に、私は成長しているッ!!同人誌作家としてもッ!!スタンド使いとしてもッ!!』

恐るべき成長速度。『ストーン・フリー』よりも速く描く事が出来た晴美。

スタンドを絵で縛られている徐倫は成す術なく連れて行かれる。しかし、向かう場所は推測できる。アナスイはそこへ走る。

(体育館、何故体育館かは知らねえが兎に角行くしかねエーーーーーーツ!!)

徐倫のために廊下を走るアナスイ。規則違反だが彼には知ったこっちゃない、彼女を助け出す事しか今は頭がない。

体育館の近くに来たアナスイ。丁度その時スタンドが徐倫と入った。そして、鍵を掛

けた。

だが、アナスイはその扉をスタンドで叩き壊し、入った。そして、その中で見た物に驚愕する。それは……

わらわらと群れている徐倫だ!!!

「徐倫が……徐倫が……徐倫が “いっぱい” いるツ!!!グへへへへへへへへ」

アナスイはそう叫ばざるを得なかった。だって、誰でも同じ人がいっぱいいたらそうするだろう。

何だか天国だなあと一瞬思ったがその考えを振り払い、晴美のスタンドを捜す。だが、徐倫の量が多すぎて中々見つからない。

『ウへへへへへ。アナスイイー!! てめエーにはこいつらにぶん殴られて再起不能なりなアー!!』

すでに自動操縦に変え、徐倫の量産していく。何処からかそいつの声が聞こえるアナスイだが、見つけるより前に徐倫達が5、6名襲って来た。

「うおおおお!! ダイバー・ダウン!!」

自分のスタンドで襲った彼女達を返り討ちにしたが、1名だけ完全に倒せておらず、スタンドの顔を殴る。

「ぐほお!!」

『私が作つたんだからスタンドにも直接攻撃できるぞオー。ほらほら早くしないともっと増えるぞ。さアーて、本当の徐倫と私は何処にいるでしょうか?』

「アナスイ!! 本物は私よツ!! ここにいるわよ!!」

しかし、徐倫の叫びも空しく至る所から同じセリフが出てくる。アナスイの頭はパ

ニツク状態だ。もうまともに思考出来ない。

「うわあああああ!!! 本物はどれだアーーーーーッ!!! どれが本物なんだアーーーーーッ!!!」

『無理よ……あんたが私に勝てる筈がない。ここまで正確に素早くしかも丈夫な絵が描ける時点でもう終わりよ……成長した私達の勝ちよ……さようなら』

パニックになっているとどんどん徐倫が襲い掛かって来た。幾ら何でも数が多いため全てを捌ききれず、アナスイはどんどん傷をおった。

それを見て、「イマジネーション」も勝ち誇っていた。そのとき何処からか徐倫の声が聞こえた。

「しつかりしなさいアナスイ!! 気をしつかり持つのよ!! よく考えて、「本物と偽者」で惑わされちゃダメ!! ようは「絵と私」だけなんでしよう!!」

「……!! そうか……そうだったな。所詮、偽者は「空想」、  
「絵」でしかねえ!!」

ビヨヨヨ~~~~~ン!!

徐倫の言葉で気が付いたアナスイ。そして彼は思いつきりジャンプした。

「脚をバネに『改造した』!!そして、このまま殴りぬけるッ!!」

弾性エネルギーで天井までジャンプしたアナスイ。そして、その〃火災報知機〃を叩き壊す。

ジリリリリツと非常ベルが鳴り、天井に設置されていたスプリンクラーから水が出てきた。その水でどんどん徐倫達が崩れていつている。

「そうだよな、所詮〃絵〃だから水に濡れたら崩れるんだよなあ。あんがとよ徐倫」  
「どういたしまして」

絵は濡れたら絵ではなくなる。そんな当たり前のことを教えてくれた徐倫に感謝したアナスイ。

そして、アナスイが床に着地したときには全ての絵が崩れて残ったのは、アナスイ、本物の徐倫、そして、

『ひええええええええええええええええええええええ!!』

“イマジネーション” だ!!

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

絵を描こうとしても放水はまだ続いているから描けない。何も出来ない “イマジネーション” は只のスタンド、爪から黒いインクが漏れながら怯えているだけのスタンドだ。

そして、無能なスタンドに近付くアナスイ。

「なるほど、爪からインクを出して描いていたのか。通りで色んな所に描けるはずだ」  
『あわわわわわわわわわわわわわ』

もうすぐそこまで来ているアナスイに冷や汗が止まらない。イメージネーション。逃げ道はもうない。あるのは……

「さてと……それじゃあ……始末するッ!!」

ドォー—————

『死』だけだ!!

『ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい!!!』

「『ダイバー・ダウン』」

怯えているスタンドに『ダイバー・ダウン』が入り込んだ。

『何……何をしたんだ……私に……』

「てめえーの肉体そのものに『潜行させた』」

『え……それっ……ぎよぼおおおお……!!!』

次の瞬間 “イマジネーション” の体が穴だらけになった。これは怯えている “イマジネーション” にとってはかなり恐怖ものだ。死に対する恐怖がより強くなった。

「内側からブツ壊すんだぜ!!」

『うるわああああああああ!!!』

「本体に伝えておけ、 “次はてめーの番だ” と」

ドカアアアアアアアアアアアアン

“イマジネーション” の体は粉々に吹き飛び、消滅した。もう放水は止まっている。そして、アナスイは体育館から出ようとする。

「行くぜ徐倫、晴美ヤツの所によ」

徐倫は今の今までのことが分からないけど頷いて、体育館を一緒に出る。そして、エルメエス達と合流し、晴美の家へ急ぐ。

“イメージネーション”・・・再起不能

しかし、すぐに復活した。

「ふう〜〜〜〜。やっと終わった〜〜」

場所は晴美の部屋。同人誌の原稿を描き終えた晴美。かなり清々しい気持ちの彼女は笑うことしか出来なかった。

（今頃、アナスイさんは倒されているだろうな、あれほど有利な状況を作ったんだから特別スタンドがハマしない限り、大丈夫のは・・・うっ!!!）

そう思っていると、晴美に突然の吐き気が襲った。これは“悪阻”ではない。スタンドが倒された事を知らせる症状だ。



## 第拾弐話 『空想《イマジネーション》』その②

アナスイ達御一行は奈美に道案内をさせて、晴美の家に向かつていた。その向かう道中で今まで起きたことを徐倫に話しておいた。彼女は「大変だったのね」と奈美や偽承太郎と同じ事を述べた。

時刻は既に5時を過ぎていた。ここまで御一行は一言も発せず黙って来ていた。

かれこれ300メートル程歩いているが、長い沈黙に耐え切れず奈美が喋り始めた。

「思ったんですけど……貴方達って晴美ちゃんと闘った後如何するつもりなの？ やっぱりまだ調査する？」

「当たり前でしょ……スタンド使いが全員判明するまではね。それに貴方達の『計画』を暴いてからね」

「ハハハ。だと思った」

聞いても自分の予想通りの返答が返ってくる質問をしてしまった奈美にその通りの答えを言った徐倫。

そして、『彼らの計画』について徐倫が触れた際、エンポリオは奈美に問う。

「その……『計画』って何をしているのですか？ 奈美さん、答えられる範囲でいいから」「政府にも極秘」って事しか言えないわ。晴美ちゃんに勝つたら教えてあげてもいいから」

答えをやはり濁らす奈美。千里の紅い髪や「第三の目」の事を聞きたい徐倫達だが、言葉を濁らされると思ってしまう。

晴美に勝てば教えてくれるかもしれないので、この闘い絶対に負けられないと思う徐倫達だ。

暫く住宅街を歩いていると、晴美がこちらに堂々と向かっている。それに気付いたアナスイも前に入る。

その二人の目からは殺気が飛んでいる。そして、晴美とアナスイは話が出るほど近くに近付いて、対峙する。

「やりますねアナスイさん、完全に彼方の事を嘗め切つてましたよ」

「嘗めんなよ大人を。てめーのスタンドじや接近戦で俺を倒せねえーんじやねえか？」

「彼方、人のことは言えませんが嘗め過ぎてませんか？」

アナスイの底力に敬意を払い、自分の考えを反省する晴美だが、アナスイは接近戦で彼女のスタンドが自分に勝ち難いと言っている。

晴美がその事に苛立ちながら、掛けているメガネを外し、捨てた。そして、奈美はその行動に驚く。

「晴美ちゃんが・・・・晴美ちゃんが拘束具を外した!!」

「拘束具・・・?」

「晴美ちゃんは身体能力がズバ抜けてて、それを隠すためにメガネをかけているの。そして、その重さは50キロ!!」

「50!!」

皆が驚いている間にメガネが鈍い音と共に地面に落ちた。そして、身軽になった晴美は軽く準備体操をした。

「私のスタンドは元々近距離パワー型なのよ。拘束具のメガネを掛けたことでスタンドパワーを抑えて、あの形になったのよ」

「それじゃあ学校での闘いは最大の力ではなかったということか」

「そうよ、真の力はここかよ!! 来なさい」 イマジネーションⅡルンバ”!!」

ゾゾゾと姿を現す “イマジネーションⅡルンバ”。色が黒くなり、筋肉質になった “イマジネーション” が晴美の傍に降臨する。

体が一回り大きくなった “イマジネーション” を見て、額から汗を出すアナスイ。学校では遊ばれていたとこの時実感した。

「それじゃあこつちから行かせて貰いますよ」 シュン!!

「……………!!」

「なっ……………速っ!!」

アナスイと闘うために1ステップ踏んだ晴美は、その瞬間消えてしまった。

否、消えた訳ではない、速いのだ。たったの1ステップで驚きのパワーを出して、相

手を翻弄する。そのあまりの速度に驚いて徐倫以外言葉に出来なかった。

しかし、そんな晴美の行き先はアナスイではなかった。でも速過ぎて何処に向かったすらも分からない。

奇襲をかけるつもりだろうかとアナスイは考えている時に、晴美は狙いを定めて襲って来た。

「隙ありですよ、アナスイさん!!」

「……?!?!そこからか!!」

彼女はアナスイの背後、右斜め上から襲って来た。

それに気付いたアナスイはスタンドで抗戦しようとするが、その時には晴美とスタンドのパンチを振り下ろしていた。

「ぐほあ……」

「遅い遅い、遅すぎますよ」

諸にパンチを食らい、地面に叩き付けられるアナスイ。その勢いを利用して晴美は自

分が来た方向へ下がる。

そして、よろけながらもアナスイは立ち上がり、こんなの痛くも痒くもないぜツという態度で晴美に対峙する。

「ふむ。あれで立っていられるなんて、ちょっと凄いわ。少しだけ褒めて上げましょう」

晴美はアナスイの痩せ我慢に敬意を表し、軽く拍手する。アナスイは殴られた痛みと荒い息遣いで返事も出来なかった。

そんなアナスイを見て、晴美はニヤツと笑い、1ステップ踏んだ。

勿論、超高速だが自分の真正面に突つ込むと分かったのでアナスイはスタンドで彼女を向かい入れた。

ドバゴオオオオオオオオオ

「くっ・・・・・・・・」

両者の力はほぼ互角、このまま二人とも吹き飛ばされる。誰もがそう思っていた。・・・・・・・・後ろに「晴美」がいなければ・・・・・・・・

バコオオオオン

「ぐは……何っ……ぐふ!」

「私の能力をお忘れですか？」

『分身をさつき一人用意していたのですよ』

背後から襲って来た晴美、分身体はアナスイの背中を殴り、殴られた反動で腕の力が一瞬弱くなり、向かい合っていた本物の晴美に殴られるアナスイ。

アナスイが仰け反った時、二人の晴美は彼を高く蹴り上げた。

「さあ、アナスイさん。決着<sup>ケツ</sup>をつけましょう」

そう言い、晴美は超物凄いスピードで自分を6体描いた。そして、計8体の晴美が各々アナスイに向かいジャンプして、昇龍拳を浴びせ、アナスイより高い場所に全員集結した。

そして、脚を振り上げて下にいるアナスイを見て、ニヤツと笑う。

「地面に叩き付けられるオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ドギヤアアアアアアアアアアアン

「くぼはあああああ!!」

8人の晴美に思いっきり蹴られ、地面に叩き付けられるアナスイ。叩き付けられた影響でメキメキとコンクリートの地面が割れる音がするが、普通なら即死だ。

倒れて動かないアナスイに晴美は近付き、本当に倒したか確認する。念のため絵は解除していない。

アナスイのスタンド射程距離内に入るほど近付いても動かないので、晴美は帰ろうとするが不意に足を掴まれた。

「まだ意識があつたんですね」

「こんな所で………負けられるか………」

もう体はボロボロなのにまだ闘いを続けようとするアナスイ。そんな彼をスタンドを横に配置させて見下ろす晴美。

「私、しつこい男は嫌いなの。このままスタンドで首を折ってあげましょうか？」

「否、その前にてめーは負ける」

「どういう根拠で？」

「てめーも俺の能力を忘れるなよ」

首を折ると嚇す晴美だが、折る前にアナスイに敗北すると言われてプチツときて、蹴ろうとするが外れてしまう。

理由は簡単、両腕と両脚に力が入らない、否、動かないのだ。

「はっ、まさか!!私の足を掴んでいた時に体の中にスタンドを!!」

「そうさ……『潜行させた』。てめーの腕と脚の付け根をグチャグチャにして使えなくした」

脚に力が入らず晴美は仰向けに倒れてしまった。『改造された』ことを倒れる途中で気付いたからもう遅い。

幾等強いスタンドでも本体が動けなくなれば、忽ち弱くなる。しかし、晴美は諦めず、

うつ伏せになり、アナスイと対峙する。

「全員!!アナスイさんを倒せええええええ!!」

その一言で7体の分身体はアナスイに襲い掛かる。しかし、弱りきっている体を起こし、スタンドをこちら側に戻して、アナスイは両手を腹に持つてきてフツツと笑う。

「俺が何の用意もせず態々ここに来る訳ねえだろう。俺の腹部を何かが入るように『改造した』!!」そしてその何かとは……」

アナスイは自分の腹を抉じ開けて、その中に入っている物の中身を分身体にかけた。勿論、それは……

「水の入ったバケツだああああああ!!」

バシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

分身体全員は水をかけられて体がドロドロと崩れていった。そして、崩れた彼女達を

踏み越えてアナスイは晴美の所まで歩を進める。

「ハ……………ハ……………早く…………描かなきゃ「ボギイ!!」ぐぎやああああ!!」

追い詰められた晴美は絵を描いて身を守ろうとするが、*“ダイバー・ダウン”* にスタンドの両手首を踏み付けられ、嫌な音を発して描けなくなってしまった。

そして、その激痛で苦しんでいる晴美をアナスイは見下ろす。

「ハ……………ハ……………ハ……………ハ……………ハ……………ハ……………ハ……………ハ……………ハ……………ハ……………ハ……………」

「もうてめーに言える事はない。あるとしてもたつたーっだ」

息遣いが荒くなる晴美。*“ダイバー・ダウン”* はもう何処にもいない。地面か壁か自分の体のどれかに『潜行している』に違いない。

何処から襲って来るか分からず、疑心暗鬼に陥っている晴美。そんな状態の晴美にアナスイは一言言った。



ばされる晴美。しかし、攻撃はまだ終わっておらず、スタンドをジャンプさせて、上空を舞っている彼女に拳を振り下ろした。

『地獄へ落ちろオーーーーーーッ!!』 ドドギヤアア

「まみるッ!!」 メメタアア

晴美の顔面に拳がブチ当たり、地面に叩き付けられる晴美。白目を向いて気絶しているが、ここで立ち上がったなら化け物である。

彼女を倒した事をアナスイは確認すると捨て台詞を敢えて言っておいた。

「……てめーが敗北することにな」

藤吉晴美……再起不能　その後ちゃんと腕と脚を元に戻してくれた。

「やっぱり言わなきや駄目？」

「駄目よ。ちゃんと約束は守って貰うわよ」

「ええ……」

晴美を倒した後、奈美は徐倫達に問い詰められていた。『晴美ちゃんに勝ったら教えてあげてもいい』と彼女自身が言った事でこうなっているから100%自業自得だ。

「約束はちゃーんと守って貰おうか。じゃなきや『解体』するぞ」

「ひいー……どつちみち私、殺されるじゃーん!!」

「ええ!? 貴女、仲間に殺されるの!？」

「そうだよ!」

言わなきやアナスイに『解体』すると嚇されて怯える奈美。泣きそうになりながら嘆いていると、その内容に逸早く気付いた徐倫。

奈美は、その『計画』を他人に話すと殺されてしまうのだ。

「3日前に裏切り者の研究者が千里ちゃんの手で殺害されたんだから。だから、私の口からは絶対に言えない、殺されたくないからね」

「おいおい、それじゃあ本末転倒だぜ」

「だな・・・」

「何だが、スタンド使いを見つけた方が手っ取り早い感じがするよ」

絶対に他言出来ない奈美の意地でスタート地点に戻って来てしまった徐倫達。そして、周りに嫌な空気が漂い始めた。

そのことで落ち込むエルメースとアナスイ。『計画』について全く進展がないのでクラス内のスタンド使いを捜した方がいいとエンポリオは言う。だがその時、徐倫は突然思い出した仕草をする。

「そういえば、1人見つけたわ」

「誰だ徐倫、そいつは!?!」

「風浦可符香って子よ」

「可符香ちゃん!?!」

徐倫が見つけたスタンド使いは誰かと問うアナスイ。だが、徐倫がその子の名前を言った直後、奈美は驚いて、尻餅をついて後退りをする。

不自然な行動に徐倫達が疑問に思うと彼女は聞いてきた。

「徐倫さん・・・可符香ちゃんに会ったんですか？」

「ええ、そうよ。今日の校舎内だね。ちよつと怪しかったから糸をその場に残したら、気付かずにペラペラと、自分はスタンド使いです」みたいな話を話してたから分かったのよ」

「可符香ちゃんに会ったんだ・・・」

徐倫と可符香が遭遇した。その事実を知った瞬間、奈美は汗が止まらなかつた。

「彼女と会ったなら、もう『計画』を知るのも時間の問題ですね」

「どういうことよ！意味が分からない!!」

「明日になれば、おそらく分かりますよ。いえ、確実に」



彼らがついさつきいた所の石造りの壁から女子生徒が出てきた。その少女は風浦可符香（P・N）である。さつきの話を聞いていたので徐倫にばれていたことに初めて気付いた。

「めんどくさい能力持つてるのねえ……徐倫さん。全く一本取られましたよ、アハハハハハハハハ」

誰もいないこの場で笑い声だけが響く。そして、そのまま彼女は空を見上げる。雄大な空を見て、彼女を眩く。

「明日は荒れるわね……………天気だ」

その沈黙の時に可符香は何を思っていたのか。この場に誰もいないし、いたとしても心が読める訳でもないため一生分からないが。





「報酬と人員をたんまり用意してくれるなら引き受けていいぜ」  
彼の職業は殺し屋。そして、スタンド使いでもある。

T o B e C o n t i n u e d . . . . . ⇒

# スタンド・キャラクターデータNo. 1

評価：A・・・超スゴイ      B・・・スゴイ      C・・・人並み      D・・・ニガテ      E・・・  
超ニガテ

・空条承太郎

本作で42歳になる。40代のくせに見た目が若々しく、大学生と間違えるほどだ。この体質から母親に妬まれている。

服はいつも6部の衣装を着て、学校に行っている。その服の中には遠距離戦対策にベアリングを携帯している。

本業は海洋生物学者で博士号を取っている。因みに、望とまといと戦う前にあびるにその事を知られて、うんざりする程海洋生物の尻尾について聞かれた。

頭脳明晰で常に冷静沈着で、正義感が強く、気になることがあるとそれを知るために、地の果てまで行くほどの執念深さを持つ性格だ。

スタンド使いとしてはかなり優秀で、スタンドの性能と本体の精神の強さによって全くスキが生じないから「最強のスタンド使い」と言われる事がある。

こんな彼の課題は調査をしつつ、妻との時間を作ることである。

スタンド：星スタープラチナの白金

【破壊力：A スピード：A 射程距離：C 持続力：A 精密動作性：A 成長性：E】

スタイル：近距離パワー型 分類：人型

とてつもなく鍛え上げられたような筋肉質の人型のスタンド。ちゃんと髪も生えている。世界最強と言われることもあるスタンドだ。

他のスタンドを寄せ付けない圧倒的なパワー、スピード、精密動作、視力、動体視力を持つ。

射程距離は約2メートルと短いですが、射程距離外に敵がいても、『時止め』で相手に近づくか物を投げるかでカバーが可能。

『時止め』に関しては下記で説明します。

スタンド：スタープラチナ・ザ・ワールド

【破壊力：A スピード：A 射程距離：C 持続力：E 精密動作性：A 成長性：C】

スタイル：近距離暗殺型 分類：人型

“スタープラチナ”のスピードが光の速度または時間を卓越している間のみ、この世

の時間を止める事が出来る。

そういう原理で止めているため、止めれる時間は一定ではない。しかし、最低でも0.5秒、最大で5秒。

因みに、『時止め』は、承太郎のテンションが高ければ、高いほど長く止められる。

何故パワー型ではなく暗殺型と定めているかという点と相手に気付かれずに攻撃するから。

#### ・空条徐倫

承太郎の娘で本作で20歳。半年程前まで色んな理由があつて承太郎を毛嫌いしていたが、そんな彼の目的などを理解してちゃんと和解している。

服装は6部の終盤に着ていたものを着ている。

明るく少々下品だが、承太郎から受け継いだ冷静な判断力と『黄金の精神』を持って  
いる。

戦いを通して日々成長している姿はしっかりと『ジョースターの血統』を引き継いでいる。

望達が行っている『計画』にいち早く知りたいたいと思つているのは彼女だ。

スタンド：ストーン・フリー

【破壊力：A スピード：B 射程距離：C 持続力：A 精密動作性：C 成長性：A】

スタイル：近距離。パワー・中距離操作型 分類：人型

本体の体を糸に変化させ、操る能力。糸II体のため糸を出し続けると体が減る。他人の体も糸に出来る。

サングラスをして男性の様に鍛え上げられた人型のスタンド。

その糸は糸電話のように話を聞けたり、傷を縫合したり、衣服に擬態するなど、応用力が高い。

弱点として、糸が切れると激痛が走り、その部分が欠ける。

スタンドを糸状にすることも出来る。その時はパワーは落ちるが射程距離が数十メートル（B判定）と長くなる。

その性質によつて、相手を糸で追尾して、人型でトドメを指す。そういう戦法を徐倫はいつも心掛けている。

・エルメス・コステロ

本作で22歳であるメキシコ移民の娘。

自分の姉を殺害した犯人への『復讐』で、わざと武装強盗の罪で捕まり徐倫と同じ刑

務所に入り、彼女が捨てた『スタンドの矢の欠片』を拾ってスタンド使いになった。

徐倫とは留置所で会ってから、友人になっている。

服装は原作終盤で着ていた物を着用している。

明るく情に厚いが目的のためなら明確に覚悟を決める性格で、その犯人を倒した後徐倫たちと共にプッチの陰謀に立ち向かった。

日本に来てまだ間もないので環境に慣れようと必死であるが、調査や雑務はあまりしていない。

スタンド：キツス

【破壊力：A スピード：A 射程距離：A 持続力：A 精密動作性：C 成長性：A】

スタイル：近距離。パワー・遠隔操作型 分類：人型

全身に描かれたキスマークのシールを貼っていて、無数の釘が刺さっている人型のスタンド。

本体の手から出てきた『シール』を貼った物を2つ（人体ならば、貼った部位が）に分裂する。

シールを剥がすと分裂した物同士が合わさって1つになり、この特性で攻撃したり、高速移動が出来る。

また、自分や味方に使用して部位的攻撃を回避を行う事が出来る。

射程距離判定Aとなっているがそれは分裂した物のものでスタンド自身は約2メートル程（E判定）である。

・エンポリオ・アルニーニョ

本作で12歳となる男の子。スタンドは自身のとウエザーのDISCの2つ持っている。

若干12歳だがかなりの博識で自動車の運転も出来る。優しい性格で人に好かれやすい。

徐倫と承太郎が面会する時、彼女に警告をするために初めて会った。それ以降仲間のウエザーとアナスイを徐倫に対面させたりとサポート役として行動を共にした。

原作終盤で一人辿り着いた「一巡後の世界」でプッチを倒し世界を救った英雄でもある。

服装は6部で着ていたものを常に着ている。

本作では心身ともに成長して“ウエザー・リポート”を巧みに操れるようになった。

スタンド：バーニング・ダウン・ザ・ハウス

【破壊力：なし スピード：なし 射程距離：なし 持続力：なし 精密動作性：なし  
成長性：なし】

スタイル：近距離操作型 分類：道具型

物体の幽霊を操るスタンド。像（ヴィジョン）は無く、原作ではピアノやパソコン等の幽霊を出し、どれもエンドのみが使用可能。

但し、拳銃の幽霊は撃つても着弾せず、ジューズといった飲食物の幽霊は味がしても腹を満たすことが出来ないように現実世界に影響させることは出来ないため戦闘では不向き。

また、ゴミ箱をポケットの中に入れておくことが出来、これを利用して移動または隠れる事が出来る。

本編ではまだ無使用だが隠れてちよくちよく使っている。

スタンド：ウエザー・リポート

【破壊力：A スピード：B 射程距離：C 持続力：A 精密動作性：E 成長性：A】  
スタイル：近距離。パワー・遠隔操作型 分類：人型

天候と空気を広範囲に操るマスクをした人型のスタンド。

気象を操って風を纏ったパンチをしたり、空気を凍らせて相手を捕らえたりするなど

幅広い応用力を持ち、近距離戦・遠距離戦・集団戦において得意とする能力。

その操れる気象の距離は大体数キロ（A判定）に渡る。

但し、発現出来る気象状態は細かい微調整が出来ず、飛行中の飛行機に追い着くことが出来ないように、気象現象の限界を超えることは出来ない。

あくまで気象を操る精度が悪いだけで、スタンド自体はC判定ほどである。

・ナルシソ・アナスイ

原作では年齢が明らかになっていないが、本作で23歳となるようにする。

エンポリオの秘密の部屋でウェザーと共に滞在していた囚人で、極度の分解癖を持ち、元カノが浮気している所を発見し、その二人を『分解』して刑務所に入れられる。

最初はウェザーが抑え付けないと何を仕出かさか分からない危険人物だったが、徐倫の話聞いて恋心を抱き、現在の様なお調子者になった。

やる時はやる性格で、一度捨て身の作戦などを立てたほどの性格だ。

只、上記に記した通りボケキャラにし易いので本作ではポルナレフの様な扱いをされる事が多々あるだろう。

余談だが、ケーブ・カナベラルの道中で寝ている徐倫に高値で買った指輪をはめたがワニを撃退するために無意識に投げ捨てられた悲しい思い出がある。（ブッチ死亡後、

その辺りを探したが見つからなかった)

スタンド：ダイバー・ダウン

【破壊力：A スピード：A 射程距離：E 持続力：C 精密動作性：B 成長性：B】  
 スタイル：近距離暗殺型 分類：人型

人や物質の中に潜行して操ったり、改造したり、そこに潜らせた自分の力を解放して攻撃するマスクとスーツをして酸素ボンベを背負った人型のスタンド。

自分や味方にも潜行して負傷した箇所の代わりになり、ダメージの肩代わりをしてくれる。

また、異物を自分の顔に埋め込んで変装したりと応用が多岐に分けて、戦闘向けバリアの能力。

To Be Continued . . . ⇒

## 第弐章 糸色勢力と野犬の猛威篇

### 第拾参話 侵入者を討て!! その①

某国某所のビルの来賓室。殺し屋“スコッチ・ウイスキー”は、雇い主の“エッグプラント”と話していた。

スコッチは標的である承太郎を殺すためにもつと報酬と人員を用意するように頼んでいた。

少し悩んでエッグプラントは彼が出した要求についてこうきりだした。

「スコッチ。金は用意出来るが人員は数人程しか出せん。我々も必要な人員を減らす訳にはいかないからな」

「問題ない。数人だけでいい。後は俺の所持している金でバイトしてくれるヤツを探すから」

「それはありがたい」

人員はなるべく割きたくないエッグプラントだが、スコッチも承知の上で少しだけで

十分だろう。

それで安心するエッグプラントだがスコッチはその依頼に疑問する点があった。

「なあ、どうしてあんた等をリストラした『パツシヨーン』ではなくSPW財団の方なんだあ?」

「どあほ! そうしたいのも山々なんじゃが、ボスにはわし等など相手にもならないからわし等がリストラされた原因のSPW財団を叩く方が良い訳なのさ」

「なぐるほど……あんた等の全滅を恐れて組織の嫌がらせにしたのか……奴さんの利益を潰してあんた等の根を張りやすくすんのが狙いかあ……ああ、女々しいねえ」

目的はあくまで組織の勢力拡大。そのために目の上のたんこぶのパツシヨーンを弱らせようと考えているエッグプラント。しかし、組織の力はあまりにも強いため関係を結んでいるSPW財団に優先を向けた訳だ。

何故そこまで組織を恨んでいるかという彼は元々イタリアのギャングの『パツシヨーン』の幹部だった。

しかし、10年も前に組織のボスが方針を変え、麻薬チームを一掃してSPW財団と

結び勢力を表向きの社会まで拡大し、より良い組織を創り始めた。

その時、その考えに賛同しなかったエッグプラント率いる反ボス派の団員は全員組織から追放された。そして、エッグプラント達はアジアへと逃げて新たな武装組織を設立した。

「我々『ワイルド・ドッグ』は密かに力を蓄え続けて早10年。そして遂に来た!!今がその時だッ!!!組織に復讐する時がなッ!!!」

まずはSPW財団を潰し、組織が混乱、衰弱したところを叩き、征服するのだアアアアアアアアアアア!!ブハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

エッグプラントの馬鹿げた野望を散々聞かされて呆れたスコッチは彼の邪悪な笑いを無視して部屋を出ようとする。

「じゃあメンバーの確保……任せませ」

「ハハハ……ん?ああ、分かった。報酬は成功したらここに来い」

「へいへい」

「後、奴等は文京区の妙な噂が流れている学校に行っているらしい」

「ほお・・・そうかい、じゃあそいつ等にも気を付けておきますわ」

色々とエッグプラントが忠告したことを聞いてスコッチはニヤツと笑いながら、部屋を出てアルバイトをしてくれる奴等を捜しに行った。

静かになった来賓室で窓際に寄り、景色を眺めるエッグプラントは険しい顔つきになつていた。

「ヱジヨルノ”。貴様と貴様の組織に決着をつけてやるッ!”

2日後の朝、承太郎達は学校の校舎を歩いてきた。数名の擦れ違った生徒が自分達に挨拶しながら暫く歩いていると、前方に風浦可符香が見えてきた。

近付いて来る彼女に彼らは立ち止まり、息を呑んだ。

彼女がスタンド使いと判明しているので、如何してもこんな風になつてしまう。色々焦る彼らに対して彼女は軽い会釈だけしてそのまま過ぎ去つてしまった。

無駄に緊張をしてしまった承太郎達だが、その緊張は一向に解けなかつた。

「ねえ、見た？今の……」

「ああ……見たぜ徐倫……如何見てもおかしい……」

「見間違ひなんかじゃねえ……あの女……」

「異常だ……何者なんだ……？」

「風浦可符香……全くやれやれだぜ」

可符香を見て驚く徐倫とアナスイ。見間違ひではないと確信しているエルメエス。彼女を見て異常だと主張するエンポリオ。そして、焦るも冷静を保とうとしている承太郎。

只彼女が近付いて来たから唾然してはいない。その姿を見て唾然しているのだ。

((何で彼女の姿が変わっているッ!))

如何いうこと、徐倫が初めて会った時は、左目にホクロがあるポニーテールの少女だったのに、昨日は金髪で長髪の外国人の少女、そして今日は何処ぞのテーマパークのネズミの様なおだんごをした少女だった。

共通点として前髪に十字型の髪留めをしていて、且つ、へ組の生徒だと言う事。確認のため一昨日と昨日の可符香と名乗った少女に聞いてみると二人とも人違いだと言うしまつ。

昨日は何かの間違いだと思っていたが、今日で間違いではなかったと分かった。

「これが一昨日奈美が言っていたことね・・・でも『計画』と彼女とどう関係しているのかしら。」

徐倫がそう疑問をもらした時、こちらに近付く生徒がいた。その人を見て五人は唾然した。

「き……木津千里!？」

「あら……貴方達……お久しぶりね。」

現れたのはなんと全身粉碎骨折で入院している筈の木津千里だった。

意識は医者が言うところ、そろそろだったが、体は全身の骨が砕け散ったので到底2日で治る筈がない。

そんな何をしたら元気はつらつになったのか分からない千里は、可符香と彼女の事で頭が混乱している彼らに話しかけた。

「丁度いいので、皆さんに『お話』があるので、いいですか？」

「まさか、やる気かッ!?来るなら来いよ!!返り討ちにしてやるッ!!」

「いや……幾等私でももう終わった事をぐちぐち言うつもりは、ありません。」

千里の「お話」と聞いて警戒するエルメエスだが、そこまで執念深くないと千里は説明し、本題に入ろうとする。

「実は、先生が貴方達に早急に伝えなければならぬことが、あるらしいんです。」

「伝えなければならぬこと? 何だ木津それは?」

「私は、事前に聞いていますが、詳しい説明は、先生からお聞きください。色々聞きたいこともあるでしょうし。」

「確かにそれが尤もですね」

何やら望が彼らには知った方がいい情報があるらしくそれについて聞く承太郎だが、それは望本人から直接聞くように言った。

可符香の件で望に聞きたい事があるので効率がいいとエンポリオは思案中、千里は自分達に手招きをして、来た道に戻ろうとしている。

「今、先生は、宿直室にいますので、私について来て下さい。」

千里が望の所へ案内してくれるので、ついて行くことにした承太郎達五人。

只今の時刻、8時20分。朝礼前なのに緊迫な空気を漂わせるスタンド使い。数刻後、この学校は戦場と化す。

朝礼のチャイムが鳴った後、千里と五人は宿直室に着いた。

千里がその戸を開けて中に入ると、そこには五人と闘った5人のスタンド使いと望に似た少年と長髪の少女、そして、風浦可符香がいた。

「いやあ〜〜さつき振りですね」

「風浦可符香・・・」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

「まあまあそんなに睨まずに・・・好きな所に座って下さい」

呑気な挨拶をする可符香に承太郎は睨みつけ、いつそスタンドで一発ブン殴ってやろうかと思ったが、望が彼を仲裁して畳の上に彼らを座る様に言った。

座ったところで長髪の少女が五人分のお茶を用意して彼らに渡した。

アメリカンスタイルの生活を送ってきたアナスイ、エルメス、エンポリオは承太郎の家でお茶を飲んでいるが、まだ濁りとかに抵抗はあるが、とりあえず飲んでおいた。

「それでは、〃小森さん〃。少し大人の話をするので、〃交〃を少しの間、何処かに連れて行つてください」

「はい、先生」

望は自分に似た少年、甥の〃糸色交〃を長髪の少女に頼んだ。その少女、出席番号2番、〃小森霧〃は、それを承諾して無関係な交と共に部屋を出る。

二人が部屋を出たところで望は真剣な表情に変わり、話し始めた。

「貴方達を呼んだ理由はたった一つです。間もなくここに侵入者が来ることです」

「侵入者ああ!?!」

望の言葉に茶を啜っていたアナスイが素っ頓狂な声を上げて驚いた。

「侵入者ってどういうことだ!」

「それはこつちの台詞ですよ。今朝、突然小節さんが予知したことで、私も驚いてますよ」

アナスイは如何いいうことか分からず、望に聞き返すが、彼も分からず、只、あびるの予知を聞いただけらしい。だが、彼女の予知は完璧のため絶対にそいつ等は来るといふ事は確かだ。

その時、承太郎はそのことである事を推測した。

「もしかしたら、標的は私か?」

「えっ?!それってまさか、DIOってヤツかプッチの残党ってこと?」

「かもしれないな。どっちみち私を殺せば、利益はあるだろうし」

その侵入者は自分の命を狙っているだろうと承太郎は推測した。徐倫はそれがDIOかプッチの元部下・関係者かと推測したが、その可能性もあるかもしれないと結論付けた。

そんなことでざわついている徐倫達の声を割いて望は承太郎にある提案を出してき

た。

「そこです、承太郎さん。私達と共闘、共に侵入者を倒しませんか？」

「一体何故故に？」

「私は学校を、生徒を、人々を護りたいのです!!私の追い求める『結果』へ辿り着く為には即刻に彼らを排除しなければなりません。つまりは、貴方達の今の目的と同じではありませんか？」

「確かに………いいだろう。あんたの考えに乗っても構わない。」

望と同じ目的を持っているので、共に侵入者を討とうと同盟を組んだ望と承太郎だが、承太郎は疑い深い男。そう易々と同盟は組まない。

「だが、念のために約束してくれるか？」

「なんです？」

約束とは何だろうかと思う望に承太郎は皆が気になるある条件を出した。

「お前等に安心して背中を預けるために、終わってからでもいいから、てめえ等が隠している事全て包み隠さず吐いて貰うぞ!!」

それを聞いた望を除く彼女達は青褪めていた。はつきりと自分達の秘密を交換条件にしたので誰もがぶつたまげたが、そんな彼女達とは対照的に望ははつきりと答えた。

「ええ、いいでしょう。そろそろ貴方達には知って置くべき頃合いだと思っていたところなんでね」

承太郎の苦渋の選択に苦勞することなく望はOKと答え、『計画』を知るチャンスが漸く遣つて来た彼等。

その喜びもつかぬ間、ふとエンポリオが疑問に思った。

「糸色先生、これから闘うとしても他の学年やクラスがその騒動を知ってパニックを起こしてしまうと思うのですが・・・」

その疑問は単純、侵入者と闘うとしてもその騒ぎで無関係な生徒・職員がパニックに

なるからだ。

しかし、望は何ともない素振りをして答えた。

「大丈夫ですよエンポリオ君。それを防ぐスタンド使いがいますから、彼女に任せましょう」

「とうとうとその可符香の野郎か？」

「いえ・・・彼女では・・・『ガララッ』・・・おっ、丁度来たようですね」

望の言うスタンド使いは可符香のことかと尋ねて可符香に指を差したエルメエスだが、違うらしい。

望がそれについて説明する時に、この部屋の戸が開いたので、確認するとその子はさつきまで望の甥を外に連れ出していた少女、*“小森霧”* だった。

その霧が眠っている交を抱えて、入ってきた。

「おや、小森さん。交は寝てしまったのですか？」

「いや・・・眠ったって言うより*“眠らせた”* と言えば正解だと思うよ先生」

「あまり乱暴なことは控えてくださいね。交に対して」

望は交がぐつすりど寝ているので不思議に思っていたが、霧自身が無理矢理寝かしかけたので若干引くが、霧は何とも思わずたたみに上がって承太郎達に一礼した。

「初めまして、小森霧です。列記としたスタンド使いです。スタンドは学校にとり憑き、設備を自在に操る“ステープル・ステープル”というものです」

「“学校の設備を自在に操る”能力かあ．．．確かにそれだと安全ですね」

共に戦う承太郎達に自分のスタンドを紹介する霧。彼女の能力なら多少激しい戦闘をしても大丈夫であろうとエンポリオは納得する。

「戦う際はやはりなるべく屋外へ相手を誘う様にしてください。幾等彼女でも大きい欠損は直に直せませんからね」

「ああ、なるべくそうするつもりだ」

望と承太郎はそういった作戦を考えていたがふとこの部屋にいる皆に承太郎は言った。

「すまない、聞くのを忘れていたが敵が偵察しているかもしれない。近くにそんな気配はあるか?」

「気配? そんなことはありませんが・・・どうですか小節さん、小森さん」

「包帯を踏まれる感覚はないですね」

「私も同じです」

気配に逸早く分かるあびると霧に聞く望だが、二人はさつきからその様な反応を感じ取ることはないようだ。

しかし、侵入者の1人はもう既に敷地内に侵入しているが・・・

『クツクツク．．．良い事沢山聞いちまったもんねえくくくくくくくく』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

そこは宿直室の近くの暗い場所に侵入者は潜んでいた。何故二人に見付からないというところといつはモノに「同化している」からだ。

そいつは彼等が話し合っている時には既にそこに侵入していた。全てがそいつにバレてしまった。霧のことも、共闘のことも。

しかし、そいつは焦っていた。これ程自分達に有利な情報も持っているのに、そいつは焦っている。

『嘘だらうくくくくく。聞いてねえくくくよオオくくくく。そんなことくくくくくくくく』

そいつはそう焦りながら体からバチバチという音を立てて心の中で呟いた。

『何でここにいやがんだア~~~~~!!?承太郎~~~~~!!?』

そいつは嘗て承太郎に面識があるスタンド使いだった。

「あいつはちゃんとやってんだろうなあ~~~~~」

学校の近くの住宅街の電柱に身を寄る男、スコッチ・ウイスキーは偵察係のスタンドの返事を待っていた。彼の思う予定の時間とは少し遅いらしく、苛立っていた。

本体がいる所に行つて来ようかと彼は思ったが、その時、電柱からバチツバチツという音が聞こえてきて電線から火花が出るとスコッチはニヤリと笑つた。

「全く遅かつたじゃねえか．．．．．そんなじゃあ襲撃するとしますか旦那方」

その現象を襲撃の合図としていたスコッチは後ろに待機していた仲間を呼び行動を開始する。

「奴等を血祭りにしましょうか。グヒヒヒヒ」

血戦の時が今始まる。

To Be Continued . . . . . ⇒

次回予告

承太郎 『何ツ!? 侵入者だとツ!?』

あびる 『敵は敷地内に3人います』

スコツチ 『まずはヤツを殺る』

徐倫 『怪しいヤツは全員敵だツ!!』

??? 『ようこそ・・・』

エルメエス 『なんなんだこいつは・・・!?』

??? 『クイズショーへ・・・』

徐倫 『エルメエスーーーーーッ!!』

??? 『たんと味わいなさい』

承太郎 『久しぶりだな・・・』

??? 『俺は何も知らねエーーーーーッ!! 知らされてねえん

だアアアアアアアアア!!』

『第拾四話 侵入者を討て!!その②』

## 第拾四話 侵入者を討て!! その②

時刻は午前9時をまわった頃、学校付近の路地で見た感じ怪しさ丸見えの集団が行動していた。

あまり足音を立てずに行動し、その集団のリーダーらしき男は後ろの二人の仲間止まれの合図を送り、敷地内を覆う柵に手を当てた。

「いいか。今から俺の『能力』でこの柵を一瞬で穴を開ける。開けたら侵入してバラバラに分かれて散れ。いいな・・・」

その男、スコッチ・ウイスキーは、後ろにいる二人の仲間に伝えた。その二人は彼の顔を見て頷いて返事をする。

そして、返事を受け取ったスコッチはすぐさま『能力』で人が数人同時に入れるほどの風穴を一瞬で開けてその場にいる全員で学校内に侵入した。

かくして、運命の血戦の火蓋が切って落とされた。

「・・・!!侵入者がやって来ました!!北西15度の柵に巨大な穴を開けられました!!」

「何ッ!?敵だとッ!?数は!？」

「穴の大きさからして複数人です」

スコッチ達が侵入した同時期に学校の設備を操るスタンド使い、小森霧はそのことを感知して、宿直室にいる皆に伝えた。

その情報を聞いて承太郎は、数の特定を彼女に聞いたが、そこまで正確な数は霧には分からなかった。しかし、その後その場にいたあびるが彼に話した。

「承太郎さん。私のスタンドが踏まれた感覚ですと、敵は敷地内に3人います」

「なるほど。敵は一まず3人か・・・」

あびるが敷地内全域に伸ばしていた包帯で侵入者の数を特定する事に成功して承太郎に伝えた。数を断定できて気合を入れる承太郎。

その時、望が宿直室の戸を力一杯開けて、部屋にいる皆に決まり文句を言った。

「それでは討伐と行きましょうか・・・健闘を祈りましょう」  
「お互いにな」

望の決まり文句に承太郎も決まり文句を返した。その言葉に面白可笑しくなりフツツと笑う望は、部屋を出る前に晴美に向かって話した。

「藤吉さん。至急へ組の皆さんにこの事を連絡して下さい」

「もうしてあります」

「そうでしたか。失礼・・・」

へ組の生徒に侵入者の事をスタンドを使って知らせるように言ったが、もう彼女は済ませているので、余計な事を言ってしまったと思つて謝つた。

そして、そんな二人の会話を聞いていた徐倫はある事が気になった。

「ねえ？何故へ組に伝える必要があるの？」

徐倫は生徒達の混乱をなるべく避けておきたいのが、下手したら混乱を煽る可能性があるかもしれないへ組の生徒に伝える必要が本当にあるかを思っていたが、望はその彼女の疑問に自身ありげに言った。

「使えるスタンド使いは多い方がいいでしょう？それに、戦いが長引けば他の生徒達がパニックになってしまいます。その為に必要最低限増員した方がいいのですよ。心配しなくてもそんな情報を漏らす生徒はへ組にいませんから」  
「確かに理に適っているわね．．．でも後者はどうだろうね」

あくまで望は敵の撃退の為に使えるものは全て使う気だ。それは早期解決と安全を考えての手段だ。

徐倫がその事を理解した時、望は駆け足で部屋を出て、廊下を爆走して敵を捜しに行った。

望が部屋を出た後、それにつられて霧以外のスタンド使いも部屋を飛び出し二手に分かれた。

一つは承太郎、千里、晴美の3人、もう一つは徐倫や可符香達7人。そう二手に分かれた後、共に行動している千里と晴美に承太郎は質問した。

「すまんが・・・徐倫達は大丈夫だと思いが彼女達は如何なる時でも自分のベストを出さないと死ぬ程の命を賭けた戦闘経験は豊富か？」

自分達はプロの殺し屋を相手するので、今までのような戦いとは違う為かつてエジプト道中で襲い掛かってきた刺客達の戦いのような戦いは豊富なかと承太郎は聞いた。その質問に千里は何やら興奮気味な状態で答えた。

「御心配なく。私達は学校の特別任務でそういうやり取りは慣れています。特に、可符香ちゃんや先生と共に『計画』を取り仕切っている為、暗殺、資金調達、このようなイレギュラーな事態の対処の思案なんて、お茶の子歳々ですよ。」

へ組のスタンド使いは大体学校側の任務でそういう血生臭いことはある程度してい

る千里はと答える。

しかし、何だが千里が説明すると必要以上に意味深に聞こえるのは気のせいだろうか……

承太郎はそんな事を思つて走りながら人指し指と親指で帽子のつばを押し、深く帽子を入れた。

「やれやれだぜ」

暫く承太郎達は廊下を走っていると前方に望が何やら辺りをキョロキョロしながら立ち尽くしていた。

「如何した望」

「……!! 承太郎さんですか……気を付けて下さい。敵が近くにいます」  
「何ッ!?!」

異様に辺りを気にしているので彼に聞いた承太郎。望の行動の理由は敵の襲撃を受けているからである。

それを聞いた三人は驚き、望と同じ行動をとる。一向に姿を見せないことから同化型と推測している承太郎に望が続けて話した。

「それと承太郎さん。どうやら敵に我々の情報が伝わっているようです。そのスタンドが『電気』に同化して偵察していたらしいのです」

「『電気』!? 今『電気』と言ったのか?」

「はい、そうですが……最終的にあのコンセントの中に逃げ込みました」  
「なるほど……」

望の今の発言によって千里と晴美は不思議そうにそのコンセントを見ている中、承太郎はある確信を持って、周りの3人、否4人に伝えた。

「君達、コンセントの様な電気が通っている所の近くに近付くな。スタンドに引きずり込まれて死ぬぞ」

「承太郎さん。そのスタンドの事を知っているんですか？」

「ああ知っているぜ……二度と会いたくはなかったんだがな……」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

承太郎に忠告されて、襲撃しているスタンドの事を知っているのかを晴美は聞いた。

そして、承太郎はそれを肯定し、帽子のつばを軽く押し付けヤクザも恐れおのく程の眼光を飛ばした。

「覚悟はいいか？顔面の形がぐちゃぐちゃになって誰だか分かんなくなる位殴られるよ  
う……ええ、『音石』」

承太郎が『音石』と言った途端、廊下の蛍光灯の1つから電気が異常に漏電して、そ

こからパキケファロサウルスの様な頭と尾を持った人型のスタンドが出てきた。そいつがこの敵の、おとしあきら“音石明”のスタンドのヴィジョンだ!!

『まさかここにあんたがいるとは思っていなかったんだよ、承太郎……さん』

この敵の名は“音石明”。スタンドは電気に同化する“レッド・ホット・チリ・ペッパー”。ウルトラスーパーギタリストの男だ。

13年前に杜王町で承太郎とそこの住人のスタンド使いと一悶着あり、長い間刑務所に入れられたスタンド使いだ。

「久しいな……お前……13年前のことまさか忘れた訳ではないだろうな……」  
『ち……違うんだよ！俺はアイツに雇われたが、俺は何もしらねエー……ッ!! 知らされてねえんだアアアア!!』

承太郎の嚇しに怯える“チリ・ペッパー”。その約束、「今度スタンドで悪事したら、徹底的に叩きのめす」ということを音石もちゃんと覚えていた。

しかし、怯えるが、戦う意志はあるらしい。“チリ・ペッパー”は再び蛍光灯の中に

戻り、承太郎達の周りのケーブルを通って疾走し始めた。

『まあ・・・いい、承太郎。此処で会ったのも何かの縁だなあ。本当はやりたくはなかったが、しょうがねえ。テメエも此処で死ね!!』

「くっ・・・至る所から奴の声が聞こえるんですけど・・・」

「奴の速度は光速、遅くて音速だ。私の『スタープラチナ・ザ・ワールド』を使用しなければ流石に捕らえられない」

音石のスタンドのスピードは音速を軽く超えるため、至る所から声が聞こえてきて、不安になる晴美だが、承太郎はそんな彼女を励まし、気合いを入れさせた。

「神経を尖らせろ。少しでも奴の姿を見たら、透かさず私に言うんだ」

「了解!!」

「チリ・ペツパー」の移動速度にめげず、承太郎のアドバイスで全員、五感を日常時よりも使い、「チリ・ペツパー」が出てくる一瞬の隙も逃がさず、目を配っていた。

勝負は刹那よりも短い一瞬。全員が汗をかき、心臓の鼓動が異常に速くなる中、望の

頭上に位置する蛍光灯からひよつこりと「チリ・ペツパー」が出てきた。

「ククククク。誰も気付いてねエな。承太郎の「時止め」は厄介だが、発動するまで多少の時間は掛かる。それに杜王町の時と違ってここは大都会。誰も、承太郎も見た事が無い程のスピードは出せるに違いねえ。殺つてやるぞ。位置からして先ずは糸色望!! てめえからだツ!!」

承太郎達はまだ気付いておらず、望に狙いをつけていることを察知していない。そして、「チリ・ペツパー」は膨大な電力を吸い上げ、勢いよく飛び出した。

「……ツ!!望、上だツ!!上にいるぞツ!!」

『今更気付いてももうおせーんだよツ!!承太郎!!』

「チリ・ペツパー」が出て来たことで承太郎は反射的に察知したが、今の目も開けられないほど輝いている「チリ・ペツパー」の行動の方が如何せん速かった。

(まずい……間に合わない!)

「さあ、糸色望。このまま肩甲骨をブチ割ってサンマの開きのようにしてくたばりやがれッ!!」

望も「チリ・ペツパー」の方に向くがその時には奴の手刀が望の目先1メートル程の距離だった。

承太郎も千里も晴美も反応が遅れた為、あと一步のステップが足りなかった。  
0・1秒経ったら望が殺される。誰もがそう思った。

しかし、現実はそのなりに残酷ではなかった。

ガシイイツ

『・・・・・・・・・・』

『な・・・何ツ!!こ・・・こいつ何時の間にツ!!』

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
 ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
 ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
 ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

何と望のスタンド “ミニット・エンジェル” が “チリ・ペツパー” の手刀を左手で止めたのだ。誰もが驚愕した。 “ミニット・エンジェル” がそこまで素早く精密な動きが出来たことに。

否、それだけじゃない。望の一瞬もブレない強い精神もだ。

『先生に危害を加えさせない。それが “この私” の存在意義、デス』

ボギャギャアアアアアアアア

『うげえええええええ!!』 ゲキツ バキツ

“ミニット・エンジェル” に殴られ、スーパーボールのように “チリ・ペツパー” は

床を跳ね、壁に激突した。

その後、突然の一面で固まってしまった承太郎達は我に返り、望に寄っていった。

「大丈夫か？」

「ええ何とか・・・ 天使さん”がやってくれなかったら、今頃三途の川でしょうね」

「・・・??お前がやったんじゃねえのか？」

「いえ、実はという私のスタンドは自我を持っていません、よく勝手に行動する事があ  
るんですよ。今回はそれで助かった訳ですよ」

「なるほど。そういうことか・・・ 変わったスタンドだな」

つまりは、あの一瞬の反撃は望の意識下でやった訳ではなく、”ミニット・エンジエ  
ル”の自己判断によるものだったらしい。

とてもユニークなスタンドだと承太郎が思っている時、殴り飛ばされた”チリ・ペッ  
パー”が起き上がった。

『く・・・くそーーッ。ちつ、ここは一度、逃げるかあーーッ!!』バチバチバ  
チ



「お前等。何か忘れてねえか?ここが一体何処なのかを・・・」

今の承太郎の顔は何やら勝ち誇っているようなものだった。

「ちくしょう~~~~。あのスコッチって奴。ぶつ殺してやりてえ・・・だが、今は俺の所に戻すことだけを考えよう」

“チリ・ペツパー”は今、ケーブルを通り、承太郎達から逃走中。その時、承太郎の事を知らせてくれなかったスコッチに殺意を向けていた。ちやんと言ってくれていれば、何かしらの対策を考えてられた筈なので、こんな撤退を余儀なくされる事はなかった。

しかし、今は逃げる事に専念するようにした。余計な事は後で幾等でも考えられるからだ。







音石明  
布化されて一旦再起不能

場所は、承太郎達とは違う廊下。スコッチ・ウイスキーは慎重に行動していた。プロであるからどんな所でも敵地ならそういう行動をすると、肝に銘じているからだ。

（旦那らはいいとして、音石明。以前承太郎とやりやって、トラウマになつていと言っていたが、大丈夫だろうか。だが他に強いスタンド使いいなかったし、ああでもない

と、手伝ってくれないからなあ。後でゼツテエー怒られるだろうなあ)

そう思いながらスコッチは壁に寄り添って、進んでいると、後方から彼目掛けて換気扇の羽根が飛んできた。

スコッチはそれを即座に反応し、自身のスタンドでそれを真つ二つに切り裂いた。

彼のスタンドはかの暗殺ロボット映画の人型ロボットを連想させる姿をしていて、その堂々しきで周りが殺伐とした雰囲気醸し出している。

「くそ、どっから飛んできた」

彼がそう愚痴った時、また後方に、今度はナイフやフォークが大量に飛んできたが、それを一つ一つスタンドの鋭い指で切り裂き、全て防いだ。

『流石にこんなものでは倒せませんか・・・まあジワジワと攻めていきましょう』

少し息があがったスコッチに、スピーカーから霧の音が聞こえてきて、知らぬ間にモップやら何やらが宙に浮き始めた。その光景を見て、スコッチはある決断をする。

(ちっ、面倒だぜツ。こりや承太郎に辿り着くには、骨が折れる……。だからまずはヤツを殺る、"コモリキリ"!!承太郎はその次でも構わん!!)

スコッチはそう決断した時、こそこそと行動するのは止め、障害物を薙ぎ払いながら疾走し始めた。

「必ずてめえを見つけ出し、八つ裂きにしてくれるツ!! "コモリキリ"!!」

スコッチが廊下を疾走する少し前、徐倫達の班はグラウンドにいた。体育の授業はやっておらず、彼等以外ひよっこ一人いなかった。

少し辺りを見渡していると、下足場からへ組の生徒が次々と遣つて来て徐倫達と合流した。

「来たな。ざつと6人の増援かあ」

「頼もしいじゃないのあんた達。助かるわ」

「いや、自分の命くらい自分で護らなければならぬし、何より学校を荒されるわけにはいかないのよ」

彼等の元に合流した生徒達に感心するアナスイと徐倫。それで照れる生徒も中にはいるが、そんなことは当然だからとあびるは徐倫たちにちゃんと説明した。

一通り集まった所で、金髪的女子生徒が発言した。

「一つ思うんだけど、侵入者って一体どんな奴なの？それが分からなかつたら意味はな  
いんだけど」

「どんな奴って・・・兎に角、怪しい奴は全員敵だツ!!」ドン!

「いや滅茶苦茶過ぎるわよ!!ゴミの中から金目の物を探しあげるみたいは何時間もかかるじゃないの。訴えるわよ!!」



教師としては派手過ぎる衣装に身を包んでいる為、敵だとすぐに分かった。つかつかと歩むその男にエルメエスが一番前に出て来て、大声で話した。

「おい！てめえ！分かつてることだが、敵でいいんだな!!あたしらにぶつ殺されるために姿を現した訳だなあ!!敬意を表するから名を名乗りな!!」

エルメエスは大声でその男に話しかけたが、その男は何も喋らない。そして、彼女達の前方2、3メートル程で立ち止まり口を開いた。

「『パルチエ……トミート』……と言う者だ。君達に殺されに来たのではない、殺しに来たのだよ」

「はっ！ほざけやがって！殺れるもんなら殺ってみろ!!」

「……では」

男、『パルチエ・トミート』は、自分の目的を言い、宣戦布告を告げる。エルメエスはその余裕のあるパルチエの仕草を見て、彼を挑発し、パルチエもそれにより異様な動作をする。



何やら話しかけてきた。

「そういえば、君……何て言ったつけ……名前……」

「ああ!? ふん。冥土の土産に教えてやるツ!! あたしは、  
“エルメエス・コストロ” だあ  
あッ!!」 ドン

「ほおお……それは有難い事だ」

彼の質問にエルメエスは彼に近付きながら答えた。エルメエスの名前を聞いたパールチエは何故かニヤついていた。

そして、事件は急に訪れた。

「むんぐ!? ……ぶぼはあああああああああああ

あ————

!!!」

「……!? なんだなんだ!?」

「エルメエス————ツ



ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

睨んだ先の彼の顔は途轍もなく、まるで人が失敗する所を見ているかのように嘲ていた。

「ようこそ・・・クイズショーへ・・・たんと・・・味わいなさい」

「貴

様――――

!!!」

パルチエの発言が遠まわしに自分の思っていた通りのことだったと徐倫は理解した。

そして、その怒りの叫びは、更に彼の顔を歪ませた。彼等の愚かさと痛快な反応で。

「さて、あと12人。次は誰が、この『クイズパレード』の餌食になるのかな?」



## 第拾伍話 侵入者を討て!! その③

各地で激戦が繰り広げられている訳だが、その中で望と承太郎組はというと音石明を捕えるべきなのだが、彼等はある人物を待っていた。

「望。本当にそいつがいれば簡単に音石<sup>ヤロ</sup>の居場所を見つける事ができるのか？」

「勿論です。彼女の『マシユマロウ・ジャステイス』さえ使えば、その人を容易く見つかります」

待たされている承太郎は本当に使えるのかどうか望に聞いてみると、ソイツは望のお墨付きのスタンド使いらしいが、一体どんな生徒だろうかと思っていると、何者かがこちらに走って来る音が響いてきた。暫くすると、後ろ髪を束ねて、左目の下に泣きボク口がある女子生徒がやって来た。

「すみません！すみません！遅れて来てしまつて本当にすみません！」

「いえいえ、謝らなくても大丈夫ですよ。『加賀さん』」



「その布は我々が捕えたスタンドなんですが、如何せん遠隔操作型なので本体の場所が分からないんです。ですから、あなたの能力で居場所を逆探知してくれませんか？」

「ええ!?!・・・分かりました。私のようなちっぽけなスタンドで良ければ・・・」  
「感謝します」

望の依頼を聞き入れ、おどおどと「チリ・ペツパー」の所まで進み、左肩にスタンドを出現させる。

そのプロペラに双眼鏡を垂れ下げた小さきスタンドを出した後、その双眼鏡から何かが発射される。

「あれはアンカーなんですよ、承太郎さん。愛ちゃんのスタンドの隠し銃から発射される針は当たると痛みは無いけど数キロ先まで感知できる優れものなんです」

「ほお・・・確かに便利だな・・・」

愛のスタンドの性能を得意気に話す晴美の話を聞いて、改めて愛を再評価する承太郎。勿論、評価は高い方だ。

「そして今、スタンドに引っ付けた訳ですけど、スタンドは本体から何らかの信号を送っていますからそれを辿ることで、逆探知が可能ということですよ」

晴美は更に追加の説明を言い終えた後、愛はくるつと向きを180度かえて、望達に告げた。

「先生。この人の居場所はこの先北東方面、1キロ先に位置しています」

「おお、そうですか！それでは行きましょう！」

愛によって音石の現在地がわれたので、早速向かおうとするが、その前に晴美が聞いてきた。

「先生。出発前に聞くんですけど。この布どうします？」

晴美が解いた内容は、布化した“チリ・ペツパー”を如何するかという事だ。持つて行くべきか、持つて行かないべきか、どちらを選ぶべきかだが、それは望の一言で決まった。

「いいでしょう・・・そのスタンドは・・・本体も布化しているから持つて来ても無意味でしょう・・・」。持つて行つても解除する時足搔かれるのも困りますし」

「確かに私も同感だな」

「承太郎さんに私も同感です」

望のその鶴の一声で周りの皆も納得し、結論付けた。そして、*“チリ・ペツパー”*を置き去りにして彼等は移動するのであった。

彼等が廊下をかけていて階段に差し掛かったとき、望は立ち止まり他の皆にある事を告げた。

「あの～～～～～～。言いだしつぺの私が言うのも何ですが、音石さんのトドメは貴方

達だけで行つて下さい」

「……!?どうした、何か心変わりすることでもあつたのか?」

その場を仕切っていた望が急に承太郎達だけで目的地へ行くべきだと言うので、承太郎は質問し、望は頭を縦に振る。

「いえ、心変わりというか……主戦力となる私と承太郎さんがここを離れるというのはどうかと思ひまして……布化の解除は別に私がそこにいなくてもいいので」

「なるほど……確かに戦力を大幅に削つてまでのことではないから理には適っているよ。戦力を引き過ぎて頭や仲間を失うことだけは避けなくてはならない。よかろう。私が許可する」

「有難う御座います」

戦いの基本中の基本である戦力のバランスを保つ為に学校に残ると決めた望に承太郎はそれを理解した上で許可を出した。

「それで貴女は如何するのですか、常月さん?」

承太郎に自分の身勝手な行動を許可してくれたため、お礼を言った後、望は現在マントになっているまといにどちらにつくかを聞いた。まといはただ黙っていたので、自分の方へつくと心の中で察した。

「それでは皆さん。解除の際は私に電話をしてきてください。幸運を祈ります」

「了解です！」

「ああ、そうだな。お互い」

各々返事をして、階段を下りた彼等。そして、望は徐倫達の所へ、他の皆は愛に連れられ音石の方へ向かった。

戦いは結果からするとまだ始まったばかりだった。

場所は戻って“チリ・ペツパー”が取り残された廊下。そこに隙間風が廊下中に流れ



リ・ペツパー”を俺の所に戻し、この忌々しい布化の能力を解かれるのを待ち、その直後に奇襲をかけるツ!!なんて良い考えなんだ~~~~。ンフフフフ”

”チリ・ペツパー”もとい音石明は途轍もない悪巧みをたくらみ、実行の為に移動し始めた。行き先は勿論自分の所だ。

『必死になるよオオ~~~~!!テメエもあのメガネ教師も全員まとめてノックアウトしてくれるぜエ~~~~!!』

音石と承太郎達の激突まであと約10分。

丁度承太郎達が学校の外に出た程の時、望は漸く徐倫達のいるグラウンドに到着した。何故そこまで遅かったかと敢えて理由をつけるとトイレ休憩を取っていたからだ。

というのはさておき、望の目前には倒れている仲間のエルメスを抱きかかえて、歯を食いしばって悔しそうな顔をしている徐倫と動揺している生徒や他の仲間、そして、いかにも敵と思わしき男が優越感に浸ったような顔をしながら立っているのが映っていた。

「どうしたのですか、徐倫さん」

「あつ……糸色先生。実は……」

今の状況を飲み込む為に望は徐倫に近付き、事の成り行きを話させた。そして、全てを理解した時、敵の男、パルチエ・トミートを睨んでスタンドを出した。

「おーとつとつと。待ちな……えっーと……あつ、糸色望。俺に危害を加えるつうなら止めるんだな」

「……??」

パルチエはスタンドを出現させた望に自身を攻撃するなど忠告した。ただその時、望の名前を言うとき、懐に隠していた手帳サイズのファイルを見ながら言ったのだが。

兎に角、そんな事を言うので望は？と思うが、パルチエはそれを丁寧に説明した。

「いいかテメエ等。俺のスタンドは『相手の言霊を奪う』能力だッ！言霊はモノに対して必ずある名の魂のことだ。名のないモノはもう『モノ』ではない、魂の抜かれたモノなぞもう『モノ』ではない!!だからこそそれが質問を答える事によって奪われれば、お前からその言葉がなくなる。仮にそれが人間の名ならそいつは生命体では無くなるッ!!所謂『死』だッ!!それに言霊は案外繊細な代物であ、俺がうっかり気絶したり、死んだりすると一生奪われた言霊は戻ってこないッ!!決してッ!!一生ッ!!」

パルチエの口から出て来た言葉によって周りの空気が凍てついた。

質問されれば死ぬッ!!誰も彼もがそう思った。だがそれと同時に全員がこうも思った。

「たとえあんたがどんなに強くても、必ずあんたには『弱点』がある筈よ。そうでしよう?」



てパルチエはぼつを悪くした。

（ちつ、あの野郎ども俺の「もう一つの弱点」に気付いたな……俺の声が聞こえなくなるぐらいの距離まで離れられたら、俺の質問の内容が聞き取れない。聞き取れない＝能力は発動しない）

歯を噛み締めて弱点が悟られたことに苛立ちを覚えるが、直にニヤつきながら前進した。

（まあ。別に離れるならこつちから近付けばいいだけなんだがな。ジワジワと四方八方から野良猫に囲まれる鼠の様に追い詰めて逃げ場を無くし言霊を奪い取ってやろう）

彼らの方へ歩み寄るパルチエ。それから離れる徐倫達。

一進一退の攻防の最中、望の携帯のバイブ音が鳴り始めた。それに気付いた望は懐から携帯を取り出し、誰からかを見る。

発信者が空条承太郎となっていたため、望は直に通話ボタンを押した。

「はい、もしもし。承太郎さんですか?」

《ああ、そうだ。今しがた音石の野郎の潜伏場所を発見したのでな。そろそろ布化の解除をして貰いたくてな》

場所は此処より北東一キロ程先に空き地。土管が積み上げられたのが中央にあり、昭和の子供達なら野球をするくらいの広さを持った空き地で、承太郎は望と通話していた。この時、愛以外の二人は少し息があがっていたが。

《それでその人はどの辺りにいるのですか?》

「野郎は土管の上で、寝惚けている」よ。幸い野郎が持っていたギターが重石になつてくれているおかげで面倒な事にはならなかつたがな」

望の質問に承太郎は電話越しだから見えないにもかかわらず音石のいる土管の方に親指で向ける。

承太郎の言った通り、布がエレキギターの下敷きになっている為、風で波立てるが飛んでいきはしなかつた。

「この人を倒せば一先ず私達の任務は一段落するということですね」

「ああそうだ」

「腕がなりますね」

「あああ………何だかすいません！すいません！」

音石（布）を見て、晴美は承太郎に自分達が課せられた任務の一つを終える事を探ね、千里は腕をポキポキ鳴らし、愛はこの緊迫した空気に耐え切れず、頭を下げまくっている。

いずれにせよ、布化した音石を見て彼等はゆっくりと進み始めた。戦いを終わらせるために音石の所に。

しかし、彼らは気づいてない。音石はまだ足掻いている事に。

「フツ、どうやらあのメガネ教師はいないようだなあ……だが、承太郎オ……。野郎……フツ！さっさとこい！フツ殺してやるツ!!」

じわじわと近づいている承太郎たちに音石は脈拍数を上げるが、すでに、チリ・ペツ

「パー」は音石から5メートル程離れた電線に潜んでいた。

「この距離からして全員を暗殺することは不可能に近い。だから音石は慎重に一人は殺せるポイントを探していた。」

「フー、フー、フー。落ち着け……落ち着くんだ……殺害チャンスは一度しかねえ。幸い奴等はオレのことは知らねえ。だから慎重に、そう慎重にだ……獲物を見てゆくりと忍び寄るトラのように慎重にだ……」

電機が漏電して気付かれないようにそつと適確なポイントを探っている「チリ・ペツパー」。だが、そんなことをしている間に承太郎たちは音石の目と鼻の先まで来ていた。

「さて、トドメだけ。音石。これから布化を解き、てめーに「スタープラチナ」を叩き込んでやる」

ドド

ドド

ドドドドドドドドドドドド

布の音石に指をさし、トドメの準備をする承太郎。しかし、布になつてゐるため、音石の表情は見えないが、彼は今、口角が「上がつてゐる」。

「何がトドメだツ!! 終わんのはてめえだよ承太郎! すでにベストな位置を見つけてんだよツ!! 後は待つだけなのよ~~~~ん」

音石はスタンドを承太郎の背後、右に135度の位置にとどまり、能力が解かれるのをじつと待つていた。

それから承太郎は携帯を取り出して、望に連絡した。

「よし、能力を解け!」

《了解しました!》

電話越しからの望の声が聞こえてから数秒後、音石に何かがみなぎってきた。それは肉体が元に戻つてきている証拠のものだ。布から人間に戻つてゐることだ。

それがこれから起こることの兆しだった。音石にとってこの感覚はバックドラフト現象のように内側に秘めていた闘志を爆発させた。

「これだツ!!これ待っていたんだツ!!勝負は一瞬!!スタンドがここにいるはずがないと油断している今がチャンスだツ!!」

肉体が元に戻る感覚を感じつつった次の瞬間、渾身の力を振り絞り承太郎たちに突撃した。

「・・・?!?ばかなツ!! “チリ・ペツパー” がなぜここにツ!!」  
「つて言ってる場合じゃないですよ!!」

なぜこんなに早く “チリ・ペツパー” が現れるか驚く承太郎だが、千里につっこまれる。つっこまれながらも彼らは反射的に音石を攻撃せず、その場から離れた。

たった一人、加賀愛を除けば・・・

「何をしているのだ!!かわすか何かしろッ!!」

「ひええ〜〜〜。と言われましても〜〜」

「・・・やれやれだぜ・・・」

承太郎は動かない愛に怒鳴ったが、愛はただおどおどしているだけだった。

じれったくなる承太郎だが、後方に下がっている最中かつスタンドの射程距離外のため彼女を助けることが至難だ。

そんなことを考えながら承太郎は“チリ・ペッパー”を見ると、案の定やつは承太郎や千里、晴美を狙わず、愛に向かっていった。

かといってここで今時を止めても今の状態ではもって数秒ほどしか止められないので、自分も巻き込まれる可能性はあった。

そんなことを承太郎が考えつく中でも、“チリ・ペッパー”の進撃は止むはずはなかった。そして、能力が完全に解けて、音石本人が起き上がった。

「クツクツクツクツク。やはり承太郎たちは避けられるかあ・・・。まあそれも承知の上だッ!!始めっから全員を殺せるとは思ってたねえ・・・。だがッ!!それでもッ!!一番弱い

テメエだけでもオオオオオオオオオオオ!! ブツ殺してやるウウウウウウウウウウウウ!!」

バリイバリイバチイバチイ————ツ

音石の腹の底から出す台詞で “チリ・ペツパー” に力がより入り、いかにも襲い掛かる体勢になった。

「キイヤアアアアアアアア————ツ!!!」

「まづいッ!! このままじゃあ……」

「殺されるッ!! 確実に殺されるッ!!」

そして、とうとう愛は恐怖のあまり腰を抜かしてしまい、悲鳴を上げながらうずくまってしまうた。

それを見て、承太郎は時を止めようとし、残りの二人は青ざめていた。

端から見れば、数秒のことだが、彼らには数十秒のやり取りと体は感じていた。だが、それも終焉の時を迎えた。

「・・・殺されるわ・・・愛ちゃんのスタンドに・・・」

晴美と千里の台詞は周りには聞こえはしなかったが、その通りのことが起こった。

承太郎が時を止めようとした瞬間、音石が愛を殺そうとした瞬間、愛の体からちらちら光る何かが飛んできた。そのため「チリ・ペツパー」は急遽攻撃をやめ、それをすべてはじいた。

はじいたなにかは軌道を反れて、地面やら壁やら家に小さい穴をあけさせた。と同時に「チリ・ペツパー」のどてつ腹に何かがぶつかりにきて、スピードが落ち、仰け反つ

てしまった。

その後音石は念のためにスタンドを自分のところまで戻して、あたりを見まわした。すると、何やら飛行機のエンジン音が聞こえ始めた。

それで音石が少し頭を上げると愛の上空5メートルぐらいの高さに双眼鏡を垂れ下げた中型のプロペラ戦闘機が停滞していた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「何なんだあれは!?!木津!藤吉!!あれは一体!?!」

「あれは愛ちゃん用最悪のスタンド、マシユマロウ・ジャステイス『ACT2』!!」  
「あれが発現したらもうどうにもできません。離れましょう承太郎さん。巻き込まれてしまいます」

突如現れた戦闘機に承太郎は戸惑うが、千里と晴美の言うとおりに空き地から離れて、その場所でも以下のように説明された。

彼女のスタンド、『ACT2』は彼女自身に身の危険を感じた時、自動的に発現するスタンドである。そしてそれは自動操縦のタイプのスタンドのため愛自身には制御できない。そして、敵とみなしたものを見境なく襲い、死亡するまで止まらないスタンドでもある。

この能力により、望によつて手厚く監理され、へ組の危険人物「ワースト5」の二番目に属している（因みに一番目は勿論千里だが・・・）。

承太郎に『ACT2』のことを説明しているうちに『ACT2』は音石のほうに向かい、両翼に搭載されている計6個の口径30ミリの機関銃を一齐にぶっぱなした。

音石はスタンドで銃弾を全弾はじいて、『ACT2』を殴りつけて、地面に叩きつけた。叩きつけられた『ACT2』は猛烈な破壊音を発生させながら壊れてしまった。

「ブハハハハハ。んだよ、簡単にぶっ壊れやがったぞ。もれいスタンドだなッ!!ブハハ・・・」

『ACT2』を叩きつけて勝利の優悦に浸っている音石。だが、先程地の文で書かれたこ

とを忘れてはいけない。確信した勝利に音石が笑っているとその残骸は消え、愛の体から『ACT2』が再び飛び出した。

「……って何!? また出てきやがったッ!!」

さすがの音石はびっくり仰天するが、それでもまたスタンドを壊した。するとまた出てきたので壊した。出てきて壊した。出て、壊して、出て、壊して……何十回も同じことを繰り返させられていった。

しかし、徐々に「チリ・ペツパー」の動きが鈍くなった。それは動力源となる電気が失われているからだ。こうも立て続けに襲われては充電できるはずがない。

「ま……まずい。このままじゃあ……確実にッ!! だろッ!! この俺がッ!! こんなスタンドごときにイイイ……ッ!!」

どんどんパワーダウンしているスタンドで必死に抗うがとうとう『ACT2』を破壊できなくなり、追いつめられてしまった音石。

そして、彼にはついに裁きの時が訪れた。



「ああー……。すいません。すいません」

「フツ。加賀君が誤ることはないのだよ。それにしても全くこいつは悪運が強いな」

「殺害するだけでなく、戦闘不能でもいいんですか。これは報告したほうがいいですね」

倒れた音石を見て、愛は謝罪し、承太郎は音石自身の悪運強さにあきれ、千里はメモ帳を取り出し、『ACT2』について書き留めた。

そして、晴美は承太郎に音石を指さしながら話し始めた。

「承太郎さん。この人どうするんですか？この後」

「そうだな。まあ後はSPW財団にでも任せるさ。そんなことより早く学校へ戻ったほうがいい。あっちもあっちで戦いが激しくなっているかもしれない。急ぐぞ」

つかの間の休息もなく、彼らは学校へ戻りに行った。彼の言うとおり、学校では更に戦いが激化しようとしていた。

音石 明……完全敗北。再起不能。

To Be Continued . . . ⇒

次回予告

パルチエ 『質問に答えるということは、必ずしも . . .』

徐倫 『三人一遍にツ!!』

パルチエ 『その答えで間違いないという確固たる自信があるのだよ!』

可符香 『良いでしょう。私が相手をしましょう』

パルチエ 『又又ウ . . . かかってこい小娘がアーーーーーツ!!!』

可符香 『あなたには「星」になっていただきましょう』

『第拾六話 侵入者を討て!! その④』

## 第拾六話 侵入者を討て!!その④

「さてと、これで眼前の敵に集中できるといふことですね」

承太郎との通話で布化の能力を解除させた後、望は敵のパルチエを睨みつけた。

音石の事は彼等に任せたので、余計な錘が外れてこちらの現状を打破できるからだ。

一方睨まれているパルチエはそんなことを関係なく、お構いなく彼等との距離を縮めていった。

状況は依然として膠着状態。一進一退を続けていったが、パルチエはある程度離れている望に聞こえる位の大ききさで話した。

「おいッ！その！てめえ、何つうんだっただけ？」

パルチエの質問をバツチリ聞き取れた望だが、答えようとは更々なかつた。

理由は簡単。答えてしまえば言霊を奪われるなら、逆に答えなければいいと思ったか

らだ。

「おい聞いてんのかあ!? 『答えろ』 って言ってるんだろがッ!! 早くしろッ!!」

望を焦らそうとするパルチエだが、望は断固して答えない。暫くこのやり取りを続けると、パルチエは肩を竦めだした。

「はあ……てめえ……一応てめえの身の事を案じていたのに、いた仕方ないなあ……」

パルチエは何やらブツブツと言っていたので、周囲の人達は聞き取れなかった。その後、望の携帯が鳴り出した。普通ならそこで携帯を取り出すところだが、望はしなかった。

何故なら………望とマントから言霊が出てきたからだッ!!

ドジャアアアアアアアアアアアン

「なッ!! 何イイイツ!? 答えなくても奪われるだとオオオオオ!!」

「それに……マントになっていた私もッ!?!」

ドサツツ

二人の言霊は「グイズパレード」の壺の中に吸い込まれ、それと同時に二人は白目を向いて倒れてしまった。これを見た彼等は血の気が引いた。

「う……嘘よ……先生がこんな……呆気なく」

「ソフフフフ。これで厄介な奴は倒せたかな」

奈美は自分達の担任がこうもあっさりと倒されてしまった事に戸惑う中で、パルチエは次なる標的を見つけた。

「よおし。それじゃあそのチビガキと金髪と女。名前……何つうんだ?」

「……!!?」

パルチエの次なる標的はエンポリオとカエレと奈美だった。三人がその事に気付くとある行動をとった。

それは、『逃げる事』だったツ!!途端に彼等は踵を返して走り去さろうとした。



ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「これで・・・分かったか？伊達に幹部を勤めてんじやねえ。それなりの実力と自信があるからこそ俺は組織で幹部を勤めてんだ・・・。貴様等は俺の“クイズパレード”の前では何もかもが無力だッ・・・」

「組織イ？私等の命を狙う輩が組織単位なのか」

「おっと、お喋りが過ぎたな・・・まあ知ったところで如何もならねえがな」

パルチエが言った「組織」という言葉に徐倫が反応し、有力な情報を得た。このことに気付いたパルチエは露見してしまったにも拘らず冷静さを保ち、余裕の態度を見せた。

「何事も冷静が肝心だあ。物事を思案するときも熟考するときも冷や汗掻いて慌ててやるよりは余計な考えを捨てて頭ん中を整頓させた方が十中八九・・・良い」

常に自分が冷静な態度を示す事は、より相手を術中に嵌めさせ、術策の通りに動かす為のミーンズだという意味で解釈出来るパルチエの人生哲学。そして彼は、そのことを

述べた後、次の狩りを始めた。

「そ〜〜れ〜〜では〜〜と、その包帯女。お前の名前は一体なんだ?と問う」

「・・・!!」

「あ・・・びる・・・」

次なる獲物、小節あびるに目を付けた。パルチエは彼女を指名する。それで、徐倫は指名されたあびるを心配して、彼女を見ると、あびるは離れるどころか、怯える様子もなかった。

只彼女は前へ進んでいった。一步一步、パルチエに近付く為に。

「フッフッフ。まあそうだろうな。逃げも隠れもできねえんだから間違っつてはいねえよ。後は“答える”だけだぜ君イ」

あびるは彼との差を3メートル程まで開けた後、残り少ない時間で熟考する。

（・・・くっ、どうする。どうやって“答える”?どうやって抗う?どうやって・・・ダ

メ・・・やはり私の名前を言うしか・・・でも、それだと私が・・・いや、結局同じかあ」  
「お~~~~い・・・そろそろ時間だぜ~~~~」

あびるは何とかじつくりと抗う手段を考えようとするが、それといった良い案が出てこない。時間だけが流れていく。パルチエが制限時間近だと伝えてくるので、あびるは万策尽きて素直に自分の名前を答えようと大きく息を吸った。

その時、声を発するより前にあびるは咄嗟にある推測が脳裏に浮かんだ。そのことが脳全体に循環したとき、発する言葉を変更した。

「ごとうゆうこ後藤邑子・・・」

辺りにいた生き残り達は揃ってきよとんとした顔をした。何故なら彼女は「嘘をついた」からである。

「ば・・・馬鹿野郎オ!!」  
「中の人」の名前を言う奴がいるかあ!!結果として死んだだろうがあああ!!!」

「いやアナスイ。『中の人』って何?ってか、そっちじゃあないでしょう!」

アナスイの一部の人しか分からないボケを徐倫が捌いたあと、この事について深く考え始めた。

(あびるはさつき嘘をついた。確かに『嘘をつくな』とは奴自身の口から言っただけではなかったが、奴のスタンドの実体は完全に掴めちゃいないのに・・・何故だ?自分を捨て石にするつもりなのか?)

あびるの行動に疑問に思う徐倫だが、そうこうしている束の間にその勝負の勝敗が確立した。

「ぼげろろろーッ!!」

「あびるッ!!そんな、嘘を言っつてはいけないのか!」

勝利者はパルチエ・トミート。敗北者は小節あびる。敗れたあびるは口から言霊を取られて地に伏せてしまった。徐倫が「グイズパレード」の脅威を目の当たりにしたとき、パルチエは徐倫の台詞に一部訂正をかけた。

「違うさ徐倫。別に嘘はついても構わない。只、人が質問に答えるという事は、必ずしもその答えで間違えないという確固たる自信があるのだよ!さっきの娘は自分の名前を答えなければならぬと自覚していたが、ぎりぎりであの策を思い浮かんだのだろう。だが、いくら嘘をついたところで、一度でもこうだと自覚すれば、意味はないのだよ!」

あびるの敗因は気付くのが遅かったことだった。たった一つの単純なミスが自分の首を絞める羽目になったのだ。

しかし、そこで立ち止まる訳にはいけない。彼女の屍を踏み台にして前に進まねばならないツと思つている人物——ナルシソ・アナスイが颯爽と前に現れた。

「徐倫……何も言うな……何もだ。仮に俺が負けたとしても決して君は激情してはならない。考えなしで勝てる相手ではないからな」

アナスイは後ろに振り返り徐倫に忠告をしたあと、聳え立つパルチエという名の壁へ向かうのだった。

「ほほお……自ら名乗り出てくるなんて……大した玉を持つているじゃねえか。その玉に免じてちよつと質問を変えてみるか」

アナスイの根性を見込んでパルチエは質問を変え始めるようだ。

一体どんな質問が飛んでくるかとアナスイは息を吞んで待った。そしてパルチエの口から発射された質問が辺りに響き渡った。

「おい。ほんのちよつとでいいからファイルを見せてくれないかあ?」

アナスイや周りにいた人が聞いた質問は何とも不思議なものだった。何か意味があるのかとアナスイは思うが、一先ず答える事にした。

「ああいいぜ。好きにしなよ」

「サンキュー」

アナスイが許可した事で早速ファイルをペラペラめくってパルチエは眺め始めた。

そのとき口からさつき言った言葉が出ていって「グイズパレード」の壺の中に入った。

(ちつ、こんな事でも取られるのかよ)

とアナスイが思っているとパルチエはものの五秒程でファイルをパタンと閉じた。

やはりパルチエには何らかの狙いがあるとみなし、アナスイが問おうとしたが、それはパルチエの新たな質問によって遮られた。

「ところでもう一つ訊ねてもいいか。実はもう喉がカラカラなんだよ。だから水を飲むことを許可するか？それともしないのか？先に言っとくが、質問に適する答えなければならぬからお前は『許可する、しない』しか答えられないぞ。別に全く意味が違う事を言ってもいいが3回までだ。それ以上は命の保障はない」

「ふん。別に許可してもいいぞ」

「サンキュー」ゴクゴクゴク

又しても少し変な質問を繰り返してくるが、アナスイはその質問に対して肯定し、パルチエに水を飲ませてあげた。その後、又してもアナスイの言葉の言霊が取られる中、パルチエは懐からペットボトルを取り出し、豪快に飲み、ボトルの中の水が空になるまで飲んだ。

それを飲み干したあと、プハーと息を吐き、パルチエは満足そうな顔をして、急に言い出した。

「それでだアナスイ。水を飲ませてくれた礼に今まで奪った言霊を返して、お前等を助けようではないか。お前はそれを許可するか？それともしないのか？」

それを聴いた瞬間、誰もが仰天した。こいつは一体何を言っているのかと。

普通人質となった人達を返す強盗はいるだろうか。返すとしても何らかの罠があるに違いない。しかし、答えなければ死んでしまうので、アナスイは答えるしか出来なかった。

アナスイは自分を捨て身の特攻をするかの如く発言した。

「『ひよは』する!」

「あれっ? 『ひよは』する・・・『ひよは』するッ!・・・『びよば』ずるッ! 『びよば』ずるッ!! 『びよば』ずる————ッ!!!」

アナスイは『許可する』と言いたいが、何故かそれが言えない。周りには不思議に思う

中、アナスイは汗をにじませて叫ぶのだった。

「おいおいアナスイ。何言ってるんだあ？もう一度言うぜ。お前は言霊を返しててめえ等を助けてやろうか？それともいいののか？」

「ういいういです……えっ!？」

質問を繰り返されたが、尚もアナスイは上手く答えられない。タイムリミットはもう直なのに。

（何故だ！何故俺はこんなに上手く話せるのに『許可』と『良い』が喋れねえんだ!?!）  
「フフフ。時間オーバーだッ。ナルシソ・アナスイ」

パルチエがそういった後、アナスイの口から言霊が出てきてしまつて又もや彼に奪われてしまった。

「ふはははは。偶にはこんな質問をしてスリルを味わうのもいいな」

「何故……こんな……」

「聞きたいか徐倫?単純な話さ。2つの質問で『許可する』と『いい』の言葉を奪ったことで、あいつの中からその2つを消したんだよ。それによつて奴は2つの言葉が言えなくて俺の質問に答えることができなくなつたつて訳さ」

徐倫はアナスイが敗れたことに落胆させられ、それに加えて、パルチエがダメ押しにもう一撃をくらわされ、深い絶望感が募つた。

徐倫だけではない、周りの生き残つている子達も希望の光を失つていた。

「駄目だ・・・勝てないッ。こいつをどうやって倒せばいいの?『質問され』れば終わリだッ!かといつて奴を倒せば奪われた糸色先生、あびる、アナスイ達の魂が死んでしまふ・・・如何すれば・・・」

誰もが一寸先はどんな光も届かない闇にいる状態だつた。この場で動くものはいなかつた。一步踏み出せば落とし穴があるかも知れない。躓いて転ぶかもしれない。

そんな視えない恐怖に怯える徐倫立ちの中で一人が一步を歩み始めた。

「皆さん。希望を捨ててはいけません!気をしっかり持つてください!!」

徐倫たちの耳に聞こえた凛々しく慈愛に満ちて安心する声で語る者がいた。徐倫は今にも崩壊しそうな目でその人物を見た。

その人物は独特な耳のように大きい2つの団子して、左の前髪に十字型のバレッタをした少女、風浦可符香がそこにいた。

ドーーーーー

「例え照らしてくれる光が無いなら貴方達自身が光となれば、自ずと道は照らされます。足下だって見えます」

「可符香・・・あんた」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

可符香の演説は今にも衰亡しそうな彼、彼女達に希望の光を照らし、奮起させた。その光景を見て、さつきまでニヤけながら眺めていたパルチェは眼光を鋭くし始めた。

「風浦可符香・・・てめえを真っ先に葬る必要があるようだなあ、こりやあ」

「はなっからあなたとはやりやうつもりでしたよ。今の私は情報通りの電波さんとは訳が違います。私の精神状態は今ツ!!極限状態に達しています。私の師と級友、そして仲間を無残に殺した上、残された者達を失意のドン底に落としたことで怒りがグツグツと煮えたぎってますからねえ!!そして!!私の口から申し上げるのは抵抗がありますが、彼方を絶望の二番底、三番底に叩き落ちて地獄に行ってもらいますツ!!パルチェ・トミートさん!!」バーーーーー

可符香の熱弁こもった宣戦布告をする瞬間、彼女の背後から人型のスタンドが出現した。そのスタンドは拳の第三関節に石がはまっており、太腿や腕や頭にパワースーツのようなものを装着しているスタンドだった。

そのスタンドをも出しての宣戦布告を可符香が申し上げてパルチェは額に血管を浮き出させた。

「又ヌウ・・・この俺をコケにしやがってえーーーー。いいだろうツ!!かかってこい小娘がアーーーーーッ!!その生意気入った態度に敬意を表してーっだけ

質問させてやるよッ!!!」

可符香の態度にプツンしてしまったパルチエは彼女に一度だけ自分に質問するチャンスを与えてくれた。そして彼女は少し考えた後、彼に質問した。

「私のスタンドは『デッド・ライندگانス・デス』と名づけているんですよ。近距離パワー型で能力は『岩石を自在に操れる』能力なんです。そしてその距離は4〜50メートル……」

「おい。質問って意味知ってつか？それってただの雑談じゃねえか。常識あんのかこの野郎!」

可符香の『質問』はまったく質問と言えるものではないただの自分のスタンドの説明のことなのでプツンしているのにパルチエは更にプツンしかけたのだ。

周りもそうだ。きっと彼女は何やら頓知の効いた質問を繰り返すと思いきや全く違うものになっているので気が抜けてしまった。

しかし、周囲の温度とは違う可符香はニコニコ（悪い意味で）していた。

「これから彼方を殺すのに何の情報も与えないのは不公平ですよ。だから教えてあげたんです。それ以外で彼方に伝える情報なんてありませんよ」

「プツツ~~~~~ン。頭にきたぞお!! 嘗めやがつて! そんなに死にたいなら直に殺してやるツ!! てめえの名前を答えろオオ!! この小娘がああああ!!」

可符香の挑発に彼は二度目のプツツンをしてしまい、最早さつきまでの冷静な態度は存在していなかった。

彼が可符香に名前について質問したあと、彼女はなんびとたりとも表情を変えずに返答した。

「風浦可符香」

「何ツ!? 何言つてんだあああああああ!! 可符香あああああああ!!」



ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

パルチエは最初幻聴だと思った。しかし、その生々しいドスの効いた言葉は存在感が有り触れていた。

その天からの声のような音が彼の脳を響くごとに彼は冷や汗を掻き始めた。

(何故・・・だ。何故・・・何故なんだ。何ゆえにこんな事が起きているんだ!?)

声が聞こえた方へパルチエは向くと、風浦可符香の姿は、さっきまでとは何も変わらず、凛々しく聳え立っていた。

「あり得ないツ!!合っている筈だツ!!お前の名前はあれで適<sup>あ</sup>っている筈だツ!!」

「ええそうですよ。半分正解です。ですがその名前は〔P・N〕なんですよ。要するに偽名です。私の本名ではありません」

今になって分かった新事実がパルチエの調子を崩していった。そのことで焦ったパルチエはファイルを取り出し、ページを捲りながら考えた。

「偽名だとお!? 嘗めやがってツ!! 徐倫達は偽名で呼んでいたのかあ? くそッ! . . . おつ、あつたぞ。ククク、丸井円まるいまどかかあ . . . 間違いないな . . .」

ファイルのページを捲つて探りついたあるページに可符香と同じ姿の写真があつた。その事に確信したパルチエは再度質問した。

「小娘え . . . お前の名前は何だ? 本名だぞ、本名を言えよ!!」

「ええー。本名!」

笑顔が崩れて不気味笑いになっているパルチエは再度同じ質問をすると、可符香は少し嫌がりながらも答えた。

「丸井円だけど . . . . . ウプツ . . .」

答えた事で再び言霊を奪われた可符香。しかし、今度はやけに苦しそうだった。

(やった！勝った！バカめツ！今度こそ俺の勝ち・・・「ゲホゲホ。うええ・・・噎せちやつたじゃないですかあ。それで？次は？」・・・!?)

噎せて咳き込む可符香を尻目にパルチエの頭の中は暴風雨の如く荒れていた。

(何故だ・・・何で・・・もうわからねえ・・・何がどうなっているのか・・・ウケ、ウケコ、ウケケケケ。ウケハハホホハヒヒホホハ)

訳が分からなくなり、珍語を頭の中で駆け巡ったパルチエを可符香は細い目で見るようになった。

「ネタが無くなってしまったんですか？それじゃあ私の番ですよ。先ず彼方の名前は何なのか？いくつなのか？誕生日は？生まれは？身長は？体重は？血液型は？・・・」  
 「いや待って待って。質問は1つずつだ。いいか、1つずつだ。俺はパルチエ・トミート、25歳独身、生まれはアメリカのノースカロライナ州、5月26日に生まれ、身長は173cm、体重は63キロでA型の男だッ！」

パルチエが質問しなくなったので可符香がマシンガンの如く質問を流していったが、彼は途中で遮り、律儀に答えいった。そして、彼女はフツと顔の影を濃くしてもう一つ聞いた。

「ねえ、パルチエさん。『解除』って彼方が言えば、能力は解けるの?」

「ああ!? 決まってるだろう。『解除』って言ったら・・・ハッ!!」

パルチエは可符香の質問に答えたとき、実は頭に血が上っていた。散々自分を小馬鹿にする態度が気に入らないのと彼女の名前を答えさせても彼女の魂を奪うことが出来なかったからだ。

だが、ふと冷静になって自分が言ったことを瞬時に思い出すと、パルチエは冷や汗が止まらなかった。何故なら言っただけではない。『あれ』を言ったからだ。

『禁句』。それを言ってしまうえば、能力が解き放たれて奪った言霊があるべき場所へ還ってしまう。そのことが脳裏に映ったときに『クイズパレード』を見ると、今まで多くの言霊を閉じ込めた壺の蓋がガタガタと鳴り出し、勢いよく蓋が吹っ飛び中の言霊が飛び出してきた。

「言つてないツ!!俺は一言も『禁句』を言っていないいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

「認めてもらつてよかつたですよ。彼方自身が禁句を言つてしまったことを・・・」

壺の中から今まで奪つてきた言霊が噴出しているのを見ながら、パルチエは自分が禁句を言つてしまったことを否定するが、逆にこの否定が禁句を言つてしまったことを肯定していることに当の本人は氣付いてはいない。

無事パルチエに禁句を言わせることに成功して安堵する可符香は言霊が本来の持ち主の元へ戻り、魂の言霊が戻つて息を吹き返す仲間を確認する。

「ん??戻つてきたのですか、私達は・・・」

「うぐおおお・・・気分が悪いぜ・・・」

「望ツ!!エルメエスツ!!甦つたツ!!全員甦つたよおおお!!」

氣が付いた望とエルメエス達に徐倫達が駆け寄つた。正に絵になる光景が広がる中、パルチエはずるずると近付いてきた。

「ぐううう．．．よくも．．．しかし、次こそは．．．「彼方に次はありませんよ」．．．ッ  
!! 「ボカアアアン」グゲバアア!!」ドシヤアア

近付くパルチエだが、突然地面から出て来た「デッド・ラインダンス・デス」に殴り飛ばされた。そして痛みに耐えながら体を起こそうとするパルチエに可符香が近付いてきた。

「あなたには『星』になっていただきましょう。燦然と輝く『一番星』にね」

「ぎゃ．．．ぎゃぎゃ」

可符香がパルチエの処刑を執行しようとするが、パルチエはそれに待ったをかけた。そして、かすれた声で彼女に尋ねた。

「風浦可符香。いや丸井円か？どっちでもいいが．．．本当にお前の名前は何なんだ？頼む。能力は使用しないから．．．答えてくれッ。お前は一体何者なんだ!?!何者なんだあああああ!!!」

彼の必死の叫びに彼女の心が響いたのかは分からないが、彼女は包み隠さず答えた。  
だが、その瞳は黒くくすんでいたが……。

「あかぎあん赤木杏だよ……」

ドタタタタタタタタタタツ

パルチエはその名前を聞いた瞬間、尻餅をつき、後方に下がった。そして、瞳孔を思

いつきり開けて可符香を見た。

「ばかな．．．そんな．．．そんなことがある筈が無いッ!! その名前は．．．その名前は!!」

パルチエが何故挙動不審になっているのか徐倫やアナスイ達は分からなかったが、それ以外は顔の影を濃くして沈黙していた。

「俺は3年前まで、組織に入るまでは警察官として働いていた。だが、俺の仕事は現場で手がかりを探す捜査官や死体から何かを検出する検査官といったものではなく、ただ単に死体を保管するだとか、死体の遺族に連絡するだけのクソ役にも立たねえ無意味な仕事だが、頑張つて続けていけば、部署の移動もあるだろうと思つていたが叶わず辞めたのさ。だが．．．5年前、丁度日本で仕事をしている時に、俺は運び込まれた死体の中に「赤木杏」という名を見たことがある。同姓同名かあ？もし違うなら、どうして5年も前に死んだ奴が出てき．．．待てよ。まさか．．．」

パルチエが自分の過去について語つていた時に、突如脳裏にある推測が浮かび上がった。

た。そして、懐からファイルを取り出すと、ページを捲りだした。

そして、あるページでパルチエは止めると、急に気をおかしくしたらしく、発狂しました。

「エハハハハハハ．．．そうかつ！そういうことかつ！何故2のへ組に執着し、居座り続けるかが今になってわかつたぜツ!!クハハハハハハ．．．てめえ等．．．いざれお前等のせいで、全世界が激しくうねりだすツ!!その時代で、平和に生きれるとは思うなよツ!!エヴァアアアハハハハハハハハハハツ!!」

「おいッ!!てめえ、一体何のことを言つてやがるツ!？」

「エア!?!知らねえのか徐倫?こいつ等はただ単に学園ライフを送つてんじやなくて、たいな「ブギチョツ!!」．．．イウエエツ!!」

パルチエが言う事の意味を問いただそうとする徐倫だが、完全に彼が言う前に、可符香が彼をスタンド能力で地面を拳状に浮き出させ、彼を空中に巻き上げた。

「申し訳ございませんが、彼方にこれ以上漏洩される事は許しません。何も知らないチンピラ如きに何が分かるかーーーーーーッ!!!」

眉をピクピクさせ、激しく憤怒している可符香は、その場の地面を殴りつけてパルチエを見上げた。

「冥土迷鳥” ツ!!」

彼女がそう叫んだ時、地面が割れ、崩壊していき、その断片が彼に向かって一斉に突撃しに行った。

「ウギグゲゲツ!!!」

地面の断片に彼は纏わり付かれてしまい、終いにはそれを球体の形に形成させて閉じ込められてしまった。そして、可符香は手を満面なく開いた右腕をそつと振り上げたと思ふと、すぐさまぎゅつと閉じた。

バキバキ バキバキ バキバキ バキバキ バキバキ バキバキ バキバキ

「ぎゃ あ

あー………ツ!!」ドブグシャアアアアアア

バキ バキバキ バキバキ バキバキ バキ バキバキ バキ

その後、意志の集合体の球体は瞬く間に収縮し、パルチエの囂々とそいつの何かが砕け散る音と破裂する音が響いた後、石と石のわずかなスキマから鮮血が迸る。

「最低なんだったけど、八面六臂な人には変わらない。だから『パルチエの墓屋』と名づけておきましょう」

可符香はその塊を見て、独り言の様に呟いた後、その墓を後にして徐倫の所に向かい、少し頭を下げた。

「すいません……でも、そうせざるを得なかったんです。私は……」

「別に怒ってはいないけどらしくないわね。一体何があるの?」

「それは……ハッ!死にやがったぜ。あの野郎……ッ!!」

一戦終わって気が落ちている時に、全く聞き慣れない声が聞こえた。

彼等は声が出た方向、上り台の方へ見ると見た目からして20代のいかした女性が一  
人、否、それだけではない、上から降りてきた大型の鳥がそこにいた。

「本当だわい。幹部になって日が浅い青二才が!!あたいを嘗めるんじゃないわいッ!!」

降り立った鳥は流暢に人語を、否よく見たら嘴の中に女の顔が見える。

まあともかく彼女は死んだ。パルチエに文句を垂れる。

「結局の所、詰めが甘かったのよあいつは……でも私等は違うわよ。泣こうが喚こうが  
ためえ等をぶつ殺す!!」

「そうわい!その体をズタズタにして猛禽類のエサにしてやるわいッ!!」

突如現れた二人の女のスタンド使い。校庭での戦いは更にヒートアップ。

今、一世一代のサバイバルバトルが始まろうとしていた。

パルチエ・トミートー スタンド名：クイズパレードー

死亡。

To Be Continued . . . ⇒

ープロファイラー

・パルチエ・トミートー 25歳。独身。男性。

アメリカ、ノースカロライナ州、5月26日生まれ。A型。

職業はギャング。元警察官。

性格は慇懃無礼。冷静沈着。パニくるとボロが出る。

スタンド名：クイズパレード

【破壊力：なし スピード：なし 射程距離：C 持続力：A 精密動作性：E 成長性：

E】

能力：質問に答えた時の言葉を奪う スタイル：近距離操作型 分類：人型

## 次回予告

『幹部トップ5の力を思い知れわいッ!!』

『触れたもの全て・・・』

エルメエス 『何ーーーーッ!!! 鳩があーーーーッ!!!』

『滅殺する霧・・・』

アナスイ 『やめろッ! 無茶にも程があるッ!!』

『私の霧に敵うものなぞ無いッ!!』

エンポリオ 『あんたは人を見かけで判断しすぎだッ!』

『このビチグソがアアーーーーッ!!!』

『第拾七話 侵入者を討て!! その⑤』

## 第拾七話 侵入者を討て!!その⑤

強敵パルチエを撃破した直後に現れた二人の女スタンド使い。一人は見た目20代後半でスタイルはよく、細い体をしているのにジャージを着て、上り台に腰をかけている女性と、スタンドと思われる怪鳥の口から顔を出している女性。

その二人が先程勝利に歓喜していた徐倫や望たちに向かつて鋭い眼光を向ける。

「ずいぶんとブツ飛んだ予告を言うものね。そんだけ自信があるとは思うけど、これだけの数よ。無理つてもものよ」

「無理イ? いや可能だわい。確かにあたいはこいつのことをよくは知らないが、こいつの能力の怖さは十分に理解しているわい」

にらんでいる二人に徐倫がさっきの二人が言った台詞を論破する勢いで言い放つが、スタンドを身にまとっている女性から今度は徐倫の台詞を論破する勢いで言い返した。そう彼女が言うのと徐倫は気の抜けた調子で言った。

「へえ〜〜そう。なら来てみれば？ 私たちの実力も知らないで余裕かましていてめえらにお灸を添えてあげるわ」

「・・・!!」

さすがに見え見えの挑発だが二人にとってはかなり頭にきたようだ。

そして、その挑発を受けて二人は戦闘態勢の構えを取り始めた。

「いいだろう。乗ってやるよ!!だがしかしッ!!『乗りこなす』のはあたいらだッ!!つつうことでもいいわよねえ〜〜〜」

「ナメやがって、クソッ!!クソッ!!タンカス程度のでめえみたいなやつに・・・クソむかつくわいッ!!ゼッテーブツ殺すわい。ゼッテー」

前者はシアンIIアミグダリン。 スタンド名―ブラック・ミスト―  
後者はセルリー・シチュー。 スタンド名―ストーム・ライダー―

スタンドを身にまとった女―セルリーは徐倫の挑発に頭が来て、徐倫に向かって空中を滑空しながら突撃してきた。

「ブチ殺すツ!!あたいのスタンドで必ずブチ殺すツ!!なめやがって・・・幹部トップ5の力を思い知れわいッ!!」

猛スピードで向かってくるセルリーに徐倫は迎え撃つ準備をするが、後ろのシアンが急に大声で言い放った。

「何やってるのよあんたはッ!!そこをどきなさいッ!!あたいの能力に巻き込まれたくなかったらねえ!!」

「はあ!?!・・・ちっ、仕方ないわい」

ギユウウウウウウウー………

シアンの台詞からセルリーはやむを得ず急上昇した。

否、ただ急上昇したわけではない。シアンから離れるように大きく旋回した。

そして、彼女が旋回するやいなやシアンはまるで『波』のようなものを飛ばすようなポーズを取り、自分の前にスタンドを発現させる。

至る所に管が露出している人型のスタンドで、本体と同じポーズをとっているが、そ

のうちに掌の管から何やら紫色の気体を出し、球状に固めた後、それを勢いよく飛ばした。

ボウフウウウウウウウー………

シアンと徐倫たちとの距離の差は十数メートル程あつたが、その発射された「何か」は発射された音とともに、勢いよく徐倫たちの方向へ進行していった。

徐倫たちは身の危険を感じて、右と左の二方向に回避した。そして、徐倫たちがさつきいたところでその「何か」は弾け、拡散した。

この時、徐倫や特に戦闘経験の多い者はしまったツと悟つた。

（あの紫の「何か」は私達を「攻撃する」ためではなく、「分離させる」ためのものだった……のか）

望がそういうふうに考察するが、そう思った直後、近くの地面に小さい穴が開き始めた。即座に望はその場から離れて、頭上を見ると、セルリーがこちらに向かつていた。

「ギヒヒヒヒ。惜しいわい。あと少してその足を蜂の巣のようにできたのによおおー。勘のいい奴だ」

「ムムム。．．．この人なかなかやりますね」

セルリーに対して望は少し敬意を表すると、すぐに彼女の能力の解析をし始めた。

（小さい穴が鮮やかにブレもなく空けられている．．．彼女．．．一体何を飛ばしたのでしょう？そして、今気づいたことですが、両翼に4つ、骨のような突起物がありますが、能力と何か関係があるのですか？）

望は彼女の能力の解析を急ぎますが、いかんせん隣の方は大丈夫かと心配して、あまり集中できませんでした。

今のところ戦力は半々となっており、向こう側はまだ紫色の「何か」で充満していて、視界が悪く気になる望。

その彼の心配をよそにそっち側の人たちは隣の心配をしていなかった。ただ、決して薄情だからではない。

エンポリオやアナスイ、エルメエスや奈美、カエレといった者たちは前の敵―シアンにもものすごく警戒しているからである。

いつまたあの「何か」を飛ばしてくるかで緊迫なムードになっている場で、シアンは

スタンドを出したまま話の口を切った。

「どうも、改めて言うけど・・・あたいはシアンⅡアミグダリン。気安く「アミン」って言うてもいいつうことよ」

変な語尾をつけるシアン、通称アミンは、こちらに近づきながら軽い挨拶をすると、自分が放った「何か」に指を指した。

「あえて言うけど、それには触らない方がいいつうことよ。好奇心で触ってみようかなとか思ってるなら別にいいけど・・・」

彼女の話の聞こえが聞くまいが、もともと誰もそれに触りたいと思う者などいない。当然ながら、命の保証がないからだ。

誰もがそんなことを思っていたとき、数羽の鳩が何の警戒もなく恐ろしいその「何か」の近くにやってきた。

そして、とんでもない光景を見てしまう。ある一羽の鳩が急によたよたと千鳥足になったかと思うと、多量の血を口から吐き、苦しみながら倒れていった。ほかの鳩も同



恐ろしい能力に誰が立ち向かえようか……。

その能力にたじろいでいる彼らを見てアミンはからかい始めた。

「ギシシシ。あんたら本当に腰抜けつつうことねえ。あたいの『毒霧』にビビっておびえるなんて、かすかな物音で体を丸めるダンゴムシみてえなものだぜ。ゲヘヘヘ。どおうだい??くやくしくないのかあい??くやくしいだろう?ムカつくだろう?このあたいを倒すために死中の活を求めてえなら来るんだなあ!!まあ、そんな根性のへったくれもないだろうがなあ。ギハハハ」

アミンは警戒していたアナスイたちをひどく嘲り、目に涙を浮かべるほど笑ってやった。しかし、ここですかすかと前へ行つてはいけないのは確かだ。それこそ死に行くようなものだ。アナスイやエルメエス、そしてほかの人たちもそう思っている。

しかし、たった一人―エンポリオを除けば……

「お……おい!やめろツ!てめえツ!!無茶にもほどがあるツ!!いくらガキでも手えー出してはならないことぐらい分かるだろうツ!!」

「うん、そうだよ。わかってるよアナスイ。でもね……それじゃあ僕らの『明るい未来』は永遠に……決して訪れないよ……」

アナスイは前進するエンポリオの肩を押さええて進ませないようにするが、エンポリオはその手を払いのけて、前進する。

ただ『明るい未来』の方へ——アミンを倒すことしか考えていなかった。

アナスイはこの小さき少年の誇り高き志とまなざしを見て動くことができなかった。それは刑務所で徐倫がしていたものと同じだからだ。だから是が非でも止めようとす  
る気になれなかった。エルメエスも同じ気持ちだ。

前へ進むエンポリオはとっさに心の中で思った。これまでの自分をだ……。

(僕はあの頃はただ逃げていた。恐怖から……現実から……“ホワイトスネイク”に勝てないという現実から……ただ逃げただけだったんだ)

彼は生まれてから数ヶ月前までずっと……ずっと刑務所の中で暮らしていた。外への憧れはあった。刑務所の外へ出てみたかった……だが、“ホワイトスネイク”というスタンドの存在に怯え、外へ出るという考えせず、こつそりと誰にも見つからないよ

うに生きていた。徐倫と会うまでは……。

（今思えば、どうして僕は外へ出なかったのだろう。いや、『外へ出る』という勇氣を持てなかったのだろう。もしかしたらその勇氣がそのときあれば、早く刑務所から出られたらどうか）

そう。その勇氣さえあれば「ジエイル・ハウス・ロック」に引つかかる前に出られたかもしれない。いつまでも恐怖におびえることもなかったのだ。しかし、エンポリオは出なかった。たとえても、彼は天涯孤独の身。母親は「ホワイトスネイク」に殺されている。そんな恐怖から彼はどうしても出られなかったのだ。

（だけど……今の僕にはそんな『恐怖』という者は存在しない。あるのは『仲間』と『闘志』だけだ。もう刑務所にいた頃の僕じゃない。今は徐倫お姉ちゃんや承太郎さん、アナスイやエルメエスたちがいるそんな『明るい未来』が僕の目の前にあるんだ。決してその『未来』は自分からはやってくることはない。自分自身で行かなきゃ……手に入れることはできない。だから僕は逃げない。たとえどんな困難が待っていていようと一歩ずつ一歩ずつ行かなきゃ……逃げて意味がないんだから、進まなくちゃッ!!）

その輝かしい覚悟を心中に秘め、着々と一步を踏み出すエンポリオ。アミンはそれを見て半分あきれた調子で話しかける。

「あらら。肝が据わってるつつうことね。でもねボーヤ・・・あたいの能力は触れたもの全てを滅殺する霧つつことなのよ。つまりッ!あたいの霧にかなうものなぞないッ!! あんたのその信念を『毒霧』でボロボロにして殺してやるわッ!!」

そう言うのと彼女はエンポリオに向かって『毒霧』を圧縮して、固めたものを飛ばした。あえて名付けるなら『毒霧弾』と言おう。その『毒霧弾』はかなりのスピードでエンポリオに向かっていった。しかし、それはエンポリオの目と鼻の先で大きくカーブし、軌道が逸れた。

アミンはそれを見て驚きを隠せなかった。しかし、彼女の行動には一分の無駄もなく、更なる『毒霧弾』を連射した。だがこれもすべて軌道が逸れて、エンポリオに着弾しなかった。そして、何発か打った後、アミンは何かを思い出して、攻撃をやめた。

「そうだったわね。あんた・・・天候を操れる”能力”だったわね。気流を操り、全ての



壮絶なラツシュの嵐の中、二人の息は全くと言うほど乱れなかった。的確に拳を叩き込み、拳と拳の威力を相殺させている。スピードももちろんのことほほ互角だ。だがあまりに長続きするののでしびれを切らしたアミンは大きく右手を振り下ろした。だが、その腕はエンポリオが後退したことによって大きく空振りし、空気を裂いた。しかし、そこで終わりではなかった。スタンドの手の甲から小さいながらも『毒霧弾』が発射された。

エンポリオはそれを気流ではじこうとするが、その前にアミンは素早く、懐からマツチを一本取り出して火をつけた。そして、後方へ下がるとともにマツチを飛ばし、『毒霧弾』に命中させた。

ドカアアアアアアアアアアアンツ!!

「おぐうううううううううツ!!」 ドンガラ    ドンガラ

あろう事か『毒霧弾』はマツチに接触した瞬間いきなり爆発し、エンポリオは吹っ飛ばされてしまった。爆破規模が小さかったためかエンポリオはそこまで負傷せず、体はふらつくがなんとか堪えた。

そんな彼にアミンは自分の茶色い髪をいじりながら近づいてきた。

「ぶつとんだでしよう？ さっきのが『毒霧』のさらなる性質。この性質を利用してもらったのよおん」

「ぐは……耳鳴りがひどいな……これは水素並みかも……」

「えははは……おそろしいでしょう。だから無敵と言ったのよ。でだよボーヤ。君は焼けて死にたい？ それとも毒に犯されて死にたい？ ねえどつち？ どつちでツ!! 墓碑銘を刻まれないツ!!」

かなり疲労が蓄積されているエンポリオにアミンは大量の『毒霧弾』を発射しまくった。エンポリオは同じように気流を発生させて向かい打つが、今回は途中で拡散し、エンポリオの周囲に停滞した。かろうじて自分の体を覆うように気流を発生させているため、霧は入ってこないが別の問題が発生した。

その問題とは爆破されることだ。

エンポリオは『毒霧』のないところへ移動しようとするが、すでにここまでの範囲まで散布されてしまったら、逃げ切れても爆発の余波をくらうことになり、重傷を負うこ

とになるだろう。

つまり、今彼は万事休す―王手前だということだ。そうこうしているうちに上空に十数本の火のついたマッチがあった。こんな時こそ天候を操ってマッチの火を消せばいいのだが残念ながら今のエンポリオのスタンドパワーでは氣流を操るだけで精一杯だったので、彼には落ちるマッチをただ見ることしかできなかつた。

ドボオオオオアアアアアアアアアアアアアアアアアアン

さっきの爆発とは桁違いのパワーが発生し、その爆風であらゆるものを吹っ飛ばした。隣で戦っていた徐倫たちできえも例外ではなかつた。アナスイたちはすでにある程度の距離を置いていたので、爆撃の巻き溜いにはならなかつた。徐倫は何が起こったのかと隣を見た。隣を隔てていた『毒霧』はさっきの爆発とともに爆散したか知らないが、はつきりと見えるようになった。そこで目にしたのは爆煙にまみれながら歩くアミンだった。

「ボーヤなら……徐倫。もうこの世にいねーつつうことよ。今の爆発で灰も残らなかつたかもね」

「……………何だ……………と……………おい」

「現実を受け入れわい、徐倫。ガキは死んだ……………よくやったよーなのは確かだがなく。チエツクメイトされたがあがいた方だと思っわい」

徐倫は爆心付近にいるアミンからエンポリオの死亡を告げられ、驚愕している。それを空中にいるセルリーがお世辞にもエンポリオを敬うことを言うが、その直後、ふとアミンの前方に『ゴミ箱』があることを見つける。アミンもそれを発見するがどうしてこんなものがと不思議に思っていると、その中から声が聞こえてきた。

「日本の『将棋』ってチエスと違って、とつた駒を自分の駒として使えるらしいですよ。まあ……………そこにはいろいろなルールがあるとは思っけど、今の僕は“そんな感じ”ですよ。『王を守るために駒を召喚し、王手を免れた』……………っという」

「ま……………ま……………まさかッ!？」

ゴゴ



分際で……非難しやがって……この畜生がアーーーーーッ!!!」

ブチぎれたアミンはスタンドの全部の管から空気を吸い込み始め、力をより込める。セルリーすらそれを見て恐怖の感情を抱いた。

「あたいの『毒霧』は溜めればためるほどより広範囲に噴射できる。つつうことわよお。ムハハハハ。いくらためえでも止められる訳ねえだろう?ええ?」

「まずいいわい。『あの目』はマジだッ。マジでやる『目』だッ。あたいもろとも否、それだけじゃない……民間人さえも殺る『目』だッ。こうしてる場合じゃないわい。逃げなくてはッ!!」ドオーーーーン

セルリーは力を溜めているアミンの『毒霧』を恐れて、安全なところまで移動する。だが徐倫たちは逃げることはできなかった。いつ発射されるかわからないからだ。下手したら逃げる瞬間に噴射されるかもしれないからだ。だが、この状況を打破するためにエンポリオは後方にいるある人物を呼んだ。

「奈美さあーーーーーんッ!!早く来てくださあーーーーーいッ!!あいつを倒す方法を考

えつきましたッ!!」

「・・・ッ!!」わ・・・分かった!!」

声をかけられた奈美は一瞬動じるが、全速力でエンポリオのところに向かった。しかし、アミンはこれを見逃さなかった。

「“あたいを倒す” だあああ?!?不可能だと言いてえが・・・てめえだけは本気で殺さなければならぬからなあ・・・死ねいッ!!クソガキどもオ~~~~ッ!!」ドブシユウウウ~~~~ッ

後者を包み込むほどの『毒霧』が噴射されて、超絶なスピードでエンポリオたちに向かう。本体のアミンも毒きりの中に入っているが、アミン自体には無害のようだ。

「ぐははははは・・・。あたいだけがこの毒に耐性があるつつことよ。それ以外はあの鳩のように毒に触れてくたばりなッ!!がーははは・・・「ガクン」・・・はあ!?!」

勝ち誇っていたアミンだが、彼女の体が急に体勢を崩してしまい、仰向けに倒れてし

まった。

(何ッ?!?!バカな……何が起きているのだ。急に足がしびれてきた。何が起こったんだあ!?!?)

訳のわからないことが起きてアミンは戸惑うがあたりを見渡すと霧の流れがおかしく、まるで球を描くように流れていた。アミンはまさか「ウエザー・リポート」の術中にはまっているのかと思ったとき、エンポリオの声が聞こえた。

「残念……ですが……あなたはここまでです。『毒霧』を球を描くように流し、二酸化炭素で覆って、外へ出て行かないようにしました。そして、その空間の空気を純酸素にしたので動けないはずですよ」

「ばかなッ!!いくら「ウエザー・リポート」でもそんなにたくさんのごことをできるはずはないだろうッ!!」

確かにその通りだ。「ウエザー・リポート」でもここまで精密で大がかりなことは決してできない。しかし、エンポリオは苦しそうに言った。

「ええ。だから奈美さんに来てもらったんですよ……彼女の能力の『普通アレルゲン』で『ウエザー・リポート』の動作力を普通にしてもらったんですよ……でも賭けでもあった。一度このアレルゲンに感染しているので……アナフィラキシーショックで死ぬかもしれないから……勇気が必要だったんです……だけど……僕を殺すためにあなたは手段を選ばなかった。だから……僕も……あなたを倒すために手段を選びません」

「ごんの……ガキの分際がアア~~」

姿は『毒霧』で見えないがアミンが悔しがる声を発したあと、エンポリオは奈美に支えられながら立ち上がり、ポケットからライターを取り出した。そして、そのライターの火を点火させる。すると、目には見えないが覆っていた二酸化炭素の膜に小さい穴が空いて、そこにライターを投げ込む用意をした。

「よくもお~~ツ!!……クソツたれつつがアア~~」

「悔やみなさい……あなたが今まで殺めてきた人達の魂に……懺悔しろ……」



アミンはおそらく一粒の灰も残らず、燃え尽きてしまったのだろう。奈美はそう思い始めた頃、何やら風切り音が聞こえ始めた。

一体どこからだろうかと思っていたが、その場所がようやく分かった。頭上だツ!!と奈美はとっさに思った。

「やばいツ!!戻ってきやがったツ!!弱ってるエンポリオ君を始末する気だツ!!」

奈美の言う通り頭上からさつきまで避難していたセルリー・シチューが猛スピードで降下してきた。狙いはもちろんのことエンポリオだ。

「あああ．．．あいつめ．．．敗れやがったな。まあいいわい。奴が狩り損ねた獲物をあたいがもらうよお〜〜〜〜」

近づくセルリーからエンポリオを逃がすべく奈美は彼をかばいながら進むが、セルリーには関係なかった。

翼にある計8本の突起物の照準を奈美にした。つまり、奈美ごとエンポリオを打つつもりなのだ。徐倫たちも二人を助けたかったが距離が離れすぎていて、間に合う要素が

なかつた。

「エンポリオ・アルニーニョ……3万ドルの報酬はもらつたわぁー……いッ!!  
グヘヘ……『オラツ!!』ベギイイ……ブヘエツ!!」

ドガアア……

まさにセルリーが二人に攻撃しようとしたその時、いきなり彼女は殴り飛ばされ、体が地に落ちた。

彼女を殴つた男はそつと地面に降り立ち、エンポリオを見る。

「よくやつたエンポリオ。そして、日塔。後のことは私に任せなさい」

「じよ……承太郎さんツ!!」

「ふツ……」バアーン

二人を助けたかつたが承太郎は二人を徐倫や望たちのところに行かせ、自分は殴つたセルリーを凝視する。また、ちょうどそのときに遅れて千里達も校庭にやってきた。

「どんな気分だ・・・さつきまで飛んでいたらしいが、地に落とされた気分は・・・」  
 「承太郎・・・。そうか『時止め』かあ・・・。『時』を停止させている間にあたいに攻撃を・・・クソツ!!よくもあたいの体に傷をツ!!くくくよくもツ!!」

セルリーは承太郎に殴られて、かなり苛立ちを覚えて、苦虫を噛み潰すような顔をして、上空へと飛び立つ。

「てめーだけは許せねえぜ承太郎。必ずこの苦しみの千倍は与えて、じわじわと殺してやるうくくくくく」  
 「やれるものならやってみるんだな。せいぜい口先だけのはったりにならないように気をつけるんだな」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

互いに互いを挑発する二人。片や『時』を止められる最強のスタンド使い。片や未知

数の力を持つスタンド使い。

二人の戦いは予測不能なことになりそうだ。

その頃校舎内では、リーダー格のスコッチ・ウイスキーが小森霧のスタンド、〃ステープル・ステープル〃の襲撃を受け、飛来してくるものを手当たり次第に切り裂いて進んでいた。

（あの爆発・・・おそらくアミンの『毒霧』で間違いないだろう・・・奴の生死はどうでもいいが、何人奴が殺したか・・・5、6人は仕留めなきやさすがにプロとして失格だな）

先程の二つの爆発でスコッチはアミンが闘っていることを知った。しかし、彼には彼女がすでに死亡して、尚且つ誰一人として殺せていないということは知る由もない

が……。

さつきからスコッチは霧を捜すべく校舎内を徘徊しているが、一向に見当たらない。隠れ場所になり得る場所を徹底的にしらみつぶしで捜したが、全く見つからなかった。

やはり標的を承太郎に変えるかと考えていたとき、ふとある部屋の前で止まった。

スコッチはプロ中のプロの殺し屋。そのため人一倍五感が研ぎ澄まされているので、その部屋の中がどうも暖かいと感じたのだ。

その場所は宿直室。扉を切り刻んで、スコッチ・ウイスキーは宿直室に侵入する。

そして、その畳の上に本体である小森霧を発見するスコッチ。そして、二人は睨み合うのだった。

「ようやく見つけたぜ……コモリキリ。あと少しで挫折しかけたぜええええええ。よかつたぜえええええホント」

「私にはありがた迷惑よ。まさかここで……こんな形で見つかるなんて」

「ふふふ……運命感じるかい？ 私は信じるねええええ……。お前が死ぬっていう『運命』がなあ」



ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

い。二人が出す一般人にはない圧倒的な覇気。どちらの覇気が強いのかは今は分からない。

だが次の瞬間には分かることだ。どちらが強いのかは……。

To Be Continued・・・⇒

——プロフィール——

・シアンIIアミグダリン 20代後半。独身。女性。

仕事の都合上彼女の一切の経歴不明。現在はフリーの殺し屋。

とてもスタイルが良く、豊満な胸を持っているが、そういう方面には興味がなく宝の持ち腐れである。

性格はキレやすく、口癖は「つつことよ」。

スタンド名：ブラック・ミスト

【破壊力：A スピード：B 射程距離：C 持続力：A 精密動作性：D 成長性：D】  
能力：細胞を壊死させる霧を生成      スタイル：近距離パワー型      分類：人型

## 第拾八話 侵入者を討て!!その⑥

校庭でのセルリーとの戦いはかなりの長場となっていた。というのもセルリーが誰も近づけられないほど高くにいるため、攻撃が届かないのだ。かといって、飛び道具を投げて、それが急に穴だらけになり、威力を打ち消されてしまう。

これにより、長期戦となつてしまい、承太郎達にしたら悪戦苦闘だった。各々疲労が溜まつている顔つきが多くなり始めた。対照的にセルリーはまだ余裕で飛んでいました。

「んふふ。いい表情ね・・・ゾクゾクするわい。このセルリー・シチューの好きなもの一つは『地べたに這いつくばる野郎どもの姿』なのよね。まあベストとは言えないけどこれはこれで・・・イイわね・・・」

セルリーは優雅に空中を舞いながらそんなことを言うが、承太郎達には別に彼女の嗜好など知ったこっちゃないと思っていた。

しかし、セルリーはそんなことに気を止めることなく、承太郎に向かって急降下した。

「承太郎~~~~~ツ!!まずはてめーからだツ!!そのデケエ図体をボッコボコに空いたチーズみてえにきれいな風穴を空けてやるわいツ!!」

ズグ~~~~~ン

高速に移動して承太郎のところへ向かうセルリーに彼はスタンドを出し、構えて迎え入れた。しかし、突然彼女のスタンドの翼にある骨のような突起物から『何か』が発射されたのをほぼ無意識で感じ取り、その瞬間に『時』を止めた。

『時』を止めている間に自分に飛んできた『何か』を調べる承太郎。そして、その『何か』の正体に彼はようやく気付いた。

(『空気』・・・か?否、間違いないッ! 『空気』だツ!!空気を弾丸のようにして飛ばしていやがるのか・・・なんて奴だ)

見ると、透明で見えにくい丸っこいものが空中で止まっていた。このようなものに酷似しているものを承太郎は知っている。それはかつて杜王町で確認され、調査された『猫草』の『空気弾』だ。



「ぐぼ……くそ……奴の能力は『空気を飛ばす』だけではなかったのか……」

セルリーにラッシュを与えた承太郎だが、右肩から斜めにまるで『かまいたち』にあつたかのような切り傷をつけられる。

その傷から出血し、肘を地に着いてしまった承太郎に徐倫は心配で寄り添いに来た。

傷自体はそこまで深くなく、重傷といったものではなかった。それで徐倫はほつとすがるが、『スタープラチナ』の『時止め』ラッシュを食らつたにもかかわらず瀕死にすらなっていないセルリーを見つめる。

セルリーの顔面は『スタープラチナ』の拳を食らつて残つた痕と鼻血を出して、目は血眼になっていた。

「あたいのスタンドの『ストーム・ライダー』は大砲を仮に撃ち込まれても傷一つつかないほどの防御力だから、てめーの『スタープラチナ』のラッシュも痛くもかゆくもねえわい。だけど、唯一の弱点である顔面に攻撃しやがつてくくくくくく。よくも！よくも！よくも！よくもッ！くくくくよくもやつてくれたなあああ。怒つたわいッ！！もう二度とてめーらの射程制空圏には入らないぜッ！！あたいのスタンドの『風のブレード』と『弾丸』でブチ殺してやるわい—————ッ！！」

承太郎の攻撃でかなりの度合いで憤り、大きく翼を広げてひとはばたきするセルリー。そのひとはばたきで生成した『風のブレード』が地上にいる承太郎達に降り注いだ。

そのブレードは目には見えないが轟々とした風切り音でおおよその位置をつかまれて全弾かわされる。

「ちよこまかちよこまか逃げ回ってんじやねえわいッ!!」ズバババ  
バーーーーーーッ

『風のブレード』をかわされて憤激したセルリーはがむしやらにブレードを生成し、空気と地面を切った。

あまりにも向こう見ずに攻撃してくるので、夕立の如く降ってくる『風のブレード』の1つ1つがどこにあるのか分からなくなってしまう。だがそれはあびるの「ラヴマシーン」がドーム状に集約して、承太郎達の身を守った。

「くそッ!!無鉄砲に放ちやがってッ!!どうします承太郎さん……このままでは共倒れ

だッ!!」

ブレードや弾丸が「ラヴマシーン」に当たり、アナスイが話している間もその衝撃音はしている。次々と包帯を重ねてガードはしているがいつまで持つかわからない。

そんな状況下で望はこの打開策を練り上げた。と同時に一つの結論に至った。

「一つだけ方法があります。もはやこれしかありません。しかし、何より『一度』しかありません。たった『一度』……それが失敗してしまつたら、彼女は更に距離をとられて、我々の敗北となります。賭けますか?」

望の提案に皆は黙って少し悩んだ後、こくりと頷き同意を示した。

『やらなければ勝てない』という思いを感じ取つた望はその策の具体的な説明をした。

全員が作戦を理解した時、ドーム状の包帯を解いた。包帯を解いた時にはさすがに無意味と思つたのかセルリーは攻撃をやめていて、承太郎達の目が合つて睨んでいた。

「おい女。そこで余裕ぶっこいているようだが、今からお前をやっつけてやるぜッ!!」ギ  
ラーーーーー

「ああ?!?何言つてやがんだてめー。この距離だぞツ!!10メートルはそこそこあるんだぞツ!!どうやって近付いてくるんだよ!?ええ!?」

「ふっ。ああ確かにな．．．だが勘違いするな。お前が来るんだよ。」

「はあ?」

承太郎はセルリーに睨みながら宣戦布告を決めるが、セルリーには言つてることが理解できず、今の状況は自分が絶対的有利であることをさんざん言うと同時に承太郎の何か違和感のある台詞に何の意味があるのか分からず、終いに苛立ちを覚える。

血眼になってニヤついている承太郎を凝視するセルリーだが、その時自分に向かってくる2つの何かに気付いた。

「『ストーン・フリー』ツ!!」

「『ラヴマシーン』ツ!!」

その二つ一糸の状態の『ストーン・フリー』と『ラヴマシーン』が近付いてくるのにセルリーは気付いて、『風のブレード』でなぎ払おうとするが、突如降ってきた落雷を浴び、ひるんだスキに何か黒いインクのようなものに捕らえられてしまう。

「ハア・・・ハア・・・なんとか奴を・・・止められた・・・ようですね・・・」  
 「このガキイ、貴様ツ!!!よくもツ!!こんな変なものであたいを止められるとでも思ったかあー~~~~~!!!」

『変なものとは失礼な人ですね。私の『絵』を変なものといコールさせないでよ』  
 「やかましいわいッ!!そんな小細工があたいに通用するかあー~~~~~!!!」

さっきの落雷はもちろんさきほど目が覚めたばかりのエンポリオの「ウエザー・リポート」のものであり、次のものは「イマジネーション」のインクのものだ。

エンポリオと近くに留まっている「イマジネーション」に悪態をつくセルリーは「ストーン・フリー」と「ラヴマシーン」のことも念頭におきながら風を使ってスタンドの突起物だけがインクを削り取り、照準を二人に合わせた。

「おっと・・・やめた方がいいぜ。痛い思いしたくなかったらなあ」

「・・・っ!!? 貴様は・・・アナスイツ!!!」

今まさに『風の弾丸』を撃とうとするが、背後から「イマジネーション」のインクを

足場としてアナスイがやって来て、彼女に忠告を聞かせた。

しかし、アナスイの忠告を無視して、セルリーは弾丸を発射しようとした。しかし、弾丸は発射されることはなく、代わりに突起物が膨らんだかと思うと、破裂して破損した。

「うっぎやああああああああああ!!」

「『ダイバー・ダウン』・・・既にてめーに潜らせておいたのさ。てめーが弾丸を放とうとする時、発射口を閉じさせて破裂させるようにしてもらった」

強烈な痛みがセルリーを襲うがそれだけじゃない。空気が入った突起物が勢いよく破裂したことにより、その空気圧で下方へ下がってしまった。

アナスイが仕掛けた罠によって裏目に出てしまい、あっけなくセルリーの首に『ストーン・フリー』の糸と『ラヴマシーン』の包帯が巻き付いた。

ビツツシイイイイ

「ぐええっ・・・!!!この・・・肝っ玉のちーせー下衆があゝゝゝゝツ!!!」

「よしッ!!捕らえたッ!!」

「さて・・・後はこっちに来なさいッ!!」

グ~~~~~ン

糸と包帯が首に巻き付けられて苦しみながらセルリーは彼らをかすれた小さい声でけなすが、それをお構いなしで徐倫とあびるは自分のスタンドを手繰り寄せて、セルリーをスタンドの中から引きずり出すのに成功した。

重力と糸と包帯の張力でくせつ毛のある藍色の長い髪をなびかせながら急降下するセルリーだが、まだ余裕の表情を浮かべていた。

「げーへへへへへッ!!ばかめッ!!あたいを地面に叩き付けるのか?それともスタンドでランチにするのか?ムダだわい。ムダムダ。地面だろうが拳だろうが激突する前にスタンドを再発動できないとでもッ!?!大間違いだよバカ共めッ!!」

スタンドは射程距離外でもちろん消えている。このまま落下しても再びスタンドの中には入れる自信を持つセルリーだが、その自信をボキボキにおるほどの光景を見てしまった。

彼女の真下にはスタンドを真正面に出現させている望がいた。しかしただそこにいるわけではない。光っているのだッ・・・「ミニット・エンジェル」の両手の指が・・・。

その光はまるでさつきまで彼女が放っていた弾丸のように圧縮しているのをセルリーは実感した。

「さて……それじゃあどつちが早いから勝負といきましょうか……」

「糸色望……貴様——ツ!!!」

十カ所に光る光明を見て、ここで初めてセルリー自身は戦慄し、助かるために急いでスタンドを出現させるが、望の方が早かった。

「くらいなさいツ!!! 光の弾丸ツ!!」  
天使の小型弾エンジェル・ライフル　ツ!!」ドバドバドバドバドバドバドバ

「ぐがああああああ……!!!」ギヤアアアン

発射された弾丸は超高速で空中を滑空し、セルリーの頭部、胸部、腹部を貫通した。頭部に食らった弾丸が致命傷となり、スタンドの動きが停止し、灰になるように消滅した。

ドチャアアツ

鈍い音とともに地面に落下した彼女はその傷口からどくどくと血が出始めて、終いに息をしなくなつた。彼女の体から生命が抜けたように灰が巻き上がった。

トドメをさした望はその後ぐったりした。それは人を殺めてしまったという負い目からではなく、一つのことをやり遂げて安堵したからだ。

もちろん、望だけではない。この場にいるものは皆そうした。なぜなら彼らはセルリーを倒すために残っているすべての力を出したからだ。

失敗への不安感と緊張から抜けて、肉体的にも精神的にも疲弊した彼らはそのまま動けなかつたし、動こうとは思わなかつた。

場所は変わって宿直室。セルリーが倒される同時期に霧とリーダーであるスコッチ

の闘いは終結していた。

「数分前に言ったよな。『俺の前に立つことは死を意味する』ってな．．．まさにその通りだな」

「う．．．ぐぐぐ．．．」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

その場で立っていたのはスコッチの方だった。彼の体にはかすり傷一つたりとも負ってはおらず、息も乱れていなかった。

対して霧はボロボロで体中切り傷だらけだった。一番ひどいのは脚部で、太ももからばっさり切断されていて、血がドクドク出ている。

脚をばっさり切られた霧は上体を起こせずうつぶせの状態ですコッチを見ていると彼は彼女の背中を足で踏みつけて押さえた。

「これからお前の首をスパンつとぶつた切るからよ。覚悟しろよ。おれの流儀で『狙った敵は必ず殺す』つつうのがあるからあえてやらせてもらおう。お前が生きてしまうと、う恐れをなくしたいからなあ．．．おれは．．．」

「先．．．生．．．」

うつ伏せになっている霧に聞こえやすいように首を近づけたスコッチはそのままの姿勢でスタンドの腕を振り上げて彼女の首を切るポーズを取り始めた。

苦し紛れに霧が言った言葉を無残に切り捨てるように彼のスタンドの手刀を振り下ろした。

メギ      マギ      バギ

「．．．ッ!!こ．．．これは．．．ッ!?!まさかッ!!」

力が抜けてぐったりしていた望だが、校舎の外観が崩れ始め、ボロの校舎になってい  
るのを見て驚愕した。

これは望以外にもそれを見た者は誰でも驚いた。

「お．．．おいッ！これは一体どういうことだぞ．．．ッ!?!?な．．．に．．．奴が〃消  
えた〃ッ!」

承太郎はこの光景が何を意味するのかを望に聞こうとするが、彼は既にいなかった。

承太郎はそこに奇妙な疑問が生まれたが、彼がいないことに事態が悪い方向に進んで  
いるという胸騒ぎがするのですぐに考えるのをやめてしまった。

望は誰にも気付かれないほど大急ぎで校舎に入り、宿直室へと向かっていた。

あの光景が正しければ．．．おそらく．．．と恐ろしい気持ちに望はなるが、すぐに



ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

霧を殺された怒りで闘志がメラメラと燃えだし、スタンドを出す望。そして、スコッチも8の字を描くように手を動かしながらスタンドを発現させる。

スタンド名―「プレゼントステイト・デイストラクション」

両者は睨み合いながらスタンドを自分の前に配置して、ゆっくりと・・・木にとまっているセミを虫網で捕まえるようにゆっくりと歩を進める。

そして、十分に近付くと両者は、急に血の気をフルにあげてスタンドが持つ最高のパワーをぶつけた。

「オーラ．．．!!!」

常人なら即K・O・されるほどの威力とスピードを有するラッシュユが叩き込まれる中、敵であるスコッチが若干押され気味だ。

そうこうしている内に、その差は徐々に広まり、最終的には「ミニット・エンジェル」のボディブローを食らうことになったスコッチ。ボディを食らった後は、全力で足を床につけ、その摩擦抵抗でこれ以上吹っ飛ばされるのを防いだ。

だが、望はその時間を無駄に使わず、スコッチがそうしている間にスタンドの指に光を溜める。

「天使の小型弾ツ!!」 ドバ　ドバ　ドバ

時を計らい三発の弾丸を撃ち込む望。それに気付く頃にはスコッチ自身が回避不能な距離まで弾丸が近付くが、その三発ともスコッチのスタンドにはじかれた。

否、「斬り裂かれた」と言えばいいか。

「・・・ツ!!?」

「おれのスタンド自体パワーはあまりない。10キロの錘をなんとか持ち上げられるほどのパワーしかない・・・だが、おれの「P・ディストラクション」の指はお前のスタンドの指の光弾のようにちと特殊でよ、物質をいともたやすく切れるんだ・・・こんな風になツ!!」

ズツパアアアアアアン

「・・・なツ?!?うおおおおあああああああ!!!」ズブシャアアアアアア

『天使の小型弾』エンジェル・ライフルを斬り裂いてその残骸を四方に散らばらして防御されるのを見て、望が驚愕している内にスコッチはうまく近付き、望の右腕をぶった斬ることに成功する。

傷口からの痛みと出血で苦しむ望だが、悶えながらも残った左手で弾丸を撃つが、すべて真つ二つにされて軌道から外させてしまう。

そして、もう一撃“P・デイストラクション”の攻撃を食らいそうになるが、後方に下がって回避する。

その後、スコッチは斬り落とされた望の右腕を拾い上げて望の方へ向かう。

「おれの能力は『結合を断つ』というもの。ものは必ず原子と原子、分子と分子に『くつついて』いる。分子間力とか共重合とか水素結合といったものがそれだ。おれはその『結合』をスタンドの指で全て『切る』ツ!!」

そう言うのと斬り落とされた望の腕の切断面をスタンドの指でいじくった後、望にそれを投げた。

望はそれを顔面すれすれでかわせたが、次の瞬間ほおが焦げてしまった。その痛みにびっくりした後、望は焦げた箇所を手で覆うと、その手も焦げつき、終いにはその焦げ目から火の手が上がり、皮膚を焼いていった。そして、その火は体中に回って大いに苦しむことになる望だった。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

(まづいです!!このままでは．．．肺まで．．．内蔵まで火があああ!!)「うおおおおお  
おおおおおおおおお!!」ドバドバドバ

身の危険を感じた望は力を振り絞って光弾を壁に発射させる。そして、水道管に穴を空け、その吹き出た水を被り、消火しようとした。

しかし、火が消えた代わりに、今度は皮膚の下で痛がゆい感覚に襲われる。

「うごおおおおお!!何が．．．一体何が起こっているのですか!?!」

「何が起こっているか理解できないだろう。だが深あゝゝゝ考えれば、分かることだ」

体中が変な痛みで蝕まれている望の肉体は悲鳴を上げ始め、血管から血が噴き出し、

内部から燃えるような感じを覚え、とうとう膝から崩れてしまった。

痛がゆい感覚が今では激痛に変わり、悶え苦しむ望にゆっくりと近付きながらスコツチは声をかけた。

そして、望を素通りすると、さつき投げた望の右腕を拾い上げて語り出した。

「骨つてよ。リン酸カルシウムでできていて、人間にはとても大切って言われてはいるが、構成物質自体はとっても危険なものだけ・・カルシウムは空気中でものを燃焼させるほどの熱を発生させるし、黄リンは自然発火を起こすからなあ・・これでもう分かっただろう？理解しただろう！・てめーの右腕の骨に含まれるカルシウムと黄リンを単体にして空気中にばらまき、てめーの皮膚も内臓もこんがり焼いたんだよ!!そして今もなああああああああッ!!」

スコツチはそう言った直後、切断面から火が出ている望の右腕を切断面を前にして投げた。そして、その切断面が望の胸にくつつき、そこを重点的に焼いていった。

胸を焼かれながらも投げられた腕を取り除こうとするが、接着剤でくつついたかのようになく抜けなかった。



ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

(そろそろ承太郎達が来る頃合いだな……一人ずつだ……一人ずつ順番に暗殺してやる……必ず始末してくれる)

望が消えてから数分経つてから承太郎は彼を捜しに校舎をうろついていた。敵はまだいるかもしれない……潜んで隙あらば襲ってくるかもしれないので警戒していた。

そんな後、宿直室の前に糸色望が「無傷のまま」いた。

「大丈夫か?……敵はいたか?」

「いえ……いません……否、というより逃げたそうです。彼女を……小森さんを殺して……」

望を見つけた承太郎は自分に気付いた彼に尋ねるが、望は霧が殺されたことにくやし涙を浮かべていた。

望の証言で敵は近くに潜んでいるかもしれないので辺りを、正確に言うなら望に背を向けたまま見渡していた。

前もって言うが、今の望は望であって望ではない。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

(フフフ・・・成功したぜ。おれのスタンドは結合を断ち、結合を組み直すこともできる能力。ちよつくら顔面と声帯と髪を奴と同じように改造したんだよ～～～～ん。そしてツ!!おれに背を向けた今がチャ～～ンス。糸色望やその側近の女と同じように、ミクロサイズの肉塊にしてやる～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～ツ!!)

望に化けたスコッチが背を向けている承太郎に奇襲をかけようとし始めていた。ゆつくりゆつくりとスタンドを出現させて、殺気を殺しながら射程内に収めるように近

付いていった。

そして、スタンドの手刀を繰り出し、承太郎の首をはねようとするスコッチだが、その手刀が首に届く前に「スタープラチナ」によつてほおを殴られ、壁に叩き付けられる。

『オラア~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ツ!!』ベゴオン  
「ぶぶぶつぱつ!!」

スコッチが壁に激突した後、承太郎は後ろを振り返った。

「やはり敵だったか・・・やれやれだぜ。こぎれいな身なりだったから怪しんだが、予想は的中したと言うことか」

「んんぐぐ・・・おしかつたのになあ~~~~~~~~ツ。やはり多少は傷をつけときやよかつたぜ~~~~~~~~」

無傷が仇となり正体がばれたことに反省しながらスコッチはシュパパと顔や喉、髪をスタンドで戻し、彼から奪った着物を脱ぎ去った。

素顔に戻したスコッチは鋭い目で承太郎と対峙した。

「お前はこう思っているだろう承太郎。望は始末された・・・と。ああ・・・そうだけ。お前も同じようにお前であることを知覚できないようにバラバラにしてやる・・・」

「な・・・ん・・・だ・・・と」

「おいおい。キャラに似つかわしくねえ台詞だなあおい・・・冷静でいられなくなるほど糸色望の死が恐ろしいかい」

望の死を聞かされて予想外に狼狽える承太郎を見て、半分あきれるスコッチ。

承太郎は微かに震えているが指を差し、スコッチに問いだした。

「それは・・・お前の能力では・・・ないんだな・・・？」

「・・・はあ?！」

承太郎の意味不明な問いにスコッチの頭に?マークが飛び交っていた。

スコッチは鋭い目承太郎が指差している方向が自分ではないことを知り、その先を探っていた。

その先は床を指していた。なぜそんなところをと疑問に思うスコッチだが、その意味が分かった途端、彼は青ざめた。

指されていたもの……それは……

ウジユル ウジユル ウジユル ウジユル

『肉片』だったツ!!

「な……何——ツ!!!」な……なんだこれは——ツ!!!こ……これは……  
『肉片』ツ??知らないぞツ!!!おれは知らないぞツ……こんなものは」

変な音を立てて、ミートボール並の大きさの『肉片』は床一面に……スコッチの背後に多数存在していた。

しかし、よく観察してみると、ただ存在しているわけではないッ!! 集まっているのだッ!! パン生地や粘土を追加して大きくするように『肉片』自体が寄せ集まり、一体化し始めているのだッ!! それも急速にだ。まるで意思でもあるかのように何の変哲もない『肉片』が中心の『肉塊』に直進している。

その過程でいくつかの『肉片』はスコッチが脱ぎ捨てた望の着物を運びながら引き寄せられていた。そのときも承太郎とスコッチはただ目をひんむいて見ることにしか出来なかつた。

次第にその『肉塊』は形づくり、腕や脚が作られ、最終的に頸が出来上がり、一人の裸の男―糸色望がそこにいた。

そして、意識がはっきりした望は、まだ完全に傷口が治っていないくて、至る所の傷口に体から出ていった血が入り込んでいる最中に、そばにあった着物を着服し始める。

その後、奇妙なものでも見ているかのような目でじぶんを見ているスコッチと承太郎をじつと見た。

「何者だ・・・とても人間業じゃねえ・・・何者だ――――ツ!!」  
 色望――ツ!!」

肉体を完全に修復した望に対してスコッチは冷静さを忘れてパニックに陥った調子で問い出す。

望は彼の問いに首をボキボキ鳴らせた後、腕を組みながら答えた。

「さあ……どうなんでしょうね？しかし、あなたのような人なんかに教える必要がどこにあるんですか……少なくともこれから死んでしまうあなたなんか……」

To Be Continued……⇒

——プロフィール——

・セルリー・シチュー 年齢不詳（おおよそ30代前半）。女性。

非常に攻撃的で一度暴れ始めると止まらない。地に這いつくばる人を見ることが一番大好き。

“ワイルド・ドッグ”の幹部の中で五番目に偉い地位を持っているため実力はかなり

ある。

口癖は「くくわい」。

スタンド名：ストーム・ライダー

【破壊力：A スピード：A 射程距離：C 持続力：A 精密動作性：E 成長性：C】

能力：スタンドの周りの空気を操る      スタイル：近中距離パワー型      分類：装着

型

## 第拾九話 侵入者を討て!!その⑦

「あ．．．ありのまま、今起こったことを話すぜ．．．おれは糸色望をバラバラの肉片にしてやった。しかし、その肉片から糸色望が復活した。何を言っているか分からないと思うが自分でも分からねえ．．．幻覚だとかこいつの能力とかでもねえ．．．そんなちやちいもんでもねえ現象がおれの目の前で起こっていやがるッ」

スコッチは廊下で殺したはずの望が蘇ったことに戦慄しながら立ち尽くしていた。承太郎も一緒だ。

そう言ったシヨッキンクな出来事にパニックになっていたスコッチだが、ようやく我に返って、自分の前後にいる望と承太郎に警戒する。

（くそッ!!どういうことだあ?なんで奴が死んでねえんだあ．．．化け物かあいつはよお!!）

スコッチは心の中で望に愚痴った後、意識を全て望に向ける。

それは単に己が流儀である「狙った獲物は必ず殺る」と言うものがあつたからだ。それを破るほど軽い人間ではないので、彼は望を殺すことだけ考えた。

（おれは絶対負けない・・・負けてたまるかつ!! たかがスタンドを操れる先公如きが・・・  
チヨージ乗ってんじゃあねえぞお!!）

『シイイイヤアアアーーーーーッ!!』 シュバツ シュバツ  
『オラオラオラオラアーーーーーッ!!』 ドスドス ドスドス

自信の誇りと威厳を背負い、スタンドの手刀のラツシユを叩き込むスコッチ。望のスタンドに一撃一撃を受け流されながらも、素早く正確に精密なラツシユを叩き込み、あの手刀が“ミニット・エンジェル”の両腕を斬りつけ、望はそれでひるんだ。

「・・・ッ!!」ズブーーーーッ

「勝ったツ!! トドメだアーーーーーッ!!」

ズドバアーーーーーッ!!

ひるんだ望にスコッチは“P・デストラクション”の手刀で顔を、体を縦に真つ二

つにするように斬りつける。

斬りつけられた縦の線から血が噴き出し、倒れ込む望だが、瀕死の重傷を負っているのに顔色一つ変えず、倒れながら素早い足払いを食らわし、スコツチを転ばす。

そして、予想外の足払いを受けて仰向けになっっているスコツチに望は倒れる反動を利用して体勢を整えるだけでなく、そのままスコツチに攻撃しだした。

「この攻撃ならどうですかッ!？」

「ミニット・エンジェル」の拳を振り下ろし、仰向けのスコツチの顔面を殴りつけようとすが、殴るより先に「ミニット・エンジェル」の、ついでに言うなら望の腹に「P・デイストラクション」の腕が突き刺さってしまった。

ドツシユウウウウ

「・・・ゲファツ・・・」

「調子に乗るなよ・・・こんな危機ぐらい乗り切れないとでも・・・?このおれは過去10年間で1000人ほど暗殺しているんだぜ・・・。そんなもの飽きるほど食らっているわッ!!」ギャン!

スコツチは苛立ちながら望に説教じみたことを言うが、言ってる傍から先程つけた縦の傷が徐々に治つてきていた。

それを見たスコツチは気味が悪く思えてきて、腹パンしていた腕を動かし、望を振り払った。

振り払われた望は床に叩き付けられてうつ伏せとなつて倒れたが、難なく立ち上がった。その後、穴が空いた彼の腹が再生していき、元に戻った。

(クソツたれが~~~~~ツ。どうすりゃいいんだよ……ん?)

スコツチは先程から起こっている珍現象に苦虫を噛み潰したかのような顔になり、煮え切らない心情になつてきたとき、ふと廊下から騒々しい音が聞こえた。

それは徐々にこの場に近付きつつある音だった。

(や……やべえ……徐倫達だア~~~~。つ……ついに、ここに来やがるのかツ!?ただでさえあの『糸色望(ふじみおとこ)』で手間取っているのに……クソツ!!仕方ねえツ!!最終手段だツ!!)

こちらに徐倫たち援軍が来るのを察したスコッチは背水の陣を敷いて、望に手刀をか  
ます。

「フンツッ!」ズバァン

「うおっ!!」ドズシユウウ

あまりの不意打ちに望は度肝を抜かれ、両眼をメガネごと斬られてしまう。

そして、斬り裂いた瞬間スコッチは一目散に宿直室に突進して、ドアを破壊し、中へ  
逃げ込んだ。

ガツシヤアアアアン

(どうやら奴を「殺す」ことはできないらしい。一度決めたら最後までやるのがモットー  
だがコイツは例外だ。ちようどいい。徐倫たちが来るなら命令通り『暗殺』してやるッ。  
望と殺り合うより効率がいいぜ。まずは任務だッ!!既に「計画(プラン)」はできてい  
るッ。望は二の次でも構わん!!)

逃げ込む中で強い決意をしたスコッチは五人を殺すための「計画（プラン）」を実行しだした。

宿直室に逃げ込んだスコッチを見て、ようやく承太郎は金縛りのように動かなかつた体を動かして、宿直室の中を覗いた。

しかし、奇妙なことに、そこにスコッチの姿が見えなかつた。あたりを見渡してもどこにもいなかつた。

仕方がないので向きを変え、両眼を斬りつけられ片膝を付いて患部を手で押さえている望を見た。

（死んでもおかしくない傷を食らつたにも関わらず、ピンピンしているとは……それに今だって失明するはずの眼が傷一つなく完治するとは……やれやれだ。お前達が言う『計画』と何か強くつながっている気が十分にあるぜ……）

今でも発現している望の異常すぎる自己再生能力に承太郎は望たちが提唱する『計画』と強い関わりがあることを突き止めた。当の望はそんなことに気づきもせず、懐から予備のメガネを取り出して、耳にかけている。

ここで承太郎の性格上、詮索したいところだが、一にスコッチが何処に消えたのか、二

に徐倫達がすぐ側まで来たので出来なかつた。

(くつくつくつ．．．集まってきたぞ、クソ野郎共め！そおだしやべれしやべれ！意識がおれより話に向きやがれツ。まだだ．．．焦るなよお．．．まだだツ。「時」が来るまで待つんだ。こういう時にこそ冷静な奴が勝つんだ。このままでいい．．．：：：そう．．．このままで．．．：：：)

徐倫達と承太郎・望のコンビが合流したとき、宿直室に隠れ潜んでいるスコッチが彼らの会話を聞きながらタイミングを伺っていた。

どこにいるかは確認できないが、宿直室の中にいるのは確かだ。  
しかし、そのことは目もくれず、彼らはこれまでの情報を整理していた。

「確認すると父さん。敵は1人でいいのよね？」

「ああ。私の勘では1人だけだ。もしもつといるなら、我々のもとにもう現れているからだ」

「たしかにそうですね。説得力のあるいい推測だと思います。承太郎さん」

承太郎の推測交じりで敵の数を確認する徐倫。そして、そんな彼の年季の入った推理に感銘を受ける望。それから望の台詞に頷くその他諸々。

こんな緊張のない空気が流れているが、彼らは決して気は抜いていない。

承太郎から既にスコッチが何処かに潜んでいることを伝えられているからだ。

「いいか。髪は短髪で、亜麻色の男。背格好はアバウトだが170 cm後半だ。人型のスタンドで手で物をめったやたらに切る能力をもつ。それに速い。十分に気をつけるツ。スピードに余裕がない奴は特にだツ。それに奴はやり手だ。油断するなよ!!」

彼らは承太郎の忠告を聞きながら全員に背中を預けて四方八方、あらゆる死角となる所を付かず離れず探索していた。

彼らは心の中に疑惑と緊張が巡っていた。全ての行動に無駄がなく慎重に且つ俊敏

にするように心懸けていた。

しかし、スコツチの姿は一向に見えない。徐々に彼らには焦燥の念が出てきた。

「く……くそ……いねえ……どこにも・承太郎さんツ！これはもしかや一時撤退したかもしれないっすよツ!!」

「落ち着けアナスイ。敵は私達の『心の乱れ』を誘っているんだ。そこをつく気なのかもしれん」

「しかし……こんな数でしらみつぶしに探ってるのに誰一人たりとも見つけてねえ。宿直室も確認した。アナスイの行った通りかもしれないよ」

焦りに焦ったアナスイとエルメスは承太郎に問いかけるが、彼は額に汗を光らせながら周りを見渡した。

「必ず奴はいる……奴は妙なくらい執念深い奴だった。そんな奴ほど戦場から逃げない。……ひよつとすると……もう既にこの中の『誰か』に成り代わっているとしたら……」

「……なっ……本当なのツ!!父さん!」



(そうッ!これだッ!!この「時」がやつと来た。意識がおれから仲間に移った正にこの「時」ッ!!このおれの完璧な暗殺計画が開始するのだアーーーーッ!!)

実はスコッチは誰にも化けてはいなかった。化けてはいるが『人外』のものに化けていたのだ。ずっとずっと宿直室にいたのだ。

「時」が来たスコッチは体を「くねくねと動かし、壁を伝って」承太郎に狙いを定める。

(んん!?あ・・・あれは・・・)

いち早く気付いたあびるはスコッチが変化したモノをみつけた。

「承太郎さんッ!!『蛇』ですッ!!『蛇』が貴方を狙っていますッ!!」

「・・・ッ!?何!?」

「もう遅いッ!!ガード不可能よオオッ!!」ニルパン!

『蛇』のスコッチを承太郎にあびるが伝えて、彼が認識するときには、俊敏な蛇の動きで一気に距離をつめられてしまう。

(言っただろう!!おれの攻撃は刹那に終わるとツ!!あれ?言っでなかったっけ?まあ、いい。あろう事か標的である五人がこんなに近くに集まってくれるだなんてラッキーだよなアーーーーーッ!策士策に溺れるとはまさにイイイイこのことだったなあああああーーーーーッ!!)

スタンドを見せ合うために承太郎は徐倫、アナスイ、エルメス、エンポリオとかたまっていった。しかしながら、それが仇となり、ターゲットである五人を数撃の手刀で全員抹殺される距離まで近付いてしまった。

スコッチは鋭い目「そこ」を狙っていたのだ。完全なる不意打ちが成功するほど五人全員が近付くところを。

「くたばれえええええーーーーーッ!!!これで任務は無事に『完了』だアーーーーーッ!!!」ギャオオオオオオオ

あまりにも突然、速攻過ぎる攻撃に五人は思考が停止してしまっていた。彼のスタンドのヴィジョンが出現したにもかかわらず何もできなかった。

まああしかし、哀しいかな・・・反応できたとしても時既に遅し、というやつです。

「死ぬええいッ!!! 承た・・・あっ?・・・あれ・・・?」

突然、〃P・デイストラクション〃の手刀は承太郎の鼻の先で何故か止まってしまった。否それだけではない! スタンド自身も自分自身も全く微動だにしない。

「ば・・・ばかな・・・体が動か『ない』ッ・・・一体何がどうなつていやがるんだッ!？」

奇妙なことに空中に〃止まってしまった〃『蛇』のスコッチ。だが彼だけではない。皆止まってしまったのだ。誰一人として動ける者はいなかった。ある一人を除けば・・・

「やれやれですよ。私が〃本気を出さなくてはならないとは〃・・・」

「な・・・な・・・なにイーイーイーッ!?! い・・・いと・・・糸色望ウウウウウウ!?!」



望の言う台詞にスコッチと承太郎たち五人は目玉が飛び出るほど驚いていた。承太郎以外に『時』を止めることができる者が存在することに……

「ばかなッ。『時』を止めただと!?!承太郎以外にも『時』を停止させれる者がいたというのかッ!!」

「まあしかし、正確に言うなら『今』は『空間』を止めたというところですよ。承太郎さん：あなたの『スタープラチナ』は実際はスタンド自体を光以上に超加速させることにより、慣性の法則の原則上、あたかも時が止まっているかのように見えてしまう。しかし私の場合は違う!この世の世界の四次元的な意味での『隣』には『平行世界』が存在すると言われていますが、その平行世界と平行世界の間には『時間軸』というその世界の時間と空間を司る空間が実は存在しているのです。私の場合の『時止め』はその空間にスタンドを干渉させ、この世の時間または空間を止めるのです」

意味の分からない単語がずらずらと言われたが、とにかく『時』を止める能力を持っていることを理解したスコッチと承太郎たち五人。

既に『空間』は10秒ほど止まっているが、まだまだ望は余裕顔をしている。そこで



るだけのただの先公なんぞにイイイイイイ………ツ!!!)

腕を動かしプルプル震わせながらも上体を起こして、何ともない右足で床を強く踏み込んだ。

そして、汗を大量に流し、息が荒い中で、右足と両手で獲物に食らいつく野獣のような一歩を踏み出し、承太郎に接近した。

「RRRRRUBAAAHHH———ツ!!!承太郎ツ!!!お前さえ……お前さえ死んでくれればツ!!おれはツ!!!殺し屋としての立派な最期を迎えられるんだよオオオオオオオ!!!『命に代えても任務は遂行する』……その誇りにかけてええええ……グサアアツ」……あツ?!

目を充血させて、自らの誇りを胸に承太郎に襲いかかるスコッチだが、P・デイストラクシヨン”の手刀を食らわす前に背中に何かが勢いよく刺さった。

そのおかげでスコッチは失速してしまい、口から血を吐いて、片膝をついた状態になっちゃった。

スコッチは後ろを確認すると、換気扇ほどの大きさのファンが突き刺さっていた。



「この『穴』は『時間軸』に通ずる『穴』です。あなたが地獄に行く手土産に私と共に  
 タイムトラベル〃をしましょか・・・」

「タイムトラベル〃・・・だと・・・その向こう側は・・・どうなっているんだ・・・  
 一体何が起ころののだというのだから・・・」

「はて・・・どうだったか・・・言えることはそんなことを感じる前に〃死ねる〃という  
 ことです」

「う・・・うお・・・うおおおおおおおおおooooooooooooooooooooo  
 !!!」

『時間軸』に通じている『穴』にスコッチを引きずり込もうとする望。死を直感したス  
 コッチはどたとたと暴れて抵抗する。しかし望を攻撃しようするも霧の〃ステープル・  
 ステープル〃の能力で操られた電気コードがスコッチのスタンドを雁字搦めにして動  
 きを止める。

「くそ・・・こんなところでくたばれるかアoooooooooooooooooooooo!!」

左脚は折れ、〃P・ディストラクション〃は縛られて身動きができないので実質右足だけでスコッチは踏ん張り続ける。だが、右足だけで踏ん張るにはやはり力不足であり、『穴』へと近づくと一方だった。

「やめろおおおおおおおおおおお!! マオバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

スコッチは断末魔の叫びを上げながら命綱の右足で何とか踏み止まろうともがき続ける。しかしそんな抵抗では現状を変えることは叶わず、最終的に彼は『穴』へと引き込まれる。

そしてその最中、スコッチは自分の首を引っ張っているはずの望が手に人間サイズの黒い物体を持つて目の前に現れるのを見た。

何故そこにいるのか？なんでそんな物体を持っているのか？そんな疑問がふと頭をよぎった瞬間、スコッチ・ウイスキーはこの世から完全に消えた。

気がつくとスコッチは表現できないような異様な空間にポツンといた。残念ながらスコッチは動けず、常に宙に浮かんでいることしか出来なかつた。  
そんな時、彼に向かつてくる者がいた。・・・糸色望だ。

「ようこそ人類の未開の空間・・・『時間軸』へ」

「貴様、望ツ!!このおれをどうするつもりなんだあ!?!」

「どうするって決まっているじゃないですか・・・こうするんですよ」グワシイ

「何ッ!?!うおお・・・!!?」

望は彼の襟首を掴むと真上に飛んでいった。だがスコッチにはその行動で異常が生じた。それは体が燃えていることだ。

ゴオオオオオオオオオオオオボアアアアアア



「これが・・・私の・・・『ミニット・エンジェル』の本気です。全ては・・・本気にさせたあなたが悪いのですよ。あなたが・・・」

小言のような台詞を只の炭と化したスコッチに言い放った。より黒く暗い眼差しを向けて・・・

リーダー格のスコッチ・ウイスキーを葬ったので、ようやく戦いは完結したのだ。

「先生。何処にも彼らの仲間らしき者はいません。我々の完全勝利ということですよ」  
「そうですか・・・」

霧は彼らの残党がないことを望に報告し、彼らが画餅に帰したことを望は感じた。と同時に複雑な疑惑が浮上していることも。

「さてと、戦いも終わったようなので、約束通り全て話してもらおうか」

「……」

さつきまで蚊帳の外だった承太郎の発言に、そう言うと思っていたと言う表情を望は浮かべた。

そして、承太郎、徐倫、アナスイ、エルメス、エンポリオ以下五人に背中を向けながら望は伝えた。

「明日はちょうど学校が休みですので、明日9時に『糸色医院』という救療所に来てください。話は……その中で」

そう言うのと望やへ組の生徒はその場から立ち去ってしまう。

五人しかいなくなってしまったこの場所で承太郎は情報の整理をしようと思うが、突拍子のない大事だらけのオンパレードだったので、途中から頭がこんがらがり始めたの

で考えるのをやめた。

「父さん……ひとまず帰ろう。ここで難しい顔しても意味ないよ」

「そうですよ承太郎さん。明日!!明日で全てが分かるんだから。明日にしようぜ。今は闘いで疲れてるんだから」

「……ああ……そうだな」

徐倫とエルメエスの意見に同意した承太郎はその場を離れた。遅れて四人もついて行く。

遠くでパトカーと救急車のサイレンが聞こえてきた。なので承太郎たちは歩く速度を少し上げた。

承太郎たちは知らない。彼らの秘密がどれだけ深く暗いものかを。

承太郎たちは知らない。彼らの秘密に関わったことでこれから決してタンマも途中辞退もできない運命に直面することに。

承太郎たちは知らない。さっきの戦いはまだ序章に過ぎないことに。

スコッチ・ウイスキー — スタンド名：プレゼントステイト・デイストラクシオン

— ……死亡。

To Be Continued . . . . ⇒

— プロフィール —

・スコッチ・ウイスキー 30代前半の男性。

フリーの殺し屋であり、過去10年間で100人程度殺している。

性格は極めて冷酷で残忍。時には自身の命までも投げ捨てるほどの覚悟を持っている。

そのため彼を雇う者は世界中に存在し、ほかの殺し屋と比べても彼以上に信頼されている殺し屋は存在しない。

スタンド名：プレズントステイト・デイストラクション

【破壊力：D スピード：B 射程距離：E 持続力：A 精密動作性：A 成長性：D】  
能力：あらゆる物体の結合を断つ    スタイル：近距離パワー型    分類：亜人型

## スタンド・キャラデータNo. 2

・糸色望<sup>いとしきのぞむ</sup>

本作では28歳と考えている。文学好きの2のへ組の担任で担当科目は国語(数学や理科なども教える事もある)。度々課外授業をしたり、一時間目を自習にしたりと教育者とは思えない行動をよくする。

口癖の「絶望した!!」や性格、名前から『絶望先生』と呼ばれる。(しかし、こう言われると酷く落ち込む)。

実家は信州蔵井沢の名家である糸色家の四男。上に3人の兄がいて、下には1人妹がいる。誕生日は11月4日。

服装は原作と同じで小紋柄の着物を着ていて、外出する際は黒い無地のマント(まとい)を着る。

全てをネガティブに考える性格で常日頃から「旅立ちバック」を持ち歩き、自殺未遂を繰り返す。しかし、いざ死に掛けると『死んだらどうする!!』と開き直る。

自他共に認めるチキンで大人気ないほどに執念深く負けず嫌いである。チキンな性格ゆえに、危機回避能力が人一倍ズバ抜けていて、人知を超えた危機予測能力を発揮す

ることもある。

それらの厄介な性格で周囲に迷惑を掛ける迷惑人間だが、へ組の複数の女子生徒から好意を持たれている。(が、自身は女子生徒を恋愛対象としておらず、生徒からのアプローチを基本避けている)

『計画』の欠けてはならない重要人物である。

クラス内のスタンド使いを全て把握していて、その実力も知っている。

挽肉の状態からでも体を完全に再生させる異常な細胞を持つが、現段階では詳細は不明である。

自分では白と言っているが、承太郎達は今のところ半信半疑だ。

スタンド：ミニット・エンジンエル秒速の天使

【破壊力：B スピード：A 射程距離：C 持続力：A 精密動作性：B 成長性：A】

スタイル：近距離。パワー型 分類：人型

天使のような翼、頭上の輪、そして慈愛に満ちた髪留めをした少女のスタンド。光を操られて、その応用でこの世界の隣にある『時間軸』の空間を干渉し、支配出来る能力。見た目が釘付けになりそうだが、人をノックアウトさせる程の威力を持つ。パワーは「スタープラチナ」より弱い、スピードは少し速い。

自我を持っており、望の意思とは関係なく動く事があるが望自身はあまり気にしていない。

上記で書いた通り望の危機回避能力は彼女が未来に転移して望の危機を知らせるためズバ抜けている。

『時間軸』の空間”を支配出来る為、空間と時間を分けて止める事が出来る。2つとも十数秒止められる。

空間の場合、『止まっている世界』で行動出来る者以外、動けない。また、時は止まっていないので、人々はそれに知覚できて、勿論、痛みも即伝わる。

また、干渉出来る為『時間軸』の空間に入れる。(しかし、望以外の物質がここに入ると要は光と同じスピードで移動するので、大量の熱量で焼き尽くされる)

物質は現在の所からミミリも動く事は出来ないため望は『時間軸』に入った際、上へ往復するしか進めない。(スタンドは物質ではないため過去・未来へ自由に飛び回れる) 現在の場所はベルトコンベアのようにたえず進んでいるため、上へ往復するだけでそれに掛かった時間の分、過去に戻る。(望自身にとつての現在には出てきた所が常に現在の為、何秒経とうがその場所が現在である為そう解釈できる。)

戻ると暫く同じ人間が二人いるが、『時間軸』へ移動したという確定された運命があるため、その時刻に絶対に過去の自分や連れてきたモノは『時間軸』に移動される。

必殺の一撃は指先から数十メートルの距離を余裕に滑空する光を濃縮した光線を発射する。天使エンジェル・ライフルの小型弾”。

名前の由来は原作百九十九話に出てきた”0・001秒の天使さん”を言い直したものだ。

・常月つねつきまとい

2のへ組、出席番号25番の女子生徒。超恋愛体質・ストーカー少女。

多くの男性と交際していたが過剰な恋愛感情がストーキングに発展し、警察沙汰になつていたが、ストーキングを咎める為に言った望の言動を告白と勘違いして以来、彼にストーキングし始める。

服装は望と合わせて着物を着ている。(付き合う男によつてキャラや服装を変えている為そうしている)

常に何処かに隠れていて、気付いた時にはよく望の背後にいる。

スタンドを発現してからナイフや拳銃、電柱を隠し持ち、『計画』遂行のために先生の護衛をしている。(無許可で)

たまに感情が望同様荒ぶるが望のためなら何だつてする位に絶対服従なのだ。

スタンド：ウオーアイニー

【破壊力：なし スピード：A 射程距離：なし 持続力：A 精密動作性：E 成長性：

C】

スタイル：近距離操作型 分類：一体化型

本体及び掴んだものを布にする能力。部分変化も出来る。像（ヴィジョン）は「セト神」の様な大きい目のみ。（一般人は目は視えないが布化したものは見える）

布化したものはどんなものでもとても軽く、柔らかくなる。

スタンド発動中は無敵でどんな攻撃も効かない。（只、弱点として身動きが出来ない）後、精密動作が悪い為基本無地しかなれない。

スピードは「スタープラチナ」と互角のため倒すのに一苦労する。

他にも相手を布化して捕まえるという手もある。

・小節<sup>こぶし</sup>あびる

2のへ組の女子生徒、出席番号22番。尻尾好き・被DV疑惑少女。

常にどこかしらに怪我を負って、包帯やギブスまみれで父親からDVを受けていると周りでは噂するが、実際は動物園でアルバイトをしていて、その動物とじやれている時に負ったものである。

正確には動物の尻尾を触るのが好きで自分の部屋に無数の動物の尻尾と「しつ拓コレクシヨン」が存在する。

身長はクラスで2番目でスタイルがよい。そして、髪型は三つ編みのおさげ。

左目はオッドアイで、幼い時、事故で怪我をして高校入学前に移植した。普段左目は包帯を付けている為、見えていないが、外すと角膜の前の持ち主を轢いた車のナンバープレートがフラッシュバックする。

今は見えにくくなったが、代わりに目から血が出て、数秒後の未来予知が出来る様になった。(又、自分の身に途轍もない危険が及ぶ未来をも予測出来る)

飄々とした性格で、常に冷静だが、運動音痴である。

望の影武者と一線越える出来事があつて以来、望に好意を抱いている。

スタンド：ラヴマシーン

【破壊力：D スピード：B 射程距離：A 持続力：A 精密動作性：B 成長性：D】  
 スタイル：近遠隔操作型 分類：同化型

あびるの包帯に同化して自由に操る能力。同化しているため一般人にも視える。

射程距離は数百メートルだがA fewではなくSeveraiのイメージ。

鋼鉄の強度を持つが、殺傷能力はなく、『波紋』も使えないので、基本投げ飛ばす、縛

る、丸めてぶつけるしか攻撃方法がない。また、保護色を持つので奇襲は得意中の得意である。

張り巡らせている包帯を踏まれると相手が何処に居るのかが的確に分かる。

あまり戦闘向けではなく、味方の補助に適しているスタンドだ。

・日塔奈美  
ひとうなみ

2のへ組の女子生徒、出席番号27番。超普通少女。

個性的な面々が揃うへ組の中で至つて普通の生徒。いい意味では使われない普通にコンプレックスを持ち、普通を指摘すると「普通つて言うなあ!!」と怒る。

コンプレックスからの裏返しから自己顕示欲や自負心が強いが普通なので大したアピールにならない。

望に対して好意は原作にはないが、集団でのアピール合戦では度々参加している。

2のへ組になってから暫くしてスタンドが目覚めたが、思った以上に沢山いて結局あまり変わらなかった。

スタンド：オレンジジミント

【破壊力：C スピード：C 射程距離：C 持続力：C 精密動作性：C 成長性：C】

スタイル：近距離。パワー型 分類：人型

口に酸素マスクをして、そこから6本の管が髭の様に通り出っていて、両手には分厚い手袋がはめられた人型のスタンド。

そのスタンドの表面に付着している『普通アレルゲン』に感染すると、スタンド・生物問わず、全ての性能が人並みになる能力。

しかし、強い衝撃がないと飛び散らないため、攻撃を一回受けなければならぬ。

アレルゲンの射程距離は十数メートルだが、一度感染して射程距離外に出て、再び感染すると、『アナファイラキシーショック』を受けて最悪死に到る。

奈美曰く、「普通が最も、最も、もー……つとも恐ろしい」。

・木津千里

2のへ組、出席番号20番。几帳面・粘着質少女。

極めて几帳面で、何事も自分が考える「きつちり」にそぐわないと気が済まない完璧主義者で、かなりしつこい。

きつちりを追求しすぎて、よく暴走して周囲に危害を加える。

トレードマークは正面をきつちり真ん中分けにしたストレートヘア。体型はスレン

ダーで無駄が無く、胸が貧相。

彼女の台詞には他のキャラより句読点が多く書かれている。

寝相の悪さで保健室のベットで望と添い寝してしまつてから、責任を取つて結婚するように強く迫っている。

原作では晴美とは幼稚園時代からの幼馴染らしいが、二百六十三話を参考にしたため小5からの馴染みである。

前髪は普段真ん中分けになっているが、精神状態がおかしくなるか動揺すると乱れる。

常に制服に愛用のスコップを隠している。その破壊力は凄まじい。

生まれつきスタンド使いのため辛い人生を送り、親友を瀕死に追い込んで生きる目的を一度失つたが、望と会つて改心した。

『計画』のためならまとい同様、自分が死んでも構わないと思つている。

スタンド：サムライハート

【破壊力：C スピード：C 射程距離：E 持続力：A 精密動作性：B 成長性：A】

スタイル：近距離。パワー型 分類：人型

右手に日本刀、左手に斧を持ち、センターラインが引いたホットケーマスクを被り、魔

法使いの様なオーブを着て、体中に口元だけ緩くしてあるさらしを巻き、歯が牙の様に鋭い人型のスタンド。

千里自身が恨めば恨むほど負のパワーが積もりスタンドと自分を強くする能力。

負のパワーは、千里自体がイラツと来たり、ストレスを感じるとどんどん増幅し、逆に、彼女自身が満足したり、うれしかつたりすると、消えていく。

またこのパワーは、攻撃をかわされたり、防がれたり、痛みを感じるだけでも増幅する。

性能の成長はほぼ無限で彼女の肉体の限界が来るまで上がる。(一旦気絶すると負のパワーが完全に消えるため、元のステータスに戻る)

ふじよしはるみ  
・藤吉晴美

2のへ組、出席番号28番。腐女子。耳好き・カップリング中毒少女。

熱心なオタクで、眼鏡と猫耳に強いこだわりがあり、コスプレ好きで、自ら同人誌を描いている。

運動神経はズバ抜けているが、本人はスポーツには全く興味はなく、あまり活動していない。

だが、晴美はその体質のため普段は眼鏡を掛けて力を制限しているが、いざ外すと、超

人並みの身体能力が解き放たれる。

また、そのときスタンドが変化するが本人も精神力が制限されるかは知らない。

千里の次に戦闘経験豊富でよく学校側の特別任務に参加している。

高一の時、千里に殺されかけたが、あれは単なる事故だと今でも主張しているが、千里は納得していない。

スタンド：空イマジネーション想

【破壊力：C スピード：B 射程距離：A 持続力：A 精密動作性：B 成長性：A】

スタイル：遠隔半自動操縦型 分類：亜人型

長くて鋭い爪を持ち、眼鏡を掛けたブリキの様なスタンド。勝手に行動してくれるし、自分でも操れる正に、自動操縦と遠隔操作の長所を持ったスタンドだ。

能力は黒いインクが出るスタンドの爪で描いた絵を具現化出来るスタンド。

本体とスタンドはある程度別離しているため、考えを共有することは出来ない。そのため、自分の駒の進め違いや打ち違いが多々ある。

また、スタンドが完璧に倒されても、そのフィードバックはないが、代わりに、吐き気をもよおす。

後、スタンドが晴美にまたは晴美がスタンドに切り替えるとその間に経験したことが

二人の精神に一瞬で伝わる。

具現化した絵はスタンドの力でできているためスタンドを攻撃できる。また、絵は所詮絵なので水に濡れると形態を維持出来ず崩れる。

最も恐ろしいのはスタンドの成長力で千里も驚く成長をしてくれる。

スタンド：イマジネーションⅡルンバ

【破壊力：A スピード：A 射程距離：E 持続力：B 精密動作性：B 成長性：A】

スタイル：近距離パワー型 分類：亜人型

晴美が眼鏡を外し、真の力を解き放つたことで進化したスタンド。能力は変わらないが、外見は一回り大きく筋肉質になり、色が黒くなる。

第一形態よりもパワーとスピードが大幅に強くなったので、接近戦に強くなり、より速く精密に絵を描けるようになった。

しかし代わりに、射程距離がグーンと下がったので、間を開けられると不利。

基本は、スタンドのパワーだけで攻撃せず、本体と共に攻撃する。そのためかなりの威力が発生する。

・風浦可符香 {P・N}

2のへ組、出席番号14番。超ポジティブ少女。

何事も前向きに考えるポジティブシンキングで、常に明るく丁寧な言葉遣いと笑顔で、絶やさないう少女。

後頭部のハネ毛と前髪の髪留め（制服時は十字型だが、私服時は色々変わる）が特徴で、ショートカットである。

望のネガティブとは対照的に現実逃避に近い極端なポジティブ論法を展開し、周囲を大きく巻き込む。偶にポジティブを通り越して、電波発言が目立つ。

ポジティブな一方で腹黒い一面が本性と見えるフシがあり、物事の不条理や負の面に詳しく、人の心に入り込むことが特技で、クラスメイトの幼少期のトラウマの陰には大体彼女がいる。

物事を陰から操る黒幕でもあり、クラスメイトの暴走や混乱に動じず、逆に煽ることもある。

本名は「赤木杏（あかぎあん）」らしいが、パルチェ曰く、「もうこの世にいない筈の人間」と言っていたが、真偽は確かではなく、知っているパルチェは可符香によつて即刻抹殺された。

度々姿が変わるが詳細は今のところ不明だ。

『計画』に深くのめり込んでおり、クラス内の生徒の中で一番良く知っている。そのため

『計画』は、望と可符香を基軸に遂行している。

上記の性格から計画上の暗殺、資金調達、イレギュラーな事態の対処の思案を積極的  
にやっている。

スタンド：デッド・ラインダンス・デス

【破壊力：B スピード：B 射程距離：B 持続力：A 精密動作性：A 成長性：C】  
スタイル：近中距離パワー型 分類：亜人型

機械的なフォルムをしていて、親指以外の第三関節に丸い石がはまっている力強いスタンド。石がはまっているため殴ると結構痛い。

岩石を自由自在に操る能力でその距離は4〜50メートルまで届く。操れる岩石は岩石の成分が含んでいる固体なら何でもい。

後、スタンド又は本体を岩石に同化させることも出来る。

以上より応用の幅が広く移動、攻撃、防御、偵察に活用できる。且つ、近距離・中距離戦を得意としている。

・小森霧こもりぎり

2のへ組、出席番号23番。ひきこもり少女。

以前は不登校児だったが、望が家庭訪問をして彼女の事を「美人だ。しかも白い」と言ったことで、学校に引き籠り「不下校少女」となってしまった少女。

常に毛布を羽織り、ジャージを愛用している。

髪がとても長く、顔が前髪で隠れるほどある。(しかし、作業をする時は、前髪を括る。)

現在は宿直室で暮らしている望と交と半ば共同生活をして、家事全般をサポートしている。そのため、まといとの仲が険悪である。

座敷童と言われる事があるが、実際は彼女の力ではなくスタンドの能力の影響である。

望と同様な力を持った細胞を所有している。

スタンド：ステープル・ステープル

【破壊力：B スピード：C 射距離：B 持続力：∞ 精密動作性：C 成長性：D】

スタイル：中距離パワー型 分類：同化型

学校に取り憑き、敷地内のあらゆる設備を自在に操るスタンド。

何時も見ている彼等の校舎は実はこのスタンドで強化された校舎で元々はボロい。

本体である霧が部屋に居座る事で自動的に発動し、その建物に取り憑く習性がある。

しかし、その建物からある程度（学校で言うところ敷地外）離れるとスタンドの射程距離を超えるため、能力が解除される。

能力は常に発動しているが、スタンドパワーは消耗せず、物を飛ばしたり、修復する事でのみパワーを使う。

また、全ての学校の設備に彼女の感覚がリンクしているため、侵入者や物の紛失が逸早く察知できる云わば、“学校の守護者”である。

・加賀<sup>かがあ</sup>愛<sup>い</sup>

2のへ組、出席番号18番。加害妄想少女。

極度の加害妄想の持ち主で、「すいませんすいません」が口癖。

垂れ眉で釣り目な人相で、左下に泣きボクロがあり、後ろ髪を束ねていてよく動く。

案外石頭。

何をするにも自分が他者に迷惑をかけていないかと思ひ、引つ込み思案で自己評価が異常に低い。

自分に厳しく、他人には優しく道徳的で且つ、非常に心が繊細で、判断や理解の限界を超えるると直に気絶するが、見過ごせない不徳には厳しく戒める毅然とした一面も持つ。

望に対して好意があり、彼女にとって初恋の相手である。（しかしながら、想いは伝えられていない。）

スタンド：マシユマロウ・ジャステイス

機械型のスタンドで時と場合によって姿と性能が変わる。

スタンド：「ACTT1」

【破壊力：E スピード：E 射程距離：A 持続力：D 精密動作性：E 成長性：E】

スタイル：近遠隔操作型 分類：機械型

プロペラに双眼鏡が垂れ下がったスタンド。

遠くまでスタンドを飛ばす事ができるが、非常にパワーとスピードが弱く、基本本体の傍に置いておく。

垂れ下がった双眼鏡を本体である愛が見る事で、映りこんだ人間の心を読むことができる。

また、双眼鏡の底側に隠し銃があり、そこから発射される針に着弾すると、痛くはないが数キ口先までその相手を捕捉するアンカーとなる。またそれは連射が可能。

スタンド：「ACT2」

【破壊力：B スピード：B 射程距離：∞ 持続力：C 精密動作性：B 成長性：E】  
 スタイル：近遠隔自動操縦型 分類：機械型

プロペラから中型のプロペラ型戦闘機に変化したスタンド。形としては胴の先端にプロペラが1つと両翼に3つずつ口径30ミリの機関銃が搭載されている。

本体である愛自身に危機が迫ると自動で発現し、敵を戦闘不能にさせるまで攻撃を止めない自動操縦のスタンド。

尚、AIが搭載されているため自分で考えて行動できる。そのため心を読んで誰が敵なのかを自分で知覚できる。

自動操縦のため愛自身では制御できず、只見守るしかできない。

基本は愛から離れず行動し、逃げる敵には隠し銃のアンカーを付けて、一先ず保留にする。その後、愛の安全を確保出来たら、アンカーを付けた敵を追尾して例え地の果てだろうが宇宙の果てだろうが捜し出して攻撃する執念深さを持っている。

破壊されても愛にはダメージはなく、愛に戻って再生した後、また向かうようになっていく。

尚、「ACT2」が発現中は「ACT1」は出せない。

・スコッチ・ウイスキー

プロの殺し屋。自分の職業に誇りを持っている。ヤクザの様な風貌をした男性で、犯罪組織「ワイルド・ドッグ」に雇われて承太郎達を殺しに来た。

3月20日生まれで、身長が170cm後半で、体重が65キロ。AB型。

リーダースキルが豊富で殆ど初見のスタンド使いを纏め上げ、学園内に侵入。侵入後、校舎内を慎重に行動するも霧に見つかり、交戦。

霧を倒した後、やってきた望と戦い、彼を殺害して後に遺体をマイクロサイズにバラバラにする。

その後、やって来た承太郎を望に扮して暗殺しようとするが、失敗。正体を明かして闘おうとするが、復活した望を見るや否や再び戦うが、死なないので本来の目的である承太郎たち五人の命を狙う。

五人を暗殺しようとするも『空間』を止めた望に妨害され、左脚を負傷する。しかし、負傷しながらも殺し屋としての誇りを見せて承太郎を殺そうとするも、復活した霧が操ったファンを彼の背中に刺して止めさせる。

そのまま望に『時間軸』の空間に連れて行かれ、その中での移動で発生した熱量に耐えられず、死亡した。

スタンド：プレゼントステイト・デイストラクション

【破壊力：D スピード：B 射程距離：E 持続力：A 精密動作性：A 成長性：D】

スタイル：近距離暗殺型 分類：亜人型

爪の鋭い骸骨型のスタンド。その容姿はターミネーターのT-800をモチーフにしている。

パワーは弱いですが、鋭い爪で物質の分子間力を断ち切り、分解する能力を持つ。又、分解した物質同士をくっつけて色んな形に再構築する事も可能。

以上の能力で自分の顔の構造を変えて変装したり、標的を証拠も残さず殺害したりことが可能。

・音石明  
おとしあきら

本作で32歳のライトハンド演奏が出来るギターを愛するロツカー。

戦いの駆け引きに関しては超一流級の才能を持つ。

13年前に杜王町で承太郎と一悶着あって、あまり派手な行動はしなかったが、この度スコッチにその才能を見込まれて雇われた。

目的はスコッチから告げられておらず、訳の分からないまま偵察をしていた。(スコッチ曰く、言ってしまうと協力してくれないから。)

まず、始めに望に狙いを定め翻弄するが、何の因果か承太郎達と合流され、正体がばれた挙句、交戦する羽目になった。

だが、持ち前のスタンド能力で翻弄し、望を背後から奇襲をかけようとしたら、「ミニット・エンジェル」が望の意思とは関係なく攻撃した為失敗。

一旦退却しようとしてコンセントに入り込むが霧にその延長線の電気コードを承太郎の前に突き出させるようにした事によって逃げていた「チリ・ペツパー」がそのまま勢いよく飛び出して、「スタープラチナ」のパンチを浴びて、一旦再起不能になった。

その後、まといに布化され、さらに、駆け付けた愛によって居場所を知られ、望とまとい以外でその場所へ行き（布化したスタンドは持つてこないで）、絶体絶命のピンチになるも運よくスタンドの布が風で電線まで飛ばされた事で、スタンドが電気になり、承太郎達が来る頃には音石の所まで戻す事に成功して承太郎の連絡で布化が解除した瞬間、この場で一番弱そうな愛を攻撃しようとして謀る。

が、それによって愛の秘められていた「ACT2」が発現し、叩き壊すも、その異常な執念に完敗し、弾丸の嵐を食らい完全敗北。再起不能になった。

その後、SPW財団に連行された。

スタンド：レッド・ホット・チリ・ペツパー

【破壊力：A　スピード：A　射程距離：A　持続力：A　精密動作性：C　成長性：A】  
 スタイル：遠距離。パワー型　分類：同化型

電気を操り、電気と同化する人型のパキケファロサウルスを思わせるスタンド。

電気を通っている所なら何処にでも移動可能であり、他の物質も電気と同化させて持ち運びが出来る。

射程距離は何十キロとあるが、電気を吸収すればするほどスタンド自身が強くなり（パワーはジェットエンジン程で、スピードは光速に近い）、一層輝きが増す。

弱点はスタンドが電気と同化しているため、電気が失うとパワーダウンに留まらず消滅（＝本体の死亡）してしまう危険をはらむ（同化型のため自由に消す事ができない）。

また、電気抵抗の影響も受けるため、絶縁体の内部では電気供給は出来ず、逆に導体である海などに落ちると電気が拡散してしまう。

・パルチエ・トミート

犯罪組織「ワイルドドッグ」の幹部のスタンド使いの男。25歳。独身。

5月26日生まれで、アメリカのノースカロライナ州出身。身長が173cm、体重が63キロ。A型。

三年前までは日本でも仕事をしたことの事がある警察官でありながら、仕事内容が死

体を単に保管しておくだとか、死体の遺族に連絡を送るといった本人曰く、「無意味な仕事」だった為、やる気を無くし、警察を辞めて組織に入団した。スタンドはその時発現した。

冷静な行動と判断力を持ち併せ、エルメエスやあびるを初めとする人達の言霊を奪い、優勢に立っていたが、可符香と対決している時、彼女の生意気な態度と、名前を『答えさせ』ても魂を奪えることができない事に驚愕し、次第に冷静さを失い、彼女の『質問』に対して、『解消』と答える時に、石をぶつけられ、自分が『解除』と答えてしまつたと思ひ込まされて、自らの能力の性質を利用され、呆気なく能力が解除して敗北。

その後、可符香に対して能力を使用しないで名前を答えるよう要求したが、それで、「赤木杏」と可符香が答えた事により、後方に尻餅をつき、その名前の人物はもう五年前に死亡している筈だと訴え、頭がこんがらがった。

その時、彼女達がこの学園に集まる意図に気付いた為、可符香はこれ以上彼の口から余計な事を漏らさないためにパルチエを岩で空中に巻き上げ、体中に岩をパルチエに纏わせて、彼の体をその岩で圧縮させた事で、内臓が破裂して死亡。

その無惨な死体はそのまま岩に閉じ込められ、その岩の塊を『パルチエの墓星』と名付けられ、グラウンドに放置された。

名前の由来は野菜の「トマト」。

スタンド：クイズパレード

【破壊力：なし スピード：なし 射程距離：C 持続力：A 精密動作性：E 成長性：E】

スタイル：近距離操作型 分類：人型

大きな壺を持った妖精の様な姿をしたスタンド。

本体が質問した時、その質問に適する事を答えさせ、その言葉を言霊として奪う能力。そのため耳が聞こえなかったり、遠すぎて聞こえなかったりすると発動しない。

言霊は、物に在る名前で、名前が無い物はこの世に存在できないため、奪われるとその言葉を言えなくなったり、使えなくなってしまうたりする。

違う事||嘘でも言っていないが、質問に適している答えとは逸脱したり、無回答だったりすると強制的に魂を奪われてしまう（逸脱した答えだった場合は3回まで言える）。

又、複数人を同時に相手できて、一旦射程距離内に入った標的がそこから出るとその人物の言霊を奪える。

答えるという事は、その答えで間違えないという確固たる自信があることを心の中で「認めて」喋るという事なので、一度その答えを心の中で「認める」と喋る時に内容を変えても最初に「認めた」言葉の言霊が奪われる。

これらの方法で奪われた言霊を取り返すには本体に奪った言霊の言葉か「解除」と言わせるもしくはは言ったと自覚させる。

又、言霊は魂同様、繊細な代物の為本体が死んだり、気絶すると言霊は持ち主には戻らずこの世から消滅してしまい、永遠に失われたままになる。

・シアンIIアミグダリン

世界中をまたにかけるプロの女暗殺者。スコッチと数回任務で共に行動したことがある。

口癖は「くつうことよ」。スタイルは良い割に露出度の低い服装をしている。

標的に気付かれずに毒殺するスキルを持っていて、それ故に毒を知り尽くしている。

仕事仲間だった理由でスコッチに自分の小遣いの半分をくれるという条件で雇われて、パルチエが虐殺された後にひよっこり現れた。

自身の能力で徐倫達の戦力を二分割して襲いかかるもエンポリオと互角にやり合い、一度は追い詰めるも彼の機転によりいなされてしまった。

エンポリオにいなされたことで怒りの頂点に達して敵味方、一般人おも巻き込む覚悟で毒霧を散布するも、奈美の「普通アレルゲン」によって動作性が上がった「ウエザー・リポート」の空気操作で止められ、身動きがとれなくなる。

そのままエンポリオにライターを投げ込まれて毒霧による大爆発に巻き込まれて死亡した。

スタンド：ブラック・ミスト

【破壊力：A スピード：B 射程距離：C 持続力：A 精密動作性：D 成長性：D】

スタイル：近距離暗殺型 分類：人型

全身至る所に管が飛び出ている人型のスタンド。

その管から細胞を壊死させる毒霧を発射させる能力。毒霧を圧縮させると弾丸のように飛ばしたり、溜めるとより広範囲に発射される。

毒は本体には効かず、可燃性がある（その爆発はちゃんと本体も食らう）。

細胞を壊死（生命を絶たせる）させるため、仮に死んだ者を生き返らす能力でもない限り、治せない。

尚、毒のため感染するとその箇所からジワジワと広がる性質を持つ（だから、心臓に感染するとそこから血液を通して身体中にまわって即死である）。

・セルリー・シチュー

犯罪組織“ワイルド・ドッグ”の幹部の中でトップ5の女スタンド使い。

口癖は「くらくわい」。くせっ毛のある藍色の髪をしている。

異常なほど狂暴で、その狂暴さは常軌を逸している。

地ベタに這いつくばる人間を見るのが何よりの幸福であるようだ。

シアンの能力で分割された望と徐倫がいる方へ交戦するが、シアンが暴走した際は一旦逃げた。

そして、シアンが敗れたと知ると、再び襲いかかってくるが、承太郎の一撃を食らい、非常に憤慨した後、上空からの攻撃を開始する。

だが、アナスイや徐倫たちの連係プレーで追い詰められていき、望の“天使の小型弾《エンジェル・ライフ》”を食らい、死亡した。

名前の由来は野菜の「セロリ」。

スタンド：ストーム・ライダー

【破壊力：A スピード：A 射程距離：C 持続力：A 精密動作性：E 成長性：C】

スタイル：近距離離。パワー型 分類：装着型

翼に6つの突起物がある巨大な怪鳥のスタンド。本体がスタンドの中に入って初めて起動する。

スタンドが接触している部分の空気を自在に操れる能力を持つ。突起物は銃のように中が空洞になっていて、そこに空気を押し込んで弾丸のように発射できる。

スタンド自体はかなり丈夫で、大砲レベルの攻撃に耐えるほどの防御力を有する。しかし、弱点として、顔面は守れない。

To Be Continued . . . ⇒

## 第貳拾話 糸色望と2のへ組その①

「パンドラの箱」。

その中には災いが入っているという箱で、『触れてはいけないもの』や『知ってはいけないもの』として今日でも使われる一種の慣用句である。

つまり、望たちの『秘密』をこれから知る承太郎たち五人は「そいつ」に触れることになるわけだ。

現在8時50分。約束の9時より少々早く「糸色医院」についた5人であった。

昨日の騒動で疲れが出てもおかしくないのに不思議とそんな気にならなかつた。どうしても『秘密』を知りたくて、おちおち寝ていられないからだ。

「糸色医院」は今、シャッターで閉じられていて、入り口の扉が見当たらない。辺りも奇妙なほどに殺風景だった。

やがて、固く閉じられていたシャッターが開き、中から男性が出てきた。

その男性は医師らしく白衣を着ており、メガネをかけていて、その容姿は糸色望に似

ていた。

「お前……望……なのか？」

「ナルシソ・アナスイさん……ですよ。残念ながら私は望ではありません。その兄の糸色命いとしまいことと言います」

出てきた男が望と似ていたので目を丸くしたアナスイは確認するが、彼は望ではなく、その兄で医院を営んでいる命だった。

自己紹介ついでに5人全員に名刺を渡す命。その名刺を見てちよこんと置いてあるものの名前を言うような心情でエルメスは呟いた。

「糸……色……命??…『絶命』??」

「『絶つ……命……うああああああああああああああああああああああああああああ!!』  
ドスン ドスン ドスン

「先生!!落ち着いてください!!」

エルメエスの呟きで半狂乱になって壁に頭突きする命。それを見て近くにいた看護婦はそんな命を止めにはいった。

五人全員がデジャブのようなものを感じて、「ああ．．．兄弟なんだな．．．やつぱ」と思つた後、ようやく落ち着いた命が話しかけてきた。

「アハハハハ。いやゝゝゝお見苦しいところを見せてしまいましたねえゝゝゝ。安心してください。『ごういう』のは慣れっこなので．．．」

「いや．．．あの．．．なんだ．．．何ていうかその．．．あの．．．すまん」

「いやいや。それより望が待っているのでどうぞあちらに．．．」

立ち直つた命を見ると、罪悪感というものが湧き出て、エルメエスは顔向けできず、謝つた。

命は望が待っているからと話を打ち切り、承太郎たちを奥の通路へ案内した。

そして、五人は通路を進むが、その通路はすぐに行き止まりになっており、正面には巨大な絵が掛けられており、右側には診察室があつた。

「診察室に入ればいいのでしょうか？」

「いえ。その必要はありません。入る部屋はそこではなく、ここ」ですから」

「えっ!?!そこって・・・どういふことですか？」

「見れば分かりますよ」

診察室に頭だけ入れて、辺りを見渡すエンポリオだが、命に間違いを指摘され、かつ、巨大な絵に指を指してより多く頭の上にはてなマークが出た。

それをよそに命は絵の下側の額縁を両手で掴み、引き上げた。すると、大ききの割にたやすく引き上げられ、壁に組み込まれている何らかのセキユリティー装置があり、その装置にパスワードを入力して、胸元からカードを取り出してかざすと、セキユリティーが解除されて、壁の一部がドアとなり開門した。

入り口は妙に薄暗く、監視カメラも無数にあった。そしてそのまま下へ続いていた。

「この中です。足下に注意して明るい部屋がある階まで降りてください」

五人は命に従って降りるが、エルメエス、アナスイ、エンポリオは言葉にできないほど先程の出来事に仰天する。ただ、空条親子は全く動じなかったが・・・。

最前列に承太郎、最後列に命がいる状態で地下を何階か降りると明るい部屋があるので承太郎はそこに入る。

その中には多くの白衣を着た研究者らしい者がいて、最新精密機器の一式が配置されていた。

そして、その中の円形テーブルに置いてある紅茶を飲んでいる望がいた。

「午前9時・・・時間通りに来ましたね」

「ああ・・・なんせこれから『秘密』とやらを知るんだからな」

承太郎が来たことに気づいた望は腕時計を見た後イスに座り、カップを皿の上に戻した。

そして、承太郎が挑発的なセリフを言つて、研究者たちは彼らの存在を初めて知覚して、自分がしていた仕事を中断して、五人に視線を向ける。

「みなさん。ご心配なく、私の客人です。速やかに持ち場に戻ってください」

気まずい空気になりかけたので、命は研究者たちの警戒を解かせた。それによつて、

張り詰められた空気が緩んで、研究者たちは自分の持ち場に戻った。

それを確認すると、命は五人を円形テーブルに招き入れ、席につかせて話し始めた。

「さてと、改めて言いますが、ようこそ。糸色医院の秘密の研究室へ」

「研究室ねえ〜。よくそんなものをここに作れるねえ〜」

「仕方ないですよ徐倫さん。ここで取り扱っているものは非常に『危険なもの』で、誰にも知られる訳にはいかないのですから」

「ほお。ではその『危険なもの』は何処にあるんだ？」

「あそこの・・・あのシエルターの中の棺に収監してあります」

「棺の・・・中だと・・・？」

命、徐倫、望、承太郎は会話の中に入り、『秘密』を共有し始める。そして、この研究対象の『危険なもの』が保管されているシエルターに彼ら全員は近付いた。

そのシエルターは近くに寄れば寄るほど迫力が増し、いかにも頑丈であることが理解できた。

「ふ〜〜む。悪いがシエルターを開けてくれないか？」

「ええ、構いませんが皆さんはまずこれを着てください」

「ん!?!手袋ツ?」

「そうです。これから見る“もの”は手袋なしでは見ることはできませんから」

承太郎がシエルターを開けるよう言った時、望は五人全員に手袋を渡したので、不思議に思う。望が正しければそれほど危険なので、この場には異様なムードが流れた。

やがて、厳重なセキュリティーチェックを受けて頑丈なシエルターが命によつて開いた。そして、望と命の二人で中の棺を引っ張り出した。気がつくまで辺りには研究者らはおらず、棺との距離を充分に空けて近づこうとはしなかった。

「よし……それでは中身を確認させてもらおうぞ「お待ちください、承太郎さん」……なんだ……望……」

承太郎が棺を開けるためにふたに手を置いたとき、目つきが鋭く、どこか必死さが窺える望が待ったをかけた。

何故こんな時に中断させたのかと思っている承太郎は渋々望の言い分を聞いた。

「私はあなたたちを信頼しています。例え「彼女」を見ても決して悪用しないと……」  
 「「彼女」？ どういうことだそれは？」

「我々にとつて『悪用』が一番恐怖していることです。世界を乱世にしてしまうという「恐怖」が……」

「だからッ!!それがどういうことだつて言つていやが……「ガララン」……ッ!!こ……こいつは……!?」

望の台詞がじれったく感じて、勢いよくふたを開けた承太郎は「その中身」に驚きを隠せなかった。他の四人も然りだ。

「その中身」は白い装束に包まれている15〜16歳の「少女の遺体」が入っていた。

「そう……それが我々が必死に隠していたもの……  
 ドーーーーー  
 「赤木杏あかぎあんさん」です」

彼女を見て五人の誰もが口に手を覆った。あまりにも意外なものが入っていたので、しばらく口から手を外すことはできなかった。

「パルチエの言っていたことはまさか……これ”のことだったとは……しかし、どうしてこんなことを……」

「論より証拠ですね。しばしお待ちを……」

以前パルチエが死ぬ間に悟ったことがこれだと理解した徐倫だが、それと同時に何故彼女の遺体を保管する必要があるのかと言う疑問が浮上したが、そこは望が一つの瓶を用意して証明してくれた。

その中には一匹のゴキブリがいて、そのふたを取り、逆さにしてゴキブリを外に出して、杏の上に落とした。

グアブギヤアア!

「ゲ……!!?こ……こいつ”生きているのか”!?!ゴキブリを……”取り込み”やがったああああああ!!!」

『スタンド能力』 ツ!!明らかにこれは『スタンド能力』だツ!!」

杏の上にゴキブリを落とした途端、彼女の肉体自身がゴキブリに食らいついたのを見

て、エルメスは戦慄し、この現象をスタンド能力かと思なしたエンポリオ。

二人がそういったリアクションをしている間に、ゴキブリは彼女の肉体の中に消えてどこかに消えてしまった。

「そう。彼女に発現しているスタンド・・・名を『ヴードウー・キングダム』と呼んでいるこの能力は生命ある物の肉体を食らうものことです。そして能力の性質上、肉体は不死身と化し、永久に死なないのです。その証拠に私もそのスタンドを移植して完全なる不死身の体になっているのです」

「なるほど・・・そういうことだったって訳か・・・死んでも尚発現しているスタンドは聞いたことはあるが、実際見るのは初めてだ」

望のあり得ないほどの再生能力について理解できた承太郎は、初めて見るタイプのスタンドに好奇心が芽生えたが、ふと何かを思い出した。

否それだけじゃない。仰天のオンパレードだったため、忘れていたが根本的なことを思い出した。

「彼女の顔・・・どこかで見たことがあると思ったら・・・この顔、お前のスタンド



望の口から語られそうな時に、入り口から聞いたことのない声が聞こえた。承太郎たちは振り返ると、そこには望に容姿と服装までよく似ているが、明らかに発しているオーラが違う男がいた。

それだけではなく、その彼の後ろに四人の男女が後からやってきた。その一人は髪や体を洗っていないのかフケや垢だらけの容姿で知的と思わせる眼鏡をかけた小汚い男性。もう一人は前述の男とは真反対で清潔感に溢れ、着物を綺麗に着飾っている大和撫子風の少女。そしてその彼女に付き添っている初老の執事。最後の人物は承太郎達も既に面識のある女性。

「え……縁えにし兄さん……それに景兄けいさんに、時田ときたに、倫もりん……それに智恵先生まで……全く、何も全員来る必要はないでしょう……」

「バラすんですから今のうちがいいでしょう？糸色先生」

「そうですねよお兄様。抜け駆けは許しませんよ」

「ここにいる智恵先生以外全員初登場なので。後々出てきたら『あれ？誰だこいつ？』みたいなことは我々は避けたいのですよ」

「尤もな理由をつけるなら全員お前に協力しているだろう、望。伏線回収なんてまどろっこしいことは作者も疲れるし、忘れちゃうからいいんだよ」

「そういうことだ望。ここは我々のわがままを聞いてくれ」

「……仕方がないですね……」

少々説明するのがめんどくさいほどカオスになってしまったが、とにかく望の代わりに縁が重要な発言をしてくれた。

「十五年前だと……!?」

「そうです……私が当時高校入学して間もない時まで遡らなければなりません」

「一体何があったんだよ、おい……」

承太郎とエルメスが驚きを隠せないほど昔のことを話すつもり。その時、彼の表情が哀しく見えていた。

そんな哀しき思い出を彼はまるで昨日のように鮮明に振り返っている。

15年前……1997年の春。

高校生になったばかりの望だが、早くも憂鬱になっていた。

それは受験のリバウンドの「燃え尽き症候群」ということではない。クラスでいじめられているということでもない。

それは・・・怪しげな部活に入ってしまったことで起こった。

### 「ネガティブ部」

一時のテンションで入ったものの全てがネガティブなことをする後ろ向きな部活だったので、希望に満ちあふれていた望には痛恨の大打撃を受けてしまう。

やめようにも入部時にもらい、装着したポジティブなことを考えると孫悟空の禁箍児（きんこじ）のように締め付けるメガネが外れないので、強制的にネガティブにされ、やめられなくなってしまう。

そして追い打ちをかけるように「恋愛」というものに疎遠になってしまったて、恋人ができていくクラスメイトの大半と大きな差が生まれ、絶望の淵に立っていた。

しかし、神様は誰しにも平等に幸せを与えてくださるようだ。「彼女」との出会いはそんな状態に耐えきれず、ついに発狂し、散り終えそうな桜通りを爆走していたときだ。

望は何か小さいものがその通りを横切ろうとしている時に出くわし、ぶつかって尻もちをついた。

尻もちをついた望はぶつかつたものを確認すると、それは幼稚園生の少女だった。しかも仰向けに倒れていた。

その頭にたんこぶをつけている左の前髪に十字型の髪留めをつけた少女は起き上がると、目に涙を浮かべて泣きださずにただけろつと笑って彼に話した。

「えへへ。みんなとはぐれちゃった」

その澄んだ、闇を感じない声で望の何かが救われた。当時の望はそれが何なのかまでは知ることはできなかったが……。

とにかく、望はその名も知らぬ少女が気の毒に感じて、彼女の担任のもとに送らないといけないと思い、彼女を近くの空き家に連れて行って入った。

中には誰もいなかったが、幸い電気は通っているので電話をかけて迎いに来させようとする望。そこでその少女に何処の幼稚園かを聞こうと彼女を捜すと、ちょうどテレビの前にいた。

電源をつけてその番組を石のようにじつと見ている少女に話しかけようとした時、思

わぬものを見てしまった。その番組では臨時ニュースが流れており、そのニュース内容が望の心臓の心房に至るまで硬直させた。

その内容は、幼女の失踪について取り上げられており、文京区のある幼稚園の園児―赤木杏（あかぎあん）―5才が昼にクラスの皆と散歩をしている間に姿が見えなくなっ  
てしまったというものだ。

それで捜索願を出して、警察が誘拐であることを前提として捜し回っていることを聞いた瞬間望は冷や汗をかきだして、がたがたと震えだした。そのニュースで出た幼女の顔とこの少女の顔とのが一致していたからだ。

つまり、その幼女を怪しげな家に連れ込んだ・・・どうあがいても誘拐犯としか思われないような状態であることを思い知って、これ以上事態が悪化しないように手を回すしかないと決意した。

早速、電話の受話器を取り、糸色財閥の信頼できる人員にかけて、一連の事件をなるべく穏便に済ませるように手配させて、彼女を無事に送り届けた。

一時はどうなるかと心配した望だが、何事もなく終わってほっとした。

しかし、その時の望は知らなかったし、見ていなかった。彼の去り際をその少女、杏

が目をキラキラさせて、見つめていたことを。

そしてそれから10年の歳月が流れ、2007年、望が25歳のときだ。

からくもあの忌まわしきメガネをたたつ壊したが、あ那时的癖が中々抜けず、そのせいで職にも就けず、途方に暮れていた。

なんとか親のすねで今までやって来られたとはいえそろそろ限界だろうと思いつながら、必死に就職活動に励む望。

しかし、ここぞつて時に癖のネガティブ思考が働きかけ、その機会を失っていた。

そろそろ彼のメンタルが耐えきれず、何もかもに絶望しかけて虚空を見ているときにとある少女の肩とぶつかって、彼女が持っていたビニール袋の中の本が散らかってしまつた。

そこで望ははつと我に返つて、彼女に謝りながらその本を拾い上げていると、その少女は突然くすつと笑い始めた。

「うははははは。デジャブですよ。デジャブ。幼い時にぶつかった人とあなた近いですよ」

突然何を言い出すかと思つた望だが、彼女の顔を見てはつきりと思ひ出した。10年前の「あのこと」を。

何という皮肉、何という奇妙な運命。落とした本を取ろうとする望を全て見透かしているような眼でその少女、赤木杏は見つめていた。

15歳となった杏に奇跡的に再会した望はそれをからきりに町中で頻繁に彼女と出会うようになり、会いに行くようになった。

二人は会うと何気ない話や受験の話で盛り上がり、望にとってはいやな現実から隔絶してくれる気がしてとても楽しかった。

彼女は望とは正反対のポジティブな子であるため、彼のネガティブ発言を全てプラスにしてくれたので、彼は次第に彼女を女神のように思えてきて、尊敬を通り越した恋心のようなものも芽生え始めた。

そんなでもって望は思い切って彼女に人生初のプロポーズをしたところ、何の拒絶もなく彼女は受け入れた。

それからしばらくして彼女の両親の耳にも入ったのか彼女の家に呼ばれた。汗が止まらなくなるほど緊張して望はやって来たが、予想外にも彼女との交際をあつさりと承諾してくれたので、望は内心奇妙と思いつながら話ほとんどん拍子に進んでいった。

望と杏との交際は順風満帆であるように思われたがここである異変が起こる。

彼が誕生日を迎えた時、彼女のおごりで誕生日を喫茶店で祝った帰りに、彼女は咳をした。それも血を吐くほどだ。

それに仰天する望に大丈夫ですよと痩せ我慢をする杏だが、数歩歩いた瞬間倒れ込んだので、彼は119番を呼んだ。

杏が病院に運ばれたことを知ってやって来た両親に望は彼女のことをおそろおそろ聞いた。両親の口は重たかったが、杏のパートナーとして話すべきだと思つて彼女について話した。

実は彼女の左脳にはガンがあつて、それに伴い合併症が発症して彼女の体を衰弱させ

た。

既に現代医術ではもう手の出しようがないほどの深刻なもので、余命は約半年と推測された。

だからせめて、両親は彼女の思うがままにやらせてあげた。望とつきあうのもその一つだ。

それを聞いた望は力がただ抜け、ずっと目を背けていた現実を思い知った。残酷な現実を。

それでも杏は前と何も変わらず前向きに生きていた。望からしてみると空元気をしているに他ならないと思っていたが――。

だが望はそんな彼女を受け入れた。自分を受け入れてくれたように、彼は彼女の望むことを全て叶えてやった。彼女の寿命の続く限り。

望は側にいた。どんな時でも……。彼女の笑顔を守るために……。

それが応えたのか医師達が予想していた月日を超え、彼女が行きたい高校の受験に受かり、卒業式に出席した。

既に3月末で彼女はガンを患っているとは思えないほど元気がいっぱい年相応の若々しさがあった。

だが、運命って奴は彼女を幸せにはさせてくれなかった。

4月になつて間もない頃入学前の準備をかねて二人は都会でデートをしていた。

そのところ日差しに弱くなつた杏はつばあり帽子をかぶつて望と練り歩いてた。

「これくらい私だけでもいけると思いますが……」

「大丈夫です。望さんと一緒なだけで心が落ち着くんです」

彼女の体の心配をする望だが、一緒にいると落ち着くと言われて少々赤面する。

そのとき電光掲示板の臨時ニュースにここより少し離れたところで強盗事件が発生したと報道され、物騒だなあと二人は思った。

その後、横断歩道渡ろうとすると杏は元氣いっぱい走り出して望より先に渡つて、早く来るようにピョンピョン跳ねている。

やれやれと思つた望は少し急ぎ足で渡つてみると、ふとそよ風が吹いて、杏の帽子がさらわれて、望より後ろ数メートルの所の横断歩道に着地した。

まだ信号は点滅していないので望は早速彼女の帽子を取りに行った。

そして、帽子を拾い上げた瞬間、望は誰かに強く突き飛ばされて前のめりに倒れ、その直後に車と急ブレーキ音と何かがぶつかった鈍い音が聞こえた。

突き飛ばされた拍子にメガネを落としたので、それを拾い上げて後ろを確認すると、柵と標識にぶつかったワゴン車とその手前で血まみれになって倒れている赤木杏がいたのだった……。

To Be Continued . . . ⇒

## 第貳拾壹話 糸色望と2のへ組その②

赤木杏は望が彼女の帽子を取りに行っているときに頭痛に襲われた。否、ただそれだけではなくビジョンも見えた。彼が帽子を拾い上げた時、ワゴン車に轢かれて死ぬところを。

急にそんなものを見て寒気が彼女を襲い、震えが止まらなくなった。こんなことが気のせいであつてほしかった。

怖くなつた彼女は望のところに駆け寄つたが、その途中で黒い車がものすごいスピードで交差点を曲がり、望のところに突つ込むのを見た。あれで見たのと同じ車が。

それで杏は望を守ろうと彼を突き飛ばした。何故かこの時だけは思つていた以上に体が動いてくれた。

そして、突進してきた車の方へ杏が向く時には目の前にはその車のバンパーがあつた。

杏が血まみれになって横たわっている光景を見て、望の時間が止まりかけたが、一歩おぼつかない足を動かして前進し、彼女を抱き上げた。

抱き上げたときに吐血をして意識を取り戻した杏を望は優しく介抱してやった。だが、彼女は既に虫の息で目の焦点も合っていないかった。

望は涙が止まらなかった。こんな彼女に何もしてやれないことに涙した。その時、彼女も涙を流していた。彼女らしくなくぼろぼろと……。

「生きたかった……。本当は生きたかった……。もつとずつと貴方と……。楽しい時間も苦しい時間も一緒に……共有したかったのに……。なんで…….な  
んでなの……?」

「大丈夫ですよ。救急車が来てくれれば助かります。気をしっかり持つてください杏さん  
!」

「もうダメだよ望さん……。もう無理だよ……。体の感覚がなくなってきたあなた  
の体温しか感じない……。」

「ぐ……ぐ……は……ぐ……杏さん……。」





ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

屍となった杏をそつと地面に置いて、顔の陰を濃くしながら近付く望。だが、すぐにその車は走り出して追いつけない距離まで離されてしまった。

「アニキ。やべえすよオレたち殺人の罪まで着ちやったよ。どうするよ」

「うるせえなさつきから。そんなもん捕まらなければどうもならねえよ」

「そ．．．そうつすよね。うはははははははははははははははははは」

「そうだけ。げへへへへへへへへへへへへへへへ」

子分の男は杏を殺して罪が重くなったことに怯えるが、兄貴分の男は運転しながら警察に捕まらない限り問題ないと一蹴する。子分は彼の言い分が正しいと思つて二人して笑い出す。命の重さをまるつきり分かつていないこの二人こそゲス野郎という言葉はふさわしいだろう。

そんなときに子分の男はあることに気付いた。

「ねえアニキ。さつきから景色変わってくない？」

「はあ??お前何言・・・うッ!!・・・おい・・・おい!!オレの『脚』・・・どうなってんだ!?!」

「いや・・・え?脚?アニキの脚がどうしたって言うん・・・でえええええ!!?アニキの脚がちよん切れているウウウウウウ!!ひいいいいえええええ!!」

景色が変わらないことに疑問に思っていた子分の男は兄貴分の男に聞いたが、そのことよりもまず自分の脚がいつの間にか切られていたことに気付いた。

子分の男はアクセルを踏んでいるはずの脚が切られていて、そこから大量の出血が出てくるのを見て驚いた。そして、ここに近付く者を感じ取った。そう、糸色望だ。

「どんな気分ですか?恐怖は・・・痛みは・・・しかし彼女が受けたものはこんなものじゃあ足りませんよ!!」

「き・・・きさまは・・・」

「ああ——気にしないでください。思い出す必要はこれっぽっちもありません。何故ならあなた方二人は地獄の業火に焼かれて死ぬんですからね」

アニキが座っている右側の方から望は顔を出した。車の窓は開いていたので手元か

らライターを取り出して火をつけた。この時になって二人は至る所がガソリンでぬれていることに気が付いて、自分の男は望がライターを車内に入れる前に銃を抜くが、銃を握っていた指が引き金を引く前にポキリといやな音を立てて折れた。

「いぎてえええええええええええええええええ!!」

「・・・?!ほおお。なるほどあなたたちには“彼女”が見えないのですか・・・」

指が折れた苦痛で銃を落として、悶える自分を見て望は不思議に思った。それはさつきから彼の側に“半透明の少女”がいるからだ。しかも死んだ杏に似た。

このことから望は“彼女”が他人には見えないのだと結論づけた後、躊躇せずライターのガソリンが染みついた車内に投げ入れた。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオ

「ぶがあああああああ!!燃えるウウウウウウウウウウウ!!こんちくしょううううううううううう!!」

「ぎゃああああああああああ!!熱いよおおおおおおおおお  
おおおお!!」

車内が炎に包まれて苦しみだす二人。その頃望は燃える車を後にして隣にいる“彼女”を見つめた。杏に似たその子を見る内に“彼女”は自分の力で生まれた者だと奇妙だが理解した。直感で理解した。

ボバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン

黒いワゴン車はやがて爆発炎上し、全体的に炎が上がった。

望には罪悪感はなかった。平気で杏を殺したのだから当然の報いだと思ったからだ。

そして一人、恋人の亡骸を見てうなだれているのだった。

望はその後杏の葬式へは行かなかった。弔いをしなかった。ただ何もしなかった。

何もしたくなかった。

彼女の両親もそれを理解してくれて葬儀を執り行った。無理に彼を連れに来させなかった。

望はただ彼が住んでいる家でうなだれ、悲しみ、後悔して、眠り、そしてうなだれた。今の彼には食べることや飲むことなどの渴望は湧いてこなかった。湧くはずもなかった。

それを四日間繰り返して本当に彼女の後を追うことになりそうな時、彼の家の扉が強く開けられた。そして、やって来た男、糸色命は望を見つけると堂々と声をかけた。

「来い望。お前に来てほしいところがある」

痩せ細り顔に濃い隈をつくった望は今更何処に行こうって言うんだよと思ったが、渋々立ち上がって命の後を歩いて行った。

「荒れ果てたな・・・お前は。恋人に先立たれたショックで危うく死ぬ一步手前だったとは・・・兄として情けないな」

「恋人のいない兄さんに何が分かるというのですか？愛する人を亡くすつらさが・・・」  
「はは。確かにそうだな」

命は望をからかうように話してくるので望は目元を鋭くして苛立ちながら返答した。自分が言い出したことに望がとげとげしい台詞を返してきた後、少し笑って自分の言動に反省した命は変わらず歩いていく。

望はさらに苛立った。一体何処に兄は連れて行こうとしているのかと。

「さあ、着いたぞ」

「に・・・兄さん。どういうことですか？これは・・・」

しばらくして、命は目的地に着いたと望に報告した。そこは都内でも有数の病院だっ

た。

どうしてこんなところに・・・と心の中で望は思うが、その理由を聞こうとするときには命は病院内に入ったので、聞きそがれてしまった。

流石に命は医者の方へ運ばれたのである。病院の受付をさくさくつと終わらせて、命が行こうとしている病室まで歩いて行った。

その途中で命はさつきまでのほほんとした表情とは打って変わって真剣になって望に問いかかってきた。

「それでだ望。お前の恋人、赤木杏が臓器ドナーに入っていたことを知っているか？」

「ええ・・・知っていますよ。実に君らしいねって褒めたことがあるし・・・それが？」

「実は臓器ドナーの件で少々・・・否、かなり問題だな」

「どうしたんだよ」

「臓器移植まではうまくいっていたんだが、その後がな・・・」

「だからどうしたんだよ」

「望・・・聞いていいか？彼女は人間なんだよな？」

「・・・ツ!! さつきからなんだよ!! いいからさつきと言えよ!!」

命は本題をもったいぶった調子で話してくれなくて苛立ちを覚えた望にやれやれと思つて1つの病室を指す。そこは「日塔奈美」という人の病室だった。

「百聞一見にしかず・・・話すより実際見た方が分かる。ただ一つ言つておく。これはおそらくお前でなければ解決できない問題だ」

命の発言により望はつばを飲み、ゆつくりとその扉を開く。そこで目にしたものは・・・・・・・・・・。

「離してよ！離してつたら!!くそッ!!うぜーぞ!!てめーらああああ!!!」

一人の少女が数人の看護婦に押さえつけられて、暴れまくっている姿だった。そして、その少女は看護婦達がひるんだ一瞬について、病室にあった鋭利なものをひった

くってそれを自分の首に突き刺して肉を抉った。

ブシューーーーーーッ

「……ッブ!!」

「な……なんてことを!!」

その少女がつけた傷はあまりに深く即死は免れないほどなので、彼女は少し苦しみなから死んだ。

望はどうして自らそんなことをするのか分からなかった。しかし、命が言っていたことがこの後すぐに分かった。

その少女が抉った肉と噴き出た血がみるみるその傷口に戻ってきて、あっという間に彼女の首は傷なんて始めからなかったかのように治った。

数人の看護婦はそれを見ると叫び声を上げて、病室絵と飛び出したが、望はそのまま立ち尽くした。これが杏の臓器を移植した結果なのだ。

「一体……これはなんですか?」

「それは私が聞きたいですよ。糸色望さん」

「紹介するよ望。こちらの女性は新井智恵先生。臓器移植コーディネーターで今回赤木杏さんの臓器を彼女や他の人達に移した責任者だ」

「……んには」

望が呟いた直後に白衣姿の女性が突然病室に入ってきた。彼女の入室と同時に入ってきた命はその女性、新井智恵を望に紹介した。

命に紹介された智恵に望が軽い挨拶を済ませた後、智恵は望に再度質問する。

「それで改めて問いますけど、彼女は一体何者ですか？」

「……ただの……私の恋人です」

智恵に問われた望は杏をただの普通の女の子だとしか答えられなかった。それ以外の答えが言えるはずがない。

そんな時、自らの体を刺して意識を失っていた少女、奈美が起き上がり、自分が死なないことをぼやきながら望の姿を見た。

「ああ……あなた。そこのあなた……私を殺してよ。私を無意味に生かさないでよ。」

ああ……ああ……私を……殺してくれよおおおお!!!

望の姿を見るや否や自分を殺すように要求する奈美に望は狼狽えてその場でじつとしていると、彼女は頭を抱えて苦しみだし、大声を出して彼女の体から“半透明な人型”を出現させて襲ってきた。

その“人型”の出現に望はびつくりするが、反射的に一週間ぶりに“彼女”を出して、その“人型”を返り討ちにする。

その“人型”に一発お見舞いしたとき、同時に奈美は後方に吹っ飛び、壁に激突した後に気絶してしまった。そして、望は彼女も自分と同じ能力を持っていることと今ここではつきりした。

そんな時、倒れた奈美をベッドに運んだ命が望に急に問いだした。

「望……お前今何をした。彼女をどうやったんだ」

命や智恵にはさつき起こったことを認識していないことに驚く望だが、彼は二人にありのまま起こったことを伝える。

まさしくファンタジーな内容で意味がちんぷんかんぷんですぐには理解に苦しむ命

だが、それをある程度理解したとき、ある事実を望に伝えた。

「望。実は二日前杏さんの墓を掘り出したところ、きつちりと火葬されたはずの遺体が焼け焦げていたが人間の形をとどめていた。否それだけじゃない。彼女の墓を掘るきっかけになったのが、彼女のように臓器を移植した十数名の少女が不死身になり、ずっと何かに怯えて、死を選ぶようになるんだ。しかも・・・」  
「どうかされましたか？」  
「・・・ッ!!望ッ!!来たぞッ!!」  
「・・・ッ!?!」

命が話している途中で気絶していた奈美が起きて、さつきまでとは打って変わって丁寧な言葉で話し出す。

命が慌て出す理由がまだ分からない望は一応奈美を見ておいた。そんな彼女は起き出して早々色んな所を動いて何かを探し出した。そして該当するものを見つけた後、それを左前髪につけた。それは十字型の髪留めだった。

(・・・ッ!!ま・・・まさか・・・そんなことが・・・杏さん!?!赤木杏さんですか!?!  
あなたは・・・)

そのバレッタを見て、奈美を杏かと思ってしまう望。奈美はそんな彼を見るとくすつと笑うとまた眠りについた。

望には緊張が走る。死んだはずの杏のような仕草をする奈美に。

「まさか兄さん……これは……いやありえない。ありえるはずが……」

「いえ、実際にありますよ。受容者は稀にドナーの記憶の一部を受け継ぐことがあり、これを『記憶転移』と呼ばれています。これは脳だけでなく臓器も記憶しているから起きるそうです」

あれが杏だと思ったが、すぐにそんなことはないかと否定する望。ですが、实例は存在するので智恵は肯定した。

つまり、さつき笑ったのは彼女自身であると言っても過言ではない。

「いや、まだだぞ望。まだお前に説明していないことがある」

突然命や智恵の声とは異なる声が聞こえたので辺りを見渡すと、病室に望とほぼ同じ

柄の着物を着た男性が入ってきた。

望はこの男を知っている。何故なら彼の一番上の兄である縁（えにし）だからだ。

「縁兄さん！父上から縁を切られた兄さんが何故ここに……」

「縁を切られた……どうやら勘違いをしているな？縁は切られてはない。糸色家の当主として陰からお家を支えてきたんだ。元来糸色家の当主は前当主が亡くなるまで表には出ないというしきたりなのだ。暗殺や謀反による討ち死にを防ぐためにな。これが現在まで栄え続けるための策だ」

「そう……だったんですか」（し……知らなかったああああ）

糸色家の長男である縁が現れて驚く望。というのも縁は一家から絶縁扱いとされているため、糸色家の行事や有事の際に居合わせていないのだ。なので会う機会が皆無だったので望は縁の再会にびっくりしたのだ。

だが、望が知らないだけで縁は当主として陰で糸色家を支えていたのだ。

とにかく望の誤解が解けたところで話の腰を戻し、何故この場に縁が現れたのかを望に縁は説明した。

「ここに来る前に他の全員を見たが、全員同じ境遇を持つている。それは、全員自殺未遂者だつてことだ」

「ええ!?!自殺未遂者つてこの子が!?!本当なんですか智恵先生!」

「ええ、そうよ。私は彼女たちを助けてあげたくて・・・生きてほしいために移植したのに・・・これじゃあ私のやったことが悪魔と変わりないわ」

縁が彼女たち受容者レシビエントが全員何かしらの自殺をしたが生きながらえてしまった者だと知つた望は仰天した。

智恵は自分がしたことが結果として単なる悪魔の行動だつたことを悔やんでも悔やみきれなかつたようだ。

「だが厄介なことに彼女たちと同じ境遇に陥り亡くなつたが本当は生きてかつた霊が彼女たちを集まり始めている。その霊を成仏させないと彼女たちはその霊に怯えながら暮らすことになる。彼女たちが自殺を繰り返すのはそのせいだ。それに聞いたところによると、彼女たちは死なないそうだな。これでは彼女たちの心は砕け散つて確実に廃人になるだろう。それは避けなくてはならない」

「ど・・・どうすればいいんだ縁兄さん!!」

「一つだけある．．．何年かかるか分からんができないことではない!!彼女たちの自殺理由の共通点は『学校』に関係することだった。これから考えて霊たちは学校を卒業する前に亡くなった。それなら死後結婚同様に彼女たちを依り代として偽りの学園生活を送らせて全ての霊を未練の一つもなく満足させる。それが唯一の手段だ。これしかないッ!!」

靈感のある縁は彼女たちが自殺を繰り返す原因として昔に彼女たちと同じ境遇で死んだ霊に取り憑かれていることとこのままでは彼女たちは悲惨な運命に飲み込まれることを指摘した。

受容者となった彼女たちを救うために偽りの学園生活を送らせる案を縁は提案するが、望は一つ疑問が浮かび上がって縁に食いかかった。

「ちよっ．．．ちよつと待ってください!学園生活を送らせる．．．ですって?校舎は父上に頼めば準備してくれるとは思いますが、問題は担任です!!担任は誰にどうするんですか!」

「担任?もちろんお前だ望」

「何ですって!」

校舎は準備できるとして、彼女たちの担任は誰がやるのかを聞いた望だが、縁から自分ができることを言われて驚いた。

慌てふためく望に縁は根拠となることを話して落ち着かせる。

「望……お前しかいない。お前も見たであろう。彼女たちは全員『何かしらの超能力』を持つている。お前と『同じ能力』が……我々では務まらない」

「私と……『同じ能力』——。兄さんにも見えるのですか!？」

「ああ。一応な……便宜上それは『スタンド』と呼ばれているがな。今の彼女たちだと能力を暴走させて、周りをむやみに傷つけるだけだ。正しい使い方を分からせて社会復帰させてあげられるのは……何より命の重さを一番理解しているのはお前だけだ。彼女がつなぎ止めた彼女たちの命をお前が救うんだ。守るんだ」

縁の説得により、望の心の中に何かが生まれた。死にかけて彼の心に熱く燃え上がるものがあつた。

望が生まれて初めて経験するその感覚は彼のどんな絶望をも跳ね返し、彼にある決断をさせるほどの清々しいものだった。

「命兄さん。杏さんの遺体をその後どうしましたか？」

「もちろん別の場所に移した。あんなものを放っておく訳にもいかないだろう。それがどうした？」

「彼女の細胞、もしくは血を私の体に移してください」

「……ッ!?何だと望ッ!!」

望の決意、杏の体の一部を自分に移植することを命に頼んだのでこの場にいる三人は彼の口から出た言葉の意味をしばらく理解できなかつた。

糸色望が言いそうにない言葉であつたために智恵や縁、命は口あんぐりとただただ情報処理をして、命は望にその真意を疑う。

望は相も変わらず清々しい気持ちで自分の意見を命に伝えた。

「私は彼女たちの担任になるわけです。それなら私も彼女たちと同じ立場にならなければ、真に彼女たちを理解できるとは到底思えない。死なないという苦しみを受けている彼女らが簡単に死ぬ今の私を見て心を開くでしょうか……彼女たちを救うには彼女たちと同じ運命を歩み、同じ苦しみを味わい、理解することだと思ふんです。だから

私は杏さんの力を使って彼女たちと同じ・・・人間を超えた存在になります」

杏の体の一部を移植すると言うことを望の口から聞いたので彼の考えが分からず困惑する命だが、望の覚悟の眼を見ると、言い返す気にもならなかった。

誰もあの眼を見ると止めるだけばかばかしい気になるので、三人はこのことを承諾することにした。

かくしてこのときから、糸色家、新井智恵による壮絶な極秘プロジェクトが開始されたのだった。

「これが・・・我々が行っている『計画』の全てです」

時間は再び現在の糸色医院の極秘研究所。壮大な過去を話されて、各々表情が洩る五

人。

その五人は望の悲惨とも言うべき過去が明かされてなんとも不思議な気持ちになり、言葉も出なかった。

「皆さん。どうか我々に力を貸してくれませんか？ 私は一日でも早く彼女たちの呪縛を解き放せて幸せにしてあげたい・・・それだけが私の唯一の希望なのです。お願いしませう」

不思議な気持ちになっている五人に望は彼らの『計画』の協力をお願いするために頭を下げた。一人の男が人生全てを賭けてまでやり遂げたいことを成し遂げるために頭を下げた。そこには何の哀れみもなくただそこには何の曇りもない黄金のように一貫したものがあるように承太郎は感じた。

「頭を上げてくれ・・・望」

頭を下げている望に頭を上げるよう言った承太郎は彼の眼を見た。眼だけを見た。

「望……お前のような眼を、いやこの場にいる誰の眼にもだが、私は知っている。それは空条家の、ジョースター家の血族がしている眼だ。私の祖父はそれを『黄金の精神』と呼んでいる。他の四人も持っているその意思はどんなに美しい宝石や財宝よりも気高くずつと価値のあるものだと思っている。その気高い意思を枯らすことこそ人間としての生き恥だと思っている。だから望……私の返事は『OK』だ。私は……私たちは全力で君たちの大切なものを守ろう」

承太郎の熱弁に望は上げた頭を再び下げてしまった。そして、ぼろぼろと涙が出た。これほど優しい人に会えて心の底から感謝したからだ。

「ありがとうございます……ありがとうございます……本当に本当にありがとうございます……」

涙を流しながら言った望の一言はこの場にいる誰の心にも染みこんだ。

それは人のかけがえのないものを背負い込む責任から来るもので、承太郎たち五人以外の人は改めてその責任の重さを再確認してより一層自分の行動が機敏になっていった。

承太郎たちの表だった協力がこれから彼女たちにどう影響するかはこの物語の先に期待するでしょう。

それから夕方。この時間帯には承太郎たち五人は既に帰っていて、時間的にそろそろ病院を閉めようかと思つてシャッターを下ろそうとする命だが、ふとここに一人の外国人が来ていることに気が付いた。

金髪でかなりのパーマがかかっている若い男性が一人で命のところまでやつて来たので命は一応警戒するが、その男は礼儀正しくお辞儀をした後に丁寧な言葉使いで話した。

「こんばんは。こんな時間にやつて来てしまつてすみません。僕は『ジヨルノ・ジヨバアーナ』と申す者です」

「ジヨルノ……ジヨバアーナ……確かイタリアギャングのボスですよね」

「はい、その通りです」

丁寧な言葉使いで挨拶したその男性、ジオルノ・ジョバーナが何故自分に会いに来たのか不明で頭に疑問符だらけになる命だが、ジオルノは頭の中がとっ散らかっている命に手早く用件を言った。

「実はこれを返すためにわざわざここに来たのです」  
「……ッ!!これは……まさか『カフカ細胞』!!?」

用件を言いながらジオルノは自分のポケットから肉片が入った試験管を渡した。しかもその試験管は先日研究所から盗まれた試験管である!

杏の細胞が入った試験管を唐突に渡されて驚く命は驚きのあまり思考回路がうまく回らない状態で彼が今知りたいことをジオルノに問いかけた。

「あなた方が持っていたのですか……これを」

「はい。深刻な麻薬中毒者を治すために少々使わせてもらいました。もう僕らが使う用はなくなつたので返します」

「何故!?!何故ですか!?!何故あなたはわざわざ返してくれたのですか!?!これを使えば死者

だって生き返らせる、死なない生物を生み出せるはずなのにッ!! あなたに莫大な富をもたらすそれを何故そうあっさり手放せるんですか!!? 一体何故!!?

ジョルノがその細胞をあつさり返したので、命は彼がどういう神経をしているのか全くと言っていいほど分からないのである。

確かにその通りである。普通ならそれを利用して命たちが手に負えなくなるほどの悪事を犯したり、財閥や豪邸が建つほどの莫大な富を得られたりするわけだが、ジョルノはそうしなかった。

その理由を命がジョルノに聞いたところ、彼は昼間の承太郎がしていた眼と同じ感じを漂わせながら話した。

「何故? それはこの能力の持ち主の『意思』が分かったからです。これは『死者を生き返らすためのもの』ではなく、『生者を生かすためのもの』だからです。『彼女』の意思は私利私欲のためにあるんじゃない。生きとし生ける全ての生物の純粋な心からの願いを叶えるためにあるんです。確かに僕の知人は亡くなっていますが、仮にもし、彼を生き返らせたものなら、彼はきつと僕の顔を殴り、『死者を冒瀆するんじゃないやあねえッ!!』と怒るでしょう」

「.....」

「僕は正しいと思えるような道を常に歩いていきたい。だからこうしました。 // 彼女 // の意思を侮辱させないために」

ジオルノはその能力から杏の意思を読み取り、彼女を尊重するために悪用することなく命に返したのだと言った。

これを聞いて命はジオルノが何て純粹で爽やかな人なんだと思った。彼の意思が承太郎と似たものを感じ取った後、その試験管を懐に入れて医院の中に入った。

「// 彼女 // があなたのような人の手に渡ってよかったです」

医院に入る一歩手前で命はジオルノに感謝の言葉を贈ると、ジオルノは口角を上げてふっと笑い、夕日が染みている街へと消えていった。

「何ッ!? スコッチ・ウイスキーがやられただとおッ?!?」

「はい。そのようでございます。襲撃した五人の内幹部二名、殺し屋スコッチと彼の資産で雇った面識のあるシアンの四名が死亡。彼が雇った音石明という日本人のスタンド使いが拘束。そして、敵の死者の数、0名。以上が報告されていることです」

某国某所のビルの社長室でその社長、エッグプラントが自ら送り込んだ刺客たちが全滅したことを部下から知らされていた。

そんな中で手練れのスタンド使いであったスコッチが破れたことにエッグプラントはパニックになってしまう。

「あのスコッチがだぞ・・・あんな手練れのスタンド使いがどうして敗れるというんだ!」  
「おそらくあの学園にいるスタンド使いの助力もあつてでしょう。いずれにしろあの学園の戦力が未知数のままでは我々も手の出しようがありません・・・」

10年間も殺し屋を営んでいたにもかかわらず誰一人たりとも殺せていないことにパニックになるエッグプラントにその部下の金髪で後ろ髪を束ねている若い男は尤もらしい理由を述べた後、ある提案を持ちかけた。

「そこです。ここは私の提案に乗ってみませんか？」

「・・・??それは何だ？」「セサミ・ストリート」??」

「我ら『ワイルド・ドッグ』の第十師団を向かわせるのですよ」

「第十師団か・・・おもしろい。あの『最弱軍団』を使えばおそらく・・・」

「ええ・・・おそらくです。彼らを使えば確実に見えてくるものがあります」

その男、セサミ・ストリートはエッグプラントに『最弱軍団』こと第十師団を送り込むことを立案して、許可を得た。

そして動き出す謎の組織『ワイルド・ドッグ』の第二の刺客。闘いは次第に激しさを増す。

To Be Continued . . . ⇒

## 次回予告

望 『であるからして・・・』

承太郎 『何か妙だな・・・』

エルメエス 『エンポリオ！何してやがる!!』

エンポリオ 『僕も何が起こったか分からない・・・』

アナスイ 『全てがおかしい・・・おかしすぎるぞ!!』

徐倫 『これは一体どういうことなの?』

??? 『ようこそ・・・「俺の世界」へ・・・』

『第貳拾貳話    コントラスト・コネクトその①』

## 第貳拾貳話 『コントラスト・コネクト』その①

晴天。春風が心地よいこの日、へ組には平穏な時が流れている。

「つまり、ここがこうであり、そこがそう。であるからしてこういうことになります」

せつせと黒板に字を書く望の背中を時々見て、時々その字を写す生徒たち。偽りの学園生活を送っている彼らですが、生徒である以上授業をしっかりと聞く義務があるので当然ながらまじめに受けている。

それを見ながら廊下掃除をする徐倫たち四人。承太郎はいない。

徐倫達にとってはほんの最近始めたばかりだが、今ではすっかり清掃作業に板がついて普通と感じるようにまでなった。

ジリリリリリリリリリ。

授業終了のチャイムが鳴り響き、昼休みに入ったので、多くの生徒が教室から出て

いった。これを機に徐倫たちは望に接触した。

「お疲れ様ですね。糸色先生」

「ああ。お疲れ様です」

授業の教材を片している望に徐倫は挨拶をかけながら教室に入る。

望も挨拶し、徐倫たち四人全員が教室に入ったのとちょうど同じタイミングで別の場所にいた承太郎がその教室にやって来た。

「ああ、承太郎さん。どうでしたか？例の組織のことは・・・」

「いや、だめだった。先日我々を襲った組織の素性はSPW財団をもってしても特定できなかつた。拘束した音石に聞いても知らないの一点張りでもうお手上げだ。ずいぶんとしたたかな組織のようだ」

「そうでしたか・・・」

承太郎は今までSPW財団とこの前自分たちを襲撃した組織の素性を調べるやりとりをしていたので、徐倫たちと共に行動していなかつたようだ。

そのやりとりで得た情報について望が問うが、はつきりしたことは掴めず手詰まりであることを承太郎は伝えた。

望はそれを了解するが、心の中では気が晴れない。なぜなら彼にとつては学園を脅かすであろう輩であるため早くその正体を突き止めて一掃しなければならぬと思つてゐるからだ。

「ヤキモキしても仕方がないですよ。僕らにできることはただ待つことしかできないのですから」

「いや~~~~~。しかしですね~~~~~」

「腑に落ちないのは私もだけど、姿を現さない相手には対処不能よ。下手に動けばそこそ敵の思うツボよ。出方を待つ……今の私たちにはそれが一番大事なことよ」

「……それなら話は終わりですね。お昼を食べましょう」

エンポリオの発言にどうも腑に落ちない望だが、徐倫に言われて落ち着いて、五人との話し合いを打ち切つて昼食にしようと宣言した。他の五人もそれを機に学食を食べるに戸の方へと向かった。

「さて、今日は何にしようかな」

「『スタミナ定食』つてやつでもしようかな・・・俺は」

バキイン

「ん？」

エンポリオとアナスイが少々ほのぼのしたことを言いながら、エンポリオが戸の取っ手に手をかけたとき、「奇妙なこと」が起きた。

「何かが壊れた」ような音を聞いたエンポリオは不思議に思い、ふと先程戸の取っ手に手をかけた手を見ると、『取っ手の破片』が握られていた。

「うわあああああ!!!」

「お・・・おいエンポリオ！何してやがる!!」

「し・・・知らないよ。僕も何が起こったか分からない・・・ただ『普通に』戸を開こうとしていただけだ」

エンポリオが取っ手を破壊したことに仰天するエルメエス。エンポリオは彼女に誤解されないように今起きたことを詳しく説明した。

「ど．．．どうしたんですか!?!戸が壊れたのです．．．「ズルウウ」．．．うあつつお!!」

エルメエスに説明しているエンポリオに、望は急ぎ足で駆け寄るが、その途中で落ちてあつた鉛筆を踏んづけてしまい、奇声を発しながらすつ転んでしまった。

その鉛筆はそのまま真上に舞い上がり、天井に当たつた直後天井にヒビが入り、塵が待った。

「うげっ!何が．．．これは一体何が起こつてやがるツ!?!」

「鉛筆だけでこんな破壊力．．．全てがおかしい．．．おかしすぎるぞ!!」

「やれやれだぜ．．．こいつは何か妙だな．．．『何か』が．．．」

先程の現象に驚愕している徐倫とアナスイ、そしてそのことに疑問を抱く承太郎。この場にいる者全てがこれらのことはスタンド能力であると理解するにはそう時間は掛

からなかつた。しかしながら、どんなものまでかはさすがに推測できないままであるらしい。

『ププププ。怯えてらあ、パニくつてらあ……そんなおバカな奴を見るのって楽しいなあ~~~~~。愉快だなあ~~~~~』

窓から聞こえた声に反応して窓へ向くと、現在開いている窓から侵入している右手の甲に亀、左手の甲に兎の漢字が刻まれている人型のスタンドがいた。

そのスタンドは承太郎たちのいる教室に入ると、ゆっくりゆっくりとまるで挑発しているように承太郎たちに歩み寄っている。

『空条承太郎。お前、「無敵」って呼ばれてるんだろ？自慢じゃないが俺のスタンドもかなり早くてな……だからどつちが上か試したくなつてな……』

「や……野郎オ~~~~~ッ。なめた野郎だぜ……」

『ほれッ！来いよ！ビビってんのか？ふんッ！情けない奴だなあ~~~~~』

自らの力を過信しすぎているにもほどがある挑発をしてくる謎のスタンド。だがこ

れは、明らかな挑発。攻撃されるのを待っているはずである。ここで感情的になつてしまえば、それこそ敵の思うつぼだ。

しかし、いかに冷静沈着な承太郎でもとうとう頭にきて、そいつに向かつて「スタープラチナ」を叩き込んだ。

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!』

『ギヒヒヒツヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ』 シュシュシュシュシュシュシュシュ

「何ッ!?」 「スタープラチナ」 よりも速いッ・・・だと?!

「いや違う!!」 「父さんの方が」 遅すぎるッ!!」

スピードでは追隨を許さない「スタープラチナ」の連撃は敵スタンドに全てかわされてしまった。敵が自分よりも速く動けることに驚愕する承太郎だが、さっきのやりとりを客観的に見ていた徐倫からすると「スタープラチナ」の動きが非常に、桁違いに遅いのが分かった。

しかし、それを承太郎が理解する前に、敵スタンドの素早い攻撃を食らってしまう。

『遅せ〜〜〜んだよバ〜〜〜〜カ』 ドシユ ドゴ ドゲ バギ ボス

「うぐおおおおおおお!!」 ガッシャアアアン

そのスタンドのラッシュを食らい、承太郎は吹っ飛ばされ、エンポリオによつて壊された戸に激突する。

戸は大破し、そこで片膝ついて起き上がるとする承太郎を尻目にその敵スタンドは余裕ぶつた態度で話し始めた。

『ニヒヒヒ。見たか?これが「差」つてもんさ。いくら「無敵」だと言われても俺の前じゃあ歯クソにもならねえ。・・ククク。お前らじゃあ計り知れないことだが言わせてもらう。あべこべの世界へようこそ。・・ニヤリ

不敵な笑みを浮かべている敵スタンドに頭にくる徐倫たち。だが、そんな彼ら彼女らを放つておいて、そのスタンドは依然話し続ける。

『俺の前では「強者」が「弱者」になり、「弱者」は「強者」になる。つまり、全てを反比例にできるのだ。この「反比例の世界」では俺が一番だツ!!ナンバー1だツ!!それ以外は取るに足らない雑魚だツ!!抵抗するつて考えるなよ。お前らのスタンドは全員パ

ワー型（タイプ）。だからこの場で誰一人として俺を倒せる者はいなああい!!』

敵スタンドが長話を話した後、彼らに向かって拳を握ったまま接近した。しかし、彼らは依然として動かない。

『楽に殺してやるよ！ローストビーフを一枚一枚捌くようにこの鋭い手刀で丁寧に  
よおおおお~~~~!!』ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

「ふう~~~~。やれやれ・・・おバカなのはどちらですか。確かに我々ではあなたを  
倒すことはできません。ですが、“彼女”ならやれると思いますよ」

『え？なんだって？』

突っ込んでくる敵スタンドに構えもせずには棒立ちしている承太郎たちの中で、望が心底あきれた様子で口を開いた。

望の言っていることが分からず、敵スタンドは聞き返そうとするとき、望の手に携帯電話が握られていることに気付く。そして、そのことに気付いた直後に廊下から足音が聞こえ始めた。かなり早いペースで、しかも徐々に大きくなっている。

そのスタンドはここで初めて誰かがこちらにやってくるということに気が付いた。

しかし、内心誰が来ようが知ったこっちゃやねーぜとそのスタンドは思っている。

そして、そうこうしている内に、その足音の主が全速力でこの教室の戸の近くに現れた。

「すいません先生！お怪我はありませんか？」

「いえ、問題ありません加賀さん」

既にスタンド「マシユマロウ・ジャステイス『ACT1』」を出したまま現れた愛は現れるや否やスタンドの隠し銃からアンカーを飛ばす。

だが、それは依然見たときと違って、格段にスピードが増している。それもそのはず……この『反比例の世界』によって逆に彼女のスタンドは強化されたのだ。

『UWEEEEEEYYYYYYYY』

ツ!!!』バキン　ボキン　バギン

自分とほぼ互角のスピードで飛んでくる針をそのスタンドはラツシユではじき飛ばす。その行為は愛の針が全弾打ち尽くすまでの数秒間続き、一つたりとも取り漏らさ

ず、全てをはじいた。

二つのスタンドの壮絶な攻防を終えると、両者とも息が上がっていた。常人ならば、まともに反応できず動けない音速の闘いであったため、たった数秒でも体力を大幅に失ってしまいうらしい。

『ゼエ．．．ゼエ．．．ああ．．．くそ．．．ナメてたぜ．．．こんなにも．．．．』  
「弱い」スタンド使いがいたとは．．．この俺と互角でやり合えるとは．．．。ここは撤退させてもらうぜ。だがいいかッ!!俺は決して逃げはしない。俺には部下がいるッ!!弱々しい奴らがなッ!!ケケケ．．．意味分かるよなあ。フッフ、忘れるなよ。わが「コントラスト・コネクト」の能力の前にお前らは無力だ．．．』シユダアアツ  
「あつ!?待ってください!!」

散々ここまで攻めてきたスタンド、「コントラスト・コネクト」は突如撤退したのでその後を追う愛。だが、彼女が窓から頭を乗り出したときにはもうその姿は見えなくなっていた。

「逃げられた．．．のですか．．．。加賀さん、何か「情報」は得られましたか?」

「いえ．．．すみません。戦うのに夢中で確認できませんでした。すみません」

敵スタンドを完全に見失ったので望は愛にそいつの情報について聞いたが、残念ながらできなかつたと知ると、そうですかあと一人呟いた。

「やれやれ。どうやら本体を捜すのはとても難しくなるなあ。どうする望？ここで敵の攻撃があるまで待つか、それとも奴らに立ち向かいに行くか、二つに一つだけ．．．」  
「．．．勿論、立ち向かうしかありませんよ。ここで再びやりやうなんて御免被りたいですからね．．．」

望が一人呟いた後、承太郎は負傷しながらも彼に歩み寄り、これからの自分たちの行動について話し合った。

再びこの学校を戦場とさせたくない望は敵に立ち向かうことを決めた後、携帯を使ってまだ校舎にいる生徒に呼びかけた。そして数分後、奈美、あびる、可符香、千里、晴美の五人がやって来た。

合流した五人を含めた十二人のスタンド使いたちは承太郎の存意により二手に分かれて行動し、敵をあらかじめ倒し次第どこかで合流するという算段を立てた。

そして、このことに対して誰も異議を唱えることはせず、各々の胸にそのことを刻みこんで、彼らは市街地へと向かったのだった。

場所は変わって、人通りが多い道の一角にある建物の中に3つの人影があつた。その中で体型が割と細い男が他の二人に話していた。

「空条承太郎たちが行動を起こし出したようだ。だが安心しろ。俺がいる限りあいつらはお前らには勝てはしない……。いいか!? 必ず奴らの息の根を止めろツ!! 相手はあのスコッチや幹部二人を殺してゐるんだからなあ。まあ、もしここで俺らが手柄を立てれば、ボスも多額の報酬をくれるそうぞ。グヒヒ」

彼らを殺せば多額の報酬をもらえるので、その男は嬉しさのあまり涎が出ていた。他

の二人は生唾を飲んで、高揚した。

「さあ！　グスイート」　ツ！！　「ハネデュー」　ツ！！　奴らを殺してバカにしてきた組織の連中を見返してやろうぜツ！！」

垂れた涎を拭き取ってその男は部下を出勤するよう命令した。命令された二人は瞬く間に移動してその男の前から消えた。

そして、自分しかいない部屋でその男は窓から外の景色を——特に自らの能力でパニツクになっている人々を——見ていた。

「ククククク。一体何が起こっているのか分からないって奴の表情を見るのはやはり楽しいなあ。ククク。そう言う奴に言ってやりたい。耳元で、小声で、じんわりと……」  
「ようこそ……『俺の世界』へ……」　「つてなああ」

不気味な笑みを浮かべながら、その男はまるで自分が神であるかのように思つて混乱している市民を見下ろすのであった。

とあるビルが多く隣接している通りで、近所付き合ひのある奥様方たちがベビーカーを傍らに置きながらしばし世間話をしていた。

「ねえ〜知ってます奥さん？先日、ここ近くの風俗店で殺人事件が起きたそうよ」

「あらまあ。そんなことが・・・」

「聞いた話では殺された人は奥さんと別れた後エンコーに手を出していた四十代の会社員だそうよ」

「あらら。でもざまあないわよねえ〜。エンコーに手を出したからバチが当たったのよ」

「そうよねえ〜」



トラックのブレーキ音と母親の叫び声が響く中、その赤ちゃんは知らず知らずのうちに右手を出した。そしてそのまま、トラックと赤ちゃんが衝突した。

ドグシヤアアアアアアアアアアア

「・・・ぶ？..だどう?..」

通常なら赤ちゃんは轢かれるはずなのに、今回は赤ちゃんは無事で、逆にトラックの方が大破していた。これには運転手や母親も目玉が飛び出るくらい驚いた。

さらに何を思っただか面白かったその赤ちゃんは手を叩いて、それからぶつかって大破したトラックを押しした。

するとものすごい衝撃がトラックに伝わり、トラックが後方へ吹っ飛ばされ、ガードレールを突き破ってビルに突っ込んでしまった。

その光景を見て、その子の母親はその子を抱きかかえると恐怖のあまり

ひいーーーーーと叫びながら逃走した。

とまあそんなことがあつた通りを承太郎、エンポリオ、愛、奈美、晴美、千里の六人が通つていた。

「うわー。ひどいなこれは。ビルはなんともないけど、トラックがめちやくちゃだ」  
「能力の性質上弱者が強者に、強者が弱者になる……つまり、今まで破壊できなかつたものが破壊できるようになり、破壊できたものが破壊できなくなるということですよ」  
「なんだか頭が混乱しそう。ややこしすぎるよう」

トラックの惨状を見て晴美は気味が悪くなり、エンポリオはその能力の性質の可能性を見いだし、奈美はその反比例の法則が現実はどう影響するかを考えすぎて、頭の中がごちゃごちゃしていた。

承太郎は移動している最中も、常に周りで「反比例の世界」になつたせいで起こる事故がいつばい見られた。

壁にもたれかかつたせいで壁にヒビが入つて崩れたり、鉛筆で紙に何か書こうとする

も紙が破れたり、プリンやゼリーが鉄のように固くなってしまいスプーンですくえず、逆にスプーンが折れ曲がって食べられなかったりといったものが見られた。

そんなものを視界に入れながら承太郎は移動していると、空から輝く球体が何個か降ってくるのが確認できた。

(あの球体・・・ふっ、さっそくおでましかい)「君達！避ける!!」

その球体が自分たちのところへ向かって落ちてきていることに承太郎は即座に気付いて、そのことを仲間たちにも伝え、回避した。それを聞いて他の仲間たちも回避行動をとるが、ただ一人奈美は完全に反応に遅れ、左脚に球体が当たってしまう。

バギバギバギバギバギ

「ぐがああああ!!私の脚が・・・骨が・・・粉々に」

「ああ・・・なんてこと！奈美ちゃん!!」

奈美の左脚が紙のように薄く潰されたので、彼女に激痛が襲い、そんな彼女に晴美は

駆け寄った。

「おい日塔。そんなことぐらいで騒いでどうする。お前は不死身なんだから、どうってことないだろう」

「バカ言わないでくださいよ！痛いものは痛いんですよ。それにこれだけ脚が潰されたら、再生に30秒はかかりますよ」

承太郎は奈美が不死身なので、そのくらいの怪我でオーバリアクションはするなど大乗的見地から彼女を見ると、その偏見に彼女は怒る。

そんなやりとりをしていると周りに水晶玉のように透き通った球体が何十個も空中に舞っていた。あまりの多さに承太郎は唾を飲んだ。

「日塔……その脚の治療に30秒かかるだど？悪いがそんな呑気なこと言っているとその時間が『延長する』ぞ……」

水晶玉に囲まれて追い詰められている承太郎は皮肉を込めて負傷している奈美に言ってやった。皮肉を言われて苦い顔になっている奈美だが、そうこうしている内に水

晶玉が承太郎たち目掛けて襲い始めた。

ドストドストドストドストドストのものにめり込むような音を出して承太郎たち全員に水晶玉が当たった。

・・・かのように見えたが、よく見ると彼ら全員の体すれすれに雲が出現していて、それがクツション代わりとなり、身を守った。

「反比例になっていているなら、一かきでかき消される雲は強くなるツということですよ!!」  
「いいわよ！いい！良い機転だったわよエンポリオくん！」

晴美に褒められるほどの奇策で敵の攻撃を防御したエンポリオは、雲のクツションで水晶玉を弾き飛ばした。

その水晶玉は全て建物や道路を破壊しながらめり込んだ。そしてそのめり込んだ水晶玉が再度宙に浮いたとき、六人に近付く女の姿があった。

背格好はほぼ一般女性の平均ほどで、マジエンタ色と表現できる派手な短髪の子で右手には焼き芋が入った紙袋を持っていた。

そんな子が紙袋から焼き芋を取り出して、ムシヤムシヤ食べながら殺気を立たせて近

付いてきた。

「モグモグモグ……さすがは……モグモグ……幹部二人とスコッチを倒した奴等ね。戦い慣れてる……モグモグ」

先程から食べながら話しているので失礼な奴と六人は思うが、それと同時に「凄味」が伝わってくる。自ら姿をさらすというその「凄味」が……。

「わざわざ本体のあなたから来るだなんて余程の自信があるんですね」

「イエ〜〜〜〜ス。それに、スタンドのルール上本体とスタンドの差が縮まるほどスタンド本来のパワーをたたき込めるからね。リーダーからあなた方は完全に息の根を止めさせろと言われていきますので、これくらいのことにはやっておかないといけないと思いますので」

愛は彼女に姿を現した真意を問いただしたところ、自惚れに近い態度で彼女は返答した。その後、愛はスタンドを発現させ、ちらつとだけその双眼鏡を覗いた。

「『どうやら嘘はついていないようですね』。『スウィート』さん」

「・・・ッ!!?あなた・・・何で私の名前を・・・!!?」

「あらかじめ説明しておきますが、私のスタンドは『人の心を読む』能力。といいますが実際にはこの双眼鏡で覗かなければなりません」

愛に自分の名前を言われた『スウィート』はまだ自分の名前を教えていないので驚きを隠せられない訳だが、愛のスタンドの能力を説明されて合点がいった。

「なるへそ。確かにあなたはリーダーが言ってた通り、厄介な子ね。でも大丈夫ね。なんせあなた以外はようは雑魚だものオーーーーーーッ」

「ムカツクわね、あんた。そう見かけで人を判断すんじゃないわよ!」

愛以外を重視していないスウィートに青筋立てて怒る千里。そういつて彼女は側にあったビルの大きい破片を拾い上げた。

「あなた、全く理解が足りてないようね。『この世界』を最大限に利用してから、そう言いなさい!うなああああああああ!!!」ビシユウウウ

ドグゴオオン

「……な?!!……ぐばあああ……」ドシャツ

スウィートに説教言つた後、拾つた破片を思いつきり千里は投げつけて、彼女の腹に風穴を開けさせた。

腹からとてつもないほどの血が吹き出してあるうことかスウィートは即死してしまつた。

「普通ならその破片は人間の筋肉繊維や皮膚をあまり破壊『できない』けど、『この世界』なら破壊『できる』ということよ。それに私の『恨み』のパワーは『この世界』の法則を無視できるようだから、私はパワーアップできる。つまりは、愛ちゃんだけが強いわけではないのよ!この間抜けがあ!!あの世でこのことを反省してなさいツ!!」

千里は仁王立ちになつて死んだスウィートに刻々と時間をかけて彼女の甘い考えを酷評した。

あれだけ豪語していたがこうもあっさり終わってしまったのかと思うと、承太郎はやれやれと思ひ、帽子のつばを上から押した。

「ええ．．．反省するわ．．．．．”今ね” ツ!!」  
「「「「「．．．ツ!?!」」」」」

その場にいた六人は全員体が凍てついた。即死だった。心臓はつぶれたはずだった。なのに何で生きているツ!?

不安と恐怖に駆られながらも六人はスウィートを見た。すると、彼女はびんびんして

いた。まるで、あのこと自体が何もなかったかのように……。

「そういえば言ってたわね、木津千里……あんた……見かけで人を判断するなって……まさにあんたのことだよオー……オー……オー……オー……!!! 当てはまってるのはあんたの方だツ!! ナメてるのはあんただよツ!! 千里イ!!」

散々千里に言われた 스위트 はお返しに千里に言い返して、首をポキポキ鳴らした。

「都合の悪いことを取り除き、いいことだけを残す。それが私の能力。……」  
 「オン・ユア・マーク」 さあ!!」

彼女の激情につられて水晶玉もピグピグ反応している。

彼女の水晶玉のスタンド、  
 「オン・ユア・マーク」の恐怖はまだ始まったに過ぎない。

To Be Continued . . . . . ⇒

次回予告

スウィート 『結果はいい方へ．．．いい方へ．．．流れ込んでいくツ!!』

スウィート 『あなたたちが勝てるはずはないのだアーーーーーツ!!!』

承太郎 『物事には必ず欠点が存在する』

愛 『これなら「かわせ」ますかあーーーーーツ!!!』

奈美 『見つけた．．．彼女への突破口を．．．』

コントラスト・コネクト 『お前は強い．．．何処の誰よりも．．．圧倒的に．．．』

『第貳拾参話 オン・ユア・マーク』

## 第貳拾參話 『オン・ユア・マーク』

「スタンドパワーやスピードが並より劣っているから、戦闘では役に立たず、“格下”と呼ばれているが、この俺がいる限りそんなことはない。スウイート・・・おおスウイート。お前は強い・・・何処の誰よりも・・・圧倒的に・・・誰も敵う訳ないんだ」

遠距離パワー型のスタンド、“コントラスト・コネクト”は承太郎達の近くの建物の上の給水塔に身を潜めながら彼らを見張っていた。

自分の部下の無敵さを誇って勝利を確信している“コントラスト・コネクト”。内々隠れながら様子を窺っている彼に誰も気付かず、その局面は動きつつあった。

ビシユ　ビシユ　ビシユ　ビシユ

ドガア　ドガン　ドガガガン　ドゲアアン

「・・・・・・・・ツ」

千里は焦りつつあった。致命傷を負わしたのにいきなり敵が全快になることにだ。今だつて小石を飛ばしてダメージを与えるつもりだったのに、全て未知の力のせいで彼女の体をすり抜けて一直線上の車や建物にぶつかっている。

スウィートはというと、彼女が攻撃したということにまるで気付いていないような顔つきをして紙袋から焼き芋を取り出して食べているのだった。

「駄目です。複数攻撃でも聞かないなんて・・・攻撃手段がこれじゃあ見つからない」

「いや・・・そうでもない。さっきの攻撃で水晶玉の数が減った。能力を発動すると数が減る仕組みらしい」

「なるほど・・・つまり水晶玉の数を0にして能力を使えなくさせるということですか」「まあ・・・そういうことだ」

スウィートに命中しないことに対して腑に落ちず焦る一方の千里は頭を抱えて悩む。

だが、流石は百戦錬磨の承太郎。このタイミングでスウィートの能力の法則を見破る。

その弱点とも言える法則を利用すれば彼女を倒せると考えついたエンポリオだが、スウィートは口に芋をほおばったまま不敵な笑みを浮かべた。



千里は自身の正義の心を燃焼させ、付近にあつた乗用車を片手で持ち上げた。これを見てスウィートは驚嘆して拍手をした。

変わつて親友の晴美は破壊規模が膨れあがる気がして内心ひいたが、千里はお構いなくそれを思いつきスウィートに目掛けてブン投げた。

「ウナアツ!!」

ニヤリ「The World Rotates around Me (世界は私を中心に回ってくれる)」

バア~~~~~

バホオオオオオオオオオオオオオ

スウィートは投げられた車に接触する直前、小さい声で英文を言い、何事もなかったかのように佇んでいた。

と同時に、スウィートの後方で車が爆発炎上し、水晶玉が1つ消えた。

「フン。無駄無駄。前と全く変わつてな・・・「ドスドスドスドス」・・・ぶはあ!?!こ

れは・・・車軸ツ!!考えたわね・・・木津千里・・・」

車との接触を無効にしたスウィートだが、千里はこれだけのために投げたのではないツ!!

二次災害・・・つまり車の爆発によつてブツ飛んだその車の部品が彼女を攻撃したのだ。しかも投げる速度も速いので、部品が辺りに飛び散りやすかったのだ。

勿論、爆発や飛び散った部品を操れるわけではないので、道路はめっちゃめちゃで、ビルのガラスも全部割れて、中には火災が発生するような大惨事になったが、その代わりにスウィートは爆発で後ろから来た車軸で喉や腹部を貫通してしまったので重傷を負った。重傷を負ったスウィートはその場で倒れ込むが、千里は間髪入れずそのまま彼女の元に歩き出した。

「まだよ・・・まだあと14回。きっちり15回死んでもらわないと気が休めないのよ。私は!!!」

千里は走りながらスタンドを出現させ、倒れているスウィートに右手の日本刀を高く振り上げ、斬ろうとする。

だがその前に、水晶玉が一つ消え、体に突き刺さっていた車軸が全てとれて、立ち上がるスウィート。そして、千里の膝の裏の箇所に戻ってから水晶玉のスタンドをぶつけて、千里を倒れ込ませます。

バギイイ

「……ッ。クソ野郎……」

「もう三分経過してますよ。生意気な口を叩いた割には案外弱いですねえッ!!」

「ぐげっ……ぶううう!!」

膝にダメージを受けた千里にスウィートは続けざまに彼女の顔面に水晶玉を叩き込んだ。

そして千里は後ろに大きく仰け反り、きりもまれながら吹っ飛ばされた。

「スタンド能力は、スタンドを操る本体の心からの願望から生まれる傾向がある。殺人鬼が人を殺すために特化した能力を身に付けると言ったところよ。私は逃げたかったんだ。背負いたくなかったんだ。両親を殺してしまったという罪にね。ほんの些細なことよ……でもストレスで、つい衝動的になって殺しちゃったんだ……。それ故に

こんな能力を得たんだわ。結果は良い方へ．．．良い方へ．．．流れ込んでいくツ!! 責任や罪といった私にとって不都合なものを排除して気ままに私は生きるツ!! だからあなたたちが私に勝てるはずはないのだアーーーーーッ!!」

「．．．．．」

ドドド  
ドドド  
ドドド  
ドドド  
ドドド

先程の攻撃で顔面や膝裏から血を流して倒れている千里を放って、スウィートは自らの過去を暴露し、そこから生まれた「オン・ユア・マーク」の能力についてしゃべり出した。そのことを踏まえて彼女は指を指しながら承太郎たちに自分を倒すことは出来ないと言ふ。

しかしながら、姿を現したときと違って、今度は自惚れを感じず、自分の能力に対する自信のようなものを感じた。圧倒的『凄味』を醸し出していた。

だがそれでも承太郎は、変わらず顔をしかめて彼女を睨む。

「全ての事柄に永遠がなければ最強もない。戦乱の世……幾度も支配者が時代と共に移り変わったときのようには必ず欠点が存在する。お前の能力でさえもだ……」  
「ええ……そうね。でもついても無駄だから最強なのよ」

（……やれやれ。この戦いで必要なのは奴自身の——気付いているか、気付いていないかは別として——弱点を見切ることだな。まだ別の箇所があるはずだ……別の……致命的な部分が……）

弱点がないことを指摘するスウィートに承太郎は弱点はどこかにあると反論する。彼らにとってそれを見つけないければ、ロシアンルーレットのようにじわりじわりと敗北が押し迫ることになる。そのため、必死にヘタを探す承太郎たち六人。その中でようやく脚が完治した奈美があるものを見つけた。

（あれ……？……これ……って……??）

彼女が見たものはスウィートの右頬に小さい痣ができていることと、彼女の服の右横腹部分が軽く破れていることだ。



「だったらやるしかないわね。千里」

「ええ。」

伝わった作戦に戸惑いを覚える愛、それとは対照的にやる気のある晴美と千里。確認が取れていないから愛と晴美、千里間でリアクションが違うのだが、四の五の言っていない状況ではないのは確かなので一致団結する奈美たち四人。

それを見て、スウィートは彼女らが話している内容に訝かしめ始め、表情がきつくなりだした。

「何をするかは分からないけど、無駄よ。私の能力に勝てるはずがないッ!!」

もう余裕の態度はスウィートから消え、今は無意味に悪あがきをする彼女らに苛立っていた。

そして、作戦の皆を聞いた愛は彼女に向かって『ACT1』を出しながら飛び出した。

「くらってください。針の乱射を!!」ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

「笑止笑止笑止笑止ツ!! そんな単純な攻撃で私を倒せると思っっているなんて笑オク  
 ～～～～止千万よおーーーーーッ!!」

「その言葉・・・そっくりそのまま返すわ。私たちの作戦は“もう既に”完了しているの  
 よー!」

「・・・ツ!?!何ッ!」

愛が乱射した針を見て、呆れかえったスウィートだが、即座に千里が背後に回っ  
 たので驚き、そちらへ振り向いた。

彼女が手に持っていたのはたくさんの黒く荒い感じの「棒」だった。この棒は晴美の  
 “イマジネーション”で描いた「棒」である。彼女の「絵」は元々脆くて壊れやすいの  
 で、『この世界』ならば、充分に人を殺傷できるであろう。

それを千里は愛の針と挟み撃ちの形になるようにたくさんブン投げた。

「くらいな、くそアアアーーーーーッ!!」ブンバアアアア

（何・・・ですって・・・。こ・・・これって・・・『まずい』・・・『まずい  
 わ』ーーーーーッ!!）

「これが奈美さんのアイデアです。スウィートさん・・・これなら『かわせ』ます

かあー——————ツ!!  
 [

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
 ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
 ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ドプウウアアアアア!

「がふうふうううう・・・」

千里が暴言を吐きながら投げた棒と愛のスタンドが飛ばす針を見て、スウィートはここに来て初めて青ざめた。ここに来て初めて生命の危機を感じたのだ。

そして次の思考をする前にスウィートの体中がハリセンボンのように棒や針で串刺しになった。

体中から血を吹き出して倒れたスウィートだが、「水晶」が一つ割れたので、再び起き上がった。だが起き上がったスウィートは全快しておらず、少しでも回復していかないようだ。

心臓には到達してはいないが、もはや戦闘不能に至るほどの重傷を負っていた。

「ゲブツ・・・何故・・・わた・・・しが・・・こんな・・・奴等に・・・」

ガボアアアツ・・・ハア・・・ハア・・・重・・・傷・・・ヲ~~~~

「これがあなたの弱点です。予想した通り・・・あなた・・・無効にできるといつても物理的回避『可』能」なことだけでしょ。頬の傷や破けた服が教えてくれました。どんなこともなかったことにできたはずなのにその二つだけはできなかった・・・つまり、その二つは物理的に回避困難だと言うことでしよう。どの時点だかは知らないけど、あなたの能力の影響で攻撃をかわし続けていたのでしょうか？でも四方八方から来る攻撃や超高速の攻撃はどう転ぼうとも何度リトライしてもかわせることはできなかった、という事ですよね」

ふらつきながらも立ち続けているスウィートに奈美は自分が予想した彼女の弱点を言った。その予想が的をいったために今回の奈美の作戦は成功したのだ。

奈美の作戦に嵌まって重傷を負ったスウィートは踏みとどまれない足で立ちながら苦し紛れに喋り出した。

「そとうううれがどおおおしとううああああ!!負けてはいない!!負けてはいないぞおお!!!ハア・・・ハア・・・ハア・・・この私わア~~~~~ツ!!!」

「醜いですね。戦いに対して・・・愛ちゃん・・・彼女を、楽にさせてあげて・・・」

「……ハイ」

瀕死の状態にもかかわらず怒鳴るようにスイッチトは奈美たちに対抗し、戦うことを止めるつもりはないらしい。それを見て憐れと思った奈美は愛にトドメを刺すように頼んだ。

命ぜられた愛は『ACT1』を出して重工をスイッチトの中心、つまりは心臓に狙いを定めて発射した。

ズドオーーーーー

心臓に針を打ち込まれたスイッチトは叫ぶまもなく一気に彼女の目から生气を失って、地に這いつくばった。

その姿を見て奈美は不思議と彼女のことを自分のことのように思い馳せていた。

「スタンド能力は本体の心からの願いから生まれる傾向がある」って言っていたけど……まさにその通りだね。私の能力もみんなみんな……私と同じ風になればいいのに」って思ったもの。あなたもそう……きつとどこかで思っていたのね……」

奈美の台詞は救急車やパトカーのサイレンの音でかき消されて聞こえなかった。もしかししたら、どうしても良くて彼らの耳には入ってないだけかもしれない。とにかく、彼らはスウィートの亡骸を背にまた別の場所へ移動するのであった。

「自分の罪を受け入れたらということ．．．」

To Be Continued . . . ⇒

——プロファイル——

・スウィート・ポテト      20代前半。女性。

数年前に両親を殺した過去を持つ「ワイルド・ドッグ」の第十師団隊の一員。焼き芋が大好き。

元々のスタンドが非力でリーダーがいないと何も出来ないため度々他の仲間達に馬鹿にされている。

スタンド名：オン・ユア・マーク

【破壊力：D スピード：D 射程距離：D 持続力：C 精密動作性：C 成長性：E】  
能力：都合の悪い結果をなかつたことにする    スタイル：近距離操作型    分類：道具型

次回予告

??? 『スウィートの敗北は本体の姿をさらしたことになる』

望 『体がうまく動かせられない・・・!?!』

アナスイ 『ダメだ！水の中に入れねえッ!!』

可符香 『いくら不死身でも空気供給ができなければ先生は・・・』

エルメエス 『打つ手が何もねえーーーーーッ!!!!』

??? 『ウシャアーーーーーッ!!』

## 『第式拾四話』

ブルー・インパクト』

## 第貳拾四話 『ブルー・インパクト』

時間は少し遡り、承太郎たちがスウィートと交戦している一方で、望、徐倫、エルメエス、アナスイ、可符香、あびるの六人は彼らとは何百メートルも離れた場所において、なおも移動していた。

彼らも道中に『反比例の世界』の影響でおぞましい惨状の街を見て胸が焼けそうな思ひになった。一刻も早く敵をぶちのめして元の世界に戻そうと心に誓う望たちであった。

彼らは今、この近郊で一番大きいと言われている川の橋を渡っていた。長さは30メートルほどと言われているその橋が架かっている川は最大水深が十数メートルとなっており、今は穏やかに流れている。

その橋を彼らを通る中、可符香は何か気付いたように立ち止まった。

「どうしましたか風浦さん？」

「先生……。この橋……なんだかやばいです。足を蹴り上げるときの反射音がな

んだかやばいです・・・」

「やばい!? 何言ってるんだあ? 何も変な音はしてねえぞ?」ゲシゲシ

「いえッ!! これはやばいを通り越して“メチャやばい”ですよ。橋のコンクリート構造を今調べてみたらどこもかしこも脆いんですよッ!! 反比例のせいで橋自体が壊れやすくなっているのですから、当然ですけど・・・」

可符香が立ち止まったので他の全員も止まり、心配して駆け寄った望は彼女からこの橋の違和感を聞いた。だがエルメスには彼女の言うことが理解しがたく、確認のために自分で橋を蹴っているが、然程変わりはなかった。

しかしそれでも可符香は顔色一つ変えず、ここが危険であると指摘していると、エルメスが蹴った部分のコンクリートがひび割れ始め、彼女の言う通り、全体的にこの橋が壊れやすくなっていることが分かった。

しかし、彼女が気付いたことはそれだけではなかった。

「・・・でもそれにしてもコンクリートの破壊状況が人為的と言えるほど不自然なんですよ! 誰かが故意に橋が壊れるように手を加えたと思えない位の出来映えですよ」

可符香の能力である。『岩石を操る』ことの応用で現在の橋の構造状態を知ることができたため、破壊進行があまりに不自然であることを理解できたのだ。

つまり、このことから近くに敵が潜んでいることが予測できる。そいつはどんな奴でどこにいるのかと橋の上で彼らは悩むが、そんな中で望の左足に鋭利な槍が突き刺さる。

「えッ．．．うおおおおおおお!!」 プシイイ

望の左足に槍が下から、彼らの足場から刺さり、出欠と鈍い痛みが来て、それと同時に彼の足場も一緒に崩れだした。

「やはりいたんだ．．．スタンド使いが近くに．．．」

「ぼけつとするなッ!下がれ!!今ので橋が崩れやすくなつていやがる!」

望が敵スタンドに襲われるところを見てあびるは本当にスタンドがいたのかと思ひ、立ち尽くしているところに徐倫が怒鳴り、下がるように命令した。

徐倫の言う通り、橋がどんどんひび割れて、足場が崩れていた。その落下している橋

の断片と共に落ちている望は自分の足に刺さっている槍を空中で引き抜き、落ちている橋の断片を足場にしてそこから離れた。

望が離れた直後、さつきまでいたところの近くの瓦礫の陰からクエのような頭をした人型スタンドが現れた。

『ウシヤアーーーーーッ!!』

姿を現したスタンドは威嚇するような鳴き声を発した後、望に近付いて持っている槍を弧を描くように振り下ろすが、それを望は紙一重でかわす。

振り下ろされた槍は望には命中しなかったが、川の水を斬り、水しぶきを上げさせた。そしてそのまま二人は勢いよく川に着水した。

ドボオーーーーオン

「先生が！水の中にッ!!そうか・・・敵は私たちを順番に水の中に引きずり込んで、溺死させることが目的・・・ッ!!」

「だ・・・だが、奴は不死身なんだから死にはしねーじゃねえか。大袈裟だぜ。大袈裟」  
「大袈裟ッ!?!アナスイさん・・・あなたは勘違いをしています。私の細胞は不死を与えま

すが、決して万能ではありません。灼熱下や極寒下の環境では細胞は全く機能しませんし、ましてや水中なんて酸素を取り入れることができず、行動不能になってしまいます。いくら不死身でも空気供給ができなければ先生は、私たちは水中を流れる水草以下です」

望が川に落ちたときに敵の真意に気付き焦る可符香にアナスイは宥めるが、事の深刻さを理解していない彼に説明した。

“カフカ細胞”、“聖なる遺体”と呼んでいるそれは一見無敵に見えるが、そうではない。

その細胞は生物の活動領域内で細胞分裂を起こすため、体温は適温を保たなければならず、酸素も必要だ。そのため水中では細胞は全く働くことができない。

そういうことを可符香はアナスイに説明しているときに、水中では望が四方八方を確認して、敵スタンドを捜していた。

『ウシュューー。さつきよお。リーダーからよお。仲間のス  
ウイトトがやられたって知らせがあつたんだ。ひで。』

声が聞こえた方向に望が向くと、腕を組みながら優雅に水中を泳いでいる魚人のスタンドがいた。

本体は側にはいない。おそらく陸かまたはまた水中の何処かにいると推測できた。そう思いながら望は本体を捜そうとするが、対する敵スタンドはまだ喋っている。

『でもしやーねーよな。 스위트の敗北は本体の姿をさらしたことにあつた。そこをつけこまれたんだろうがな……。分かるか？ 糸色望……。オレは前車の轍を踏むつもりはない。本体の姿を晒すことなくお前等を殺してやるぜえーッ!!!』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

敵スタンドが話し終えたぐらいにそろそろ息が続かなくなつた望は浮上して息を整えようと上へ泳ぎ始めた。しかしそう思つた矢先に敵スタンドが接近して槍を刺そうとする。だがそれを望はすんでのところであつて、大急ぎで泳ぎだした。

第一撃は躲されたが、そのスタンドは瞬時に槍で横一閃を振り、なんとか彼の足を掠

めさせた。その後、ニヤリと微笑して望の後を追った。

だが、そのスタンドがいくら速くても、望が水面に到達する方が速く、息をさせる余裕を作らせてしまった。

ところが、望がどんなに水面から出ようとしても、水面に頑丈な膜が張っていて水中から出られなかった。

『ゲヒャヒャ。残念でしたツ！リーダーの能力で水面張力がゴムのように強くなって刃物がなければ通れないようになってんだよ。お前のような非力なんかが出られる訳ねえーんだよツ!!』シユバアア

外に出られなくて息を吸えない望を嘲り、槍で攻撃する敵スタンド。それを躲そうとする望だが、急に筋肉が痙攣を起こしたように体の自由がきかなくなつて呆気なく左肩に食らつてしまう。

(グフ・・・何てことでしょう・・・体がうまく動かせられない・・・!?そして息が・・・) 『やったぜ・・・もうお前は逃れられん。このままゆつくりと斧を振り下ろして斬首する

ようにジワジワといたぶってやるぜ……息が続く限りよッ!!」ドゲツ  
「グバア!!……バババ……」

左肩を槍で刺されているとき、全く体が動かず、酸欠で苦しむ望に追打ちの蹴りをかまし、さらに中の空気を排出させる敵スタンド。その反動で刺さっていた槍が抜けて左肩の傷口から血が滲み出る。

その様子を倒壊寸前の橋の上で見ている可符香達はピンチにありつつある望を傍観するしかなかった。

「クソツ!!やべーぜ!敵は水中戦に慣れていやがる……畜生オー……ッ!打つ手が何もねえ……」  
「望もあたしらもツ!!」

「敵の術中に嵌まっている。せめてここに鋭利なものがあればあんなトランポリンのような膜を突き破って先生を救出できるのに……」

「しかし私たちが動けば奴も動く。水が敵になってしまっているこの状況でどう打つ?!一刻の猶予もないのにツ!!」

水中での望の防戦一方になっている戦いを見て今の自分たちの非力さに痛感するエ

ルメエス、あびる、徐倫。刻々と足場がなくなる中、アナスイはこの現状を打破する名案を思いついた。

「打つ手は何もねえーか・・・いや、あるな。〴〵たった一つ〴〵 だけならあるぜツ!!」  
「なツ!!? アナスイ!!?」

「おめーらも来いッ!! 不安定な橋にいるよりはずっとましだ」

案を思いついたアナスイはメキメキと壊れていく橋から飛び降り、川へ着水しようとする。これを見て徐倫は驚くが、アナスイの言い分も正しいつちやで正しいので全員橋から飛び降りることにした。

しかし、アナスイたちが無事川に着水（正確には水面の上を立っている）のでそう言うてよいか迷うが・・・したのを敵スタンドは見逃さなかった。

「フツ・・・全員来たなあ・・・こいつぁいいぜ。ここで全員水の中に落として溺死させてやるぜ!!」

橋にいた残りのメンバーが水面に下りたため敵スタンドは体の自由が効かない望を

放っておき、持っている槍を水面に突き出してそのまま泳ぎ始める。こいつはそうやって川に穴を開けて彼ら全員を川に落とすつもりなのだ。

だがこれはアナスイの計画の一部、想定内のことなのでこの打開策は考え済みである。

パシイ

「やつぱりよおお．．．俺たちがここに来れば、そんなことをやると思ってたよ」

『なぬ!?オレの槍を．．．バカなッ!!どうやってッ!!』

アナスイは“素手”で水面を突き出て滑走する槍を掴んでスタンドの動きを止めた。

確かに“スタンドはスタンドでしか倒せない”というように一部のスタンドを除いて生身でスタンドに触れるはずがない。

しかし、アナスイはそのことをにやけながら話した。

「どうしてかって!?簡単さ。俺の腕に実体化しているあびるのスタンドを巻いているからさ。俺のスタンドで触るのが手っ取り早いが、パワー負けしちまうからなあ．．．今は。おめえんところのリーダーのせいでお」

彼の言う通り、彼の腕や手にはあびるのスタンド“ラヴマシーン”が保護色で一見見えにくくして巻き付いていた。

あびるのスタンドは本体の包帯に同化しているスタンドであるため、生身の体に干渉できる。そこをアナスイはついたのである。

そして不意をついてスタンドから槍を取り上げたアナスイは、それを取り返そうと水面から飛び出してきた敵スタンドにその槍を突き刺した。

ボスウウウウ

『げはッ!!?なああああにいいいい!!?』

「フンッ・・・思い知ったか。よし、今だあびるッ!!今の内に先公助けなッ!!」

「言われなくともッ!!」ドシューーーーーッ

アナスイによって自らの槍で胸を刺されて敵スタンドが苦しむ間にあびるは“ラヴマシーン”を敵スタンドが出てきた辺りに伸ばし、水中で一切動かない望の体をつちりと捕えてそのままちぎれないように引つ張った。

「げばああああ!!ああ．．．もうすぐで三途の川をバタフライするところでした．．．誰か手を貸してください」

「先生．．．ご無事で．．．」

何分ぶりに息を吸えた望はちよつとしたジョークを挟みながら、彼等に手を貸してくれるよう頼んだ。それを可符香は承知し、彼を水面から引つ張り出した。

「酸欠で苦しいところ悪いが望．．．まだ奴を仕留め切れてねえ。ちとばかし浅すぎた．．．だがきつと浮上してくるぜ．．．」

酸素不足で息を荒げている望にアナスイがまだ警戒するように呼びかけた。流石に水中では素早く胸を刺されて苦しむ中、敵スタンドは追撃を恐れ、槍が刺さったまま水深深くに潜ってしまったのだ。

しかしながら、さっきのダメージで川底の水草が生い茂っている所で最新鋭の装備をして隠忍していた本体・ハネデューが、たまらず水面目掛けて浮上してきた。どうも胸を刺されたことで口が血が溜まって呼吸困難になったようだ。

浮上したハネデューはマスクを外し、口の中に溜まった血を吐き出した。そして、息

を整えたときに彼はアナスイたちがこちらを見ていることに気付いた。

「どうやらあなたが本体のようですね．．．おや？　そういえばさつき、本体の姿を見せず  
に殺す」とか言ったような．．．言わなかったような．．．」

「ギギギギギ．．．よくもこのオレに恥をかかせてくれたなツ!!だがここからだツ!!  
陸では弱い水の中なら話は別さ。ここはオレのホームグラウンドさツ!!どんな奴だ  
ろうとオレを倒すことできないツ!!」ザブーン

無精髭をたくわえたハネデューは彼等に毒を吐いた後、マスクをつけて再び川底目掛  
けて潜った。そのずしつとした筋量の体を駆使して瞬く間に7〜8メートル潜った。

（ケツ。本当の戦いはこれからだ．．．さつきは油断して浮上しちまったがもう無駄だ。  
若かれし頃、「バルセロナの怪魚」と呼ばれたほどの実力と訓練によつて磨き上げられた  
潜水持続時間10分ツ!!それに加えて二時間も持つ酸素ボンベを背負っているツ!!余  
裕で半日をここで過ごせるオレに勝てるはずがなろうがア!!）

8メートル下の水中から彼等を見上げて自信ありげに勝ち誇るハネデュー。大きな

深呼吸をしている内に素早くスタンドを発現させ、彼等に襲いかかる。

ブシューウウウウ

「痛ッ!!くそがッ!!」

ハネデューは狙いをアナスイに絞って彼の右肩を水中から槍で刺した。アナスイはすぐに振り払ったが、直後に体中が痺れて動けなくなった。

『ククク。動けねー！ーよな！ーアナスイ。そりやそうさ。オレが槍で刺したとき槍から弱い電磁波を放出させて脳が送っている信号を狂わしたからなあ！ー！ー。ケケケ』

体が動かなくなつて片膝をついているアナスイに不敵な笑みを浮かべながら、魚人スタンドは槍を構えて再びアナスイに襲いかかる。

『そんじゃあよう!!今度はためーの心臓にブツ刺して一気に絶命させてやんよッ!!アナスイイイイイイイイ!!』

「いや．．．残念ながら違うな。それは『お前』の方だ．．．!!」  
『は!?!?てめーなに言つて．．．うっ!?!ま．．．まさかッ!?!』

アナスイの台詞に耳を疑う敵スタンド、もといハネデューだが、今になって自分の体に『異常』があることに気付いた。

それは徐々に自分の胸がどんどん膨らんできて、否違う、肺が膨らんできたことだ。ウエットスーツを着用していたため気付くのが遅かったが、既にハネデューの旨が風船の如く膨張している。

(ま．．．まじでや．．．やばいッ!!い．．．いつ仕掛けられたんだ．．．おのれアナスイ畜生くくく。やばすぎるくくくくく)

彼の脳裏ではアナスイの仕業であることを直感で理解できたため、死に対する恐怖とパニックで過呼吸に陥ってしまう。

それによって次第に胸が膨張していきそして．．．

ドバオオオオオオオオオオオオオオオオ

「~~~~~ツ!!!」

ハネデューの胸、つまり肺がついに許容オーバーになって破裂し、胸から大量の血が一気に水中に拡散した。と同時に体に取り込んでいた空気が出て行き、ハネデューはそのまま川底に沈んでいった。

彼の死亡と共に襲いかかっていたスタンドも塵となって消え、この場にいる誰もが彼の死に気付いた。

「水の中が好きならいるんだな……一生」

アナスイは川底に沈んでいったハネデューに向かってぼやいた後、水面を渡って川を出ようとした。

他のメンバーも彼に続いて崩壊していく橋を背に陸へ向かうのであった。

To Be Continued . . . . . ⇒

——プロフィール——

・ハネデュー・クインシー 男性。スペイン出身。

無精髭を生やし、重量感ある体つきをしている。

若い頃水泳を嗜んでおり、「バルセロナの怪魚」と言われるほどの実力であった。

潜水持続時間は10分で、水の中にいた方が落ち着くらしい。

スタンド名：ブルー・インパクト

【破壊力：D スピード：D 射程距離：C 持続力：D 精密動作性：A 成長性：B】

能力：槍で刺した生物の電気信号を狂わせる      スタイル：近距離操作型      分類：亜



## 第貳拾伍話 『コントラスト・コネクト』その②

「クツソ〜〜〜。どうしてなんだ．．．どうして俺ばっかこんなにツイてないんだ．．．」

承太郎や望のチームがいる同じ街のカフェのテラスで男が一人で座り、自分の目の下をボリボリと掻きむしっていた。その表情は齒を強く噛み締めるほど険しかった。

「あの．．．お客様。大丈夫ですか？」

「ツ!!問題ない!!ほつといってくれ!!」

「し．．．失礼しました．．．!!」

そんな彼の様子を心配して男の店員が声をかけると、一瞬その男はビクついたかと思うとその店員を下げさせた。

彼の命を賜った店員は滑るように店の中に戻ったが、依然としてその男の表情は変わらなかった。

(ケツ・・・クソが。それはさておき何たることだ・・・あろうことか部下が全滅するだなんて・・・あの役立たず共がッ!!この俺に恥をかかせおつてッ!!)

心の中で自分の部下の陰口を叩いたその男はここに来る前に「ある男」が言った台詞を徐に思い出す。

『いいか・・・パステクアー。お前のスタンド、〃コントラスト・コネクト〃は確かに想像する以上に強い。だがどんなに強かろうがお前の自身の精神が強くなければお前は負ける。彼等に対して敬意は表しろよ』

『ああ!!何俺にガン飛ばしてんだよ・・・年下のくせにナマ言うなよ。全く、何でこいつが俺より上なんだよ・・・普通逆だろッ!!逆ッ!!』

『フン・・・もう少し話の筋が分かる奴だったら、ピンとして莫大な富を得られるのに・・・。一応忠告しておくぞ・・・。〃パステクアー〃』

『ケツ・・・余計なお世話だよ!!セサミ・ストリート!』

男、パステクアーは自分が承太郎たちに戦いを挑む前、組織のアジトにて自分の上司であるセサミ・ストリートに言われた忠告を思い出し、頭を抱えて項垂れていた。

今の自分の状況が彼の言う通り芳しくないもので、パステクアーは眉を引きつらせながら後ろ指を指されている気がして内心焦りまくる。

(クソツ!!敗北感を感じるぜツ!!だが俺は間違っているわけではない。そのはずだ。俺は20年も前からパッションに所属し、ボスの部下であった俺の方が経験は上だ。アイツが下だツ!!)

彼が言ったことが実際に起こったため、目から鱗が落ちそうになるパステクアーはそれをすんでの所で完全に否定する。彼のプライド——とりわけ年上としてだが——があつて、そこだけは譲るつもりはなかった。

そして、紅茶が入ったカップの取っ手を握り潰すほどの鬼気を発し、この場にいらない上司や敵にに向かって睨んだ。

(グギギギ~~~~。俺一人でやってやるよツ!!見返してやるツ!!吠え面かせてやるツ!!俺の凄さを見せつけてよ~~~~)

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「どうだ藤吉、奴はいるか？」

「いないですね。今のところ．．．ですが、代わりに先生や徐倫ちゃんたちを見かけました。全員無事の様子ですね」

「なるほど．．．．．そうか」

承太郎たち六人は現在スイートと戦闘した場所から数百メートル離れた街角にいた。敵の次なる襲撃に備えて遠隔操作できる晴美の“イマジネーション”を上方に飛

ばして見張り役として用いた。

残念ながら敵は見つけられなかったが、代わりに望たちのチームを発見すると、晴美はそれを承太郎に伝えた。

「よし。まずはあいつらと合流することにしよう。合図を送ってくれ」

「合図う?! いや〜私なら合図より『絵』を送るね」ドシユ ドシユ ドシユバ

晴美の報告から承太郎は望達と合流することを第一に考え、晴美に何かしらの合図を送るように指示するが、彼女は首を傾げた。というのも彼女は合図なんかよりも自分が描いた『絵』を送った方が良いと思っていたからだ。

自らのスタンドの指で素早く緻密に鳥の絵を空中に描いた。その絵は彼女の能力によつて生を宿し、望達の方角へ飛ばたいていった。

鳥の絵がビルが建ち並ぶ通りを飛び去った後、この場にいる六人全員は全身に寒気が走るレベルの殺気を感じ取った。それを感じ取り真つ先に先手を打つため千里はガードレールの一片を外し、殺気がする方向へそれを突き刺すように投げた。

だが、圧倒的スピードとパワーを持ったガードレールは容易く何かによつて弾かれ

た。その主は勿論スタンダー。〃コントラスト・コネクト〃だ。

『ぬるいな．．．ぬるすぎて実力の50%も出せなかったわ。雑魚めツ．．．』

「きつつつさまア~~~~~ツ!!!イワセテオケバア~~~~~!!!」ドドドド

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
ド

「あ．．．あれは．．．あのとときと同じモードツ!?」

「千里ちゃんツ!?まさか．．．。〃アライヴ〃を使うつもり!?無茶にも程があるわよ!!」

「おい!!これはどういうことだ．．．。木津は何をする気だ!?」

「承太郎さんそれは．．．。ツ!!うわア!!」

ドヒユウウウウウウウウウウウウウウウ

〃コントラスト・コネクト〃は千里を嘲笑し、彼女はそのことで頭にきたはずみでスタンダードのオーラを真っ黒に染めるだけではなく、エルメエスとの戦いで少し見せた髪が紅くなり、額に眼が現れる現象を起こし、彼と対峙する。

エンポリオと奈美はこのモードを見て驚きを隠せず、承太郎は晴美に彼女のこのモードのことを聞くが、晴美がその返答を言う頃合いで〃コントラスト・コネクト〃と千里

が互いに接近して怒濤の殴り合いを始めた。

だがその影響で突風が吹き荒れて承太郎たちも含む当たりのものを吹き飛ばした。

この殴り合いはどちらかというと「コントラスト・コネクト」が一方的に攻撃を行っているが、千里は「サムライハート」の刀と斧を使用的確に彼の拳の一つ一つを防いでいる。

「この女・・・俺のラツシユを二つの得物で紙一重の差で防いでるんじゃねえ・・・まるで俺の拳がそこに来るのを知っているように防いでやがる・・・何者だこいつ・・・ただ者じゃねえ!!」

千里が自分のラツシユを完全に見切っていることに気付いた「コントラスト・コネクト」は一瞬困惑した。が、すぐさまフックをかけて牽制する。

けれども、千里の第三の眼がギョロギョロと動いた瞬間、その攻撃を高速で躲す。膝蹴りやエルボー、回し蹴りなどの手も試みるが、全て防がれるか躲されている。

「アライヴ」・・・それは『予知』能力ッ!!生前杏ちゃんの瞳に宿ったスタンド能力。何故2つもスタンド能力を持っているかは知りませんが、とにかく!数秒先の未来を見

通すことができるようです。尤も、こんなことができるのは千里と左眼の角膜を移植したあびるちゃんだけなんだけどね・・・」

次元が全く違う格闘をしている「コントラスト・コネクト」と千里を二人によって飛ばされた車の陰から眺めている晴美は承太郎に彼女が使う新たな能力について説いていた。

「だけど無茶すぎるツ!!この使用中はあびるちゃんの場合、左目から血が滲み出るのに対して千里の場合、スタミナ消費が激しい。即座に未来を見通せる分、性能が良い代わりにバテやすくなるリスクをもつのに・・・これほどの長時間の戦闘だともうもちませんよツ!!」

晴美からあのモードが短時間しか続かないことを聞くと、確かに千里の額からドロドロと汗が流れ、息を荒げているのも分かる。心なしか徐々に「サムライハート」の動きが悪くなってきた。

ドゴツ      ドゴア

「こふツ!?ぼは・・・。」

『おいどうした?切れたのか?アガっちまったかあ・・・?』

流石の“コントラスト・コネクト”も千里の変化には見逃すわけもなく彼女の必死の攻防をすり抜けパンチを入れる。

千里の土手っ腹に拳を叩き込んだことで口に溜まっていた唾が飛び散り、大きく彼女は仰け反ってしまふ。

この時彼女の持続時間が限界だったのか、額の眼が閉じかけ、髪も元の黒色に戻りかけていた。

しかしッ!!

ギヤアアアン!

「う な あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ

あ  
――――  
あ

!!!  
」

『何ッ!?「ドギヤアアアアアアアアン」ぶふあああアッ!!』

あろうことか千里は、殴られてしまつて膝から崩れ落ちると思つていたが、まさにその逆!!彼女が今持つ余力全てを使い、スタンドで“コントラスト・コネクト”を叩き斬つて吹っ飛ばしてしまふ。

完全に油断していた“コントラスト・コネクト”は防御も受け身もできず、後方の建物に何度もぶつかりながら飛ばされていった。

力を使い果たした千里はより息を荒げ、右膝と左手を地面につけて倒れ込む。もう完全に“アライヴ”は解除されて元の姿に戻っていた。黒いオーラも発していない。これが彼女の限界だ。

(思つていたほど体力を使つてしまった……。私のスタンドも……。体も……。どれもこれもボロボロね……。)。だけど手応えはあつたツ!確実に!100%!私に斬られて死んだ!)

全身に力が入らなくなるほど疲労した千里はもうろうとする意識の中で土煙を上げている建物も見えて敵を仕留めたことを何度も念じた。

そして、立ち上がるために左手でアスファルトを掴んだ際、左手に痛みが生じた。ど



体の至る箇所から出血している千里の他に承太郎たちや周りの赤の他人達も例外なく特に足が靴ごと斬れて出血する始末。そんな彼等を眺めながら、“コントラスト・コネクト”は吹っ飛ばされた道を通って、こちらに来了。その頃には地面で身を切る現象は収まっていた。

『俺のスタンドの能力は自動的に“パワー”、“スピード”、“耐久性”の3つを反比例にしちまうが、それ以外は調整が可能だ。尤も“鋭さ”を反比例にすると、つまりは、射程内の全ての平らなものが刃物になる……。それだけは禁止手だったのによぉ……。だって危ねえーだろぉ。座ってたらケツが切れるんだぞ。痛い痛いそんなの……。嫌ッ!!だが!!お前の得物から身を守るにはそうするしかなかった……。だから使った!』

彼曰く禁じ手を使わざるを得ない状況だったので、短い間だけその能力を使った。『“鋭さ”を解除した後、“コントラスト・コネクト”は、何の前触れもなく千里に拳を叩き入れて吹っ飛ばした。』

バゴバゴ

バシ

ゲシイ

ブゴツ

グゲン

ドシユバ

『今度は俺の番さ!!さつきはよくもやってくれたなあ!!?首の骨が折れかけただろうがッ

!!! このクソペチャパイストパ女がああああああああああああああ  
 ああああああああああ——————  
 !!! 『ドツゴオー——————  
 ドゴドゴドゴドゴドゴドゴ      ドストバ    ドゲ    ドギン

“コントラスト・コネクト”は千里を吹っ飛ばした後、超スピードで吹っ飛ばす彼女の背後をとり、即座に蹴り上げて吹っ飛ばし、また彼女の背後をとって、攻撃する。これは端から見ると、彼女を取り囲むように奴が連続攻撃を仕掛けているように見える。それぐらいの集中攻撃を食らわされ、体中の骨が軋み、内臓が傷つき、吐血しだしたときに“コントラスト・コネクト”は右大振りのパンチを食らわせ、千里を通りの向こうの彼方へ吹っ飛ばした。

血を吐きながら千里は街通りの上空を目にも見えない速さで飛ばされていたが、ふと気がつくど誰かに抱かれていた。

「やれやれ無茶しましたね……………ここからは私たちも参戦するのでご安心を」  
 「先……………生……………」

時速何百キロで飛ばされていた千里を望は抱きかかえて一緒に来たアナスイ達に彼女を渡して介抱させた。

そして、負傷した千里の肩を回して近くの日陰に運ぶアナスイとエルメエスを除いた他の四人は前へ出た。

「さあ・・・」コントラスト・コネクト”。とうとう合流しましたよ。今の内なら命だけは助けてあげなくもないですよ。勿論嘘ですが」

『ハッ!!命乞いなら貴様等だろ?この場において誰も俺に勝てないからよ』

「いやいや。私たちには既にプランがあります。貴方を青ざめさせるプランがねえ・・・」

望の提案(嘘)に”コントラスト・コネクト”が嘸み付き、なおも余裕でいるが、望はそんな奴の度肝を抜く計画があることを宣言する。

その宣言と同時に奈美が先陣切って”コントラスト・コネクト”を背後から奇襲をかけた。

だが所詮普通レベルの奈美と”オレンジジミント”なのでその奇襲が成功するわけもなく、”コントラスト・コネクト”は彼女の腹に鉄拳を浴びせ串刺しにした。

『何の真似だ？こんなチープな手に引つかかるとでも？ユーズフル．．．まさに鉄砲玉だなこいつは．．．』

串刺しになって吐血する奈美に気にせず、"コントラスト・コネクト"は腕に彼女を貫通させたまま望にあきれながら話し出した。

奈美を罵倒した後邪魔な彼女を振り払おうとしたとき、奈美は重傷の体ではあり得ないほどのパワーで"コントラスト・コネクト"の自分を貫いている腕を自分のスタンドで握った。

「鉄．．．砲．．．玉．．．!?褒め言葉よ．．．。一度命を捨てた報いとして死なない呪いにかかったわたしにはね．．．」

『き．．．貴様．．．離れろ!このクソアマツ!!クソが．．．ハツ!!「グルルンビシイ!」何．．．バカな!どうしてなんだ．．．躲せたはずなのに、破れるはずの強度なのに』

腹を貫かれても苦しまず、うめき声一つあげない奈美は"コントラスト・コネクト"の腕をスタンドを用いて掴みながら睨み続ける。そんな彼女に苛立った"コントラ

ト・コネクト”はスタンドの手を緩めない彼女を地面に叩き付け、彼女の首の骨を折った。首が折れ曲がったことで“オレンジミント”のパワーがなくなり腕の拘束が解けたので簡単に奈美を振りほどいた。

しかしそれを待っていましたと言わんばかりに奈美を振りほどく隙を突いて徐倫とあびるのスタンドに“コントラスト・コネクト”は拘束されてしまう。

だが、一つの疑問点が彼をつつかえさせるのだ。それは自分のスタンドが弱くなっていることだ。いつもならいくら何でも拘束を逃れることぐらいは出来たはずなのにだ。

その時に折れた自分の首を戻して奈美は“コントラスト・コネクト”を見ながら話した。

「捕えた……ならもう終わりよ。あんたを待つのは悲劇だけだ」

『何だ?! 化けもんかよ貴様は……。くっ……。ませるんじやねえよクソガキ……。グツ

!! おい……。これって……。ぐほおおおおおおおおお!!』

「予習不足だったよーね。いや、情報不足だったと言うべきか……。私の『普通アレルゲン』は既にあんたが攻撃したときに感染させてある……。つまり、あんたはもう“普通”になつてんのよ。だからあびるちゃんと徐倫ちゃんのスタンドの拘束を解けないのよ。そして、射程距離も“普通”になつたから実感あるでしょう……。今自分がこつ

ちに近付いていることを！」

首の骨が折れたにも関わらず奈美が生きていて、且つませたことを言ったために、頭に血が上る。『コントラスト・コネクト』だが、突如何かに気付き、苦しみ声を出してもがき始めた。しかし、もがいても二人のスタンドの拘束は解けるはずもなくその場に留まっている。

そんな彼を奈美は上体を起こしながら笑って彼が苦しむ訳を説明した。

簡単に要約すると、『普通アレルゲン』の感染による症状で全てのステータスを『普通にされたので何十キロとあつた射程が数メートルに縮んだので本体とスタンドがその距離になるまで引き合うのだが、スタンド自身は『ラヴマシーン』と『ストーンフリー』に拘束されて身動きが出来ない。それで本体が猛スピードでこちらに引き寄せられているのである。そのため何かと衝突してか痛がり苦しんでいるのである。

そして、ものの数十秒で路地裏が騒がしくなり出し、そこから生ゴミをつけたまま転がってきた細身で褐色の男が現れた。

拘束されている『コントラスト・コネクト』の近くで伸びている体の細いガングロ男ははっと目覚めると怯えたように後退りする。

「ひぎぎやああー………ツ!!うああ……わああああ!!お命だけわ………」

「ん?!何だこいつは……さつきまでの強気が嘘みてーに掌返して臆病になつたぞ……」  
「ああ承太郎さん。確かにですね。これをあれ……『内弁慶』というんでしようか?」  
「きつとそう呼ぶと思いますよ先生」

「いたんですか常月さん……」  
「ええ……ずつと」

さつきまで威勢が強かったが、本体を晒した途端急に腑抜けになる男、パステクアーに周りの皆は気味が悪くなる一方で、そんな今の彼を表現する諺を自信なさげに言う望の背後からまといがひよっこり頭を出して自信をつけさせる。

不意打ちとも言えるまといの登場に肝を冷やすと共に内心何故ハネデュー戦で援護してくれなかったのかを不満に思う望だが、そのことについては後で言うことにして、今は物陰に隠れていた愛を側に来させた。

「愛さん……彼の心を読んでください」

「はい……かしこまりました先生。　“マシユマロウ・ジャスティス”！」

望の命令通り愛はスタンドを出し、その双眼鏡を通して彼の心の中を読み出した。そして、一通りの情報を整理した後、彼に報告した。

「先生……彼等の組織の名は“ワイルド・ドッグ”のようです。一瞬ですが読み取れました」

「“ワイルド・ドッグ”ですか……我々の敵は……」

パステクアーの心に一瞬だけだが“ワイルド・ドッグ”の名を思考したので、愛はそれを読み逃さず望に伝えた。

望は少し眩いた後、パステクアーを睨みつけると、彼はヒーヒー言つて身を縮ませる。この時にエルメスはパステクアーの所持物を漁つて、ズボンのポケットからパスポートを取り出した。

「なになに……“デザート・パステクアー”、エジプト出身、40歳で未婚。だそうつすよ承太郎さん」

「そうか・・・これなら財団を通してこいつの詳しい所在も分かるってことだな」  
「ひいーーーーーッ！はわわわわわ・・・僕の情報があ」

自分が属する組織の名だけでなく個人情報まで漏洩して赤っ恥をかくパステクアーだが、内弁慶であつてか内心と表情が完全に別離していて、ビビりまくつていながら、心の中で恐ろしいことを企んでいた。

（クソがッ!!情報が漏れた!もう後がない・・・このままでは組織に殺されるッ!!殺つてやるッ!!エルメエスのバカにも気付かれていないこの短刀を使って承太郎と望の首をかっ切つてやるッ!!そして次にスタンドを拘束しているあびると徐倫もだあ!!死ねやあ!!!）

ドンッ

「丸聞こえ」ですよ・・・あなたの考えが。情報吸収力が足りなかったようですね」  
「ええ!?!.....がばふ.....」ドブチャ      カララン

背中に隠していた短刀を密かに抜いて近くにいる二人を刺し殺そうとするが、殺す前に「マシユマロウ・ジャステイス『ACT1』」の針を首に打ち込まれた。

愛の読心能力を忘れて思考してしまつたので、彼女に企みがばれて反撃のチャンスを逃した。パステクアーは打たれた後、仰向けに倒れ、その拍子に短刀を落とし、首から噴水のように血が出てきて最期はうめき声一つたりとも出さずに息を引き取つた。

その後、愛は承太郎と望に只管謝りたおした。

「本当に申し訳ございませんッ!! 咄嗟の判断でせつかくの情報源を殺めてしまい心からお詫び申し上げますッ!!」

「大丈夫だ加賀。土下座は止めろ……。元々奴から絞れる情報はなかつた。後はSPW財団に全て任せるつもりだ。尤も奴は奈美を見ていた……。生かしておくところの最大の秘密がばれるところだったしな……。」

「うっ……。確かに彼は彼女を直に見てましたもんね。ハハ……。ハハ」

土下座までして謝る愛に戸惑う承太郎はなんとか彼女の体勢を上げさせて彼女に罪はないことを言った。パステクアーが腹に穴が空いたり、首の骨が折れても生きていた奈美を見ていたことを忘れていて承太郎の発言で思い出し、冷や汗をかく望。そんな望にやれやれと呆れるとき、承太郎は野次が増えてきたことに気付いてここにいる全員に伝える。

「どうやら人集りが増えてきたな……。路地を通って避難するぞ！」

承太郎の言葉で皆面倒ごとに巻き込まれたくないため路地へ一直線に移動して、スピーディーにこの場から去っていった。

余談だが、彼等の逃走経路上にとあるテレビスタジオがあり、そのスタジオの一室にこういうのがあった。

『超怪力の赤ちゃん登場!?!』

そこで企画している番組の準備をしているスタッフと数十分前まで街通りにいたあの奥さんと赤ちゃん。奥さんは赤ちゃんを用意された大型トラックの近くに置いて、カメラはその赤ちゃんとトラックを映す。

「さあ赤ちゃん・・・パンツてしなさいパンツて・・・ほらやるのよ」

「ドウブ？」

「ほらほらさつきみたいにならないうちにトラックを押してそこにいるおじさん達を驚かせなさい」

「ギャアアブ」

「あゝゝゝ奥さん。ダメみたいですね。もう十分も経っていますし、ここはちよつとゝゝゝ」

「心配しないでください。やれますから！うちの子はやれますから待っててください!!  
やりなさい早くゝゝゝおじさん達が待つてるでしょう!!私に恥をかかせないでツ  
!!」

先刻のようにトラックを押してこの子の凄さ（スタンド能力のせいで勘違いをしているが）を見せつけてやりたい奥さんですが、赤ちゃんは数十分もの間面白がって押す気配もない。そろそろディレクターが痺れを切らして打ち切りにしようとお奥さん呼び止めるが、彼女に聞いてもらえず、赤ちゃんを煽った。しかし決してやらない。

「早くやりなさいよゝゝゝゝ!!!このガキゝゝゝ!!!」

「奥さん——————ツ!!!ちよつと我が子になってことする気なの!?!?追いお前等!!見てないで早く手伝えよツ!!!」

奥さんが苛立ちすぎてヒステリーを起こし、我が子を襲おうとしたのでディレクターは彼女を止め、続々とスタッフが彼女を止めに入る。

赤ちゃんはその様子を呑気に理解できずにただ眺めていた。

To Be Continued . . . . ⇒

——プロフィール——

・デザート・パステクアー 40歳。男性。

褐色の肌と細い体をしている。癖で目の下を搔く。

残忍だが内弁慶で、面と向き合って話すことは苦手。

パッショーンネ時代からエッグプラントの部下でかなりの古株。

スタンド名：コントラスト・コネクト

【破壊力：A スピード：A 射程距離：A 持続力：A 精密動作性：C 成長性：D】  
能力：全ての法則を反比例に出来る。      スタイル：遠距離パワー型      分類：人型

次回予告

愛 『すいません！すいません！』

望 『加賀さんはスタンドの未熟さ、そして・・・』

承太郎 『どうやら奴の“狩場”に入っちゃまったようだな・・・』

『もうお前は攻撃できない・・・』

『おおーーーッ!!この“記憶”はッ!!』

愛 『許せない・・・私はあなたを許さないッ!』

『第貳拾六話 地獄の女神 加賀愛その①』

## 第貳拾六話 地獄の女神 加賀愛その①

通勤電車には色々な人がいます。

会社に出勤する人や学校に向かう人が意欲のあるなしに限らず玉石混交している。だが、この中でこれら以外のためにいる人もいる。

例えば、人混みの中でやる犯罪のようなものだ。

今日もそういうスリルを味わいたいと思っっているバカな奴がいる。その人は人混みの中扉近くにいる女子高校生のお尻を触っていた。所謂痴漢である。

肥えた体に似合う大きくぎとぎとしているその手で触られている少女は不快に感じるが、ここで叫ぶと何か羞恥に思えて口を閉じていた。

それをいいことにその中年の痴漢は調子づいて尻を触っている手を徐々に下げた。いった。

その男の手が下がると共にその少女の恐怖心は高まり、彼女の大事なところを触られるとその恐怖は頂点に達した。

(い

や

あ

あ

!!!  
(あ

彼女がこれ以上ない恐怖と戦慄を感じたとき、彼女の体から中型のプロペラ戦闘機が現れた。

しかし、戦闘機が現れたにも関わらず、痴漢や他の人達はそれをまるで知覚していないように変わらず自分の行動をしていた。

そして、出てきた戦闘機はその男の頭に機銃の銃口を向けると、躊躇いなく発砲し、その痴漢の頭を打ち抜いた。

「ぐげっ……べ……」ドシヤ

男が頭を打ち抜かれて倒れたことで車両内に悲鳴が響き渡った。そして、その少女、2のへ組の加賀愛はその混乱の中、ことの一切を理解しているのであたふためいてとりあえず頭を下げた。

「すいません！すいません！」

「何い!?加賀が痴漢の被害に遭った!?バカ言うなよ望。スタイルは悪い、且つ平凡な顔の彼女がそんなもんに遭うわけないだろ」

「承太郎さん……いくら承太郎さんでも言つて良いことと悪いことがありますよ……」

愛が痴漢の被害に遭った日の午後三時半。終礼が終わり特にすることもないので帰宅しようかと考えていた承太郎に望が呼び止め、今朝のことを伝えた。

それを聞いた承太郎はびっくりし、何かの間違いか何かかと彼女を軽く貶しているように言つたので、握り拳を上げて静かに怒る望。そんな彼に「冗談だ。冗談」と承太郎は言つて気を落ち着かせようとする。

承太郎に宥められても青筋を立て続ける望だが、深く息をすつて怒りを外に出して、今朝の事件に対する自分の意見を言つた。

「いやですわねえ。私は彼女があそこまでの被害で終わってくれたことに実は感謝しているんですよ」

「ああ・・・確か前に木津と藤吉の二人に聞いたな・・・。木津の次に気を配っているそうだが、どういふことなんだ？」

望は痴漢一人を殺しただけでそれ以上のことはしていないので安堵するが、承太郎はそこまで彼女を気配りする意図に疑問を抱き、その真意を聞く。

質問された望は周りに人がいないことを確認すると、小声で伝えた。

「前にも伝えましたが、ここは自分のスタンド能力を知り、制御させる所でもありますが、流石に能力が強すぎたり、生徒自身が精神的に不安定だったりで、制御が難しい生徒の中にはいます。そのため、能力の暴走を抑えるためにもしっかりと監視の目を光らせなければなりません。木津さんは先日のように熱くなりやすい性格とスタンドの凶暴さ、加賀さんはスタンド制御の未熟さ、そして・・・」

「そして・・・？」

「彼女の内に眠る狂暴さ、です!!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

愛についてのことが望の口から出てから、周りは殺伐とした空気が流れた。この淀んだ空気に流石の承太郎も汗を流し、息を呑んだ。普段おどおどしている愛が望も一瞬喋るのを躊躇うぐらい恐ろしく危険であることを知ったからだ。

人次第では震えが止まらなくなったり、気を失ったりする者もいるであろう空間で望はさらに情報を追加した。

「彼女のスタンドは彼女の精神状態で変化するのです。平常なら『ACT1』、危機が迫って恐怖心でいっばいになると『ACT2』、そして……彼女の逆鱗……つまり、怒りの頂点に達すると、まるで大災害が起きたような破壊をもたらす『マシユマロウ・ジャステイス』『ACT3』”になるんです。……はい」

『ACT3』ツ!?!……大災害だど!!?」

「表沙汰にはなっていないませんが、彼女がここへ来る数日前に彼女は『ACT3』で自分の忌々しい過去を……彼女の自殺の原因であった母親を葬ったのです。その時の彼女は正に『地獄の女神』と形容できる様でした……」

「……やれやれつとしか言えんなあ……もう……」

愛に秘められたスタンドと狂気を伝えられた承太郎はそのことを想像しただけで恐ろしく感じ、帽子の鏢を押した。

「彼女が背負った業を軽くするために私が手厚く見守っているんです。ですから承太郎さん。彼女のためにもお願いがあります！」

「何……?お願いだと……?」

愛が犯した業を教えた望は続けて承太郎に頼み事を言い出した。承太郎はそれを首を傾げながらその内容を聞いた。

「実はですね。彼女の下校を付き添ってくれませんか？」

「ん？何でまた・・・」

「彼女がまた下校時に問題を起こさないように見張るんです。私は学校でやらなければならぬことが山ほどあるので、如何しても付き添ってあげられなくて・・・お願いします。勿論、承太郎さんだけでは役不足ですから小節さんも同行させますから・・・」

「ふん・・・まあいいだろう・・・」

承太郎は望のお願いで愛の引率を行わなければならなくてその理由を聞いたところ、望の事情もあり理に適っているので渋々同意する。

同意した彼に望は「感謝いたします」とお辞儀して、早速彼を宿直室へ案内した。

宿直室で合流した承太郎、愛、あびるの三人は現在学校から最寄りの車の出入りが頻

繁な通りのバス停で先発のバスを待っていた。

夕日による陽光で顔を手で覆いながらバスを待っているときに、愛が唐突に承太郎へ話しかけた。

「すいません承太郎さん．．．迷惑をかけてしまって．．．すいません．．．」

「何．．．気にすることは無い。私達は君達の領域に片足突っ込んでしまったからな。仕方のないことさ」

「．．．．．」

愛は承太郎にこんなことになってしまったことを謝ったが、承太郎は何食わぬ顔で彼女を気休ませる。

それを聞いて愛は暫く黙り込むが続けて発言した。やや不安げに．．．。

「私．．．．時々情緒不安定に陥るときがあるんです．．．。その時感じるんです。私の心がとてつもなく暗く冷たい闇に引きずり込まれる感覚が．．．。私が私でなくなるようなあの感覚．．．怖いんです。私は．．．。今朝だつて私の心が“それ”に飲み込まれそうになったんです。“それ”は『ACT2』のおかげで消えましたが、もしそ

うならなかったらと思うと、怖くて夜も眠れません・・・」

(「……………やれやれ……………なるほど。加賀の『ACT2』は自身の心の闇に飲み込まれないように彼女の精神が必死に抵抗している表れてわけか……………」)

愛の身の上話を聞いて彼女の「マシユマロウ・ジャステイス『ACT2』」の発現理由と役割を理解した承太郎。スタンドが人の心と同一なものであることを再認識したとき、承太郎は愛に名前を言われたので振り向くと、彼女は泣きじやくりそうな顔で自分の顔を見ていた。

「私……………どうすればいいですか!?!心の闇とどう接すればいいですか?」

「そ……………それはだな……………」

泣き出しそうな目で質問してくる愛に承太郎は少し戸惑うが、彼女のためにも思つてそれに答えた。

「承太郎さん!バスが来ましたよ!」

「……ッ!!?」

「ああ……そうか。なら乗ろうか……行くぞ加賀」

「あ……はい……」

承太郎が愛の質問に答えようとするとき、蚊帳の外にいたあびるは話を割って、二人にバスの到着を告げた。

それを聞いた承太郎は答えるのを止めて、答えを先延ばしにされて不満に思う愛とあびると共にバスに乗車した。

乗車したバスの中は静寂に包まれてシイイ〜〜ンとしていた。しかし承太郎達以外の乗客は無人ではなく、5、6人ほどいた。

「承太郎さん……さっきの「いや待て……加賀」……え?」

愛はさっきの問いの返事をもらいたくて、この静寂な空気の中再び問おうとするが、承太郎は待ったをかけた。そう言った彼の真意を確認するため愛は彼の顔を窺うと、その表情は戦いの中で垣間見える険しい表情になっていた。

静まりかえっているバスの中で唯一険しい表情をして殺気立たせる承太郎につられて、あびるも何かを感じ取り、構えだした。

「このバス．．．静かすぎないか？加賀．．．小節。あまりにも怪しすぎる．．．。ケータイを操作するにしろ、外を眺めるにしろ、何らかの動作をすることもなく、ただ虚空をじっと見つめる乗客のことが．．．」

「確かにそうですね．．．．愛ちゃん。気をつけた方がいい．．．ここに敵スタンド使いが紛れ込んでいるかもしれない．．．」

「ええ!?!．．．敵．．．スタンド使いですか?!?」

承太郎が感じ取った違和感というのは他の乗客が何もしていないことであった。

眠っているわけでもなく、目を大きく開けてじっとしている人達を確認できたあびるは愛に敵がいる可能性が高いことを教える。

そのことを知った愛はびっくりしてバスの扉に凭れるが、何かぬめつとしたものが背中当たったので振り向くと、そこには数本の触手があり、彼女のことを狙っていた。

「きゃあああ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~!!!!」

「くツ！そこかツ！／＼スタープラチナ・ザ・ワールド／＼ッ！！」ドオーーーン

愛が触手を見て絶叫したときに触手が襲い始めたが、即座に反応した承太郎が素早く『時』を止めてくれた。

「くっ・・・咄嗟に発動してしまって二秒も止められる自信はないが・・・まあ、それでも足りるがな」グイッ

『オラア！』ドギヤアア

『時』を止めた承太郎は「スタープラチナ」でその触手を掴んで愛から離れた後、時間切れになるまでそれをボコボコに殴ってバラバラにした。

「あ~~~~~~~~ッ!!!・・・・・はっ!?!触手はっ!?!」

「承太郎さんが処理してくれたみたいよ。安心して」

まだ何が起こったか理解できていない愛は混乱するが、あびるが今起こったことを教

えた。

“スタープラチナ”のラッシュを食らいバラバラになった触手は辺り一面に飛び散り、痙攣を起こしたかピクピク震えていた。

その時、バスが大きく揺られて三人とも体勢を崩しかけた。原因は運転手が急に苦しみだしハンドルをくるわせたからだ。だが、苦しんでいるのは運転手だけではないッ!! 乗客もだッ!!

「……これは一体……!?!」

「決まってるんだろ承太郎。我が“スリザー”の触手を微塵にしちまったんだからよお。コイツらの頭の中にある触手がさっきのダメージで暴れ回ったんだよ」

「この人……一体どこから……?」

乗客達が苦しみだしているの、頭をひねる承太郎に何処からか聞こえてくる男の聲がその理由を答えた。

あびるは愛を自分の背中に隠しながら居場所を探そうとすると、自分たちから四歩ほど歩いた席に愛のように後ろ髪を束ねた赤銅色しやくどうしきの長髪の男がいつの間にかいた。

その男を発見すると『ACT1』を展開した愛が彼の情報を探る。

「ダナー・アイベリー」……30歳。ギャング組織「ワイルド・ドッグ」の幹部……の人です」

「何だと!? バカな……パステクアーという男達が攻めてきて二日も経っていないのにもう攻めてきたのか!? あまりにも対応が早すぎる……!!?」

「ほお……やはり先日の第十師団で到頭ばれてしまっていたか……まあいいさ。所詮あの戦いは余興さ。全てはこの時のための下準備に過ぎない。オマエ達がいらぬ知識を知ったところで何の得にもなりはしないのだからな」

「余興!? つまりは失敗を前提とした戦いだというのが!? 仲間の命を何だと思っているの!?」

愛が「ワイルド・ドッグ」ということを言ったことでダナーは少し感心するが、すぐに無表情になる。

1つの作戦が失敗すれば、また新たな策を練り上げる。しかしどんな策士であろうと作戦失敗から新たな策を生み出すまで、到底数日で考え出し、実行に移すことは出来ない。

そう承太郎は思っていたが、実はパステクアー達はダナーの襲撃のための単なる贄で

あることがダナーの口から出た。パステクアー達は結果的にダナーのための良い肥やしになったのだ。

自分の恩師である糸色望でも人の命を機関車にくべる石炭のように扱うことを考えてついても実行に躊躇するとあびるは思い、にもかかわらず自分の仲間を平気で捨ててしまふ。『ワイルド・ドッグ』に憤り、その不満をダナーにぶつけた。

だが、ダナーはそれを聞いて不機嫌になり、発言したあびるを鼻で笑い、バスの格子を掴みながら立ち上がった。

「あのな……小節あびる。オマエ等のようなお手々つないで仲良く敵を倒しましょうなんて考えは甘過ぎなんだよ！力で全てを支配するためには時には仲間を自爆させるだけの冷酷さが必要なんだよ。そして勘違いするな!!ギヤングならば自分の命の1つや2つ賭けられる度胸もない奴はギヤングとは言わねえんだよ！」

立ち上がったダナーはギヤングとしての生き様を話し、簡単に否定したあびるの考えを否定した。

そしてそのままダナーは両手を触手に変換し、その触手で承太郎とあびるに襲いかかった。承太郎とあびるはスタンドを出して、受けてたとうとするが、その触手をよく

見ると、二人に向かっているよりかは二人の死角にいた愛に向かっていた。

「ええ!? う．．．嘘!？」

「何!? こいつ．．．まさか」

「愛ちゃんの方を．．．!」

『『ウオーーーーーーッ!!』』

「ッやはりッ．．．かかったなアホ共めーーーーーッ!!」

ブチブチブチ                      ドツシユウウウ

「何だと．．．!？」

「これって．．．嘘でしょ」

「承太郎さんッ!! あびるさんッ!!」

承太郎とあびるは触手が自分達ではなく愛を襲おうとしているので驚き、咄嗟にその触手が愛に到達する前に防ごうとする矢先、その触手が途中から分裂して一方がバスの扉に、もう一方が二人の首に突き刺さる。愛ではなく．．．。

「くくく．．．オレのスタンドは肉体を触手に変換して操れるスタンド。分裂もできるッ

！ブフフフ．．．承太郎。まず敵地の城に侵入しようと思つたらオマエなら何処を狙うつもりなんだ？．．．そう！一番壊しやすい部分だよなあ。なら、オマエ等に当てはめると誰になると思うう？？．．．クヒヒ、ハハ。もちろん加賀愛だよなあ」

「わ．．．私が．．．」

「That's Right!! パステクアーとの戦いでキミが一番足手まといになると思つたんだよなあ!! 理由はかんた〜ん!! あの時オマエが一番活躍したからだよ。ということは裏返せば自分は非力でええ〜すつて言つてると変わるからなあ〜!!」

「こ．．．こいつ。エグいことしてくれるわね．．．。まさか敵がこんな戦い方をしてくるとは．．．」

「やれやれだぜ．．．。どうやら私達は奴の『狩り場』に入っちゃったようだな．．．」  
「それもこれもトップのおかげだぜ。今こうしてテメエ等を追い詰めていられるのは、何もかも全てトップが考えついたことだからよおお!!」

承太郎とあびるが元々自分の方へ向かつていたのにそれを捌こうとして逆に彼等の首に触手が突き刺さつたのを見て愛が涙目になってショックを受けているとき、ダナーは愛をかばつた二人に愛こそが二人の弱点、足手まといと告げ、まんまと敵の策に嵌

まった二人は苦汁を舐めさせられる思いをした。

「加賀愛……これはオマエのせいだぜええ。オマエが弱すぎるせいで二人はオマエを助けたためにこのオレに多大な隙を作らせちまったからなあ!!」

「そ……そんな。私の……私のせいで……そんな……こんなことが……すい……うう……すいません……」

（ふふ。とはいってもこつちには乗客という人質がいる……。あのとき承太郎等がオレの「スリザー」を八つ裂きにしてもその時のダメージに呼応して人質達の中の「スリザー」が暴れる。そうすれば二人の行動は限定され、攻めを失ってしまう。結果的にオレの「スリザー」がヤツ等の首に突き刺さる運命に変わりはないが、まあここは……彼女の純情な心を利用させてもらうとするよ。くくく）

承太郎とあびるが自分を庇って敵の策に嵌まったことで涙目の愛はダナーが言った事実によつて二手、三手と自分の心に鋭く、深い自分のせいから来る自責の念というナイフに刺さり、徐々にその念を募らせる。

だが、過程はどうあれ、二人の首に触手が突き刺さることに変わりはないため、愛のせいだけとは一概に言えないが、愛自身を無力化する意味では十分に靦面といえる。

そうこうしている内に二人が刺さっていた触手は皮膚の下を這い、頬の近くにまで上がっていた。だが、承太郎の首に刺さっていた触手はいつの間にか除去されてバラバラになっていた。

その場に触手が散らばった時に、承太郎はダナーの方へ向かい、  
「スタープラチナ」  
でぶつ飛ばそうと殴ろうとするが、乗客達のうめき声を聞いてその拳をダナーの顔面すれすれで止めた。

「そ．．．そうだ承太郎。ハア．．．ハア．．．。時を止めた瞬間に触手を取り除き、オレを殴り飛ばそうとしたことは褒めてやるツ！だが！オレを殺し損なえば乗客も巻き沿いになることを覚えておけツ！」

「ちつ．．．このクズ野郎．．．」

ダナーを一発で殺し損なえば乗客達は最悪苦痛に耐えられず死ぬ。乗客を人質に取られ為す術を失った承太郎は無抵抗のまま触手に体を突き刺されていった。その状態で承太郎は頭を抱えて膝をべつとりと床につけて今にも泣きそうな愛を優しく見た。

「加賀．．．そういえばお前の質問に答えていなかったな．．．『心の闇とどう接するべ

きか』と……」

「承太郎さん。ど……どうしてどうしてこんなときに……」

こんな時にこんな状態で彼女が出した質問の答えを返そうとする承太郎に愛は疑問に思うが、彼はお構いなく伝えた。

「慣れるんだ……加賀。少しずついい……少しずつ生長すればいい。そして、お前の心の闇を本当の意味で理解できたとき、お前は“それ”を克服できるんだ……忘れるなよ……」

「……じよ……承太郎さん」

承太郎の言葉を聞いて愛が涙を流したとき、触手が彼とあびるの頭に到達し、二人は放心状態になってしまった。

「ふうー。これでもう攻撃できまい……空条承太郎、小節あびる。ゲへへへへへへへ。人間ってヤツはよう……加賀愛。人間ってヤツは単純だ。脳を抑えこめば楽に片がつく。例え無敵と恐れられる承太郎であつてもなあ!!」

ダナーは愛に近付き、放心状態の二人の肩を借りてぶら下がりながら彼女に向かって話した。愛はそれを見て二人が完全に堕ちてしまつて心の底から恐怖心がこみ上げて胃酸が逆流しそうで吐きそうなきにも彼はまだ話し続ける。

「オレはただお前等を倒すためにここにいるわけではねえぜ。一番大事なのは情報だ。あろうことかオマエ等はスコッチ等相手に死傷者ゼロ。挙げ句の果てにパステクアーとの戦いで腹に風穴空いたにも関わらずびんびんしていた日塔奈美というヤツがいる始末。だからこそそうなるための兵力、技術力、そして個人情報!! それら全てを明かし、我が組織を勝利へ導くための土台とさせるんだよ。この戦いでな」

「そんなことが貴方にできるのですか？」

「できるさあ。触手を脳に入れれば、人も操れるし、記憶も読めるツ！ さあ、小節あびるよ！ オレに全てを教えてくれツ!!」

ダナーが最優先で行わなければならないことはこの戦いで一つでも多くの情報を組織に送ることだと彼は愛に教え、あびるの頭を「なにになに〜ツ」と言いながらじっくり、情報を得ようとする。

愛は最初は半信半疑だったが、ダナーが記憶を探るにつれて徐々に冷や汗が流れ始めた。

そして、ダナーがふと動きを止め、これぞと言わんばかりに瞳孔を開けた。彼女の中で「あれ」を発見したからだ！

「『聖なる遺体』!? 『カフカ細胞』!? おおー！ー！ー！この記憶はツ!! そうか・・・そうか、そうだったのかあー！ー！ー！アハハハハ・・・素晴らしい!! コイツは素晴らしい発見だツ!!」

「く・・・う・・・うわあー！ー！ー！ー!! 『ガシイ』・・・ツ!! ハツ!!?」

ダナーが遺体のことを知り、あまりにも凄すぎて狂乱鼓舞する彼に愛は何もかも終わってしまうと判断し、我を忘れて殴り駆けた。

だが、その拳はダナーに操られた承太郎の掌で受け止められ、そのまま強く握られ愛は逃げられなくなる。

「さて・・・記憶の通りではオマエは不死身らしいが、どれほどのものなのか?」



ダナーが黒き野心を抱きだしたことで、その衝動が抑えきれずそれが顔と口に出てしまったことで、愛の中の“それ”のスイッチが入った。

ブロロロロンというエンジン音と共に現れたスタンド、マシユマロウ・ジャステイス『ACT2』”。その登場にダナーは驚くどころか逆に呆れ果てていた。

「Hey!!そんなモン出していいのかよ。忘れたか?コイツ等の頭にはオレのスタンドの一部があるってことを……一般人も殺していいのかよ!」

『ACT2』を展開した愛に人質の存在を再び上げるが、『ACT2』が既に出ているためそんなことは通用せず、弾丸を連射する。

その口径30ミリの弾はダナー目掛けて容赦なく撃ち込まれるが、彼の眼前に現れた包帯によって止められる。

愛が確認すると、あびるが“ラブマシーン”を操っていて、更に有無を言わさず巧みに『ACT2』を包帯でぐるぐるにして捕縛した。流石に鋼鉄の硬度を持つ“ラブマシーン”を『ACT2』では破壊できず、がっちりと捕えられていた。

スタンドを捕縛され、しかも性質上それを戻すこともできず、無防備になった愛は呆

然としてしまい、その隙に「スリザー」によつて彼女は捕まり、ダナーは苦笑した。

「これがオマエの人生の縮図さツ!!他人からは助けられ守られ続け、いざ人を守ろうとしても誰一人守れない・・・それが運命であり、宿命さ!そしてオレは人類の飛躍的な進化のパイオニアとして後世に名を残し、その力で「ワイルド・ドッグ」を世界一に押し上げるツ!!精々オマエも糸色望も2のへ組のヤツ等も全員!!我々の繁栄と統治のための供物になるがいいわツ!!イギハハハハハハハハハ!!」

「・・・ツ!!ク・・・カハツ!来る・・・来た・・・困まれた・・・」

ダナーに散々罵倒され、屈辱に等しい取らぬ狸の皮算用を聞かされながら、皮膚の中に触手が入り込んでいる愛はこの時、彼女の精神世界で彼女は闇に囲まれていた。一寸の光すら届かない闇に彼女が包まれるにつれて、彼女の心も闇色に染まり始める。

自責や恐怖の音が苦痛と怨嗟の淀んだ唄に変わり、楽しい記憶が惨めで陰惨なトラウマになり、無意識のうちに自重していた彼女の性の鎖が外れ、彼女の精神内がまるで地獄と化した。

「・・・これは・・・何だ!黒すぎるぞ!暗すぎるぞ!本当に人間なのか!」



は正に“地獄の女神”というに相応しいものだった。

T o B e C o n t i n u e d . . . . ⇒

——プロフィール——

・ダナー・アイベリー 30歳。男性。

エッグプラントが気に入っている幹部のスタンド使い。

慎重で計算高く、様々な策を用意する諜報員。

因みに組織の設立とほぼ同時期に入団した。

スタンド名：スリザー

【破壊力：D スピード：B 射程距離：B 持続力：C 精密動作性：C 成長性：D】  
能力：肉体を触手に変換できる スタイル：近中距離操作型 分類：分裂型

## 第貳拾七話 地獄の女神 加賀愛その②

とある少女は惨めな人生を送っていた。

彼女の家庭は普通の家庭と変わらない。だが、父親を彼女が生まれて間もない頃に亡くしていることと自分の主張を言つてはいけなないと物心ついたときから教えてきた母親がいる以外は……。

例え理不尽な目に遭つても相手を責めず、逆に自分に何かしらの原因があることを思わなければならず、自分に何かしらの責任がある場合、その都度頭を下げるよう母は教え、もし刃向かうようなことをすれば、徹底的な暴力を与えて彼女の身と心に分からせた。

そもその原因は彼女の父親、つまりはその母の夫が多国籍企業の社員で、海外で仕事をしているとき、別企業の車両と衝突事故を起こしてしまい、その裁判で相手側の企業に責があると彼は主張するが、結局敗訴に終わり、莫大な慰謝料と会社の恥曝しという汚名から来るストレスに耐えられず亡くなった。

元々彼女の祖父もその父も大戦時日本兵だったため、敗戦後母や祖母から「我々日本

人は色んな人に迷惑をかけてしまった」と教えられながら育つたために、夫の知らせを聞いたとき、「端から自分が悪かったと言え、これほどまで大事にはならなかったはずなのに・・・」と夫を哀れみ、そしてこんな辛い目に自分の一人娘が遭わないようにするために母親はこの時彼女に対して歪んだ愛情を注ぐことになる。

そんな母の教えに流されるように育つた少女は小中学校でいじめの対象とされ、事ある毎にいじめられていた。そしてそのいじめが浮き彫りになれば、決まって母は謝り、家に連れて帰ると暴力を振るう。

何かにつけて母は「あんたが悪いのよ!!あんたが変な態度取つたから・・・あの子達が不愉快になったからこうなったのよ!!」だとか「全てあんたのためだからね!!お母さんがこんなに頑張っているのは・・・全部ツ!!あんたのためを思つてなのよ!!」と怒鳴り散らし、彼女に暴力を振るつた。

クラスメイトや母親から夕立のように降り注ぐ暴力の中で彼女は毎々「誰か助けて・・・誰でもいいからお願い・・・」と思つた。だが残念なことに、空腹で堪らないのに何十回と竿を下ろしても魚が一匹もかからないように、彼女の願いは決して叶わぬことだった。

終いに彼女は自分の生きる価値があるのかという疑問を抱き、その疑問を自答する頃には、彼女は校舎の屋上におり、結論が定まったときには、彼女はそこから飛び降りて頭を地面に叩き付けていた。

『悲しい人生だったね．．．でも大丈夫。これからあなたは生まれ変わる』

気がつくると少女は暗い空間にいた。宇宙の彼方なのかはたまた別の空間なのかは定かではないが、この世ではないことは理解できた。

その中で自分の全てを包み込んでくれる優しい少女の声を聞いた。どこにいるかを確認することはできないが、その存在は近くにいるようで遠くにいるようだった。

『貴女は“第2の人生”を歩むことになる。でもそれに慣れるまでは地獄のように辛い道が貴女を待っている。だからせめてもの心の拠り所として何か欲しいものがあれば言つて?』

少女の声を聞いて彼女は戸惑うが、慈愛に満ちた少女の声が彼女の崩壊した心を紡ぎ直し、自然と躊躇いなく本音を漏らせた。

「知りたい……私はどうしても知りたいッ!!他人が私のことをどう思っているのかを……!!」

姿の见えない少女に向かって本音を言う彼女はポロポロと涙の雫を溢す。この涙は悲しいからではなく、失った大切なものを再び見つけることができたような安心感から来るものだ。そして彼女はもう一つ……生まれ初めて欲を出すのだが、それでも彼女は言った。

「あと……欲しいの……生まれてこの方持ちたくても持てなかつたけど……。勇気が欲しい!!自分で立ち上がってどん底から這い上がれるような勇気をッ!!」

彼女が言った二つ目の願い事に少女は何の小言も言うことなく望むように彼女にその二つを授けた。

その時目が覚めて、病室のベッドから体を起こした彼女。その時からその少女、加賀愛の第2の人生が幕を開けた。

話は戻って走行しているバスの中、“スリザー”に拘束され、その触手が脳にまで侵食している愛は彼女の闇のスタンド、“マシユマロウ・ジャステイス『ACT3』”を出して、本体のダナーに依然として睨んでいる。

『ACT3』は『ACT2』より大きい中型プロペラ戦闘機だが、『ACT2』まであった双眼鏡が垂れ下がっており、両翼と胴に計7つの口径50ミリの機銃が搭載されて迫力はかなりあるにも関わらず、依然ダナーは余裕の態度を見せていた。

「くくく．．．キミのスタンドが進化してしまったことには驚いたが、忘れたのかい？我

がスタンドは既にキサマの脳に入り込んでる!!もうどうすることも出来はしないッ  
!!!」

ダナーの言う通り愛はどっからどう見ても絶体絶命のピンチ。彼に操られれば、いかなる抵抗も無に等しい。それに加えて、ダナーを攻撃すると、そのダメージが承太郎やあびる、他の乗客達にも及んでしまうので手が出せないはずだが、愛は攻撃しようと企む。

(コイツ……どうやらプツンしたときに頭のネジも飛んだらしいな。実に浅はかで単純なものだ……)

触手が彼女の脳に達しているため、愛の考えていることが断片的だが分かったので、心底呆れるダナーだが、断片的故に愛が行うことを正確に把握できなかった。彼女は……。

“自分の方”に銃口を向けていたッ!!!

(ま・・・!! な・・・コイツ!! いかん! こんなことで大切な人質を失うわけにはいかん!! 早く分離しなくてはツ!!)

『ACT3』の銃口を愛自身に向けたことにダナーは憐れと思うよりも先に流れ弾に被弾し、その時のダメージフィールドバックで折角確保した人質が全滅することを恐れて触手の連結を外し、素早く後方に下がったが、銃口からではなくどうから発射された『何か』は異常に速く、たった一秒足らずで彼女の頭蓋骨と脳みそを爆撃し、その爆風をダナーは軽く受ける。

(“ミ・・・ミサイル”か!?あのスタンド・・・機銃だけでなくミサイルも所持していたのか!?そして、なんて捨て身な行為なんだ・・・不死者ならではこそその発想だ・・・!!)

ミサイルで自分の頭を破壊して、破壊痕から大量の血肉と切り離された触手が溢れ落ちながら立っている愛を見て些か彼女の不気味さと異常さに敬意するダナーは、分裂させた触手を自分の体に戻し、頭が復元している愛の出方を窺った。

頭の傷が痣一つ残さず再生した愛は自分の出方を探っているダナーを見て少し沈黙



患部を押さえながら停車したバスを見た。

見るといつの間にか愛はバスを下車していて、『ACT3』を出したままこちらに歩み寄ってきている。それに焦るダナー。何故かというど……。

(まずい……この女……いつの間にかオレの射程範囲を把握していやがった。射程20～30メートル……どう見てもそれ以上バスから離れちゃった。つまり!人質が今誰もいねえ!!人質がなくなった今……非常にやっべえええ!!)

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

愛の攻撃でスタンド射程の外に出してしまったことにより、人質として扱っていた彼等がその意味を失ってしまい、彼女と対峙しながらもかなり冷や汗を流すダナー。それを見て愛はダナーの心情を察したかクスクスと不気味な笑みを漏らす。

「フッフッフ。イイですね……怯えたあなたを見てると何かスカツとするんですよ

ねえ。でも……もつとスカツとさせて貰いますよ？あなたをブチ殺して血いドバドバ流してねえッ!!」ブロン

ドヒュ　　ドヒュ　　ドヒュ　　ドヒュ　　ドヒュ

愛の目が血走り『ACT3』のミサイルの連弾をダナーに目掛けて飛ばすが、彼はアクロバットに宙を舞ってミサイルの全弾を躲した。

発射されたミサイルはそのまま一直線上にある停車していた車両に当たり、爆発した。さらにそれに誘発されて次々と爆発が起こり、辺りは火の海になった。

その大惨事を見てダナーは一瞬ゾツとするが、構わず足から触手を伸ばし、愛の背後から襲いかかった。

「無駄無駄無駄無駄! そんな低俗な奇襲で私をやれるとでも!? 『心』が読めるのよッ!! てめーがやることなんてお見通しなのよッ!!」ドバアアア

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ

「ッ!? な……ならこの攻撃はッ!! やれるかぁー……!!」ドヒュ………

ゴバゴバゴバ　　ゴバゴバ　　ゴバゴバゴバ　　ゴバゴバ

「チツ！狡猾な悪あがきねー！」

背後の触手を見ることなく驚異的な跳躍を成し遂げてそれを躲す愛は、『ACT3』の全機銃の一斉射撃を行いダナーに攻撃するが、彼は身体を全て触手に変えて躲して見せて不発に終わった触手をジャンプしている途中の愛へ向かって伸ばした。

真下から来る触手を目にして愛はスタンドの翼を掴み、グライダーのようにスタンドを利用して距離を取ろうとした。

しかし、急上昇する触手は途中で丸く集積し、大きな球の形を作った。その時、その球の隙間から触手が飛び出してきて威力の高い攻撃を仕掛けてきたダナーだが、愛はフルスピードでスタンドを動かし、その嵐のように襲ってくる触手を悪態つきながら躲し、無事に着地する。

襲ってきた触手はダナー本人に戻り、車が一台も通っていない道路で二人は対峙する。

「ちよこまかとうざい動きをするわね・・・腹が立つのよ!!もうそんなことが出来ないように・・・荒いことさせてもらおうわ！」

決着を早めたい愛は自分のスタンドを上空の彼方へ飛ばした。その数秒後、何かが落ちてくる音が聞こえてきたとき、ダナーが想像していたことよりももつと無茶苦茶なことが起こると知って、表情が引きつると共に、回避の行動に移る。

ボグオ      ボグオ      ボグオ      ボグオ  
ボグオ      ボグオ      ボグオ      ボグオ  
ボグオ      ボグオ      ボグオ      ボグオ  
ボグオ      ボグオ      ボグオ      ボグオ

戦場と化した道路の辺り一面に空から大量のミサイルが夕立の如く降り注ぎ、街を破壊し、二人の周りを完全に火の海に変えて逃げ場をなくさせた。

（アチャアチャアチャアチャ!!コイツ・・・マジか!?ここまでとは!!オレの動きを封じるためにここまでやるか!!?・・・末恐ろしいヤツだ）

愛の大規模な無差別砲火により、ダナーの体は多少ながらやけどを起こし、愛の真の異常さを目の当たりにする。敵を追い詰めるために辺り一面を地獄絵図にするその異常さをツ!!

そしてこの業火の中、火が持つ破壊力と細胞自体の再生力の双方が行われている状態の愛がのそのそと歩いて近付いてくる。





肉塊になり、ボロボロと崩れていった。

ダナーの体が崩れ去ったのを分かっていたのか愛は攻撃を止め、再生したばかりの目で辺りを見渡す。火の明かりのせいで治ったばかりの目には負担がかかったが、脛をパチパチさせて暫く眺めると、愛は苦々しい顔つきになって舌打ちした。何故ならそこにダナーの残骸がないからだ。

愛が派手に暴れたことで救急車や消防車のサイレンが忙しく鳴り響いていて、ダナーのいる下水道までその音が聞こえていた。

彼は今彼女と戦った場所の近くの下水口からバラバラにされた触手を動かして侵入し、自分がやって来た道の方向へ撤退していた。

（くそ……ここ……ここは離れよう。あんなクレイジー女とやり合うには一人ではきつすぎる……。ここは一旦逃げて“情報”だけでも渡さねばならない……。元よりオレは“殺し”が目的ではない……。 “諜報”だッ!! オレの得た情報は偽りのないものだからこそ、ボスに気に入ってもらえてここまでの上がつてきて来れたのに……。あんな……。頭のネジが外れたヒステリー女のせいで全てを蔑ろにして堪るかよッ!!）

ダナーは心の中で悪態をついて壁に寄った。そして、そのまま足を引きずりながら少しずつ前進してこの場から・・・願わくはこの国から去ろうとする。

だが突如、自分が入ってきた下水口が爆破されて外の光が下水道に入ってきた。その時にその大きく空いた穴から少女が一人飛び込んできた。勿論その人物は加賀愛だ。

彼女の登場にダナーはとても落胆し、疲労で重たい体を彼女の方に向けて壁に凭れたまま対峙する。

「オマエのスタンド・・・やはり、"センサー"か。双眼鏡を通して心を読む今までの形態とは違い、その機体の何処からかから発せられる音波か何かで人が何処にいて何を考えているのかをリーダーのように感知するスタンド・・・。それがオマエだ！違うか？」  
「クフフフフ。凄いですねえ~~~~~大当たりですよ。ますますあなたを生かしておくべきではないですねえ!!まあ元々殺すつもりですけど・・・」

ドドド

ドドド

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

かなりの疲労感があるダナーと殺気立たせている愛は殆ど静寂に包まれている下水道の中で、最期の一騎打ちを始めようとしていた。互いにスタンドを起動させて西部劇の決闘のような雰囲気醸し出していった。

そして、ダナーはストレートに己のスタンドをフルスピードで愛に向けて触手を伸ばした。けれども、それは猛進する『ACT3』の機銃に撃ち落とされる。

ここまでは今までと同じ攻撃パターンだ。しかし、ここでダナーの思惑とは違った攻撃方法を愛は行った。

通常「マシユマロウ・ジャステイス」のようなタイプのスタンドは弾丸を発射して戦うのがオーソドックスだ。しかしッ!!彼の俊敏な動きで全て躲せされると学習した愛はその手の攻撃をしようとは思わなかった。

逆にッ!!思いつき突っ込んだッ!!

ドグアアアアアアアアア

「……………これは……………」

「もうあなたには銃撃は必要ない……………学習しましたから。このまま高速回転しているプ



ボガア

ボグウウウ

ズバアラ

ゴルリイイイ

ド

バー  
ン!!

“マシユマロウ・ジャステイス『ACT3』”の嵐のような体当たりを食らったダナーの体はものの数秒でミンチにされてしまった。

しかしスタンドの性質上触手化しているため体は元の姿に戻るわけだが、食らったダナーは悲惨なものでそれに耐えきれず、ダナーは泡を吹いて気絶していた。

それを見下ろす愛は息を整えて全ての怒りをこの一撃に込めるように倒れているダナーの頭部に目掛けてミサイルを放ってそれを粉々にした。そしてその時に愛の何か吹っ切れたらしく、そのまま虚空を見つめたまま暫くフリーズした。

(……あれ？私……今まで何を……ここは下水道？どうして私……こんな所に……)

フリーズしていた愛が再起動したとき、彼女の性格は元に戻っていた。

バスで敵の男に拘束されていたときから記憶がなく、どうして自分がバスの中ではなく下水道にいるのかが気掛かりだった。だがその疑問も近くに転がっている首なし死体を見て合点がいった。

(そうだった……私……またやつちやつたんだ。闇に吞まれて……それで……はっ!!)

「承太郎さん!!私が狂暴化していたときにやつちやつていたらどうしよう……。百遍お腹切つても償いきれないよお~~~~。私死ねないけど~~~~」

遺体を見てバスの中の承太郎のことを思い出した愛はそそくさと下水道から梯子を伝ってマンホールから地上へ出ると、自分がやらかしてしまった惨状を目の辺りにす

る。

焼け焦げた車や道路。燃えているビルを消火している消防隊。怪我人に手当てをし、救急車に運び込む救急隊員。それらを見た愛は承太郎のことを忘れるぐらい絶句し、腰を落としてしまう。

ブツブツブツブツブツブツブツブツ

「やっぱり私って生きていちゃいけない存在ですよね。これほどまでに周りが見えなくなってしまうもの。それはそうですよねえ〜ウフフ」

ブツブツブツブツブツブツブツ

「何一人でブツブツと言ってるんだ・・加賀」

「はっ!! 承太郎さん!! すっかり忘れていました。そしてすいません!!」

頭を抱えて独り言のように呟く愛の背後からふらつく足取りで空条承太郎があびるを肩に担ぎながらやって来た。愛は承太郎の姿を見た瞬間、さつきやろうとしていたことを思い出し、そのまま彼に謝罪する。

流石に承太郎もここから広がる惨状から察しがついて彼女が謝る理由が分かり、愛に

一つだけ言った。

「加賀……決して恥じることはない。子供が寝しよんべんをするようなものだ。つまりここからだ。誰だっていきなり100キロの錘を持ってやしないさ……。常日頃から鍛錬してようやく持てるようになる。君はその第一歩を進んだのだ。この教訓を次に繋げればいい。そのためにも私や望がいるのだから」

愛は承太郎の助言のおかげで目から鱗が落ち、自分の渴ききった心に水が注がれるような不思議な感じがするが、承太郎が急に膝から崩れて倒れそうになったので、深い意味でそれがどんな感情だったかは考える余裕はなかった。

「大丈夫ですか!?!やはり敵の攻撃で……」

「ああ……確かに。体がだるくてもう自力で立てそうにない……。悪いが肩を貸してくれ」

「喜んで……」

ダナーの触手攻撃でかなり体力を奪われていたらしく思うように体が動かず倒れそ

うになるところを愛が体を支えてくれたおかげで無事倒れずに済む承太郎。そのまま彼は愛の肩を借り、あびるを抱えたまま帰途についた。

《・・・そうか。ご苦勞であつたダナー・アイベリー。流石私が見込むスタンド使用だ》



けでよかったぜ。触手化したオレは“人間”として扱われなくなっていたおかげで触手の間に思いついた脳の部分に相当する触手をドブに隠す作戦は成功したぜ！脳させ損傷しなければ触手化は解けることはないッ！ちとバッチかったが結果オーライだぜ！グヘヘ）

本部へ向かう途中でダナーは愛のスタンドの弱点を利用し、自分の死を偽装したことが成功して悦に浸っていた。彼の顔が引きつるほどの笑みを浮かべながら去っていった愛に向かってダナーは叫んだ。

「加賀愛いいいいいいいいいい！！次会うときは必ずキサマを克服し、そして殺してやるッ『ドンドンドン』・・・!!?えッ!?な・・・何が・・・!?!」  
ブロン ブロン ブロロロooooooooooooooooooooooッ  
「・・・ッ!!あ・・・あ・・・『ACT2』ッ!?くそ・・・ちくしょうどうして・・・な  
んで・・・!?!」

次戦うときこそ愛を倒そうと決意するダナーだが、その時、彼の腹に3つの穴が空いて血が噴き出る。

あまりの不意打ちに動揺するダナーの背後からエンジンを吹かして現れた「マシユマロウ・ジャステイス『ACT2』」。そいつの登場にパニックせざるを得なくなるダナーは完全に冷静さを失っていた。

そして、『ACT2』はダナーに不意打ちをかました後、本格的に攻めるためにダナーに接近した。

(まさかッ!!愛の『ACT2』がここまで執念深かったとは・・・!!まずい!!!これでは触手が間に合わな・・・)

ドガガガガガガガガガア~~~~~ン

「ギ」

に

やあ——————  
!!!

「うん？何か聞こえませんでしたか？サイレンの音がうるさくて上手く聞き取れませんでしたが……」

「そんなことはどうでもいいだろう……それより携帯持つてるか？望に連絡する。二度とこんなのはゴメンだ」

「う……う……う……」

『ACT2』の銃撃を食らい、本当の断末魔の叫びをダナーが上げたとき、その叫びは下水道中に響き渡り、下水道の排水口の近くにいた愛達の耳にも入った。

しかし救急車やパトカー、消防車が発するサイレンの方が大きい音を出していたため、彼等は具体的にそれが何の音だったかは分からずじまいで、最終的に空耳かと思つてそのまま帰つて行つた。

ダナー・アイベリー……惜しくも死亡。

加賀愛・・・・承太郎の言う通り頑張つていこうと決心する。

小節あびる・・・・移動途中に意識が戻る。再起可能。

空条承太郎・・・・愛の携帯で望を呼んで自宅に帰った。やれやれと思う。

To Be Continued・・・⇒

## 第式拾八話 学校の七不思議

真夜中の学校。

校舎内から人氣がなくなるため夜の学校は古来より薄気味悪い場所とされている。そんな場所で長時間いなければならぬのは罰ゲームに等しいことだ。やる気なんて相当てないだろう。だが、それを行っている者がいた。それは糸色望と空条承太郎の二人だった。

「何故私が夜勤なんてしなければならぬんだ……ええ？望……」  
「だから何度も言っているでしょう。もう勘弁してくださいよ……ちゃんとその分ボーナスが出るんですから……」

二人は懐中電灯を照らして校舎内を見廻りしていた。だが、承太郎は望に不満を言い流しながらひんしゆく聾感を買っていて、望はなんとか言葉を取り繕っていた。

何故こうなったのか……。承太郎は昼間の出来事を思い返す。

「糸色先生。例の件をそろそろやっていただかないと困ります」

「嫌でも智恵先生・・・それは・・・」

「でもやだつては聞き飽きました。今日という今日は筋金入りのその重いチキン腰を上げて貰いますよ」

「ええー！ツツ!?嘘でしょう!?!」

「問答無用ですツ!!」

カウンセラー室で新井智恵と糸色望があることを話していた。望はその案件をどうしてもやりたくないらしく頑なに断り続けるが、智恵の許しは下りず、終いに彼女にヘッドロックをかけられて否が応でもその件をやらされそうになる。

それを見かけた承太郎は何事かと思つて二人の間に入つていった。

「どうしたんだ二人とも・・・何事だ？こんな真つ昼間に」

「あら・・・承太郎さんではないです・・・かッ！」グキイ

「ぐほえ・・・ギブギブ智恵先生ギブッ!!」

間に入つてきた承太郎に気付いた智恵は首を彼の方へ向けるが、それと同時に望の首から鈍い音が出るほど腕の締めつけを強化し、望は堪らず降参する。

望が観念したので智恵はヘッドロックを解き、自分の首をさする望を尻目に承太郎は事の成り行きを智恵から聞いた。

「実は半年前から糸色先生に生徒間で囁かれている『学校の七不思議』についての調査をするように言っていました。なかなかチキンの腰を上げてくれなくて・・・」

「・・・・・・。しかしあくまで噂程度の『七不思議』に目を光らせる必要はあるのか？」

「大ありです！事実、それを言い訳にずる休みをする生徒がいる始末……。学校内の風紀のためにも必要なんですよ……。ああ。でしたら……。承太郎さん。貴方も調査に参加なさってはどうか？一人より二人の方がきつと心強いと思うので」

「……。何だと」

承太郎と話している内に、智恵は彼を加えて二人で行う案を考えついて強引に話を進める。

承太郎はそれを聞いていたが、あまりのことなので出る言葉が見つからなかった故に話がトントン拍子で進み、いつの間にか断りづらくなつて現在に至るのだ。

(やれやれ……。早く済ませて床につかせてもらおうか)

回想し終えた承太郎は予め智恵に用意された用紙を懐から取り出し、そこに書かれている内容を読んだ。

・誰もいないはずの職員室のコピー機が動き出して、その傍らにもものすごい速さで動

いている多重腕の怪物。

・夜の校舎に現れる透き通るように白い肌をした長い髪の少女。

・奇妙な音を出しながらのらりくらりと歩く妖怪。

・何もない廊下で急に何かにつかつかかかって転倒したり、誰かに肩を叩かれたりする謎の怪奇現象。

・食堂の厨房に現れる二匹の妖怪。

・音楽室から聞こえる少女の不気味な歌と踊っているかのようなラップ音。

・保健室で包帯に包まれた不気味な怪物。

「全く一体誰なんだ。こんな根も葉もない噂流した奴は……」

用紙に記載されている七不思議を確認してバカバカしく思う承太郎。ぼやいている承太郎の側で望は愛想笑いでやり過ぎ、二人は最初に最後の欄に書かれている怪物が出るとされる保健室の前にやって来た。

いや〜〜キンチョーしますね〜〜と扉の前で呟く望を見て、承太郎はやれやれと思いつつ保健室の戸を開けた。

するとその中では至る所に包帯が散乱していて、七不思議の例の怪物がやったとして

も過言ではない状況が二人の前に広がっていた。

「ええくくくくくッ!!ちよつ・・・これ・・・ええくくくくくッ!!」  
「・・・・フーーーー」。やれやれ」

保健室の惨状を見て言葉を表せないほど困惑する望。それに対してクールにため息を吐く承太郎。その対照的なりアクションをする二人は包帯で散らかった保健室に入り込み、懐中電灯で辺りを照らし出した。

すると、散らばって山積みになっている包帯が急に膨らみだし、そこから例の怪物が姿を現した。

驚いた二人はそれに光を当てると、その怪物は眩しがるが、それでもものしりのしりと二人に歩み寄ってきた。

「あれ?・・・こんばんは先生。夜の見廻りですか?」

「・・・・・・・・ツ」

その怪物をよく見てみると2のへ組の小節あびるだった。いつも以上に包帯まみれ  
のあびるは沈黙している二人に軽い挨拶をして、こうなった理由を説明した。

そもそもあびるは常に包帯をしているが、それは動物をじゃれているときの傷を隠す  
ためだけでなく、自らのスタンドの補助のためでもあるのだ。

「包帯は古すぎると性能が下がると言うこともあって定期的にここの包帯で補充する  
のだが、毎度毎度包帯を巻いているときに絡まったりしてドジを踏み、夜になるまで身  
動きがとれなくしまつていたようだ。このとき二人はそれが原因であのような噂が生  
まれてしまったことを知ることになった。」

そして、望が「自分の家でやりなさいよ」とつつこんだら、「包帯の出費がひどいこと

になるので……」と言い訳して、あびるは散らばった包帯を全てかき集めて去つていった。

その場に佇んでいる望と承太郎は彼女が去るところを見届けた後、もやもやと気が晴れない状態で校舎内を歩くことになった。

「どうなってるんだ……望」

「知りません」

「これは異種の監督不行き届きだと思ふが？」

「知りません」

校舎を歩きながら承太郎は青筋を立てながら望に問うが、当の本人は喜怒哀楽に含まれない「無」の表情で機械的に返答していた。

まさか七不思議にへ組の生徒が関わっていたという事実になんとも言えなくなった二人は一階の校舎を巡回していた。

その時二人の耳に不気味で奇妙な音が聞こえてきた。ポーーーーooooooooooooと音が廊下中に鳴り響き、二人は身構えた。

更に足音が聞こえ始めて、3つ目の妖怪が月光差さぬ廊下の闇からじわりじわりと近づき、その姿を二人に晒した。

「ぼ

「えっ!?! 〃大浦〃<sup>おおら</sup>さん?」

妖怪が二人の射程内に入ったとき、雲に隠れていた月が姿を現したことで光が差し込み、その月明かりが校舎内を満面なく照らす。

その光で辺りが鮮明になったことで妖怪の正体が分かった。その正体はまたしてもへ組の生徒。出席番号16番 〃大浦可奈子〃<sup>おうらかなこ</sup>だった。

だらしのない身嗜み、バカみたいに口を開けているその少女は焦点の合っていない目で前方に自分の担任がいることに気がついたようだ。

「ああ――。先生…….こんなばんは……」

「こんばんは。ところであなたは何をしているのですか?こんな夜中に」

「帰宅してるんです――」。教室で寝ちやったみたいで――。それで  
は――」

望の問いかけにのんびりとした口調で答えた後、口を開けたまま「ぼーーーーー」という声を出したままのらりくらりと廊下を歩き、夜陰の中に消えていった。

「……あんな感じなんです……彼女は。察してください」

「もうやれやれとしか言えんよ」

望は承太郎に彼女の濃すぎるキャラクターを赤裸々に見られてしまい、項垂れながら察してもらおうとする。対する承太郎はこの状況で出せる言葉を選ばず、何とかこの場を納める形でやれやれと言った。

二人が始めた『学校の七不思議』の解明だが、これまでのことから予測できるようなこの『七不思議』、蓋を開けてみるとそこまで深い謎はなく、次々と解決していくのであった。

職員室の怪物は実は晴美が同人誌を描くのに白熱していただけであって、その彼女を  
発見して望は「いや、家でやってくださいよ」とつつこんだ。

職員室の妖怪は出席番号11番の「関内せきうちマリア太郎」とその友達が空腹に耐えかね  
て食堂にある物を漁って食っていた事が判明した。その二人を見つけたとき、マ太郎は  
「キイイイイ」と獣の如く奇声を上げた後、俊敏な動きで二人は何処かへと消えてし  
まった。

「おい。関内って男じゃなかったのか？ どう見ても童女だろ」

「……………」

「それに隣にいた奴に限ってはへ組の生徒じゃないだろ」

「……………」

「望……………。さつきから何黙り込んで顔を逸らしてんだ？」

「……………」

マ太郎達二人のことで確認しておきたいことがある承太郎だが、望はそれに対して何

も答えなかつた。承太郎が何度も問い詰めても一切答えず、顔を逸らして沈黙を貫いていた。

そんな気まずい二人の側を小森霧が目を閉じながら過ぎていって、二人は驚き混じりに振り返り、彼女の背中を見届けた。

「そういえば彼女……夢遊病であつたことを思い出しました」  
「謎がまた一つ解けたってか？」

霧の姿が見えなくなり、反らしていた体を元に戻したとき、二人は彼女が七不思議の一つに数えられていたことに気付いた。

彼女が夜な夜な夢遊していると、それが噂として広まったのだと考察できた二人は6つ目の音楽室を訪れた。

そこでは風浦可符香がトロイメライの曲をラジカセで流しながら、奇妙なダンスを踊っていた。

その光景を見た承太郎は帽子の鏝を押しして深くかぶり、望は今までの鬱憤を吐き出すかの如く大きな声で叫んだ。

「そういうことは家でやれエーーーーーッ!!!」

「なんなんですか!? 何かの当てつけですか!? 人が寝る暇惜しんで調べているのにその原因がうちの生徒さんッ! クラス会議の一つや二つは必要ですよッ!!!」

「それはこっちの台詞だッ!!! もとわと言えば、誰のせいだと思っていやがるッ!! 他人を巻き込みやがって!! 監督不行き届きもいところだぞッ!!!」

「まあまあ先生・・・承太郎さん・・・ここは二人とも落ち着いてください」

今までのことが積もりに積もって二人は烈火の如く憤激し、互いに険悪なムードを醸し出しているので、同行している可符香は二人を落ち着かせていた。

三人が歩いている廊下には月光が差し込まれておらず、懐中電灯の光を頼りに進んでいた。最後の噂を突き止めれば、はれて任務完了。暖かいベッドで熟睡できるわけだ。だが、それでも二人の機嫌は戻るところか更に悪化し、軋轢を生んでいた。

「それでッ！今度はどの生徒が起こしているんだよな!?望くん?」

「ああ!!?何で私に聞いてんだよッ!!知るかよッ!!」

「先生………。言葉が荒々しくなってますよ?」

早く終わらせたいたいという願望のためか、はたまた眠たいからなのか、そういうことは読み取れないが、イライラの頂点に達している二人は時折傍らにいる者に愚痴をこぼすという愚行をしながら前進していた。

望の言動がキャラにそぐわないことを指摘する度に可符香はつつこみ、度々「仲良くしましょうよお……。」と彼等に呼びかけた。

「そもそも知らないですよ！私の生徒さんの中にそのような現象を起こすような能力を持つ人は……「ガッツ」うつ……あばあ！」ズテーション

「・・・ッ!? 先生!?!」

「何だ!?! どうした!?!」

望が承太郎の方を向いて話しているときに何かに躓いて転んでしまった。一連の行動で承太郎と可符香は驚き慌てた。

だが、真の意味で二人が驚いたのは別のところだった。

「ど・・・どういうことだ。何も無いのに・・・何も無いのに転んだだとッ!?!」

「あの時明らかに何か堅い物が当たった音がしたッ!・・・のにないッ!?! こんなことやれるスタンド使いは知りませんよ! もしかして敵ッ!?!」

「その線はないです、風浦さん。この七不思議は半年前から発生しているもの・・・それに噂になっていいることから何度か同じ事が起きているということになります。もしや半年前に我々の知らないところでスタンド能力が開花させた者がいるのでは・・・」

「いずれにせよ・・・一発はブン殴る必要があるわけだな・・・」

三人は前進するのを止め、周囲を注意深く見張っているとき、月が覆われていた雲から出てきて、光が満面なく降り注いだ。

この時、さつきまでは見えていなかったが、廊下中に椅子や棚などがぼつぼつと周りにあった。望がこけたところ場所を見ると倒れたオフィスデスクが置いてあった。

「これは『透明化する』能力でしょうか．．．もしまや。どういう原理かは知りませんが、物を『透明』にすることでいいでしょうか？」

先程起こった現象から望が能力の推理をしているとき、承太郎の背後から数十センチ離れたところで上靴が床に擦る音が聞こえてきた。

その瞬間、承太郎は「スタープラチナ」を出し、音がしたところ目掛けてキツイ一発を叩き込んだ。

『オラツ!!』ドゴオオオツ!

「ぶげえツ!!」ドテン

「．．．やれやれ、どうやら本体は『今』やっつけたようだな。めでたしめでたし」

「スタープラチナ」の不意打ちを食らい、件のスタンド使いは伸びて床に横たわってしまった。

承太郎はその人を倒したのでさつきまで張り詰めていた空気を解くためにほんの些細なジョークを告げた。

「ところで？この少年は誰だ？望……こんな奴知らないが……もしや他クラスか？」

「う……………ん……少なくともうちの制服を着ていることですし、2のへ組以外のどっかの生徒さんでしょう。多分」

「え……………ツ……ちよつとツ!?いくら僕が人一倍影が薄いからって言っていることと悪いことがありますよ!!」

「えっ!?!しかし、あなたの顔なんて見たことはありませんよ……」

「う……………!!ひどいッ!!ひどすぎるッ!!遂に担任にまで忘れ去られるなんて……………!!」

場所は変わらずその廊下で伸びていた頭のさみしい少年が起きたところ、身元確認を行おうとするが、二人とも彼に面識がなく、簡単に分かるものではなかった。

が、その少年はそんな二人を見てシヨックを受けて涙目になりながら望に文句を言うが、彼に入っている意味が分かっておらず、余計シヨックを受けていた。

二人だけならまだしも傍らにいる可符香でさえも首を傾げていたので業を煮やして、その少年は三人に自己紹介した。

「僕ですよー！僕ー2のへ組ー3番ー！白井影郎（うすいかげろう）！ですよー！」

「ん？・・・ああー！ーツ！！白井君！そうそう白井君でしたッ！そうでしたねー！ハハハ」

「何だ知っていたのか望・・・何で忘れるんだよ」

少年、白井影郎の名前を聞いた望はそこで初めて彼のことを思い出した。結局は望のクラスの生徒だったので承太郎は自分の生徒の名前を覚えていない望に冷ややかな視線を送った。

そして、承太郎は謎を万事解決するために彼に近付いた。

「ところで……白井だったか？どうしてこんなことになっているか説明してもらおうか？」

「えっ……はい」

承太郎にこれまでの経緯について聞かれた影郎は包み隠さず、全てを話した。

元々彼は有名な大学の受験を二度も失敗し失意の中にいるとき、偶々命に勧誘されてあれよこれよで偽りの学園生活を給料をもらいながら過ごしていた。

最初は気味が悪いところだと思っていたが、慣れていくにつれてそれなりに楽しい生活だと思えるようになった。

しかし、受験でのストレスのせいか、髪の毛が徐々に抜け落ちていき、半年前ほどでてっぺんちよりの髪が全て抜け落ちてしまった。

困った影郎は命に相談し、「聖なる遺体」の髪の毛を植毛するよう要求した。

これには当初命は賛成できず拒否したが、それでも諦めずに懇願する彼の熱意と覚悟に負けた命は彼に杏の髪を植えた。

元来「カフカ細胞」は他者の体を取り込みやすいものであるため、安易につけた杏の

髪は上手く影郎の頭皮に食い込み、植毛は無事成功した。

が、この時に影郎は“細胞”の影響でスタンド能力を宿すが、髪のみだけを移植したせいから、“細胞”が彼の体と上手い具合に適合せず、能力が不完全に開花してしまつてこの半年間自分はおろかあらゆるものを時折透明化させてしまい、相談しようにも存在感までも余計に薄くなつており、相談できなかつたのであつた。

「そうか……つまりは風浦。こいつに“細胞”を移植させれば、この問題は解決するといふ訳か？」

「ええ確かに。私の細胞をこの人にあげれば、川の水を放流するように能力を引き出す能力が正常に発動し、能力が完全なものになると思いますよ」  
「なら早速やつてくれ」

承太郎は影郎の話から“細胞”を与えることが一番の得策であることを可符香に確認してそれを実行させた。命じられた可符香は「はくくく」と軽く返事をした後、自分の首元の肉を自分のスタンド、“デッド・ライندگان・デス”を使つてちよびつただけちぎり取り、影郎の首につけた。

すると、その肉が徐々に影郎の肉と一体化し、自分の肉として変換した。そして暫くすると、影郎の体が小刻みに震えだし、じわわつと大量の汗を流し、終いにビカアアアアアアアアアアアアと強く光り出し、三人は光が眩しくて目を閉じた。

光が収まると、影郎は今までにないほどの感情の高ぶりを感じた。

「うははははは!!これでどうとう僕はこの話からレギュラー入りを果たし、ばったつばつと敵を倒し、女の子にモテモテになる日が続くんだ〜。グフフフフ」

『皆・・・敵はみんな僕が倒したよ』

『キヤーーーーーッ!白井君ステキーーーーーッ!!』

『結婚シテーーーーーッ!白井くーーーーーんッ!!』

完全なる不死者となった影郎は解き放たれたスタンドパワーでテンションアップしているだけでなく自分が主人公に返り咲く野心までもアップしていた。

その野心に呼応するように彼の背後に人型のスタンドが現れた。

ヘルメットとグラサンをかけており、体中がぶよぶよの皮で覆われているスタンドを背後に出している影郎は他愛もない妄想するほど舞い上がっており、これから彼は完全

に発現したスタンドを用いて栄光のレッドカーペットを渡れる……

……はずはなかった。

「あれ？白井君は……何処へ行ったのでしょうか？急に光り出したと思っただらいいない」  
「さあな……少なくとも帰ってしまったのではないか？」

「もう二時前……二人とももう遅いですし宿直室で残りの夜を過ごしましょうか」  
「ふ……賛成だな」

「賛成！賛成！」

影郎の姿が見えないので不思議に思っている可符香に帰宅したのだらうと推測する  
承太郎。二人のすぐ近くに彼がいるにも関わらずにだ。

そしてそんな二人に宿直室で夜を明かそうと望は提案し、同意した二人は影郎のこと

なんか完全に記憶から抹消して宿直室へ行ってしまった。

二人の後を追う望も影郎のかの字も忘れてその場から去り、一人残された影郎はこめかみに青筋を立てて勢いよく言い放った。

「僕の青春を返せエ——————ッ!!!ド畜生——————  
——ッ!!!」

彼が言い放った叫びは先刻の望より大きく広く響き渡るほどのものだったが、生憎それは誰の耳にも届かず、ただただ静寂だけが響いていた。

そしてまた……同じ朝がやってくる……。

ガガガピガガ・・・《おっ！つながったか。こうしてツラ会わせるのも久しぶりだな。もういくつ経つかねえ・・・》

「・・・・・・・・」

日本の某所。 暁前の刻にビデオチャットで話している男がいた。その男は「ワイルド・ドッグ」のボス、エッグプラントだった。

エッグプラントの通信相手は依然として黙ったままで彼の差し障りのない話を聞いていた。そうしていたら、エッグプラントが急に我に返ったようにはつとまって、《すまないね。いつもの癖で・・・》と反省して改めてその男に伝えた。

《用はたった一つだ。空条承太郎共、この写真の者たちを始末しろッ!!出来るよな?》  
「・・・・・・・・」コクリ

その男に見せた承太郎、望達の写真。その写真に写る人物を皆殺しにするように頼ん

だところ無言で頷き、その男は依頼を承った。

そして用が済んだのでビデオチャットを切ろうとする男にエッグプラントは待ったをかけた。

《待て……まだ続きがある。この者共は並大抵の襲撃でもびくともしない鋼鉄の要塞にも等しい奴等だ……。一人で殺すのは難しい。だから行くのは少し待ってくれ……。数日中に我々が送る助っ人！そいつとチームを組んで倒して欲しい。きつと頼りになるはずだ！ではまた連絡する》プツン

チャットを切った彼はそのままパソコンの電源を落とした後、自分が座っているチェアを後ろへ回転させてそこにいる部下に睨みながら話した。

「……で？そいつは本当に役に立つの？お前が見つけたスタンド使いはよお」

そう。実はチャット相手に言った派遣するスタンド使いがどういふ奴なのかエッグプラントは知らないのだ。全部彼と対面している部下しか知らないのだ。その部下の男は着用しているサングラスをくいつと上げて誇らしげに言った。

「確かに少し頼りないところはありますが、奴の能力と彼の能力を会わせれば、例え最強と呼ばれる承太郎や不死身の糸色望だろうと勝てません」

「その言葉……期待しているぞ。『ヴェル・ペツパー』」

「ありがたき御言葉……必ずや成功させて御覧にいきます。ボス」

そのサングラスをかけた大男、『ヴェル・ペツパー』の言葉を信じて時が来るのを待つエッグプラント。ペツパーが不敵な笑みを浮かべるほどの力を持ったスタンド使用とは一体……。

To Be Continued……⇒

——プロフィール——

・白井影郎

影と存在感がない2のへ組の生徒。出席番号3番。

ハゲが目立つこと以外これと言った特徴がない。というか存在しない。

基本無遅刻・無欠席を貫いているが、殆ど知覚されていないのでそれは叶わず仕舞い。あれ?? あるいは誰のプロフィールを作成してたっけ? 思い出せない……。

スタンド名：トライバル・ソウル

【破壊力：B スピード：B 射程距離：C 持続力：A 精密動作性：E 成長性：E】

能力：自他問わず透明にする      スタイル：近距離。パワー型      分類：人型

# 第貳拾九話 『アンフェア・ワールド』と『スターティング・オーバー』その①

五月半ばの日差しが強い土曜日、糸色望は暗い顔をしていた。

五月病にかかっていると考えられますが、どうやらそうではないようです。

「はあ~~~~~。今日は外に出たくないのに~~~~」

「折角明日は天気もいいことですし、バーベキューでも催して日頃の疲れを取りましようよ、先生……」

「いや……ですが……しかし……」

望はやつと来た休日なので部屋でゴロゴロしながらテレビを見て一日を過ごそうと考えていたが、急に宿直室の扉が開いたと思ったら、体の至る所に包帯が巻きつけてきたのだ。

その部屋に入ってきたのは木津千里と小節あびる。二人はショッピングにつき合うよう望に言っつて、包帯で捕えた望を無理矢理部屋から引きずり出した。

最初は抵抗していた望だが、千里に睨まれてからは大人しくなって現在にまで至る。

やはり部屋にいた方がよかったと愚痴っている望にあびるが気を持つように言う。

千里はバーベキュウの話を振ってうだうだ言う望を元気尽かせようとするがあまり効果はなかった。その時、バーベキュウをやることに言葉を濁す望の背後からひよこつと常月まといが現れた。

「別に構わないじゃないですか……。最近色々ありすぎて大変だったじゃないですか」「話に入ってくるんですか常月さん……。だつたら猶更ゆつくりさせてくださいよお」「ですが先生……。あの女（小森霧）が最近「交（まじる）」くんの機嫌が悪いと言っていたんですが……。私が言うのも何ですが、こういうときに家族サービスしてあげないと……。あの子いつかグレてしまいますよ？」

「そうですね先生！あの子は先生の家族なんですし喜ばせてあげてくださいよ。きつと寂しがっていると思いますよ」

「そうですね先生……。あの子きつと出番がなくて、しかも台詞を一言も喋っていないから、いじけているんですよ。こういうときに出してあげないと。」

「あの……。木津さん？あなたの言っていること……。全部私にじゃなくて作者に言うべ

き台詞ですよ？それ・・・」

千里達と同意見のまといに望は少し文句を言うが、それに対して彼女は何か嫌な奴の顔を思い出したかのような表情を見せながら望に主張する。

そしてその発言を機にあびると千里は便乗して、彼の甥の交を口実にバーベキューを押し薦めてきた。ちよつぱり千里の言っていることはズレているが・・・。

一行はそんなことをあだこうだ言いながら進んでいくと人混みの多い街に着いた。百貨店やビル、デパートなどが建ち並んだこの場所で一行はある人物に出会った。

「おや・・・承太郎さん。奇遇ですね」

「ん？・・・ああ望か・・・何してんだ？」

「私達ちようど明日のバーベキューの用意を・・・」

「バーベキュー？悪いがそんな酔狂なことをやっている暇は私にはない。SPW財団に敵の組織の情報を掴めるか確かめに行つてくるんだ。だが徐倫達には伝えておくよ・・・

じゃ」

街中で彼等と偶然出くわした承太郎は事情をさりと話した後、ジェスチャーで別れの挨拶を交わしてそそくさと歩き始めた。

その彼の背中を見ながら四人は沈黙に浸っていたが、望は開口一番に我が物顔で彼女たちに言い放った。

「それえ！木津さん！小節さん！常月さん！さすが大人は違いますねえ・・・決して気を緩めない承太郎さんを見習いなさい！！」

「何勝ち誇った顔しているんですかッ！！先生こそ見習ってくださいッ！！」

「承太郎さんが敵のことを把握しようと頑張っているときにダラダラしようとしてたくせに・・・」

「先生・・・カッコ悪いですよ」

「・・・ぐ。凶星をつかれた気がします・・・」

子供がする責任転嫁のように自分のことを棚に上げて三人を責め立てる望に千里とあびるとまといはその棚上げした事実を引きずり下ろして望の凶星をつかせた。

凶星をつかれたことを半分誤魔化している望を白い目で見る千里とあびるはふと時計を見て今の時刻を知った。

「げっ！もう10時半!?先生！早く一式買わないともうお昼ですよ!・・・ぐずぐずして  
いられない!」

「ええ!?!そんな慌てなくてもパーベキューは明日でしょう・・・」

「そうは言っても先生・・・買うものはいっぱいあるし、それに『千里ちゃんの予定』を  
狂わすと・・・分かってますよね?」

「OKッ!!行きましょう!!」

慌ててデパートに入店した千里に望はやる気が最初はなかったが、あびるが言った。  
「千里ちゃんの予定」という言葉を聞いた途端、血相を変えてやる気を出した。

冷や汗を流しながら望はあびるの後からデパートに入ろうとするが、その前に腕に変  
な違和感を覚えて立ち止まった。

見ると蚊にでも噛まれた跡が残っていたので、望はもうそんな季節なのですわえと  
思った後、デパートの中へと入った。

敵に攻撃されたとも知らずに・・・。

「ムフフフフフ……。楽勝だったぜツ!! あんな奴を仕留めればいいのかよ……。プツ。バカめ……。そういえばうつかりしてたがあの「ジョータロー」って奴を嘯むのを忘れてたぜ……。まあすぐに見つけられればいい話だな。奴等の『幸運』を「アンフェア・ワールド」で吸い取るだけでいいからな……。実に楽なバイトだぜ……。ケケ」

人混みが激しくなっている通りでとある人物が望のことを見張っていた。そいつが仕掛けたスタンド攻撃に望が気付かなかったので、プツと嘲笑した。

望への攻撃は完了したので、そいつは承太郎にも同じ術にはめさせようと雑踏を利用した人海戦術で素早く移動し、完全に行方をくらました。

一方、望はそんなことがあったこともみず知れず、デパートの各階、端から端まで荷物を持たされながら連れられてもうくたくただった。

ベンチスペースで息を整えている望の傍らで千里とあびるは満足げに話していた。

「もうこれぐらいかしら？」

「そうね。これだけあれば足りるからもう帰りましょうか？」

（ん？帰る……）

二人の会話にあった「帰る」というワードを耳にしたとき、望の頭に一筋の稲妻が走った。つまり、悪巧みを思いついたのだ！

「そうでした木津さん、小節さん。私個人で買いたいものがあるので先に帰っていてください！じゃあッ！」ピピューーーッ

「ああッ!!先生逃げたッ！追いかけてなくちゃ！」

「でも本当に買うものがあつたらどうするの千里ちゃん？怪しい仕草だったけど……」  
「ぐ……ま、まあいいわ。後々きつちりと埋め合わせをもらうことにするわ。なんだか釈然としないけど……」

個人的に買いたいものを予め見つけていたので買いに行つてくると言つて、二人から離れた望を見て、追いかけようとする千里に異様ではあるが、彼の好きにさせようと思つて、千里は半信半疑ではあるが、仕方なく単独行動を許した。

だが勿論、望は逃げる気満々で、脱兎の如く走り去つてゐる。あのままだと先程まで買つていた荷物を全て持たされる羽目になるからだ。

上手く逃走に成功した望は今にも鬼神と化した千里が襲つてくるかと思つてハラハラしながらブランドの衣服売り場の試着室の側を通り抜けるとき、緊張しているせいから体勢を崩し、立て直そうと不意に試着室のカーテンを掴んだ。

しかしそのまま転んでしまい、カーテンの滑車からカーテンが外れてしまった。しかも、そのカーテンは現在使用中の部屋のものだった。

「……えっ!? ……きゃ あ あ あ あ あ あ あ

!!!  
「



なつて話が進まなかつた。

しかし、一番この流れで非があるのは望なので渋々引き下がる愛は彼の台詞を思い出して、頭から湯気を出すほど赤面しながら望に聞いた。

「そ．．．．．それじゃあ。ちゃんと私のこと．．．．．ずつと気を遣つてくれますか？  
先生．．．．．い、いや．．．望さん」

「．．．．．ええ。どんな困難があろうとも必ず実行させてみせます！．．．罪滅ぼしですから！」

赤面しながら愛が承諾したので望は喜んで、事件を丸く収めることが出来たと安心して胸をなで下ろす。しかしこの時愛が改まって自分の名前を言った意図が望には分からないほど二人の間の温度差はあるが．．．。

そんなことを知る由もない望は気持ちが悪くなったのでそのまま立ち上がり、愛に明るく話しかけた。

「はあくあく。気持ちが悪くなったことですし、加賀さん．．．罪滅ぼしとしてまずランチでも食ベ．．．『ズルウウ』．．．まッ!!何で!!」ブチブチ スツテくくくく

望は愛にランチを奢ろうと話を切り出す、その最中にまたしても使用中のカーテンを掴んで外してしまった。

「なあっ・・・!?ぎやあああああああああああああああああああああ  
あ—————ツ!!」

「うわあああああ—————ツ!!またですか!すみません!!」

カーテンが外れてしまい、中にいる下着姿の木村カエレは悲鳴を上げ、対してまたもや望は土下座をする。

「土下座だけで済むわけではないですよ—————ツ!!!訴えてやるツ!!億単位の慰謝料を払わせてやるからなツ!!」

「待って—————ツ!!はやまらないで木村さんツ!!なんでもしますから!!というか!いつも自分から見せてるくせにひどいじゃないですか!」

「何訳わかんないこと言ってるのよ!!そんな証拠何処にあるっていうの?一話もそんな描写出てないわよ!!」



は心の底から震え上がった。

「やっぱり、男の人って・・・男の人っていうのは、所詮下心丸出しの猿なんですよねえ  
 ～～～～。この・・・女タラシがあ～～～ッ!!」ムカア～～～ッ

「げっ?!加賀さん!?落ちて着いてくださいッ!!落ち着いて・・・『うるさい～～～ッ!!  
 死ぬッ!!』ドボゴゴアアア・・・ギヤあああああーーーーーッ!!」

ドボアアアアッ      ドボアアアアッ      ドゴオオオオッ

愛は人集りが多いこの場所で憤激の頂点に達し、望目掛けてミサイルを射出した。望  
 はこれを紙一重で躲すが、ミサイル自体は止まっておらず、試着室をカエレ諸共爆撃し  
 た。

爆撃を食らったカエレは「訴えてやるウウウ!!」と叫びながら吹っ飛ばされ、隣の店  
 のショーケースに直撃して行動不能になった。

いきなりの爆発とそれで起こった火災でデパート中がパニックになっている中、上手  
 く爆風を回避してうつ伏せになっている望に愛は不気味な笑みを浮かべながら近付い  
 てきた。



ない状況のため、望はこれ以上の被害を拡散しないようにスタンド能力を使い、『時』を停止した。

『時』は停止しました。今の内に外に出て身を潜めるとしましょう……。いくら今の加賀さんでも標的である私を見失っている間は暴れるようなことはしないでしよう」

停止した時の中でデパートから離れようと考えた望は窓ガラスの方へ走り、スタンドのラッシュでガラスを叩き割り、外へ出た。

実際は2階から飛び降りているが、そこは着地時にスタンドの足で地面を蹴って、飛び降りたことで生じるエネルギーを相殺した。

そしてこの着地時に能力の時間制限に達して、能力が解除された。

「はあ……。はあ……。さてと、まだ彼女の射程内にいるわけですから早めに離れなくては……。」「あら……。？何から離れるですって？」……。えっ？……。げっ!!木津さん！小節さん！」

「店内で騒ぎが起こつたらしいので引き返してきたら……。何をやらかしたのですか？」「ちよつと……。説明しづらいことですが、とにかく……。ひゃああ!!来た来た来た来た

たーーーーーッ!!」

“マシユマロウ・ジャステイス『ACT3』”は人の考えることを読む能力であるため射程距離の40〜50メートルよりも離れようとするが、ちょうどその時にデパート内の騒ぎを聞きつけ、千里とあびるが戻ってきてしまった。

望に何が起こったのかをあびるは聞き出そうとするが、彼がきちんと説明をする前にその元凶が轟音と共にやって来た。

望はいち早くそれに気付いたが、その時には望が開けた窓から猛スピードで愛が飛び出してきた。

「えっ!? 加賀さん!」

「なんで加賀ちゃんが．．．それに『ACT3』って．．．先生何を．．．」

「見　　く　　く　　く　　く　　つ　　け　　た　　．　　．　　先　　生　　死　　に　　さ　　ら

せえーーーーッ!!」ズラアアくくくくく

く　　ッ　　ビシユバーーーーッ!!

「ぎゃあああああーーーーッ!! 加賀さん．．．それ”をどこ  
でえーーーーッ!!」

千里とあびるは愛が現れたことに少し困惑し、事の成り行きを瞬時に理解することが出来なかつたが、そんなことはお構いなく愛は2階から飛び出した後、懐から何かを大量に取り出した。

それはきらきらと輝く金属のナイフ。それをこれ見よがしに望にちらつかせた後、雨霰の如く投下した。

(うおおおおおおおおおおおおおおおおお!! ミニット・エンジェル“ツ!! 『時』を止めろ—————ツ!!今すぐに—————ツ!!) ドオー————

大量のナイフを見て望はゾツとし、急いで時を止めた。

時が止まったことで広範囲に投擲されたナイフが空中で止まり、望以外の物質の行動が全て停止している隙に望は逃げるが、彼が思っていた以上に持続時間を保てず、ものの7〜8秒で限界時間に達した。

ドス

「うげぎやつ！」

「がはあぶつ！」

「うそでしょ!!これだけしか止められないなんて・・・」(私のスタンド能力は十数秒間も最大で時間を停止できるが、連続で何度も止めようとするとその停止時間が短くなるという避けようがないデメリットを持つが、このままだとそう何回も使用出来ませんよ)

「逃がさないわよ先生~~~~~ッ!!」ドガガガガガガガガガガガガガガガ

「・・・それにしても何なんですか今日はッ!!ツイてなさ過ぎでしょッ!!不幸だあ~~~~~ッ!!!!」

夕立のように激しく降ってくるナイフは状況を把握できていなかったあびると千里の体にこれでもかというほど刺さってしまう。

それを見ながら徐々に止められる時間の長さが短くなっていくことに心の中で望は嘆きつつ、自分を追跡してくる愛を振り切ろうと爆走しながら、今日の自分の運勢を呪った。

逃走する望に機銃を乱射しながら後を追う愛が去った後、全身に深々とナイフが刺さ

り、よろめいて背後の壁に寄っているあびると千里はドクドクと血を流しながらも刺さったナイフの一本一本を抜いていた。

「加賀ちゃ……ん。『ACT3』になるほど怒って先生を追っていた……。ということは先生と『何か』あったということなのかしら？」

「なん……です……つつつてえ!!!私という者がいながら、他の女ともツ!?許してなるものかツ!!!必ず殺すツ!!!あのチキンめえくくくッ!!!」ドドドーーーーッ  
「ありやりや……」

あびるが事の整理をするため、口に出して順を追って思い返していると、千里が激怒して、その怒りで刺さっていた全てのナイフを力んだ事による筋肉収縮で抜き飛ばした後、何処からかに隠していたスコップを構え、望や愛が向かっていった方角へ猛ダッシュで走り去ってしまった。

それをあびるは呆然とただ千里が見えなくなるまで凝視し、立ち尽くしていた。

「やはり知ることはできないかあ……。相手は隠れのプロだな」

場所は変わって、承太郎は人混みの多いオフィス街を歩きながら、いまだ明確な姿を現していない敵組織の情報を得られないことにむず痒く思っていた。

自分達につながる情報を全て消し去っているせいで何の進展もない。組織を攻める手立てがない状況に面していた。

これは広大な砂漠の中からダイヤモンドを見つけるかのような難しい問題だ。

「このまま密林に溶け込んでいる虎のように一方的に攻撃され続ければ、いつかは大きなダメージを負うことになるだろう。先手を取られ続けてはダメだ」

ヤキモキする衝動を抑えながらも歩道を一步一步進んでいる承太郎はふと何か、頭上から気配を感じ取り、「スタープラチナ」を軽く出して、その器用な指先でとても小さな「それ」をつまんだ。

「ん?!これは・・・蚊か?」

絶妙な力加減で“それ”をつまんでいる承太郎は小さい“それ”が気になって人気がない路地へと移り、正体を確認した。

“スタープラチナ”の視力の精度を上げると、つまんでいるそれは蚊のような生き物、というよりはむしろ蚊のような形をした何かであった。

「ス・・・スタンドかつ!!?色合いやビジュアルが既存する蚊と似ていない・・・と考えるならこいつは敵スタンドと考えるのが妥当だ!昔ダンというゲスな奴もこれほど小さいスタンドを使っていたからな!」

長年の経験もあり、その蚊がスタンドであったことを見破った承太郎はそのままそのスタンドを潰してしまおうと指先に力を入れる。

しかし、スタンドを潰す前に背後から誰かがぶつかってきたためにうつかり逃がしてしまった。

一体誰だと青筋を立てて振り向くと、そいつはほんの数時間前であったばかりの奴

だった。

「望……お前」

「ひっ！承太郎さんでしたか……ほっ」

望は愛に追われる恐怖で前を見ていなかったため、前方の人にぶつかって決まりが悪くなるが、その相手が承太郎と知るとホッと胸を下ろし、厄介なことが増えなかったことを安心した。

だが対照的に、承太郎はそんな彼の胸倉を掴んで起こってきた。

「何が『ほっ……』だっ!!おかげで敵スタンドを見失ったじゃねえかッ!!」

「敵スタンドツ!!ど……どこにいたんですか!?!」

『ケ……所詮ソナ程度力……糸色望。逆二礼ヲ言オウ』

「……ッ!?!」

烈火の如く怒りをあらわにして胸ぐらを掴んできた承太郎に怯えながらも彼の台詞に反応して周りを見渡す望。

だが何処を見てもそれらしき姿がないのだが、承太郎の背後からいかにも自分達に話しかけているような台詞が聞こえてきたので、承太郎は“スタープラチナ”で声が聞こえてきたおおよその位置に神速とも言えるラッシュを叩き込んだが、これといった手応えもなかった。

その直後に先程と同じ声がまた聞こえてきた。

『ムダダ・・・ステニ「攻撃」ハ終ワツテイル・・・。ソシテオ前等ハモウ敗北スル運命ニアル・・・。タトエボクヲ見ツケタトシテモ、オ前等ハボクニ指一本タリトモ触レルコトハデキナイツ!!』

「勝手に決めつけないでくださいよツ!!チビツこいスタンドめえー」 「ドンドンドン」・・・なっ?!?敵は・・・まさか・・・『もう一人』いたツ!!」 ビュシューーーツ

『ソウダ・・・ククク。「チーム」サ・・・遠隔操作コンビダツ!!距離ヲオキナガラ確実ニオ前等ヲ倒スツ!!』

敵スタンドの余裕めいた発言に対して叱咤し大体の位置を把握した後、“ミニット・エンジェル”で叩き落とそうとする望だが、振りかざす“ミニット・エンジェル”の右腕に弾丸のような傷穴が3つできた。

その攻撃で望はひるみ、ダメージを負ってしまふ。対する承太郎は突然の出来事に驚きつつも、着弾したものの予測軌道から上空を確認すると、その澄んだ青い空に一瞬だが黒い何かが飛び回っていた。

「“弾丸”か……ちっ……狙撃手が相手か……。ちと骨が折れるな……」

空を飛んでいたものを確認した承太郎はもう一人の敵のタイプを分析でき、その結果に対してちよつとした小言を言う。

そんなときに空中を旋回していた弾丸数発が急に軌道を変えて承太郎に向かっていった。

しかし承太郎はそのことを読んでいて、スタンドを前に出して向かいたった。

「悪いが……この私にそんな単純な手は通じないぜ!!」

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラア!』

向かってくる弾丸のスピードではやはりトップクラスのスピードを持つ“スタープラチナ”には勝てず、全弾オラオララッシュで弾かれてしまふが、このとき妙なことが

起こった。

まず弾かれた弾丸だが、奇妙なことに“スタープラチナ”のパワーで相殺されたにも関わらず、承太郎の方へ飛んでいき、腕やら脚やらに掠った。

それに加えて、他のものは流れ弾として車道に飛んで、そのまま走行している車のタイヤに当たり、スリップを起こし、最悪なことに承太郎達の方へ突っ込んできた。

ドグオオオオオオオオ

「ぐはっ!!く・・・そ・・・挟まれてしまいました・・・背骨を粉碎してしまいました・・・」

「大丈夫か!・・・くそ、また来やがってッ!!」

『オーーーーーーラァッ!!』ブオオン

ブオン ブオン ブオン「ちっ!また掠っちまった・・・」ダラア~~~~ッ

スリップしてきた車を承太郎はジャンプして躲したが、望は反応が遅れてしまい、車に衝突。そのまま壁と車の板挟みになって背骨を折ってしまう。

承太郎は望の安否を気にするが、ジャンプ中のこのときに弾丸が来襲してきて、“ス

タープラチナ”のアッパーで難を逃れようとするが、運悪く、その一発が頭を掠つて血を流してしまふ。

その後、承太郎は着地してから、突っ込んできた乗用車をどかして望を引っぱり出した。望は背骨が折れたことで起き上がれず、ぐったりと床に伏せていた。

『カカカカカカ。 “ツキ” ヲ失ツタダケデコウモ防戦一方トハナ．．．ボクタチハ単純ナ攻撃シカシテナイノニナ．．．』

「“ツキ”を失つただと？成る程．．．お前の能力は他人の“ツキ”を奪い取れるのか？」  
『ホウホウホウホウ．．．察シガイイジヤン？ソウ！オ前等ノ幸運ハボクガイタダイタツ！！幸運ヲ奪ワレタラ悪イコトシカ起キナインダヨ！ヘヘ』

「なるほど．．．だからさつきから．．．」

敵スタンドが言った“ツキ”と言うワードを聞いただけで、そいつの能力を的中させた承太郎に少し感心して自分から自身の能力をネタばらしした敵スタンド。

背骨を現在再生中で仰向けになっている望はそれで今までの出来事に合点がいき、気付くのが遅すぎたことに悔しさを覚えた。

『コレデイイ・・・アトハ高ミノ見物トシャレコムカ・・・ハハハッ!!』  
 「お・・・おのれえ~~~~ツ!!」

蚊のスタンドは自らの役目を全うしたようなので、本体の元へ戻しに行つた。自分達の大切な運を持つて逃げられたので望は悔しくて握り拳を上げる。

そしてこのとき、大量の弾丸が青白い空を旋回し、彼等への狙撃の準備を整えていた。

「銃そのものがスタンド・・・俺の“スターティング・オーバー”に死角はないッ！完璧だ・・・実にイイツ!!情報通りパワフルな力と強運を持つていたから初めはちよいと苦戦したが、もう奴等の運も底をついた。もう逃れられるとは思ふなよッ!!・・・この“益井魁”ますいさきがけからッ!!」

承太郎と望が運を奪われたまま上空を旋回している弾丸に狙われている場所から数百メートルも離れたビルの屋上に一人の男がいた。

背丈は約180センチ、歳は20代後半と推測できるその男はトサカのように長い前髪をかき払つて、異彩を放つライフルのスコープを覗いていた。

そのスコープには色んな角度から見える承太郎と望が次々と映り出されており、その

男、魁はベストな角度をスコープで見つけ出すと、殺気立った笑みを浮かべながらライフルの引き金を引いた。

因みに・・・

「先生————ツ!!! 何処に行きやがった変態ヤロー————ツ!!!」  
 「うなあああああああああ!!! 殺してくれるわ糸色望————」  
 「——!!!」

この二人は事の深刻さにいつ気付くだろうか・・・・・・？

To Be Continued・・・⇒

## 第参拾話 『アンフェア・ワールド』と『スターティン グ・オーバー』その②

「クソツ！何処にいるのツ!!あの先公は————ッ!!」

プツツンしている愛は望を追って町中を走り回っていた。それは雑踏で賑わう中でも匠に人を避けながら何処までも追跡するほどに。

勿論、上空ではスタンドが旋回中で望を見つけるレーダーの役割として出しており、見つけ次第即発砲できる状態で構えていた。

「先生……殺してやる……この手で必ず……ん??……」

望を血眼で探していた愛だが、急に何かに気付いてふと足を止めた。彼女はさつきまでの荒々しい風格とは打って変わって冷静になり、右隣のビルの屋上を見上げた。

頭の中を整理整頓して彼女自身の落ち着きを取り戻したことで見落しそうな小さなものを見つけた愛はそのままそのビルに入り、屋上を目指す。

「どうやら彼女にとって自分を辱めた望の追跡をもほつぽり出す大事な用があるらしい……。」

「そーだ！望……常月だ！こんな時こそアイツの能力の出番だ!!」

「そ……それが……いないんですよ承太郎さん!!はぐれたようです……彼女も同じく敵の術中に嵌まったんだと思います。彼女らしくないですし……」

「チツ……くそっ!!」

場所は変わって望・承太郎サイド。訳あって敵のガード不能の遠距離攻撃に苦しむ二人は空中で四方を飛び回っている弾丸をちらつちらつと見ながら相手の出方を窺っていた。

この状況下で承太郎は思いつきでまといの布化能力を使ってこの窮地を脱しようとした。彼女の能力で布化すれば解除するまで無敵状態になるからだ。

しかし、肝心な彼女も知らず知らずのうちに術中に嵌まり、この場にいないことを望みに聞かされ承太郎は舌打ちする。

「さて……この状況……どうやって王手をかけましょうか？」

「さあな……少なくとも私達の運さえ取り戻せば何とかなる。だがここで動けば敵の集中砲火を食らうことになる。携帯で連絡しようとしても撃たれる……完全に王手だな。私達が……」

車との衝突で粉碎した体組織が完全に修復できたことで立ち上がることができるようになった望は承太郎にどうやって攻略するかを尋ねるが、そんなものはないと返される。

四面楚歌でどうにもならない現実を目の辺りにして呆然としている二人に敵は数多の弾丸を向かわせた。

「来た来た来た来た来た来ましたよーっツ!!!」

『オラオラオラオラオラ「ドキュン ドキュン ドキュン」……オウツ!!』

「うぐっ!?まさか背後からも!!まずい、対処しきれないツ!!」



「幸”ひどいわ!!先生と・・・はぐれてしまっうなんて・・・」

望と一定距離以上離れてしまつて精神的不安になりながらも辺りを右往左往していたまとい。彼女は愛から逃げている望と一緒にいたはずだが、いつの間にか望とはぐれてここまで人の波に流されてきたのだ。

「先生センサーが・・・受信していない。こんなこと一日たりとも無かつたのに・・・。うっ・・・先生が近くにいないから私のHPが削り取られる・・・このままじゃ・・・死ぬ・・・」

まといは心の中になる架空のセンサーが機能していないのでどんどん精神的に疲弊していた。

そんな姿を双眼鏡で眺めていた奴がいた。そいつは制服を着ている中学生らしい男の子で、服も髪も真っ黒で均一されている。

そんな奴が見晴らしのいいビルの屋上で傍らにお菓子がたんまり入ったビニール袋を置いてまといを見ていた。

こいつこそ・・・そう!こいつこそ!望や承太郎、まといの幸運を奪つた主ツ!!

高野山史忠こうやさんふみただであるツ!!

「ケケケケケ。実に面白いなあ……あの絶望っぷり!! あつ! ……糸色望っぷり  
“ギャハハハハハハハハハ!!”

史忠はまといの様子を見て大いに面白がり、更に思いついたギャグで大爆笑する。  
自分が思いついたギャグで大いに笑った後、ビニール袋に入ったお菓子を貪りながら  
大勢集まって楽しくやっている同年代を見ていた。

「フンツッ! 幸せそうな顔しやがって! マジムカツクなあくく。こいつら絶対『こんな  
幸せな思いをしている人は自分以外いなくくい』とか思ってるよ。そんなの大間違いな  
のによくく。真に幸福で運が強いのはボクなのさツ!! 何故ならもう既に凡人と較べ  
て4倍も強いからな!! 他人の持つ運を自分のものにできるんだからボクが最強なのは  
あたりまえさあくく!!!! そして、こんなことで十万円もくれるなんてやっぱりボクつて  
ツイてるうくくく!!!!」

自分が強いものとして世にいるのだと思いき有頂天になっている史忠は大きな声で高



の運勢はツイてるんだツ!! 恐れることはないツ!!」

「そういう寝言は私の一撃を食らった後で好きなだけ言ってなさい! “あの世”でね・・・」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
ドドドドドドドドドドドドドドドド

強気な態度を取っている史忠に愛はスタンドを出して構え、いつでも射殺可能な体勢に整えた。そして一步一步と近付き、距離を四メートル、三メートルと詰めていった。

この緊迫して重苦しい空気は二人の体内時間を狂わすには容易かった。既に邂逅してから数分は経過したと思われるときに愛は距離差二メートルまで近付くと、この重々しい空気が飛行機音と共に弾けた。

「うおおおおおおおおおおお 「バキン」・・・うおわツ!!」ドバドバドバ

ドガン ズガン ズガン ズガン ズガン ズガン カキン カキン

「やったぞツ! やはり・・・ボクは無敵だツ!! 強運で守られているツ!! ボクの前では誰だ

ろーと万人は手も足も出ないのきッ!!」

愛は機銃をその少年に炸裂させようとしたが、運悪く彼女は前に出した足の足場が急に崩れだし、それで体勢を乱したため少年とは違う方向に打ち込んでしまう。

この事から史忠は確信を得て自分は今どんな敵だろうと膝まつかせる事ができる絶对的な立場にいることを強く理解した。そして、体勢を崩している愛に史忠は自分のスタンドエネルギーを漲らせて彼女を見下ろす。

「そして!!今!おまえの首元にツ!!ボクのスタンド『アンフェア・ワールド』を噛ませたッ!!『幸運』を吸い出したんだッ!!つまり5倍!!人よりツイてるぞッ!!そして、これが終われば大人から十万円もらえるんだッ!!唐揚げとかハンバーグとか食い放題だぜえー!」

「……ッ!!キサマ……!!」ドバドバドバドバドバドバドバドバドバ

史忠は愛が犯した数秒の隙の合間に自分のスタンドで愛の幸運を奪ってしまふ。

しかし愛は幸運を奪われたにも関わらず機銃を彼に撃った。理由は簡単。彼が私腹を肥やす——特に大切な人達を陥れる意味で——発言をしたことが非常に腹立たしい

からだ。

そんな怒りのこもった弾丸が襲ってくるにも関わらず、当の史忠本人は一切躲そうとする意思はなく、呑気に虚空を見つめていた。

「カーーーーーー。カーーーーーー。カーーーーーー」バサバサバサ

ボンボンボンボン

「ガア……」

「なっ!? ……うぐ……ぐう……」バスバスバスバス「そんなッ!! カラスが少年の周囲をバリアーのように囲んでいるッ!!」

弾丸が少年の体を抉るよりも先に偶然やって来たカラスがやって来た。だが、  
“にしては多すぎる数のカラスがまるで史忠を守るように飛んでいたがために弾は全弾防がれ、拳句に撃たれたカラスの骸が勢いよく愛に衝突する結果となった。

おかげで体中にカラスの羽が引っ付く羽目に愛はなつた。

「これで分かったらう? 降参しろッ! おまえはボクを倒すことはできないんだよ……絶対に」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もう既に戦って勝てないほど運が愛からなくなつたので、史忠は機銃でポロポロになつた柵にもたれかかつて彼女に降伏するように提案する。

それを聞かされた当の本人は黙り込む。無理もない。全ての行動が裏目に出るようでは何の行動も移せない。唯々時間と力を浪費するだけだ。

愛が沈黙を貫いているため、史忠は彼女が自分の案に対して肯定の意志を表していると思つていると、愛は何かを決意めいた目をして立ち上がった。

だが、その「凄味」は決して戦いを諦めるようなそれではない。されど彼女には怒りの感情を感じるものはない。とても冷静だった。

「さつきまで怒りにまかせていたからちよつとだけ冷静になつてみました。すると如何でしょう・・・・・・・・ハハ、君・・・・思つていたほどたいしたことないですね・・・・」

「何ッ!?何を言つているんだッ!!おまえは自分の立場が分かつていいのか!」

「分かつていないのは君ですよ・・・・幸運を吸つたから無敵!?とんだお門違いですね!君は自惚れているんですよ・・・・自身の能力にッ!!」



ドンドンドンドンドン

「見たか！それ見たことかッ!!これで証明されたな！やっぱりボクは無て・・・」ドボバババババアー————」・・・きゅぷっ!!ばああ!!!爆発ッ!!まさかつ！さつき撃つたのは機銃じゃなくて「ミサイル」だとッ!」

「これで証明できましたね。やはり過信だったって事が!!あなたの能力が貧弱であったと!」

実はカラスに撃ち込まれた弾はミサイルで、勘違いした史忠は被弾しなかったものの爆風までは防げず、もろに被爆してしまった。

この時愛は被爆した史忠に見せつけるように、強者が弱者に教え込ますように、高らかな勝利宣言を決める。

そしてもちろんながら、爆風を食らった史忠は吹っ飛ばされるわけだが、彼が立っていた場所は屋上の柵近く、当然その身はビルから投げ出される。

「まさか!.....このボクが・・・死・・・うわああ!!!」

ゴキ——————

3階建てのビルから投げ出された史忠はそのまま真つ逆さまに落下して、真下にあつた車のボンネットに激突した。

落下による体への衝撃の苦痛に悶えながらも薄い意識の中で彼は太陽に向かつて手を伸ばした。そして、太陽を掴んだと思つて手を握るも所詮は距離の差による錯覚。鏡に映る餅を掴もうとするようなものだ。

無敵の力を手にしたと史忠は確信していたが、先程の一連で自分の思い過ごしだと考へついで、自分の無力さを十二分に実感し、眠りについた。

「あの子は自惚れすぎた……。『運』を手に入れても自分の『運命』を変えることにはできない。とても簡単なことでしようけど誰もそんなこときつと考えやしないでしょう……。それが人間という悲しい生き物なんですから……。』」

史忠が落ちてきて、ぞろぞろと野次が集まり、どうしたどうした、子供が落ちてきたぞ！、119番だツ!!早く!などの罵詈雑言が飛び交っている様子を屋上から眺めている愛は急に悟ったことを言つて、一人さみしい思いをする。

だが同時に愛は奇妙な疑問を浮かべる。その疑問は「マシユマロウ・ジャステイス『ACT3』」を初めて自分の意志で操ったことである。

今まで我を忘れるぐらい怒り任せに『ACT3』を使っていたが、今回は冷静状態でも使用できた。今までに無かった事例。試しにもう一度『ACT3』を出そうとするも失敗する。

何度か試しても『ACT1』にしかならないので、それを為し得た条件をいまいち理解できない愛。しかし、これだけは分かった。これは「成長の兆し」なのだ・・・。承太郎はこの前少しずつ成長していけばいいと言った。その「少しずつ」がこれなのだと彼女は理解した。

（今の私になくて、あの時の私にあったもの・・・それを明確にできれば・・・心の闇を克服した、つまりはこんな私でも「成長」できたってことかな・・・）

かつて絶望のどん底にいた少女は様々な人達に支えられてようやくここまで来た。そんな皆の助力に答えるために彼女は今日も成長する。立派な『守れる人』になるために・・・。

「それはそうとどうしよう．．．先生にひどいことしちゃった．．．あつ．．．でも先生も悪いよね、うん。先生もきつと．．．」

色々と感傷に浸っていた愛だが、ふと望のことを思い出して、彼にやってしまった数々の非礼をどう詫びようか——というか詫びる必要があるのか——数十分間考えるのであった。

そして、愛がそうこうしている内に一台の救急車がサイレンを鳴らしながらやって来て、そこから現れた救急隊員が史忠を担架で運んでいた。

「この子は死んでいるのか？」

「いや．．．当分は歩けないと思うが、命に別状はないよ。それよりちやつちやつと運んじまおう」

「おk」

救急隊員の一人が史忠の様態を窺ったところ、別の隊員が死んでいないことを言ったことのでその隊員は胸をなで下ろした。そして、その二人は史忠を救急車に乗せた後、素早く運転席に戻って病院まで連れて行った。

高野山史忠……再起<sup>リタイヤ</sup>不能

ドンドンドンドンドン

「ぐぬっ!?!……ぐはっ!」

「承太郎さあ——————ん!!!」

敵スタンド攻撃の嵐をくらい、そのまま地に叩き付けられた承太郎に近寄る望。彼は倒れた承太郎の傷具合を確認しようと彼の体を仰向けにすると、なんとまあ……これ

は軌跡か！どれも心臓には当たっておらず、更に言えば被弾数もやけに少なかった。

「時を．．．止めて．．．ダメージを最小限にできた．．．運が味方してくれたぜ」  
「運」!?!?．．．つまり戻ってきたということですか!?!我々の『幸運』がツ!!」

死にはしなかったものの怪我を負った承太郎は運に頼らなければならぬ選択であつたと告げる。このことから自分達の『幸運』が戻ってきていることを望は自覚する。勿論そのことは二人だけでなく、狙撃手である益井魁も気付いていた。

「まさか．．．あのガキィ．．．あんだけ用心深く言い聞かせてたはずなのに．．．くそツ!!くそツ!!全部水の泡じゃねえかツ!!!こなくそくそくそツ!!!」

ドンドンドンドンドン

魁は今回の作戦の肝である史忠が倒されたことを知って、恨み言を垂れた。そしてもう後がないと悟り、魁はがむしやらに発砲する。

時速100キロは超えるスピードで空気を裂いて、飛行する弾丸は二人の所まで様々な角度や方向から襲いかかってきた。

．．．．．が、

「うなああああああああああ!!」ズババババアーーーーー

「ええっ!? 木津さん!? 何故あなたが．．．」

「もちろんそれはあなたを殺．．．じゃなかった。助けるためにここまで来たんじゃないですか．．．愛ちゃんから」

「すいません．．．今ちらつと殺すつて言いかけてましたよね? ねえちよつと!」

四方八方からやってくる弾丸は突然乱入してきた千里によつて全てかき消えてしまった。

彼女の唐突な登場は望を大層驚かし、さらに千里の殺意が垣間見えるドスの強い台詞を聞いて、望は恐怖で縮こまってしまった。

だが、恐怖で縮こまったのは望だけではない。そう、このやりとりもスコープで覗いていた魁もだ。

「なっ！．．．くそッ！仲間か．．．これ以上はまずいな。潮時か．．．」

肝心の史忠は敗れ、さらに千里という援軍まで登場された今ではもう深追いすることは極めて危険であることを判断した魁は荷物をまとめ始めた。

逃げる支度をする最中にふと自分のライフル銃型のスタンド、〃スターティング・オーバー〃のスコープを覗いたとき、倒れたままの承太郎と正面を見ている千里が映っていた。だがそこには誰かがいない．．．。そう、糸色望だ。

「あいつ！．．．い．．．糸色望はどこだッ!? ちょっと目を離した隙に、奴は何処に．．．ウツ！．．．クウウ．．．」

スコープにつまり、その場からいつの間にか望の姿が消えていることに驚き、望は何処にいるのかと焦る魁だが、すぐに彼の居場所は分かった。

彼の居場所は．．．。

ゴゴゴ



魁の話を黙って聞いている望。微動だにしない望の後ろにはこれまた古いドラム缶が数個配置されていた。

だが次の瞬間、そのドラム缶の中から弾が十数発一斉に飛び出して望へと向かった。

「決まったッ！勝負は決したッ!!そしてッ!!ダメ押しにもう一撃いいいいいいー……ッ!!」カッシャー……アアアア

望の背後から奇襲をかけたので、望はその対処に追われている。故に自分も至近距離から撃つて望に重傷を負わそうと振り向く魁。しかし、彼の予想を大きく外れた。後ろの弾を弾いているだろうと考えていた魁の予想を裏切り、望はただ構えていた。

「光弾」を叩き込むためにッ!!

「げっ!!まずいッ!!光弾のことをすっかり忘れて……うわあああああー……  
「ドーーーーーン」……ぐばああ……」

《エンジェル・ライフル  
天使の小型弾》

を忘れていた魁は弾丸が望に当てるよりも前に光弾が発射された

ことで、碌な回避行動を取れず、そのまま「S・オーバー」と彼の喉を貫かれて仰向けに倒れた。

魁が倒れたのでスタンドパワーが弱ってしまい、弾は望に当たる前に消滅してしまつた。

「あなたは負けましたがまだ死んではいけません……。組織の……。『ワイルド・ドッグ』の情報を話してから逝ってください。さあ話すんです……。!!」

喉から血が噴き出ている魁に望は「ワイルド・ドッグ」の情報を得ようと問い詰める。折角組織につながる人物を目の前にして手ぶらで帰ることなど出来ない。

ほんのちよつとでもいい。何かしらの手がかりを掴めないと望は……。いや自分達は一步も前に進めないからだ。

そんな望の焦燥を汲み取つてか魁は重い口を開き、掠れた声で言った。

「だれが……。答えるか……。バカが……。『ワイルド・ドッグ』には恩がある。……。生まれつき脚が弱くて……。職にも就けず、親も死に、絶望の淵にいた俺を……。彼らは助けて……。くれた。……。だから死ぬなんてこれっぽっちも怖くないさ。彼

らのためなら死ねる……本望だ……」

「……そうです……か……」

瀕死の魁の口から出た「ワイルド・ドッグ」への強い忠誠心。この固い信念を持つ男から聞き出せるものはもう無いと判断し、望は意気消沈するが、魁はニヤリと笑い、望にあることを伝えた。

「一つだけなら教えてやるよ……。勝者への土産だ……。実は俺は元々スタンド使いじゃあなかったのさ……。能力を与えられたのさ……。『ワイルド・ドッグ』に……。」「何ッ!? スタンド能力を『与え』られた!?!……。それは承太郎さんが前にちらつと言っていた……。弓矢のことですかッ!」

「弓……。矢……。? 違うな……。あれは『石』だ……。あえて言うなら『原石』だ……。その石の力によって少なくとも俺や蚊の小僧、そしてもう一人の刺客を生み出した……」

彼の言ったことに驚きを隠せられない望。無理もない。偶発的にスタンド使いの組織が生まれたのだと思っていたことが覆されたからだ。加えて、その数を増やしていくものが従来とは異なっていたものだからだ。承太郎の口からしか伝えられていない弓

矢とは別の……。

スタンド使いを生み出す媒体に対する情報を処理していく望だが、更に別のことで更に脳の血圧を上げる。

「スタンド使いがもう一人いいいいッ!!い……一体誰なんですッ!？」

「ククク。さあな……。『ネズミ』……ということしか知らん。一週間前に生み出した後ずつと野放しにしているからな……まあこれから死ぬ俺にはそんなこと知る権利も……義務も……ありはしないからな……。ククク……。クク……。ク……。ク……。ク……。」

別のスタンド使いの刺客について望は必死になって魁に問いだったが、彼は答えを明確には言わず、そのまま静かに息を引き取る。

葉の間に豆でもあれば簡単に噛み砕けるほど望は歯を食いしばらせ、このやるせない気分を味わった。

自分の誇りを守って朽ちた骸を見下ろすようにさんさんと照らす太陽は妙に暑かった。

To Be Continued . . . ⇒

——プロフィール——

・高野山史忠 14歳。身長：145cm

自惚れ思考が高い中学生。好物は唐揚げ、ハンバーグ。

学力が低いため、深く考えることを苦手とする。

因みに両親は平凡なもの。

スタンド名：アンフェア・ワールド

【破壊力：E スピード：C 射程距離：A 持続力：A 精密動作性：D 成長性：B】

能力：幸運を奪う。 スタイル：遠隔操作型 分類：昆虫型

・益井魁 殺し屋。

前髪がトサカのように長い。

脚はとても弱く、普段はいつも座っている。

3年前に“ワイルド・ドッグ”から能力を与えられ、その力でスナイパーを営んでい

た。

スタンド名：スターティング・オーバー

【破壊力：B スピード：A 射程距離：A 持続力：C 精密動作性：C 成長性：E】  
能力：ライフル弾を操作する。 スタイル：近遠距離パワー型 分類：道具型

## 次回予告

承太郎 『重要なのは「聞く」ことじゃなくて「聴く」事だ……』

望 『……は……はあ……』

承太郎 『「見る」ことじゃなく「視る」ことだ……』

望 『……こいつ、思ってた以上にやばすぎる……ツツ!!!』

承太郎 『スタープラチナ・ザ・ワールド”ツツ……いけるか!?”』

望 『こいつ! スタンドは何体いるんだ……ツツ!?”』

ネズミ 『シャアアア……ツツ!!!』

『第参拾壹話 ネズミ狩りへ行こう』